

H  
I  
比 恵 遺 跡 群 (11)

1992

福岡市教育委員会

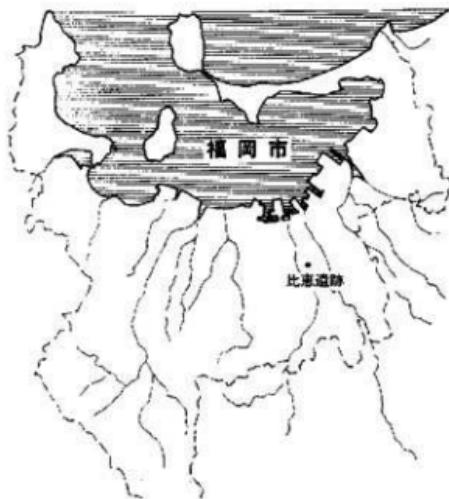
## 第289集 比恵遺跡群 (11)

P. 171~180 福岡市出土の縄文晩期から古墳時代にかけて  
漆器の塗膜構造の観察について

塗膜断面の顕微鏡写真 正誤表

試料No	顕微鏡写真	試料No	顕微鏡写真
1	1	14	6
2	2	15	20
3	3	16	21
4	1, 3	17	10
5	14	18	22
6	4	19	23
7	15	20	25
8	5	21	24
9	7, 16	22	11
10	8, 17	23	26
11	9	24	12
12	18	25	27
13	19	26	/

HI E  
**比恵遺跡群 (11)**



1992

福岡市教育委員会

## 序

現在、「海と歴史を抱いた文化の都市」、「活力あるアジアの拠点都市」として都市づくりを進めている福岡市には古くから大陸との交流を物語る遺跡が数多く存在します。本市では、特に文化財の保護・活用に努めており、失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

今回報告する比恵遺跡群は魏志倭人伝にある「奴国」の拠点的地域で、これまでにも重要な遺構、遺物が発見されています。

本書は1990年度実施しました比恵遺跡群の第29~32、34~36次調査の報告書であります。調査の結果、弥生時代~古墳時代の遺構、遺物が数多く発見され、比恵遺跡群の性格を考えるうえで多大な成果を得ることができました。

本書が市民の皆様の文化財の認識と理解の一助となり、学術研究の資料になれば幸いです。

最後になりましたが、株式会社スミトー、淀川観光、NTT、ダイア建設、祥文社印刷株式会社、デゴラ商事、北村電機をはじめとする関係各位のご協力に対して厚く感謝の意を表します。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が社屋建設などの開発事業に伴って1990年度に実施した、比恵遺跡群第29～32、34～36次調査地点の報告書である。
2. 本書に使用する遺構実測は第29～31、34次は菅波正人、佐藤一郎、林田憲三、塚副義一郎が、第32次は荒牧宏行が、第35次は下村智、常松幹雄、上方高弘、荒牧宏行が、第36次は下村智、常松幹雄、荒牧宏行、上方高弘が行った。
3. 本書に使用する遺物実測は第29～31、34次は田崎博之、山口謙治、井手かすみ、犬丸陽子、菅波が、第32次は荒牧、山口、下村が、第35次は常松、山口、杉山富雄、井手、犬丸が、第36次は下村、常松、荒牧が行った。
4. 本書に使用する遺構写真は下村、常松、荒牧、菅波、上方が、遺物写真は常松、荒牧、菅波、上方が撮影した。
5. 本書に使用する図面の製図は山口、常松、荒牧、菅波、林田、浜石正子、鉢須賀博子が行った。
6. 本書に使用する方位は磁北である。
7. 本書の執筆は第1～5章、7章については菅波が、第6章については荒牧が、第8章については下村、常松が、第9章は下村、常松、荒牧が行った。そのうち、第4章、5章の出土土器については田崎博之が、石器については山口が執筆した。また、第10章に、本田光子氏、成瀬正和氏の赤色顔料に関する分析を、岡田文男氏の漆塗膜の分析を掲載した。なお、編集は下村、常松、荒牧、林田との協議、協力のもとに菅波が行った。
8. 今回報告する遺構、遺物に関する記録は埋蔵文化財センターで一括収蔵、保管し、公開、活用していく予定である。

## 本文目次

第1章 序説 .....	(菅波正人) 1
1 はじめに .....	1
2 調査体制 .....	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	(菅波正人) 3
1 遺跡の位置と立地 .....	3
2 周辺の遺跡 .....	3
3 比恵遺跡群の調査とその成果 .....	4
第3章 第29次調査地点 .....	(菅波正人) 7
1 調査の概要 .....	7
2 調査の記録 .....	8
1) 水田跡 .....	9
2) 包含層 .....	9
3) 出土遺物 .....	9
3 小結 .....	15
第4章 第30次調査地点 .....	(菅波正人・田崎博之・山口謙治) 17
1 調査の概要 .....	17
2 調査の記録 .....	19
1) 貯藏穴 (SU) .....	19
2) 井戸 (SE) .....	84
3) 窒穴住居跡 (SC) .....	96
4) 溝 (SD) .....	96
5) 据立柱建物跡 (SB) .....	98
6) その他の出土土器 .....	99
3 小結 .....	99
第5章 第31次調査地点 .....	(菅波正人・田崎博之・山口謙治) 101
1 調査の概要 .....	101
2 調査の記録 .....	102
1) 貯藏穴 (SU) .....	102
2) 土坑 (SK) .....	106
3) 溝、河川跡 (SD) .....	106
3 小結 .....	116

第6章 第32次調査地点 .....	(荒牧宏行) 117
1 調査の経過と方法 .....	117
1) 調査・報告書作成までの経過 .....	117
2) 調査・記録の方法 .....	117
2 調査の記録 .....	117
3 小結 .....	132
第7章 第34次調査地点 .....	(青波正人) 133
1 調査の概要 .....	133
2 調査の記録 .....	133
1) 溝 (SD) .....	133
2) 上坑 (SK) .....	137
3) 包含層 .....	137
3 小結 .....	138
第8章 第35次調査地点 .....	(下村智・常松幹雄) 139
1 調査に至る経過 .....	139
2 検出構造 .....	140
3 小結 .....	153
第9章 第36次調査地点 .....	(下村智・常松幹雄・荒牧宏行) 155
1 はじめに .....	155
2 調査の記録 .....	156
3 小結 .....	168
第10章 自然科学的分析 .....	169
1 土器の赤色塗彩に使われた赤色顔料について .....	(木田光子・成瀬正和) 169
2 福岡市出土の縄文晩期から古墳時代にかけての漆器の検討構造の 観察について .....	(岡田文男) 171

## 挿図目次

Fig.1	比恵遺跡群と周辺の遺跡(1/50000).....	4
Fig.2	比恵遺跡群調査地点位置図(1/3000) .....	6
Fig.3	第29次調査地点周辺測量図(1/500).....	7
Fig.4	第29次調査地点遺構分布図及び土層断面図(1/100).....	8
Fig.5	水山路実測図(1/100).....	9
Fig.6	水田面及び包含層出土土器実測図1(1/4).....	10
Fig.7	包含層出土土器実測図2(1/4).....	12
Fig.8	包含層出土土器実測図3(1/4).....	13
Fig.9	包含層出土土器実測図4(1/4).....	14
Fig.10	遺構出土土器実測図(1/4) .....	15
Fig.11	比恵遺跡北端遺構分布図(1/2000).....	16
Fig.12	第30・37次、31次調査地点周辺測量図(1/400) .....	17
Fig.13	第30・37次調査地点遺構分布図(1/200) .....	18
Fig.14	SU-002～005、007遺構実測図(1/60) .....	21
Fig.15	SU-006・SE-014、SU-010遺構実測図(1/40) .....	22
Fig.16	SU-012、SU-016遺構実測図(1/40) .....	24
Fig.17	SU-008、011、015、017遺構実測図(1/60) .....	25
Fig.18	SU-019～022遺構実測図(1/60) .....	26
Fig.19	SU-023～025、027～029遺構実測図(1/60) .....	28
Fig.20	SU-030、031、034、036遺構実測図(1/60) .....	30
Fig.21	SU-002出土土器実測図(1/4) .....	39
Fig.22	SU-003～006出土土器実測図(1/4) .....	40
Fig.23	SU-006出土土器実測図(1/4) .....	41
Fig.24	SU-006出土土器実測図2(1/4) .....	42
Fig.25	SU-006出土土器実測図3(1/4) .....	43
Fig.26	SU-006、007出土土器実測図(1/4) .....	44
Fig.27	SU-007、008出土土器実測図(1/4) .....	45
Fig.28	SU-010出土土器実測図1(1/4、1/8).....	46
Fig.29	SU-010出土土器実測図2(1/4) .....	47
Fig.30	SU-010出土土器実測図3(1/4) .....	48
Fig.31	SU-010出土土器実測図4(1/4) .....	49

Fig.32	SU-010、011、012出土土器実測図(1/4) .....	50
Fig.33	SU-012出土土器実測図1(1/4) .....	51
Fig.34	SU-012出土上器実測図2(1/4) .....	52
Fig.35	SU-012出土上器実測図3(1/4) .....	53
Fig.36	SU-012出土土器実測図4(1/4) .....	54
Fig.37	SU-012出土上器実測図5(1/4) .....	55
Fig.38	SU-012、015出土土器実測図6(1/4) .....	56
Fig.39	SU-016出土上器実測図1(1/4) .....	57
Fig.40	SU-016出土土器実測図2(1/4) .....	58
Fig.41	SU-016出土土器実測図3(1/4) .....	59
Fig.42	SU-016出土土器実測図4(1/4) .....	60
Fig.43	SU-016出土上器実測図5(1/4) .....	61
Fig.44	SU-016出土土器実測図6(1/4) .....	62
Fig.45	SU-017出土土器実測図(1/4) .....	63
Fig.46	SU-017、019出土土器実測図(1/4) .....	64
Fig.47	SU-019出土土器実測図(1/4) .....	65
Fig.48	SU-019、020出土土器実測図(1/4) .....	66
Fig.49	SU-020、021出土土器実測図(1/4) .....	67
Fig.50	SU-021出土土器実測図(1/4) .....	68
Fig.51	SU-022出土土器実測図(1/4) .....	69
Fig.52	SU-022、023出土土器実測図(1/4) .....	70
Fig.53	SU-024、025出土土器実測図(1/4) .....	71
Fig.54	SU-025出土土器実測図(1/4) .....	72
Fig.55	SU-026、027、028出土土器実測図(1/4) .....	73
Fig.56	SU-028出土土器実測図(1/4) .....	74
Fig.57	SU-029、030、031出土土器実測図(1/4) .....	75
Fig.58	SU-030、031、032出土土器実測図(1/4) .....	76
Fig.59	SU-002、005、006、007出土石器実測図(1/2) .....	80
Fig.60	SU-010~011出土石器実測図(1/2) .....	81
Fig.61	SU-012、015、016出土土器実測図(1/2) .....	82
Fig.62	遺構出土の石器・土製品実測図(1/2) .....	83
Fig.63	SE-009、018遺構実測図(1/40) .....	85
Fig.64	SE-009出土土器実測図(1/4) .....	87

Fig.65	SE-014、018出土土器実測図1(1/4) .....	88
Fig.66	SE-018出土土器実測図2(1/4) .....	89
Fig.67	SE-018出土石器、鉄製品実測図(1/2) .....	90
Fig.68	SE-009出土鑄型実測図(1/2) .....	91
Fig.69	SE-018出土木製品実測図1(1/4) .....	93
Fig.70	SE-014、018出土木製品実測図2(1/4) .....	94
Fig.71	SE-018出土木製品実測図3(1/4、1/6) .....	95
Fig.72	SD-001土層断面図(1/40) .....	96
Fig.73	SC-013、SD-001出土遺物実測図(1/4) .....	97
Fig.74	SB-042遺構実測図(1/80) .....	98
Fig.75	Pit. 遺構面出土土器実測図(1/4) .....	99
Fig.76	第31次調査地点遺構分布図(1/200) .....	101
Fig.77	貯蔵穴及び土坑遺構実測図(1/60、1/40) .....	103
Fig.78	SU-007~010、012出土土器実測図(1/4) .....	105
Fig.79	SK-006、004、016出土土器実測図(1/4) .....	107
Fig.80	SD-001、002、005、014土層断面図(1/40、1/100)及び出土土器実測図(1/4) .....	109
Fig.81	SD-005出土土器実測図(1/4) .....	111
Fig.82	SD-014出土土器実測図1(1/4) .....	112
Fig.83	SD-014出土土器実測図2(1/4) .....	113
Fig.84	SD-014出土土器実測図3(1/4) .....	114
Fig.85	遺構出土石器実測図(1/2) .....	116
Fig.86	調査区南壁・東壁上層断面図(1/40) .....	118
Fig.87	第32次調査地点全体図(1/200)、グリッド配置図(1/400) .....	119
Fig.88	第24、25、32次調査地点遺構配置図(1/200) .....	折り込み
Fig.89	1~20区上層・中層遺物(1/3) .....	122
Fig.90	1~20区下層出土遺物1(1/3) .....	123
Fig.91	1~20区下層出土遺物2(1/3) .....	124
Fig.92	21~53中層・下層出土遺物(1/3) .....	125
Fig.93	包含層出土施文土器(1/3) .....	126
Fig.94	包含層出土木器(1/3) .....	128
Fig.95	包含層出土銅鏡(1/1) .....	129
Fig.96	包含層出土石器(1/1、1/2) .....	130
Fig.97	包含層出土土製品(1/2) .....	131

Fig.98	第34次調査地点周辺測量図(1/400).....	133
Fig.99	第34次調査地点遺構分布図及び土層断面図(1/100).....	134
Fig.100	SD-001出土土器実測図(1/4) .....	135
Fig.101	SD-001出土石劍及び木製品実測図(1/2、1/4) .....	136
Fig.102	SK-003及び包含層出土土器実測図(1/4) .....	137
Fig.103	第35次調査地点位置図(1/500).....	140
Fig.104	第35次調査地点遺構配置図(1/100) .....	折り込み
Fig.105	SD-01東壁上層断面図(1/50) .....	141
Fig.106	SD-01出土遺物実測図1(1/1) .....	142
Fig.107	SD-01出土遺物実測図2(1/4) .....	143
Fig.108	SD-01出土遺物実測図3(1/4) .....	144
Fig.109	SD-01出土遺物実測図4(1/2、1/4) .....	145
Fig.110	柱穴出土遺物実測図(1/4).....	146
Fig.111	SD-01出土木器実測図1(1/4) .....	147
Fig.112	SD-01出土木器実測図2(1/4) .....	148
Fig.113	SD-01出土木器実測図3(1/4) .....	149
Fig.114	SD-01出土木器実測図4(1/4) .....	150
Fig.115	SD-01出土木器実測図5(1/4) .....	151
Fig.116	SD-01土層断面図(1/40) .....	156
Fig.117	第36次調査地点全体図、SD-01実測図(1/100) .....	折り込み
Fig.118	立柱実測図(1/40) .....	157
Fig.119	SD-01上層出土遺物実測図1(1/3) .....	159
Fig.120	SD-01上層出土遺物実測図2(1/3) .....	160
Fig.121	SD-01下層出土遺物実測図1(1/3) .....	161
Fig.122	SD-01下層出土遺物実測図2(1/3) .....	162
Fig.123	第19次調査地点出土土器(参考資料) .....	163
Fig.124	SD-01下層出土遺物実測図3(1/3).....	164
Fig.125	SD-01上層出土埴輪実測図(1/3) .....	165
Fig.126	SD-01出土土製品・石包丁実測図(1/2) .....	166
Fig.127	SD-01出土石器実測図(1/2) .....	166
Fig.128	SD-01出土指輪・管玉実測図(1/1).....	167

## 図版目次

- PL. 1 1. 第29次調査地点全景（西から）  
2. 水田面足跡（西から）
- PL. 2 1. 調査区北壁上層（南から）  
2. 調査区東壁土層（南から）
- PL. 3 1. 第30次調査地点全景（北から）  
2. 第30次調査地点全景（南から）
- PL. 4 1. SU-002完掘（東から）  
2. SU-003完掘（西から）  
3. SU-004完掘（西から）  
4. SU-005、035完掘（西から）  
5. SU-006、SE014完掘（西から）  
6. SU-007完掘（南から）
- PL. 5 1. SU-008完掘（東から）  
2. SU-010完掘（西から）  
3. SU-011完掘（北から）  
4. SU-012遺物出土状況（北から）  
5. SU-012獸骨、貝出土状況（北から）  
6. SU-012完掘（北から）
- PL. 6 1. SU-015完掘（南から）  
2. SU-016、017遺物出土状況（北から）  
3. SU-019完掘（南から）  
4. SU-021完掘（南から）  
5. SU-022完掘（南から）  
6. SU-023完掘（南から）
- PL. 7 1. SU-024~026完掘（北から）  
2. SU-027完掘（北から）  
3. SU-028完掘（西から）  
4. SU-029完掘（東から）  
5. SU-030完掘（西から）  
6. SU-031完掘（北から）  
7. SU-032完掘（南から）

- PL. 8 1. SE-018遺物出土状況（西から）  
2. SE-018完掘（北から）  
3. SE-009完掘（東から）  
4. SD-001完掘（東から）  
5. SD-001土層（南から）
- PL. 9 1. SB-042、SC-013（東から）  
2. 第37次調査地点（平成3年度調査）（北から）
- PL. 10 1. SU-007出土土器  
2. SU-010出土土器
- PL. 11 1. SU-012出土土器  
2. SU-016出土土器  
3. SU-021出土土器（松菊里型、中央）
- PL. 12 1. SE-009出土鉢型  
2. SU-010出土剥片接合状況
- PL. 13 1. 第31次調査地点全景（北から）  
2. 調査区北側（東から）
- PL. 14 1. 調査区北側（北から）  
2. 貯蔵穴完掘（北から）
- PL. 15 1. SD-005、SU-007完掘（東から）  
2. SU-015完掘（東から）
- PL. 16 1. SU-010、SK-016完掘（西から）  
2. SK-004遺物出土状況（西から）
- PL. 17 1. SD-005土層（東から）  
2. SD-014（東から）
- PL. 18 1. SD-014（西から）  
2. SD-014（西から）
- PL. 19 1. 第32次調査区南半全景（南から）  
2. 第32次調査区北半全景（南から）
- PL. 20 1. 第32次調査区南壁土層（北から）  
2. 第32次調査区包含層出土遺物
- PL. 21 1. 第34次調査地点全景（北から）  
2. 調査区東壁上層（西から）
- PL. 22 1. SD-001出土木製品（西から）

- PL. 23 1. 第35次調査区北半部全景（南より）  
2. 第35次調査区北半部全景（西より）
- PL. 24 1. 第35次調査区北半部作業風景（南より）  
2. 第35次調査区北半部作業風景（西より）
- PL. 25 1. 第35次調査区南半部全景（西より）  
2. SD-01遺物出土状況〈1〉（南より）
- PL. 26 1. SD-01遺物出土状況〈2〉（南より）  
2. SD-01遺物出土状況〈3〉（北より）
- PL. 27 1. SD-01遺物出土状況〈4〉（南より）  
2. SD-01遺物出土状況〈5〉（南より）
- PL. 28 1. SD-01出土の無頸壺と蓋  
2. 無頸壺出土状況（南より）
- PL. 29 第35次調査区出土の土器・石器
- PL. 30 SD-01出土の木製品〈1〉
- PL. 31 SD-01出土の木製品〈2〉
- PL. 32 SD-01出土の木製品〈3〉
- PL. 33 1. 第36次調査区全景（南から）  
2. SD-01遺物出土状況（西から）  
3. 調査区全景（東から）
- PL. 34 1. 立柱検出状況（北西から）  
2. 立柱検出状況（南西から）  
3. 木柱出土状況（南西から）
- PL. 35 1. SD-01遺物出土状況（立柱付近）  
2. SD-01遺物出土状況（中央部付近）
- PL. 36 1. SD-01土層断面（南西から）  
2. SD-02土層断面（西から）  
3. SD-03土層断面（西から）
- PL. 37 SD-01出土の土器
- PL. 38 SD-01出土の土器・石器・銀製指輪

# 第1章 序説

## 1 はじめに

比恵遺跡群は昭和13、14年、鏡山猛、森貞次郎氏によって、最初の調査が行われて以来、弥生時代の代表的集落遺跡として知られてきた。しかし、現在、比恵遺跡群が所在する博多駅南地区は宅地化が進み、相次ぐビル建築で日々町並みは変化している。埋蔵文化財課では比恵遺跡群も重点地区の一つとして、開発計画が上がるごとに試掘調査を実施し、各地点の状況の把握を努めている。その上で、地権者と遺跡保全のための設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者との協議を持って、記録保存のための調査を実施している。1990年度は第29～36次までの8地点の調査が行われた。

本書は1990年度行われた第29～32次、34～36次までの7調査地点の調査報告を掲載する。

Tab. 1 調査一覧表

	第29次調査地点	第31次調査地点	第33次調査地点	第32次調査地点	第34次調査地点	第35次調査地点	第36次調査地点
遺跡調査番号	9004	9012	9016	9037	9043	9061	9064
遺跡略号	HIE-29	HIE-30	HIE-31	HIE-32	HIE-34	HIE-35	HIE-36
分布地図番号							
	037 A-1						
調査地 地籍	博多区博多駅 南三丁目29	博多区博多駅 南四丁目221	博多区博多駅 南四丁目201	博多区博多駅 南二丁目46-1番	博多区博多駅 南四丁目15-17	博多区博多駅 南五丁目109-1	博多区博多駅 南六丁目30-2
開発面積	295m <sup>2</sup>	879m <sup>2</sup>	1,094m <sup>2</sup>	299 m <sup>2</sup>	1,128m <sup>2</sup>	659m <sup>2</sup>	991m <sup>2</sup>
調査対象面積	161m <sup>2</sup>	582m <sup>2</sup>	501m <sup>2</sup>	299 m <sup>2</sup>	193m <sup>2</sup>	350m <sup>2</sup>	265m <sup>2</sup>
調査実地面積	120m <sup>2</sup>	570m <sup>2</sup>	530m <sup>2</sup>	159.5m <sup>2</sup>	80m <sup>2</sup>	432m <sup>2</sup>	198m <sup>2</sup>
調査期間	1990年4月10日 1990年4月28日	1990年5月19日 1990年6月20日	1990年6月21日 1990年7月13日	1990年9月25日 1990年11月13日	1990年11月7日 1990年11月15日	1991年2月18日 1991年3月28日	1991年3月8日 1991年3月31日

## 2 調査組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。

調査委託 第29次—株式会社スミトー、第30次—淀川観光、第31次—NTT、第32次—ダイア建設、第34次—祥文社印刷株式会社、第35次—デゴラ商事、第36次—北村電機

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

埋蔵文化財課長 柳田純孝（前任）折尾学

埋蔵文化財第二係長 柳沢一男（前任）塙屋勝利

調査庶務 埋蔵文化財第一係 松延好文（前任）吉田真由美

調査担当 第29次～第31次、第34次—菅波正人、第32次—荒牧宏行、第35、36次—下村智、常松幹雄、荒牧宏行

調査補助 上方高弘 林田憲三（西南学院大学講師）

調査作業 上野龍夫 内野弘行 大神嘉彦 大橋善平 末永諭 高田茂 立石真二 大長正弘  
塙副義一郎 德永栄彦 德永静雄 仲田忠孝 早川正樹 広田熊雄 松井一美 山部増人 三  
浦力 吉住作美 石川洋子 江鳴光子 川上すぎえ 川崎道子 黒瀬千鶴 塙塚ヒロ子 鳴ヒ  
サ子 苗野シゲ 武田潤子 竹原りえ 堀君子 舟川キチエ 長浦英美子 永松伊都子 永松  
トミ子 西本スミ 野口ミヨ 口比野典子 本田ナツ子 松井良子 宮原つや子 村田トモコ  
森山キヨ子 安高久子 山下智子 安野良 山崎美枝子 山村スミ子 吉住知子

整理補助 上方高弘 林田憲三（西南学院大学講師）

整理作業 有島美江 安部国恵 池見恭子 岩崎加奈子 上田保子 同部直美 片野ゆき子  
木村絹子 塙田慧 小西千晶 小城信子 佐々木涼子 藤信子 前田みゆき

調査に際しては株式会社スミトー、淀川観光、NTT、ダイア建設、祥文社印刷株式会社、デ  
ゴラ商事、北村電機の方々には条件整備等で大変御世話になりました。また、調査中は地域の  
住民の皆様をはじめとして数多くの方々にご協力、ご助言を頂いた。

整理に際しては第29～31次、第34次調査出土の土器の整理報告を山崎博之氏（現愛媛大学教  
養部助教授）にお願いした。また、赤色顔料の分析については本田光子氏（福岡市埋蔵文化財  
センター）、成瀬正和氏（宮内庁正倉院事務所）に、また、漆製品の分析については岡田文男氏  
（（財）京都市埋蔵文化財研究所）にお願いし、玉稿を頂いた。ここに記してお礼申し上げま  
す。

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 1 遺跡の立地

福岡市の大部分を占める福岡平野は南北に伸びる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、脊振山塊に囲まれる。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、宝見川が貫流し、それぞれの河川に開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。狭義の福岡平野はその小平野の一つで、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡を指している。比恵遺跡群は両河川に挟まれた平野内に位置し、春日丘陵から那珂川の蛇行に沿って延びてくる洪積丘陵北端に立地する。この丘陵は花崗岩風化疊層を基盤として、阿蘇山の火砕流による八女粘土、島崎ローム層が最上部に形成される。1km先の博多遺跡群が立地する砂丘との間は後背湿地となっている。遺跡の範囲は南北約1km、東西約0.8kmが予想され、現在の標高5~7mを測る。

### 2 周辺の遺跡

福岡平野では数多くの遺跡が知られているが、特に春日丘陵とそこから北に延びてくる丘陵上には弥生時代遺跡がほぼ全域に分布する。春日丘陵には須恵岡本遺跡をはじめとして、その周辺では須恵永田、須恵坂本、須恵唐梨、岡本パンジャック、赤井手、大谷遺跡等で青銅器工房、埋納遺構が検出されており、質、量ともに他の弥生時代集落を圧倒している。まさに「奴国」の中心と言うべき様相を呈している。春日丘陵から北側では弥永原、井尻、五十川、那珂遺跡等の遺跡が間断なく、続いている。又、丘陵の東側では初期水田、環濠集落で知られる板付遺跡、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪を副葬した豪富墓が出上した諸岡遺跡等が存在する。古墳時代においても、丘陵上の集落は継続していく。沖積地部分では那珂深ヲサ遺跡、那珂君体遺跡等で水田跡、大規模な井堰や水路が検出されている。一方、古墳は那珂川流域に首長墓クラスの前方後円墳が展開する。最古式の那珂八幡古墳にはじまり、安徳寺大塚古墳、老司古墳、博多1号墳、貝徳寺古墳、日拌塚古墳、劍塚古墳という系譜が想定されている。

古代においては福岡平野は那珂、御笠、席田の3郡に分割されるが、大半は那珂郡に属する。ところで、那珂郡衙の所在地はまだ限定しえないが、博多区那珂周辺に設けられた可能性がある。那珂遺跡群では7~8世紀にかけて、梁行3間×桁行4間の総柱建物が3棟連なった並び倉や区画の溝、神ノ前窓の初期瓦や百濟系單弁軒丸瓦等、注目すべき遺構・遺物が数多く検出されている。そこから、南東1.5kmの高畠廃寺は8世紀中葉の創建と見られるが、「郡」「中」「寺」等の墨書き土器があり、郡寺の可能性をもつ寺院である。

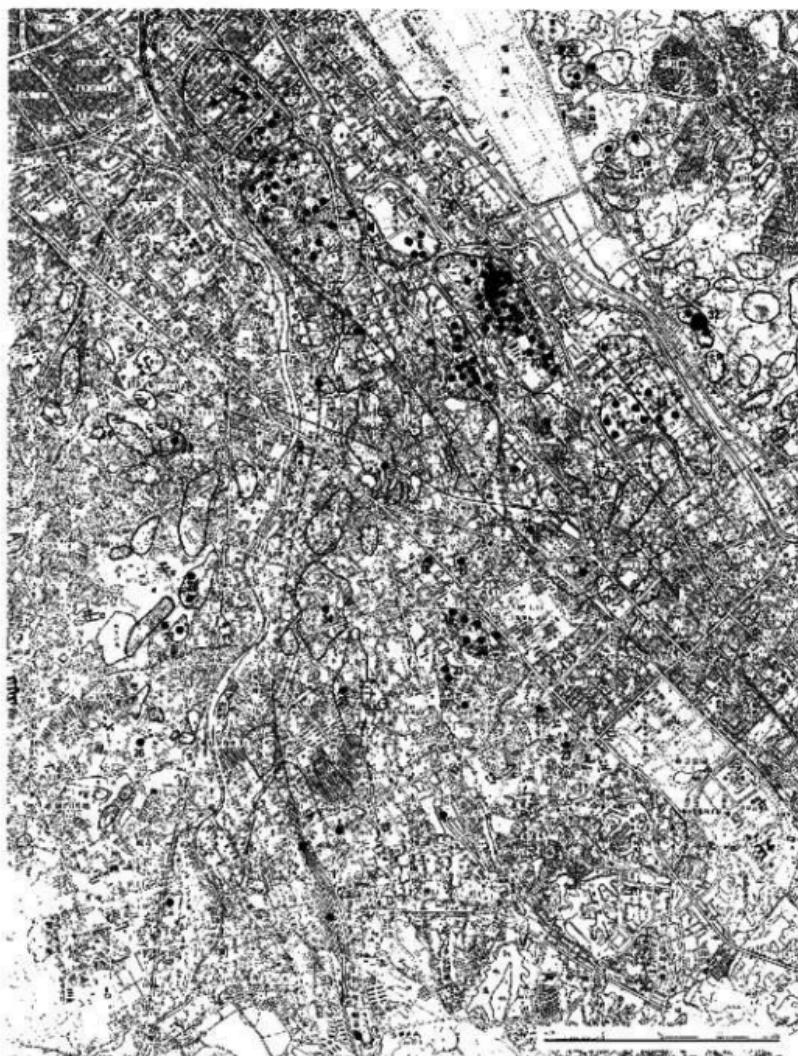


Fig. 1 比叡遺跡群と周辺の遺跡(1/50000)

- |            |              |             |             |
|------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 比叡遺跡    | 9. 鶴岡遺跡      | 17. 水田遺跡    | 25. 沢永原遺跡   |
| 2. 乳家古墳    | 10. 高畠遺跡     | 18. 唐制道路    | 26. 老司古墳    |
| 3. 鹿河遺跡    | 11. 井原 B 遺跡  | 19. 須佐同本遺跡  | 27. 野多目古墳遺跡 |
| 4. 鹿河八幡古墳  | 12. 三葉遺跡     | 20. 同本四丁目遺跡 | 28. 野多目遺跡   |
| 5. 鹿河某ワツ遺跡 | 13. 安野遺跡     | 21. 赤井手遺跡   | 29. 三宅磨寺    |
| 6. 鹿河君体遺跡  | 14. 井根田 C 遺跡 | 22. 伯玄社遺跡   | 30. 赤穂ヶ浦遺跡  |
| 7. 板付遺跡    | 15. 仲島遺跡     | 23. 西平塚遺跡   | 31. 安瀬尾遺跡   |
| 8. 鶴岡土塁跡群  | 16. 南八幡遺跡群   | 24. □佐遺跡    | 32. 全模遺跡    |

### 3 比恵遺跡群の調査とその成果

比恵遺跡群は鏡山猛、森貞次郎氏による調査以来、1991年度現在、39次の調査が行われた。比恵遺跡群のある博多区駅南地区は戦前の区画整理、近年の市街化のため、本来の地形を伺うことはできない。しかし、幾つかの調査地点で旧地形を復元するための成果がある。遺跡群の北側にある第4、26次、第24、25、32次、第29次調査地点では台地の落ち際、谷部が検出され、台地の先端には入り込んだ谷があることが判明した。遺跡群西側では第23次調査地点で西側に落ちていく台地の落ちが検出されている。しかし、これより更に西にある第3、8次調査地点では台地上で遺構が検出されることから、両者の間には谷があると考えられている。また、今回報告する第31次調査地点では東西方向に流れる河川跡が検出された。この河川跡は周辺の試掘調査等から台地を横切って流れていると考えられる。以上、これらの成果を総合すると、比恵遺跡群は地形的に3つの地区に分けられると考える。第4、26次、第24、25、32次、第29次調査地点のある遺跡群北側（北台地）、第3、8次調査がある遺跡群の西側（西台地）、中央部分（中央台地）の3つが想定される。

次に遺跡の時期的変遷を簡単に見ていく。比恵遺跡群で遺構、遺物が確認できるのは旧石器時代まで遡れる。遺構は未だ、検出されていないが、第19次調査地点ではナイフ形石器が検出されている。

続く縄文時代は突帯文土器以前の出土例はほとんどない。今回報告する第30次調査地点で前期の深鉢が検出されたのが初例である。突帯文土器期では第3次調査地点でまとまった遺物が出上している。

弥生時代以後は遺跡は間断なく継続していく。弥生時代前期は北台地、西台地で集落は形成される。特に、北台地では竪穴式住居、貯蔵穴、木器貯蔵穴等が検出されている。第24～26次調査では谷部の木器貯蔵穴から多数の農具、工具、容器の他、有柄式木剣、儀杖なども出土している。また、第30、31次調査地点では貯蔵穴が40基余り検出され、集落の貯蔵空間と考えられ、集落構造を考える上で重要な成果が上がっている。中期になると、集落は中央台地にも拡大する。中央台地で第6次調査では細形銅剣を副葬した甕棺墓や埴丘墓と考えられる甕棺墓群が検出されている。この他、溝（環濠？）、井戸、貯蔵穴等が多数検出され、集落の中心は中央台地に移ったと考えられる。後期では、第1、9次調査地点で方形区画の環濠が検出されている。また、第7、27次調査地点では大型の倉庫群が検出されている。

古墳時代後期になると、第8次、第7、13次、第39次調査地点で大規模な掘立柱建物、櫓が検出されている。これらは6世紀後半から7世紀前半頃まで遺構群で、「那津官家」関連の施設と考えられている。これ以後は官衙的遺構は那珂遺跡群に見られるようになる。

以上、時期的変遷を簡単に触れたが、各調査地点の詳細は既刊の報告書を見て頂きたい。



Fig.2 比惠遺跡群調査地点位置図(1/3000)

- 比恵遺跡群 1. 第1次調査地点 2. 第2次調査地点 3. 第3次調査地点 4. 第4次調査地点 5. 第5次調査地点  
 6. 第6次調査地点 7. 第7次調査地点 8. 第8次調査地点 9. 第9次調査地点 10. 第10次調査地点  
 11. 第11次調査地点 12. 第12次調査地点 13. 第13次調査地点 14. 第14次調査地点 15. 第15次調査地点  
 16. 第16次調査地点 17. 第17次調査地点 18. 第18次調査地点 19. 第19次調査地点 20. 第20次調査地点  
 21. 第21次調査地点 22. 第22次調査地点 23. 第23次調査地点 24. 第24次調査地点 25. 第25次調査地点  
 26. 第26次調査地点 27. 第27次調査地点 28. 第28次調査地点 29. 第29次調査地点 30. 第30次調査地点  
 31. 第31次調査地点 32. 第32次調査地点 33. 第33次調査地点 34. 第34次調査地点 35. 第35次調査地点  
 36. 第36次調査地点

- 都門道怎群 10. 第10次調査地点 11. 第11次調査地点 12. 第12次調査地点 14. 第14次調査地点 5. 第15次調査地点  
 16. 第16次調査地点 17. 第17次調査地点 18. 第18次調査地点 21. 第21次調査地点

### 第3章 第29次調査地点

#### 1 調査の概要

本調査地点は比恵遺跡群の北東端部に位置し、南西80mに第24次・25次調査地点がある。調査前の試掘調査では、北側に傾斜していく谷の落ち際が確認された。その結果に基づき、調査は台地上の造構と谷部の状況の確認を主目的に行われた。

発掘調査は、工事予定地の建物部分の120m<sup>2</sup>について行い、東側に事務所を設置した。調査はまず、約70cmの表土を除去した後に開始した。約70cmの造成土、旧耕作土を除去すると、鳥栖ローム層を基盤とする造構を検出したが、調査区西側には造構が存在しなかったので、そこを残土置き場とした。標高3.7m~4.2mである。

造構は弥生時代中期の溝1条、土坑2基、谷の落ち際を検出した。また、調査区東側では谷

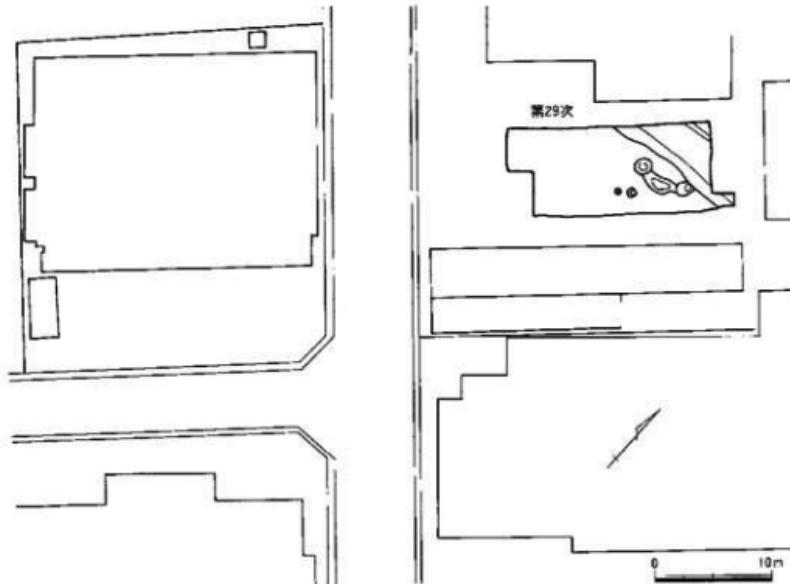


Fig.3 第29次調査地点周辺測量図 (1/500)

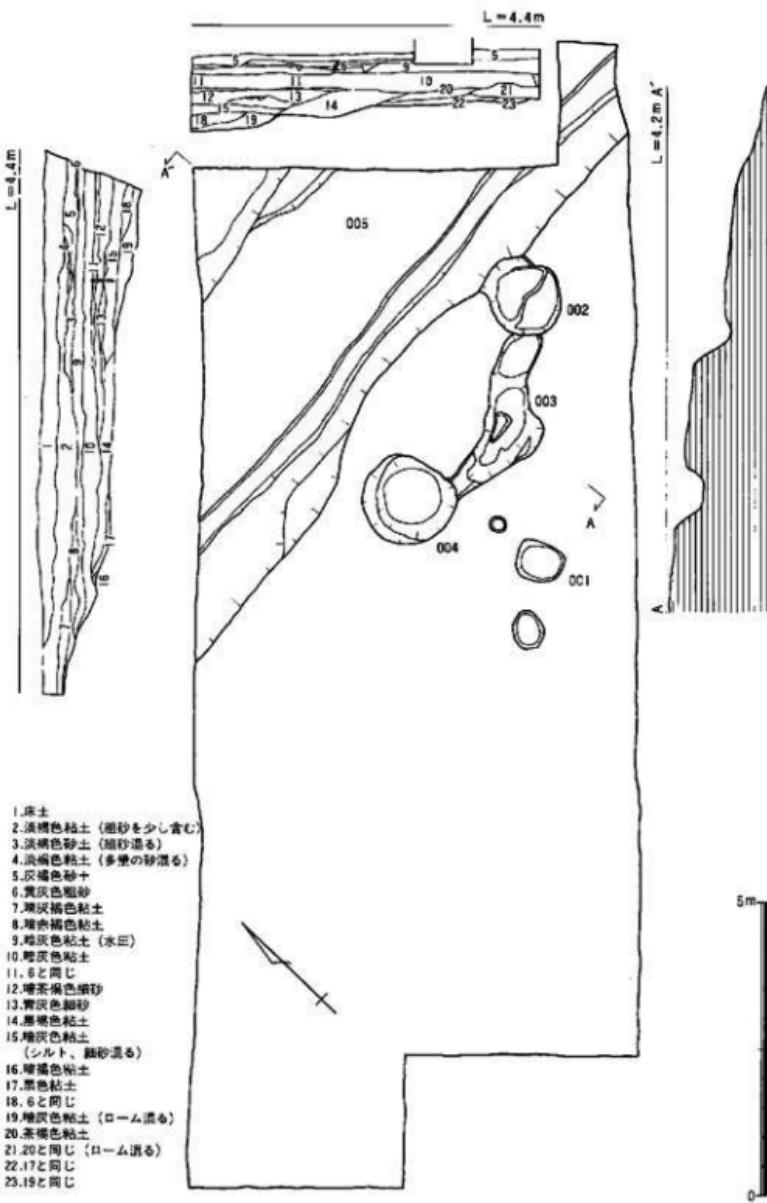


Fig.4 第29次調査地点遺構分布図及び土層断面図(1/100)

が埋没した後に営まれた中世以降の水田を検出した。

## 2 調査の記録

### 1) 水田跡 (Fig.5)

調査区の東側で検出した水田跡は谷が完全に埋没した段階で営まれたもので、近・現代の水田の下約20~40cmの所に存在する(第9層)。水田の耕作土は暗灰色の粘質土で、上面を黄灰色の粗砂(第6層)で覆われている。上面の粗砂を除去すると、大小の足跡が検出した。畦畔や杭列等は検出できなかった。足跡は水田跡の中央を東西方向に直線的に延びるが、南側では全く認められなかった。この足跡がない部分にこの水田跡の区画が想定できるが、水田面の規模等は不明である。遺物は上面の粗砂と耕作土から白磁、弥生土器、黒曜石剝片などが出土した。遺物が少量で時期を決めがたいが、中国製の白磁等から中世以降の水田跡と考える。

### 2) 包含層

調査区東側では台地の落ち際を検出した。そして、谷部では弥生時代前期から中期中葉にかけての包含層を検出した。台地の落ち際は東西方向に直線的に延びている。谷は落ち際から急激に約60cm下がった後は緩やかに傾斜していく。谷の底には流木や種子等が見られた。谷の包含層の堆積状態は水田跡の下、ほぼ水平に堆積している。堆土は暗茶褐色粘質土、暗灰色粘質土であるが、所々に砂層が見られる。遺物は各層で弥生時代前期から中期の土器が出土した。この他、自然木や種子等の植物遺体も出土した。堆積状態からは流水はあまりなく、湿地帯の様相を呈していたと考えられる。又、出土遺跡から中期後半には埋没していたと考える。

### 3) 包含層出土遺物 (Fig.6~9)

遺物の大半は調査区東側の谷の包含層から出土した。包含層の遺物は大きく3つの層に分け

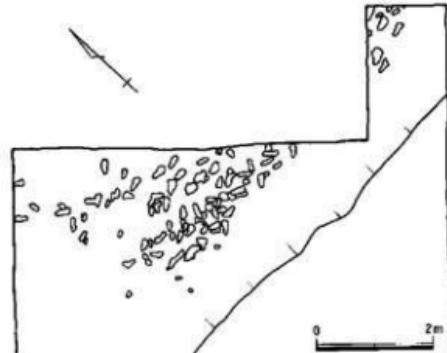


Fig.5 水田跡実測図(1/100)

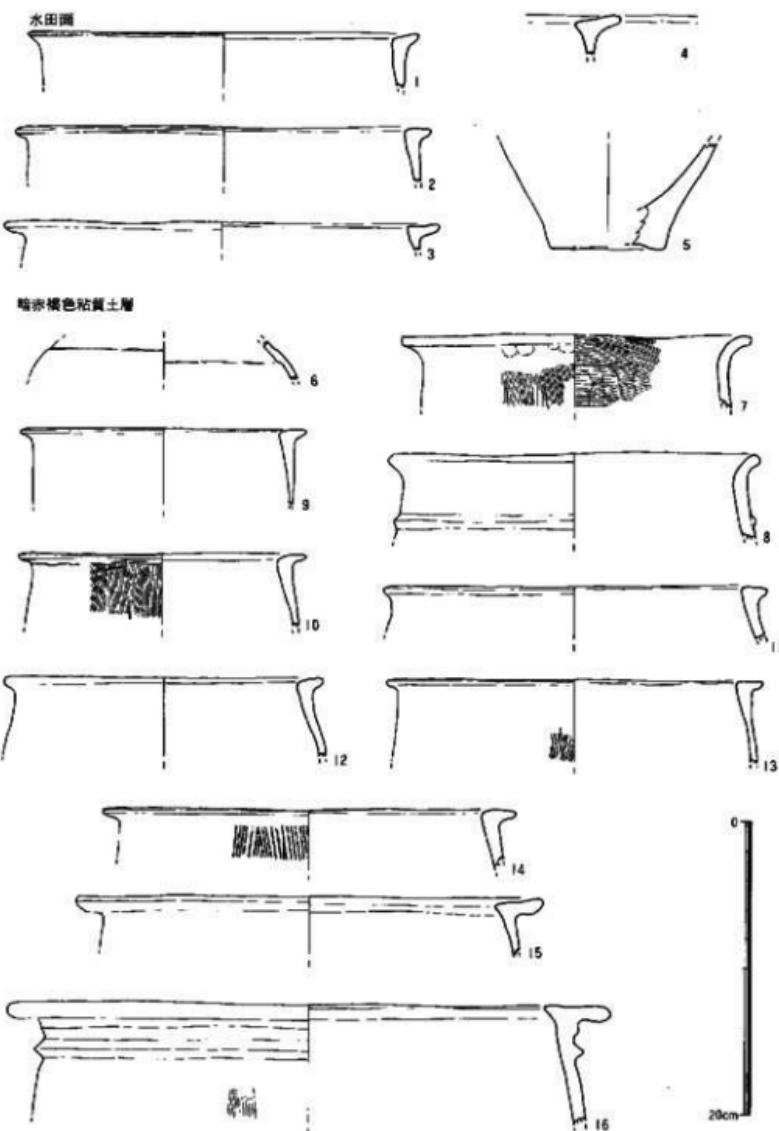


Fig.6 水田面及び包含層出土土器実測図I(1/4)

て取り上げた。1.水田面及び耕作土(暗赤褐色粘質土)、2.暗茶褐色粘質土上、3.暗灰色粘質土である。ここでは各層毎の遺物の記述をする。

#### 包含層1出土遺物 (1~28)

1~4は逆L字形口縁の甕である。5は平底の甕である。6は壺の肩部で、内外面に段がつく。7、8は如意形口縁の甕である。口縁端部は面取りし、8は口縁下に突帯がつく。9~14は逆L字形口縁の甕である。15、16はT字形口縁の甕である。16は口縁下に突帯がつく。17は丸みを持った胴部に、逆L字形の口縁がつく。18、19は蓋である。天井部は少し盛む。20は壺の底部で、半底である。21~27は甕の底部である。底部はいずれも上昇底で、外側に踏ん張るもの(22・23、25~27)とそうでないもの(21、24)がある。28は白磁碗で、口縁がわずかに外反する。

包含層1は水田耕作土のため、出土遺物の時期幅が大きい。遺物は弥生時代前期後半~中期中頃の時期のものが大半であるが、28のような中国製白磁も僅かに見られる。

#### 包含層2出土遺物 (29~60)

29~35は壺である。29、30は口縁で、外面は粘土帶貼り付けによって肥厚する。30は端部下面に刻目を施す。31~33は肩部である。32は貝殻施文による重弧文を施す。33はヘラ描きの羽状文を施す。34は胴部で、胴部最大径の位置に突帯がつく。35は無頸壺の口縁で、口縁外面に突帯がつく。36~41は如意形口縁の甕である。36、38は口唇部に刻目を、39は胴部上位に刻目突帯を施す。41は胴部上位に1条のヘラ描き沈線を施す。42~45は「亀の甲」タイプの甕口縁である。43、45は口縁下に突帯がつく。46~50は逆L字及びT字形口縁の甕である。51、52は鉢である。52は口縁下が肥厚する。53、54は壺の底部である。55~60は甕の底部である。56は底部穿孔が見られる。58、59は上底で、外側に踏ん張る。

包含層2の出土遺物は弥生時代前期後半~中期前半の時期に位置づけられる。

#### 包含層3出土遺物 (61~74)

61~63は壺の口縁である。61は口縁外面が肥厚する。63は口縁内面に粘土帶貼り付けによって肥厚する。64~69は甕の口縁である。64は如意形口縁で、口唇部下端に刻目を施す。65、66は「亀の甲」タイプの甕口縁である。67~69は逆L字形口縁である。70~72は壺底部である。73、74は平底の甕である。

包含層3の出土遺物は弥生時代前期後半~中期前半の時期に位置づけられ、包含層2と時期差は見られない。

#### 4) その他の造構、遺物 (Fig.10)

SK-001

調査区中央に位置し、平面形は橢円形を呈する。長軸80cm×短軸64cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、弥生土器が少量出土した(75)。75は甕口縁である。口縁は逆L字形を呈する。

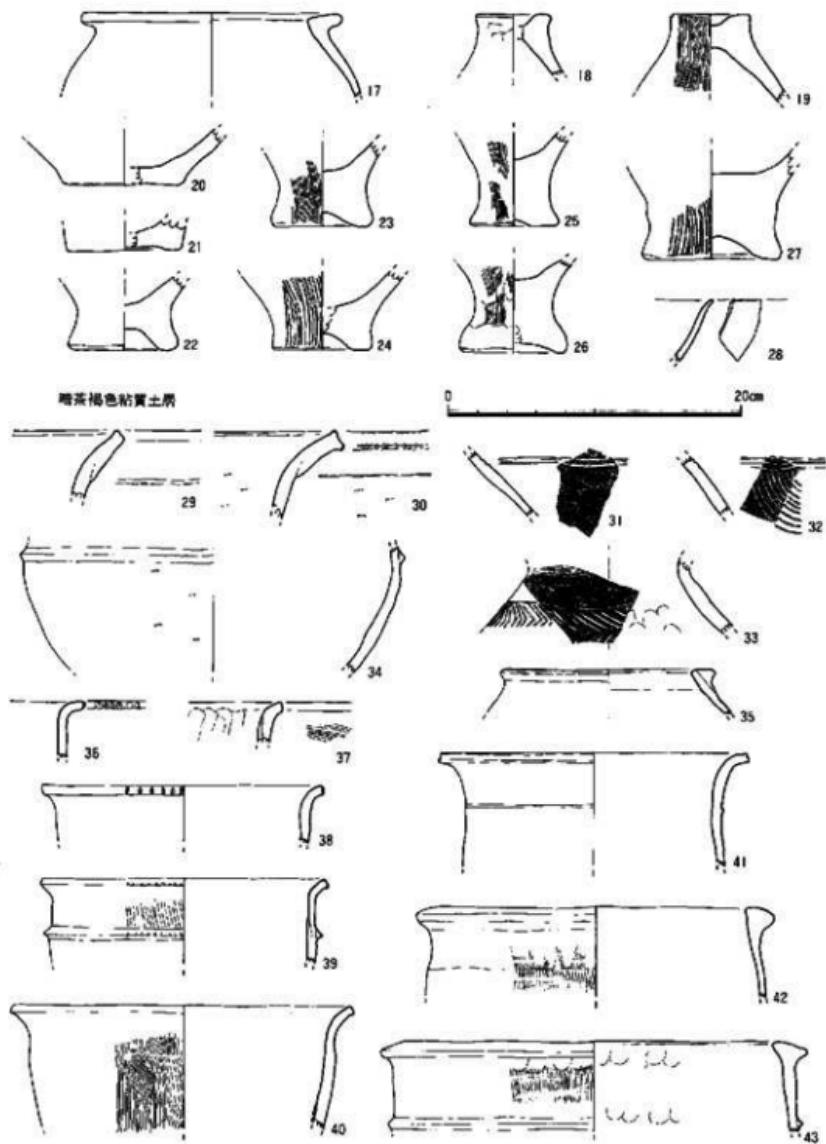


Fig.7 包含層出土土器実測図2(1/4)

## SK-002

調査区東側に位置し、古地の落ち際に並行する溝状の土坑である。SK-003、004に切られる。長さ300cm×幅100cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、弥生上器が少量出土した(76、77)。76は壺で、口縁内面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。頸部には突帯がつく。77は逆L字形口縁壺

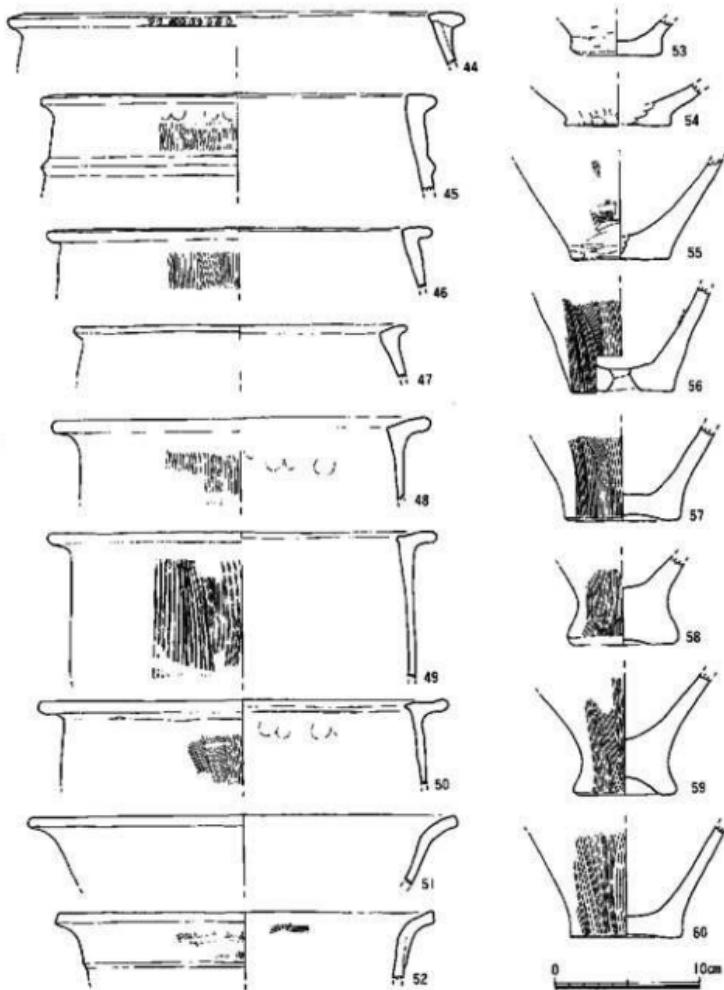


Fig.8 包含層出土土器実測図3(1/4)

である。

SK-003

台地の落ち際に位置し、平面形は円形を呈する。長さ120~140cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、弥生土器が少量出土した(78)。78は平底の甌底部である。

SK-004

台地の落ち際に位置し、平面形は円形を呈する。長さ145~160cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、弥生土器が少量出土した(79~82)。79~82は甌である。79、80は逆L字形口縁の甌である。81、82は上底の甌底部である。81は外側に踏ん張る。

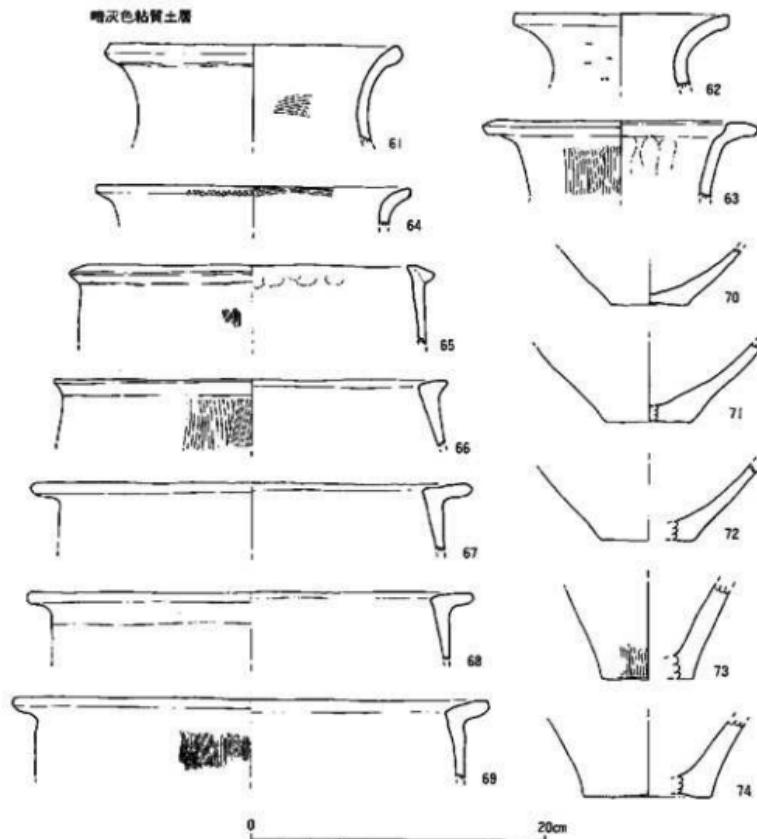


Fig.9 包含層出土土器実測図4(1/4)

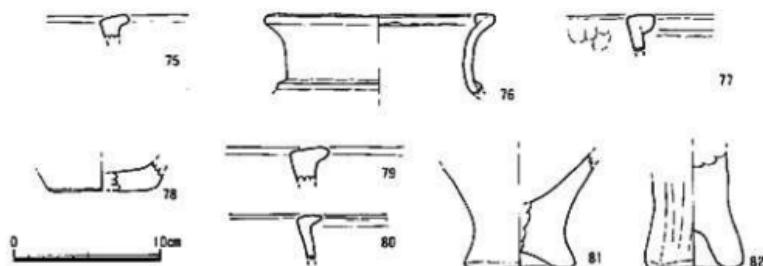


Fig. 10 遺構出土土器実測図(1/4)

遺構の時期はいずれも中期初頭に位置づけられる。

### 3 小結

今回の調査では大地の落ち際で土坑、柱穴等を幾つか検出したが、本調査地点では台地上の遺構はほとんど検出できなかった。台地上の遺構は昭和初期の区画整理の際に削平されたと考えられる。ここでは今回の調査で得られた成果と問題点について述べていく。

本調査地点東側では北側に傾斜していく台地の落ち際が検出できた。比恵遺跡の北端ではこれまでにも幾つかの調査地点で台地の落ち際が検出されている。本調査地点から約150mに位置する第4次調査地点では西側に落ちていく台地の落ち際が検出されている。北側に隣接する第26次調査地点でもこれに連なる台地の落ち際が検出されており、遺跡の広がりの西限と考えられる。また、それらから更に北にある第28次調査地点では調査区北側に洪水による砂層が検出されており、台地の縁辺に近いことを示している。一方、本地点の南西約100mに位置する第25次調査地点では東側に落ちていく台地の落ち際が、これに隣接する第24次調査地点では谷頭が検出されている。また、第32次調査地点では谷が東側に向かって上がっていく状況が確認され、第29次調査地点とそれら3調査地点の間には狭い谷が入ることが予想される。現在、比恵遺跡の北端部は未調査で状況は不明確だが、これらの調査成果を総合すると、Fig.11に示すような地形が復元される。細部は今後の調査によって修正されるであろうが、台地の先端は二段に分かれ、狭長な台地が延びると考えられる。調査の進んでいる二段に分かれた西側の台地は先端の幅約60m、根元の幅約80m、長さ約180mと推測できる。東側は不明確な部分が多いが、今回の調査地点が北端となり、幅約100m、長さ約100mの台地が推測される。

比恵遺跡は市街化が進み、旧地形の復元や遺構の広がりは断片的な調査に頼らざるを得ないが、今後の調査成果の増加を待って、検討を進めていきたい。

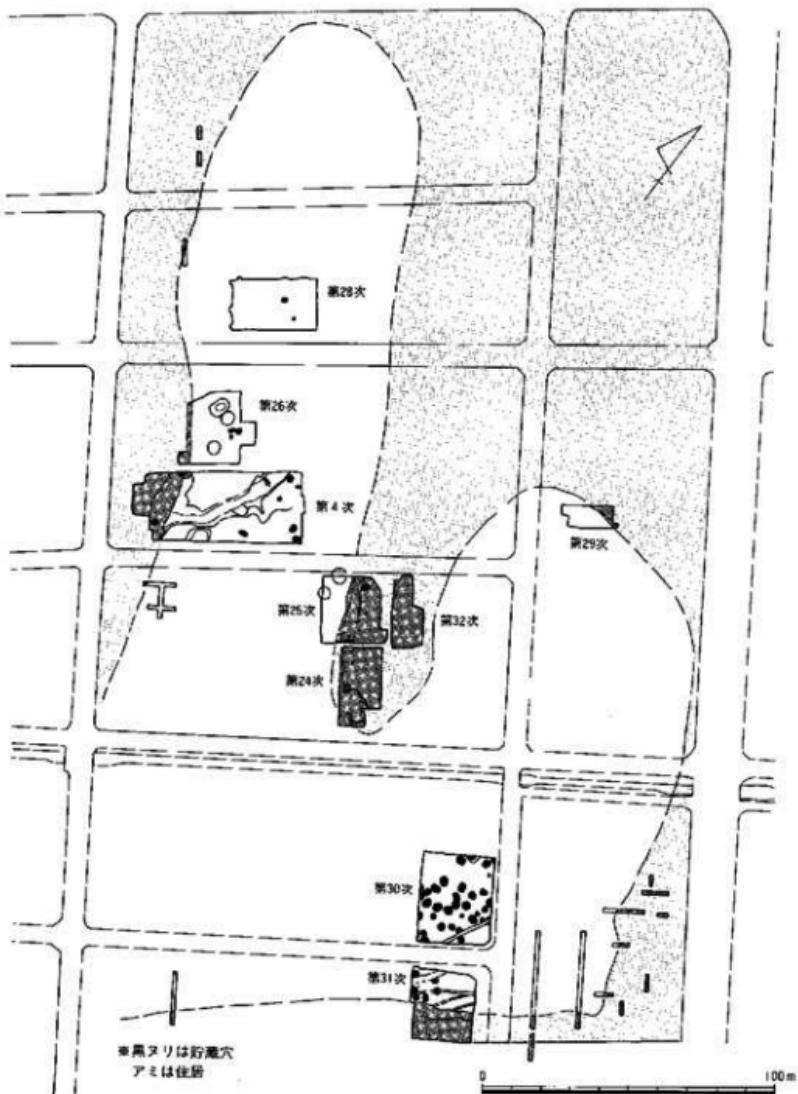


Fig.11 比恵遺跡北端遺構分布図(1/2000)

## 第4章 第30次調査地点

### 1 調査の概要

本調査地点は、比恵遺跡群の北東端部に位置し、第31次調査地点に隣接する。北西100m先には第24・25・32次調査地点があり、古地の先端に入り込んだ狭い谷が検出されている。

今回の開発予定地は試掘の結果、全域に遺構の存在が予想された。しかし、その後の地権者との協議の結果、調査の対象は建物建設によって、地下の遺構に影響を及ぼす部分のみとなつた。調査区は開発予定地に対して、逆L形に設定し、工事対象外の北西部を残上置き場とした。調査前の状況は駐車場で、盛土されて周囲の道路より約50cm高くなっていた。

調査は約70~100cmの盛土を搬出した後に行った。盛土を除去すると、基盤の鳥栖ロームとなり、その面で遺構の検出作業を行った。遺構面の標高は約5.2~5.4mである。

遺構は弥生時代前期の貯蔵穴29基、弥生時代中期の井戸3基、古墳時代前期の溝1条、古墳時代の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物1棟等を検出した。

ところで、調査終了後この土地は転売され、第三者の手に移った。そして、当初の計画は変更され、全域を工事対象とする計画で、事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された。協議の末、今回未調査であった北西部を平成3年度に調査を行うこととなった。

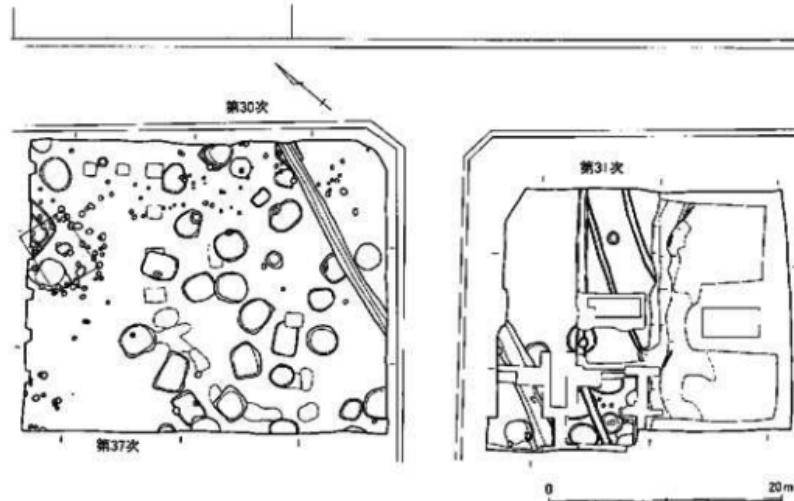


Fig.12 第30・37次、31次調査地点周辺測量図(1/500)

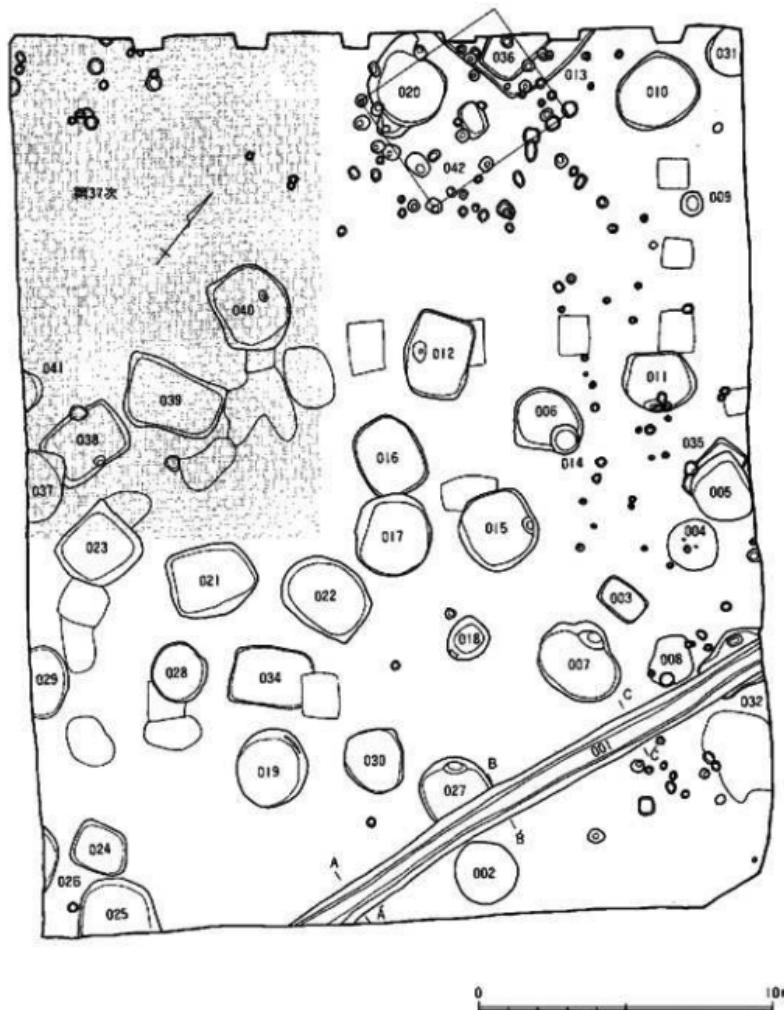


Fig.13 第30・37次調査地点遺構分布図(1/200)

## 2 調査の記録

### 1) 貯蔵穴 (SU)

今回の調査では29基の貯蔵穴を検出した。更に、第37次調査分を含めると、33基の貯蔵穴がこの地域に群集する。分布の状態から更に調査区外に、遺構は広がると考えられる。遺構の遺存状態はあまりよくなく、入口部分の旧状を留めているものはほとんどない。坑壁は袋状を呈するものが多い。残存する遺構の深さは30~140cmで、本来は深さ2mを越えるものもあったと考える。しかし、床面が鳥栖ローム層を掘り抜いて、八女粘土層まで達しているものはない。鳥栖ローム層と八女粘土層の境には湧水層があり、八女粘土層まで達すると湧水する。したがって、本貯蔵穴は湧水を避けるように掘りこまれていることがわかる。坑底の平面形は円形、長方形、楕円形がある。

埋土は貯蔵穴として使用しなくなった後に流れ込んだ暗褐色系の粘質土がレンズ状に堆積するものが多いが、中には使用後すぐに地山の鳥栖ロームで埋め戻しているものもある。

貯蔵穴は調査区全域に分布するが、切り合いはほとんど見られない。そして、遺構の分布はおおまかに、3つの小群が認められる。1群は調査区北側に位置し、更に、北側に遺構の分布が予想される(SU-010、020、031、036)。2群は調査区中央に位置するものである(SU-002、003、004、005、006、007、008、011、012、015、016、017-019、021、022、023、027、028、029、030、032、035、その他第37次調査分のSU-037、038、039、040、041も含まれる)。3群は調査区南側に位置するもので、更に、南側に遺構の分布が予想される(SU-024、025、026)。

遺物は弥生土器(甕、壺、鉢、高环)、石器(磨製石斧、石包丁、石鎌、紡錘車等)が出土した。この他、貝殻、魚骨、獸骨、炭化米等も出土した。遺物はほとんど廃棄されたもの、もしくは流れ込んだもので、坑底に据えられていた状態で出土したものはない。

出土遺物には板付I式段階のものも見られるが、遺構の時期は概ね弥生時代前期中葉(板付II式古)~前期末(板付II式新)に位置づけられる。

#### SU-002 (Fig.14)

2群に属する。平面形は円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際には崩れ落ちたロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。本米の入口部分はかなり窄まっていたと考えられる。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剣片等が出土した。遺物の大半は坑底より上のレベルで出土しており、貯蔵穴が廃絶した後に、廃棄もしくは流れ込んだものであろう。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉に位置づけられる。

#### SU-003 (Fig.14)

2群に属する。平面形は長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。坑底の中央には3カ所小柱穴がある。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉に位置づけられる。

**SU-004 (Fig.14)**

2群に属する。平面形は円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際には崩れ落ちたロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分は余り窄まっていたと考えられる。床面の中央には柱穴が、その脇に2個の小柱穴がある。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。遺物の大半は坑底より上のレベルで出土しており、貯蔵穴が廃絶した後に、廃棄もしくは流れ込んだものであろう。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉～末葉に位置づけられる。

**SU-005 (Fig.14)**

2群に属する。SU-035を切る。平面形は不整橢円形で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土は上面壁際には崩れ落ちたロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-006 (Fig.14)**

2群に属する。東側部分をSE-014に切られる。当初、造構の切り合いで気付かず掘り下げたため、上面ではSE-014の遺物が多く混入している。平面形は不整橢円形で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分は余り窄まっていたと考えられる。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。遺物の大半は坑底より上のレベルで出土しており、貯蔵穴が廃絶した後に、廃棄もしくは流れ込んだものであろう。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉～後葉に位置づけられる。

**SU-007 (Fig.14)**

2群に属する。平面形は不整橢円形で、壁は開き気味に立ち上がる。坑底の壁際には1カ所浅い窪みが認められる。このような窪みはSU-007以外にもSU-011、012、015、027、032に認められる。この窪みは明確に掘り込んだものではなく、梯子等を敷設した際に沈んだものと考える。埋土は上面壁際にはロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分は余り窄まっていたと考えられる。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。遺物の大半は坑底より上のレベルで出土しており、貯蔵穴が廃絶した後に、廃棄もしくは流れ込んだものであろう。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉に位置づけられる。

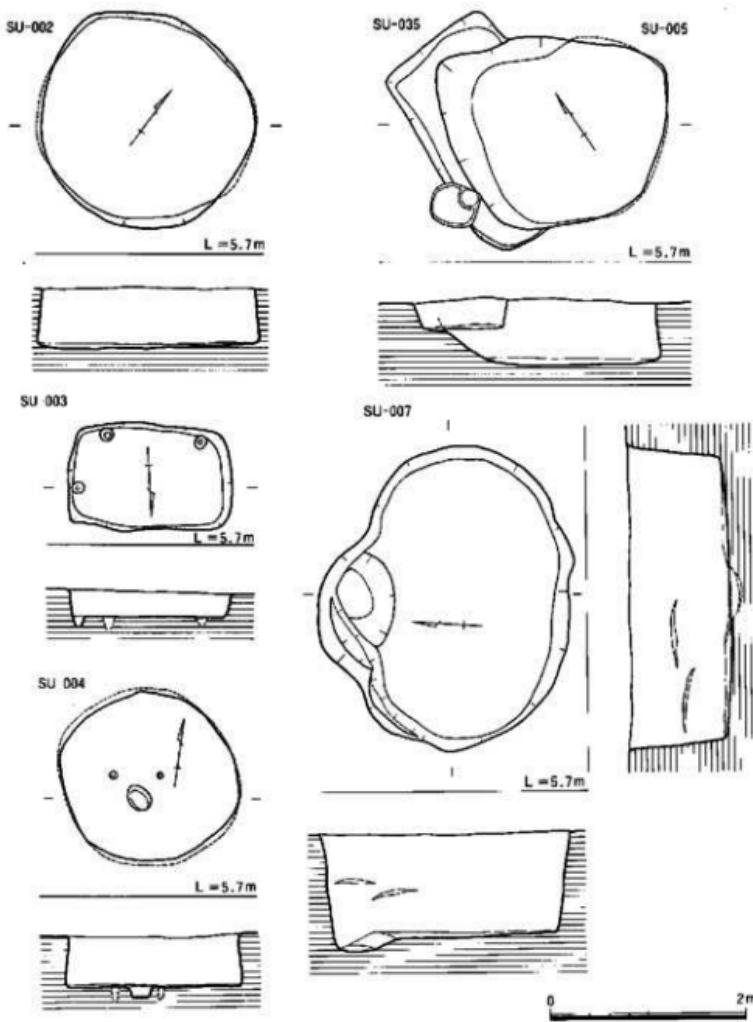


Fig.14 SU-002～005、007遺構実測図(1/60)

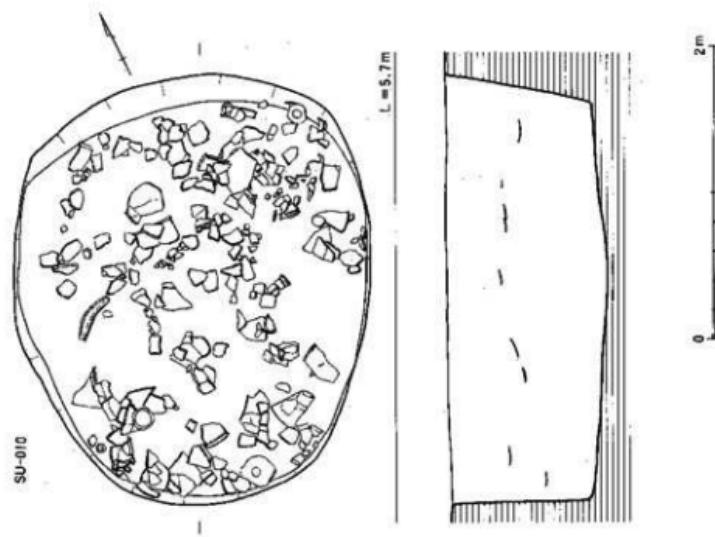
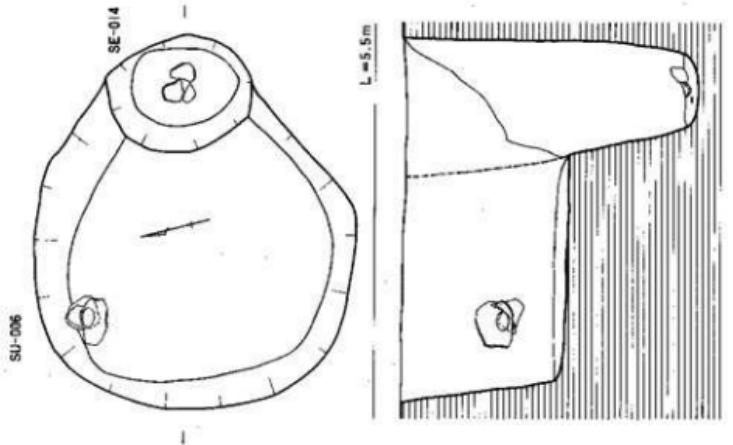


Fig.15 SU-006 + SE-014, SU-010遺跡実測図(1/40)

**SU-008 (Fig.17)**

2群に属する。平面形は不整格円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は暗灰色粘質土まじりのロームで、坑底付近に暗褐色粘質土が堆積する。埋土の状況と遺物の出土状態から人为的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-010 (Fig.15)**

1群に属する。平面形は楕円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際にロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考えられる。遺物の大半は暗褐色粘質土から出土した。遺物は坑底より20~40cm程浮いて、中央部分が高く、周辺では低い位置で出土した。遺物は弥生土器、石包丁、石鎌、黒曜石剝片、安山岩剝片等が多量に出土した。遺物の多くは欠損しており、貯蔵穴として使用した後に、廃棄坑として使用されたと考えられる。なお、出土した安山岩の剝片のはほとんどは接合して一つになり、原石に近い状態に復元できた。剝片は1カ所に集中して出土するという状況は見られなかった。石器製作時に生じた剝片を一括してこの貯蔵穴に廃棄したものと考える。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉~後葉に位置づけられる。

**SU-011 (Fig.17)**

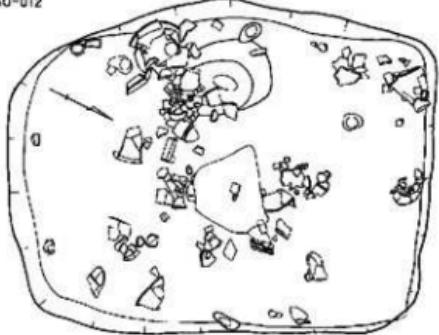
2群に属する。平面形は不整格円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。坑底の壁際には浅い窪みが認められる。埋土は上面から50cm程はロームと炭まじりの褐色系の粘質土が西から東に傾斜して堆積する。それ以下はロームまじりの暗灰色粘質土が凸レンズ状に堆積する。埋土の堆積状態から、ある程度埋没した段階で人为的に埋め戻したとも考えられる。遺物は暗灰色粘質土から弥生土器が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉~木葉に位置づけられる。

**SU-012 (Fig.16)**

2群に属する。平面形は隅丸長方形で、壁は若干袋状に立ち上がる。坑底の壁際には浅い窪みが認められる。埋土は上面から40cm程は暗褐色粘質土とロームが堆積しており、入口部分の壁が崩れ落ちたものと考えられる。それ以下は炭を多く含む暗褐色粘質土が堆積する。貯蔵穴中央、坑底から10cm程浮いた状態で貝殻、獸骨、魚骨の混土ブロック(60×45cm、厚さ15cm)を検出した。本来の入口部分は余り窄まっていたと考える。遺物は上層(1、2層)、中層(混土貝層の下面まで)、下層(12、13層)の3層に分けて取り上げた。遺物は各層から、弥生土器、石器等が出土した。また、中層、下層からは碧玉製の管玉、貝殻・獸骨等の動物遺体、炭化米を多量に検出した。SU-012は貯蔵穴として使用した後に、廃棄坑として利用されたと考える。なお、貝殻、獸骨等の分析は次回に報告する。

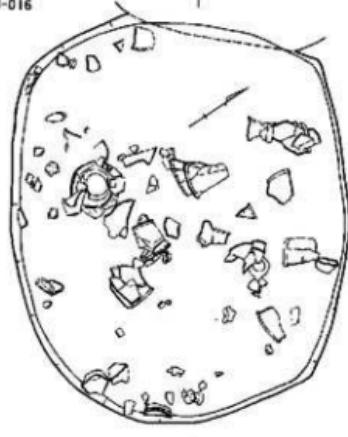
SU-012



L = 5.5m

- SU-012土層
- 1.暗褐色粘土（ローム混る）
  - 2.ローム（暗褐色粘土混る）
  - 3.浅褐色粘土（ローム、炭化する）
  - 4.3 + 多量の炭
  - 5.ローム（多量の暗褐色粘土混る）
  - 6.浅褐色粘土
  - 7.暗褐色粘土（少量のローム、炭化する）
  - 8.浅褐色粘土（少量のローム混る）
  - 9.土、貝を含む層（歯骨、土柱、炭化する）
  - 10.ローム・暗褐色粘土
  - 11.暗褐色粘土（少量のローム混る）
  - 12.暗茶褐色粘土（少量のローム混る）
  - 13.ローム

SU-016



0

2m



Fig.16 SU-012, SU-016遺構実測図(1/40)

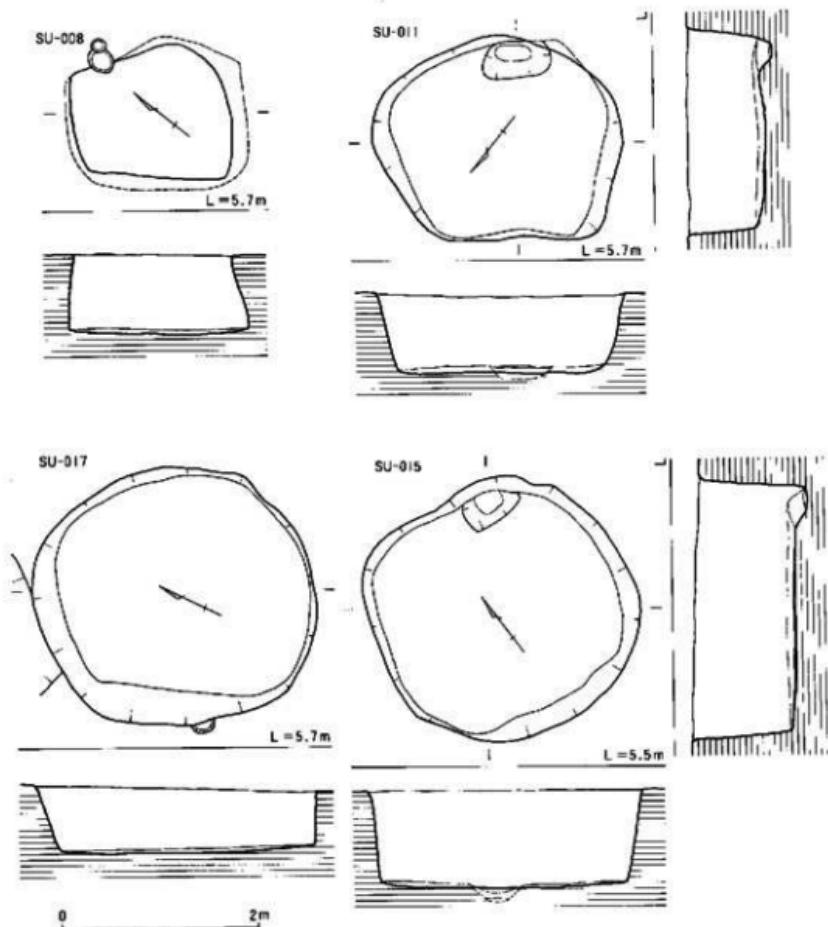


Fig.17 SU-008、011、015、017遺構実測図(1/60)

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉～後葉に位置づけられる。

#### SU-015 (Fig.17)

2群に属する。平面形は梢円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。坑底の壁際には浅い窪みが認められる。埋土は上面にはロームまじりの暗褐色粘質土が薄く堆積するが、それ以下は暗灰

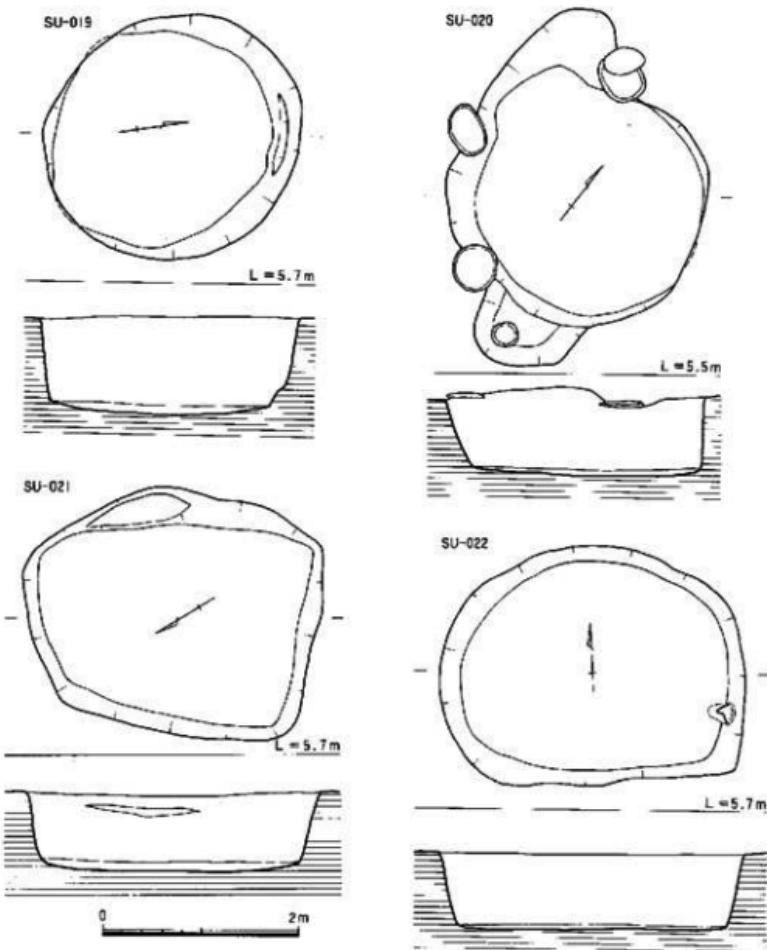


Fig.18 SU-019~022遺構実測図(1/60)

色粘質土が若干混じるロームが堆積する。ただ、坑底には薄く暗褐色粘質土が堆積する。遺物はほとんど出土しておらず、埋土の堆積状態から、廃絶した後すぐに埋め戻されたと考えられる。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉～後葉に位置づけられる。

#### SU-016 (Fig.16)

2群に属する。南側部分をSU-017に切られる。平面形は不整楕円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際にロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土(上層)、黒褐色粘質土(下層)が堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考える。遺物の大半は黒褐色粘質土(下層)からで、弥生土器、黒曜石剝片等が多量に出土した。SU-016は貯蔵穴として使用した後に、廃棄坑として使用されたと考えられる。遺物は中央東側の坑底から約30～40cm程浮いた位置に集中して出土した。また、周辺部分では坑底近くで出土しており、入口部分は中央東側にあって、そこから土器等を廃棄して周辺に流れていったと考えられる。従って、中央東側と周辺の坑底出土の遺物とは廃棄において若干の時期幅が考えられる。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉～後葉に位置づけられる。

#### SU-017 (Fig.17)

2群に属する。平面形は楕円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際にロームが、中央付近は暗褐色粘質土が堆積する。それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土、黒褐色粘質土が堆積する。暗褐色粘質土とロームまじりの暗褐色粘質土の間と、坑底にはロームが堆積しており、埋没の段階で幾度か壁面が崩れ落ちたと考えられる。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考える。遺物は埋土の中程のロームまじりの暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が多量に出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

#### SU-019 (Fig.18)

2群に属する。平面形は楕円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際にロームが、それ以下は黒褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考える。遺物は黒褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

#### SU-020 (Fig.18)

1群に属する。平面形は不整円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。壁上は上面にロームブロックまじりの淡褐色粘質土、中位に崩れ落ちたローム、下層には黒褐色粘質土が堆積する。木米の入口部分はかなり窄まっていたと考える。遺構の上面には弥生時代中期～古墳時代の包含層があり、その時期の遺物が多少混入している。遺物は黒褐色粘質土から弥生土器が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉～末葉に位置づけられる。

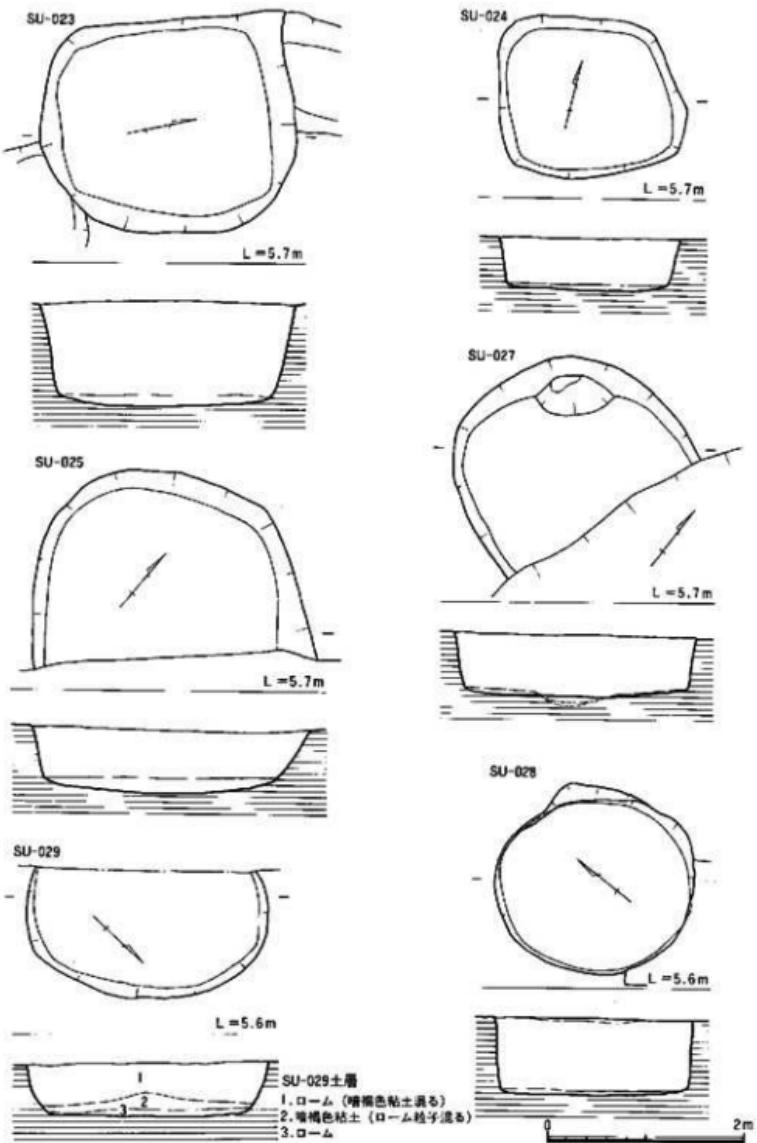


Fig.19 SU-023～025、027～029遺構実測図(1/60)

**SU-021 (Fig.18)**

2群に属する。平面形は不整長方形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際にロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考える。遺物は暗褐色粘質土から弥生上器、黒曜石剝片等が多量に出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉～後葉に位置づけられる。

**SU-022 (Fig.18)**

2群に属する。平面形は梢円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面に暗褐色粘質土が若干見られるが、それ以下は暗灰色粘質土がまじるロームが堆積しており、人為的に埋め戻したものと考えられる。遺物は暗褐色粘質土から弥生上器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉に位置づけられる。

**SU-023 (Fig.19)**

2群に属する。平面形は不整長方形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際にロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が、坑底には崩れ落ちたロームが堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考える。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、紡錘車、黒曜石剝片、安山岩剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-024 (Fig.19)**

3群に属する。平面形は不整梢円形で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土は上面にはロームブロックまじりの暗褐色粘質土が、坑底にはロームが堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-025 (Fig.19)**

3群に属する。平面形は不整梢円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際にロームが、それ以下は黒褐色粘質土が、坑底にはロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考える。遺物は黒褐色粘質土から弥生上器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-026 (Fig.19)**

3群に属する。調査区の西側に造構は広がる。埋土は上面にロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉に位置づけられる。

**SU-027 (Fig.19)**

2群に属する。SD-001に切られる。平面形は梢円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。坑底の

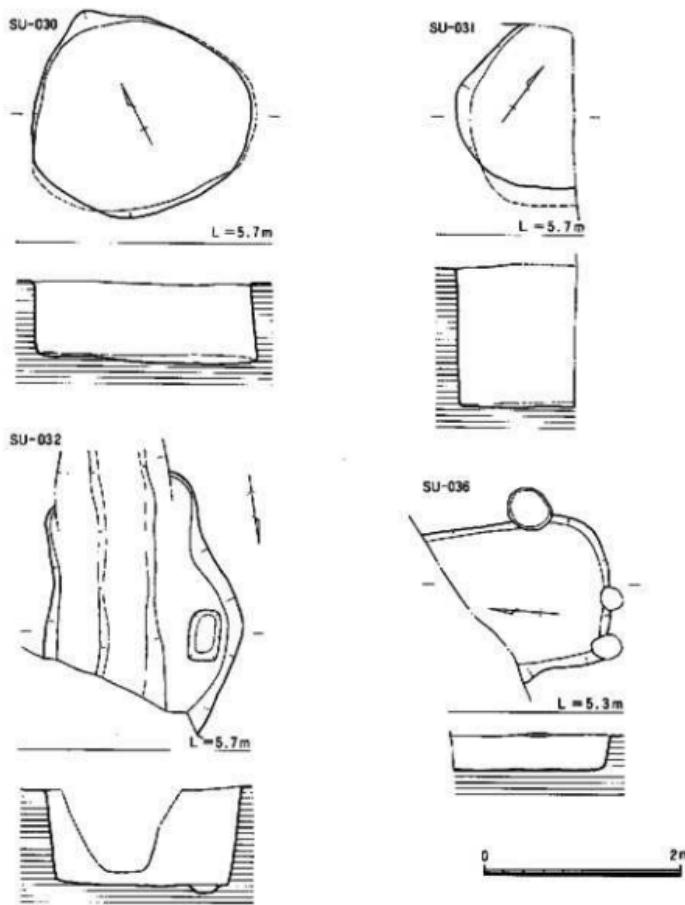


Fig.20 SU-030、031、032、036造構実測図(1/60)

壁際には浅い壅みが認められる。埋土は上部壁際にロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。本來の入口部分はかなり窄まっていたと考える。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯藏穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-028 (Fig.19)**

2群に属する。平面形は不整円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面には暗灰色粘質土まじりのロームが、それ以下は黒褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分は余り窄まっていなかったと考える。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-029 (Fig.19)**

2群に属する。平面形は不整椭円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土まじりのロームが堆積し、坑底に薄く暗褐色粘質土が堆積する。埋土の堆積状態から人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は暗褐色粘質土から弥生上器が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉に位置づけられる。

**SU-030 (Fig.20)**

2群に属する。平面形は不整円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面には暗灰色粘質土まじりのロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が多量に出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期末に位置づけられる。

**SU-031 (Fig.20)**

1群に属する。調査区の北側に造構は広がる。平面形は不整円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際にロームが、それ以下はロームまじりの黒褐色粘質土が堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考える。造構の上面に古墳時代の包含層があり、その時期の遺物が少し混入している。遺物は黒褐色粘質土から弥生上器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期末に位置づけられる。

**SU-032 (Fig.20)**

2群に属する。SD-001に切られる。平面形は不整椭円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。坑底の壁際には浅い窪みが認められる。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-035 (Fig.14)**

2群に属する。SU-005に切られる。平面形は長方形で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉に位置づけられる。

**SU-038 (Fig.20)**

1群に属する。SC-013に切られる。平面形は長方形で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉に位置づけられる。

Tab. 2 貯蔵穴一覧表

Fig. No.	遺構 番号	法量(cm <sup>3</sup> ) 長径×短径×深さ×底面積	底面の 平面形	出土遺物	時期 (前後)	備 考	
14	002	220 × 220 × 60 × 3.39	円形	土器1~28、石器1~2	中~後		
14	003	166 × 167 × 30 × 1.34	長方形	上器29	後	床面に柱穴あり	
14	004	185 × 170 × 50 × 2.36	円形	土器30~35	後~木	床面中央に柱穴あり	
14	005	— × 190 × 68 × 2.88	不整圓形	土器36~43、石器3	後	035を切る	
15	006	— × 220 × 114 × (2.48)	小整圓形	上器44~103、石器4~5	中~後	SE 014に切られる	
14	007	308 × 261 × 106 × 4.62	不整圓形	土器104~118、石器7	中	實際に1カ所浅い底みあり	
17	008	183 × 155 × 80 × 2.44	不整圓形	土器119~120	後		
15	010	294 × 244 × 110 × 5.12	塊圓形	土器121~165、石器8~13	中~後		
17	011	256 × 205 × 80 × 3.51	不整圓形	土器166~168、石器14	後~木	實際に1カ所浅い底みあり	
16	012	290 × 228 × 85 × 5.12	隅丸長方形	土器169~262、石器15~21	中~後	實際に1カ所浅い底みあり	
17	015	280 × 266 × 98 × 4.62	橢圓形	土器263~268、石器22	中~後	實際に1カ所浅い底みあり	
16	016	— × 230 × 62 × 5.03	不整圓形	土器269~339、石器23~24	中~後	017に切られる	
17	017	287 × 262 × 65 × 4.70	橢圓形	土器340~355	後	016を切る	
18	019	262 × 242 × 100 × 3.81	橢圓形	土器356~392	後		
18	020	265 × 240 × 80 × 4.29	不整圓形	土器393~402	後~木		
18	021	295 × 250 × 77 × 4.65	不整長方形	土器410~437	中~後		
18	022	308 × 247 × 76 × 4.98	橢圓形	土器438~457、石器25~26	中		
19	023	258 × 215 × 108 × 3.59	不整長方形	土器458~470、石器27	後		
19	024	191 × 164 × 54 × 2.06	不整圓形	土器471~483	後		
19	025	— × — × 64 × (3.53)	小整圓形	土器484~509	後	半分木査	
—	026	— × — × — × (—)	?	土器510~512	中	大半未査	
19	027	— × — × 60 × (2.74)	橢圓形	土器513~516、石器28	後	實際に1カ所浅い底みあり	
19	028	205 × 190 × 80 × 2.57	不整圓形	土器517~539	後		
19	029	— × — × 60 × (2.33)	不整圓形	土器540~541	中	半分未査	
20	030	224 × 202 × 80 × 3.28	不整圓形	土器542~550	末		
20	031	— × — × 140 × (1.62)	小整圓形	土器551~571	後	半分木査	
20	032	— × 200 × 96 × (1.86)	不整圓形	土器572~573	後	實際に1カ所浅い底みあり	
14	035	225 × 130 × 30 × (0.64)	長方形		中	005に切られる	
20	036	— × — × 36 × (1.81)	長方形		中	半分木査、013に切られる	

## 貯蔵穴(SU)出土の土器

貯蔵穴出土の土器は、弥生時代前期の板付I・II式に分類されてきたものが多い。その中で出土量の多い壺と鉢には、口縁部が如意形に反転するものと、口縁部外面に凸帯を張り付けたものに大別できる。前者は、板付I~II式に分類され、北部九州地方の玄海灘沿岸から遠賀川流域、そして西日本一帯に分布する遠賀川式土器の典型的な壺である。後者は、遠賀川式土器に時間的に並行し、绳文時代晚期後半の凸帯文上器の壺から系譜をひく龟の甲式・高橋式と呼ばれる壺である。北部九州地方の筑後平野、佐賀平野、そして中部九州・南部九州の西半部に分布する。本報告では煩雑さを避け、前者を壺A・鉢A、後者を壺B・鉢Bと呼ぶ。

SU-002(1~28) 1~3は精製の小形壺である。口縁部と頸部に、1は細い沈線、2は枯

上を貼り付けた段、3は浅い段がめぐる。4・5は中形壺で、4は口縁部の外側と内側に粘土を貼付して段をつける。6は3条1組の重弧文、7は浅い沈線を1条を肩部にヘラ描き施す。12~14は壺Aである。12は口唇下半にハケメ原体を押捺し、13は口唇下端と胴部凸帯にヘラ状工具でキザミを施す。15~21は壺の底部破片。22~27は鉢Aで、22~24は口唇下半にキザミを施す。板付II式古~中段階。

**SU-003 (29)** 中形壺の口縁部破片が1点出土したのみである。口縁内面に粘土を貼付する。板付II式中段階に分類できる。

**SU-004 (30~35)** 出土土器は小破片のみである。30は肩部に細い「コ」字形突帯を巡らす壺である。31・32は口唇下端に小さなキザミをヘラ状工具で施す。鉢には鉢Aの33のほかに、図示していないが、直口縁のものがある。34・35は壺の底部である。35は裾がふんばる厚い底部で、内面には薄く煤が付着。32・35は板付II式新段階に、他は板付II式中段階と考えてよい。

**SU-005 (36~43)** いずれも埋土上層から出土した。36は精製の小形壺である。37・38は壺Aで、口唇下半にキザミを施す。外面はナデ仕上げ。39は蓋。40は直口縁の楕形の小形鉢である。41~43は鉢Aである。41・42は同一個体の可能性がつよい。板付II式古段階に属する。

**SU-006 (44~103)** 上層と、中層にあたる暗茶褐色粘質上層からの出土土器には、掘り上げ時にSE-014との重複に気づかなかったため、弥生時代中期後半~末の須歎II式に比定できるものが含まれる。たとえば、中層出土の46、48・49の壺、53・54、56の「く」字形口縁壺、55の鉄形口縁壺、57・58の跳ね上げ口縁に仕上げる「く」字形口縁壺、60の直口縁の鉢、61の逆「L」字形口縁をもつ高杯、62の成人用大形壺などがその例である。これらは本来SE-014にともなうものである。以外はSU-006にともなうものであろう。63~66は出土層位が不明な資料である。

下層にあたる暗褐色粘質上層から出土した土器は、中期の土器には含まれない。67は精製の小形壺である。彩文を描いていた可能性をもつ。73~75は同一個体か。76は壺としたが、鉢の可能性も残す。79~86は壺Aである。79は口唇下半に、80~84・86は口唇下端にキザミを施す。80・81はハケメ原体を押捺したもので、他はヘラ状工具を利用している。82は口縁部下に沈線を1条、その下に柳状工具で刺突した4個1単位の列点文を巡らす。79、82、85の胴部外面には煤が付着。87~89は壺Bである。88は器形的には深鉢に近い。90~94は壺の底部である。90は焼成後に外底から穿孔を施して壊とする。95~103は鉢Aである。95は口唇に細い沈線を巡らし、下端にヘラ状工具でキザミを施す。96は口唇下端と口縁部下の三角形凸帯にキザミを施す。93の胴部上半と101の胴部下半は、2次的な火熱を集中的に受けたためか、帯状に器面が剥離。103は口縁部下に段様の沈線を巡らす。下層出土の土器は板付II式古段階~中段階の範疇で捉えてよい。

**SU-007 (104~118)** 104・105は彩文をもつ精製の小形壺である。105の肩部の彩文は器面の

荒れが著しく不明瞭である。出土時には三角文と考えたが、單斜纖文の可能性がつよいと考え閑化した。106は中形态。肩部には浅い段が巡り、4条1単位の重弧文をヘラ描き施文する。内面には指頭によるナデ痕跡が明瞭に残る。107・108は中形态の同一個体の破片。妻は妻△が圧倒的に多い。110、114、115は口唇全面に、111は口唇下半に、112は口唇下端にキザミを施す。115のキザミは非常に浅く、間隔は不規則である。妻Bは116の1例のみが出土。これらは板付II式古段階と考えてよからう。

**SU-008 (119・120)** 図示した2片しか出土していない。119は口唇下端にキザミを施すが、間隔は不規則である。120とともに弥生時代前期後葉の板付II式中段階の範疇に属する。

**SU-010 (121~165)** 壺の中で、121・122、124~127は球形の胴部に口縁部に向かいそはまる頸部がつき口縁部が反転する器形をもつ。小形态と大形态がある。121は精製の小形态で、器身の荒れが進むが、彩文を描いた赤色顔料が部分的に残る。122は肩部に2条1単位の平行沈線文をひき、その間に斜格子文をヘラ描き施文する。頸部には縱方向に有輪羽状文を描く。壺の正面を表わすものか。大形态には、頸部が筒状に近い124・125と、頸部上半がそはまる126の2者がある。時間的な新古をあらわすものか。123は無頸壺である。小形态の頸部以上の成形を中断したようなつくりである。焼成前に2孔1組の穿孔を対称的位置2ヶ所に施す。

妻は妻Aばかりである。口唇下端にキザミを施すものと、キザミのないものとがあるが、量的には前者が多い。128の胴部外側は横位のハケメ調整の後にナデ仕上げる。129は胴部外側をヘラ状工具でナデ上げる。他は縦位のハケメ調整の後にナデ調整を行う。132~134はほぼ完全にハケメがナデ消される。129、133、138、141は口縁部の屈曲が強く、内面に薄い稜線が巡る。

148~160は鉢である。148は直口縁の小形鉢、158・159は鉢Bで、他はすべて鉢Aに分類される。150、152~154は口唇下端にヘラ状工具でキザミを施す。他はキザミはない。152の胴部外側には部分的ではあるが、厚く煤が付着する。161~165は蓋である。161・162のように摘み部が厚くゆるやかに縫が開くもの、163のように摘み部が薄く胴部中位で開き具合が変化するもの、165のように両者の中間的な位置付けができるものに分類できる。時間的な新古関係が読みとれる。

これらは、弥生時代前期の板付II式古段階~中段階に比定できる。

**SU-011 (166~168)** 図示した以外には、妻Aの口縁部破片が1点あるだけである。166の壺は口縁部下に非常に浅い段が巡る。167は小破片のため底径は不確実。一応鉢とした。168は蓋または妻の底部とした。166・167は板付II式中段階、168は新段階と考える。

**SU-012 (169~262)** 多量の遺物が出土したが、埋土下層部分で集中して出土し、中~上層出土の遺物はかなり少ない。169は肩に浅く細い沈線を巡らす壺で、口縁部周辺を欠くが、完形に近い。他は小破片のみである。175は口縁部を折り曲げ下縁状につくり、端面に浅いキザミを施す。内外とも横ナデ調整。朝鮮系無文土器の系譜をひくものか。

下層土器には壺・甕・鉢がある。壺には、176のような無頸壺と、球形の胴部にゆるやかにすぼまる頸部がつき口縁部が反転して広がる壺とがある。後者が圧倒的に多く、大・中・小形品が揃う。176は口縁部下に浅い段を巡らせ、肩部に無軸羽状文を方向をちがえてヘラ描き施文する。後者の小形品には、177、181・188～190のように精製品が含まれる。181・188・190は彩文を描く。189は胴部上半が屈曲する珍しい例である。小・中形壺の多くは、口縁部と頸部の境に段、もしくは段の退化した稜線が巡る。184・185は段をもたない壺で、甕Bにともなうものである。人形壺には口縁部の外面に粘土を貼付して段をつけるものが多い。199はハケメ原体をつよく押さえてナテつけ段をつくる。196・197・199は口縁部内面に粘土を貼付し肥厚させる。207～229は甕Aで、207～209は口唇全面、210～224は口唇下半～下端、225は口唇の上下端にキザミを施す。キザミはいずれも密で規則正しい。多くは胴部外面の調整をナテ調整あるいはハケメ調整の後にナテ仕上げする。224は外底側から焼成後に穿孔を施す途中で中断する。230～232は甕B。口縁部下にキザミを施す1～2条の凸帯が貼付される。230は粘土紐づくり。233は手づくねのミニチュアの鉢である。234は直口縁の鉢で、235～249は鉢Aである。後者の中でキザミをもつものは、いずれも口唇下端に施す。243のキザミは竹箒を押捺する。235・246は胴部外面に煤が付着。

以上は板付II式古～中段階と考えてよからう。

**SU-015 (262～267)** 遺物の出土量は少なく、いずれも小破片に限られる。図示した甕の破片以外には、鉢Aの口縁部破片と、中形壺の底部破片が各1点あるのみである。262・264は口唇全面に、263は口唇下端にヘラ状工具でキザミを施す。262・264の如意形口縁がつよく屈曲する。262、264は板付II式古段階、263は中段階、厚底の甕の底部である267は新段階に分類できる。

**SU-016 (268～339)** 埋土下層～最下層から集中して遺物が出土して、上層出土ものは少ない。

277は彩文をもつ精製の小形壺である。口唇面を赤彩し、頸部上半に3条の平行線文、肩に有輪羽状文、口縁部内面に短線文を描く。頸部内面には粘土紐の接合線が残る。他の中・大形壺は、いずれも球形の胴部に口縁部にむかひすぼまる頸部がつき口縁部が反転するもので、口縁部下には段が巡る。段があまく不明瞭なものが多い。肩には1～3条の沈線を巡らす。284は胴部上半に2条の平行沈線文をひき、肩の沈線文との間に4～7条の山形文を乱雜に描く。また、292には3条1組の重弧文、294は向かいあう無軸羽状文が施文されている。

甕・鉢には甕Bと鉢Bは含まれていない。302～305、307は口唇全面にキザミを施す。305、307のキザミは細く浅い。306、308・309は口唇下半に、310～314は下端にキザミをつける。口縁部下に凸帯や沈線、段を巡らすものが含まれる。323はハケメ原体をナテ上げて段をつける。胴部下半が直線的にすぼまるものと、胴部上半のふくらみが目立つものの2者がある。前者が時間的に先行する。303、309・310、328、330・332は焼成後に穿孔を施して甕とする。303の穿

孔部分はかなり片寄る。321・322、324は鉢A。324は胴部上半と口縁部下の粘土帯の接合部分を段につくる。338・339は蓋の鉢部の破片。

以上の中で、277、289などの壺、302、305、311、323などの甕は板付II式古段階の範疇で考えられるが、他は板付II式中段階に比定できる。

**SU-017 (340~355)** 埋土の上層と下層から遺物が出土したが、上層出土の土器は小破片がほとんどで量も少ない。下層出土のものには、344・345、354・355など完形近くに復元できるものが含まれ、比較的大形の破片が多い。344は口縁端を欠く。口縁部下にあまい段、肩に細く浅い沈線を1条巡らす。355は口唇下半と胴部上半の段部に、ヘラ状工具でキザミを施す甕Aで、胴部上半のふくらみが日立つ。以上は、板付II式中段階に比定できる。

**SU-019 (356~392)** 356はミニチュアの壺である。口縁部下には粘土の接合線が段状に残り、肩部にも研磨の工具で不明瞭な段をつける。厚い底部をもつ。甕の中で、362・363は口唇全体に、364~373は下端に浅いキザミを施す。369は胴部上半に2段の段が巡り、ヘラ状工具でナデ、段をはっきりさせた上で、間隔を密に細く浅いキザミを施す。373、375~376は口縁部下にヘラ状工具やハケメ原体を横ナデあるいは下方からナデ上げて段をつける。377・378は直口縁の鉢。377は胴部上半に粘土を貼付して段をつける。378の胴部外面には粘土帯の接合線が残る。379~381は鉢A。380は深鉢に近い器形である。383・384は甕。385は高杯である。杯部は深く、脚部はラッパ状にひらく。脚部の付け根に、小さなキザミを施す三角突帯を1条巡らせる。

358、361・362・363など1段階古いものもあるが、ほとんどは板付II式中段階に比定できる。

**SU-020 (393~409)** 遺物は上層と下層からそれぞれ出土した。上層出土の土器の中には、板付II式新段階の厚底の甕底部である394や、跳ね上げ口縁の甕である393、「く」字形口縁甕の395、直口縁の鉢の399など須恵II式新段階のもの、396~398のように有田式に比定できる古墳時代前期の土師器がある。他に須恵器の甕の胴部破片や玉縁口縁の白磁碗などがあり、後世の混じり込みと考えた。

下層出土の土器は、図示したものがほとんどである。壺・甕・鉢・蓋などがある。400は壺で、肩部に細い沈線を巡らせ、下方に無軸羽状文をヘラ描き施文する。甕には甕Aと甕Bがあり、鉢には図示していないが、鉢Aがある。403・404は蓋。板付II式中~新段階に分類できる。

**SU-021 (410~437)** 411は朝鮮系無文土器と考えた。松菊里タイプにもっとも近い。410も同様の可能性がつよい。粘土帯を積み上げて整形し、胴部外面は乱雜に研磨調整を施す。焼成後に外底側から穿孔具を回転させて孔をあけて瓶とする。胎土や焼きは弥生土器と変わらない。

412・413は精製の小形壺で、口縁部や肩部の段はあまく、412は不明瞭な稜線に退化している。他に中・大形壺の口縁部がある。甕はいずれも甕A。421は口唇全面、423は下半に、422、424は下端にヘラ状工具で浅いキザミを施す。422、425は胴部上半の張りが日立つ。鉢は、430が直口縁の鉢である以外、他はいずれも鉢Aである。427は口縁部内面に薄く粘土を貼り付け、

口唇の上下端にヘラ状工具で細く小さなキザミを施す。428の胴部上半は、2次的な火熱を受けたためか、帯状に器面が剥離する。413・421・423は板付II式古段階、他は板付II式中段階に比定できる。

**SU-022 (438~457)** 壺・鉢が多く、壺は小破片だけ、蓋は2個体が出土したのみである。壺の中で、441・443は口唇全面に浅く小さなキザミを、447は口唇下半に大小不ぞろいのキザミを施す。他のほとんどの壺のキザミは口唇下端につける。胴部外面をナデ調整、あるいはハケメ調整の後にナテ仕上げるものが多い。444は口縁部外周を肥厚させて段をつける。445は胴部上半の粘土帶接合部を段としてキザミを施す。鉢には直口縁と如意形口縁をもつものの2者がいるが、後者が圧倒的に多い。450は口縁部付近がわずかにすぼまる。球形胴の壺をつくる途中で胴部中位で中断したようなプロポーションである。451は蓋で、裾端部の内面に帯状に煤が薄く付着。

以上は、441、443が古い要素をもつが、他は板付II式中段階と考えてよからう。

**SU-023 (458~470)** 出土土器は比較的少なく、小破片が多い。壺には中・小形品がある。457は肩部に無軸羽状文、458は段風の沈線をヘラ状工具で巡らす。壺には壺Aと壺Bがある。418は直口縁の鉢。409は壺、470は壺の底部である。板付II式中段階または新段階に属する。

**SU-024 (471~483)** 471~473は壺の口縁部であるが、口縁部と頸部の境の段はあまり、472は接頭に近く口縁部の幅は狭い。475は壺Bで、口縁部凸唇は小さめである。476は口唇下端に浅く小さなキザミをもつ。口縁部がつよく屈曲する。477は深鉢に近いプロポーションをもつ。外周には研磨調整を施す。出土土器はすべて板付II式中段階と考えられる。

**SU-025 (484~509)** 上層出土の484は朝顔形に口頭部がひらく広口壺、485は厚い上げ底の壺である。ともに弥生時代中期初の須玖I式古段階に比定できる。

下層からは比較的まとまって資料が出土した。486・487は小形壺である。486の口縁部の肩曲部にはヘラ状工具を押しつけて不明瞭な段をつける。肩部には間隔の一定しない2条の沈線を描き、その間に部分的に短斜線をいれる。487は円筒状の頭部をもち、口縁部は逆「L」字形につよく折り曲げる。壺には、壺Aと壺Bがあり、後者は胴部上半にも突唇を貼付する。量的には前者が多い。また前者の中で、口縁部にキザミをつけるものは、すべて口唇下端に施す。キザミ自体は浅く小さい。鉢には、鉢Aの499と、直口縁部の500の2者がある。後者は量的には限られる。501は蓋で、摘み部は厚い。

以上は板付II式中段階と考えてよい。

**SU-026 (510~512)** 図示した以外に、中形壺の頭部の破片があるので、上器の量は極端に少ない。510は、口縁部近くの粘土帶の接合部のやや上方に、ヘラ状工具を左まわりに押しつけて段をつける。いずれも板付II式古段階の範囲で捉えておく。

**SU-027 (513~516)** 完形に近くに復元できた541・516を除くと、他は小破片である。514の

口縁部はゆるやかに屈曲し、肩部は底部へむけてほぼ直線的にすばまる。516は肩部の張りが目立ち、全体に丸みをおびたプロポーションをもつ。515は口唇全面に大小不規則なキザミを施す。514・515は1段階古い様相をもつが、他は板付II式中段階に比定できる。

**SU-028 (517~539)** 墳上土層と下層からそれぞれ出土した。上層出土の土器は、520が比較的大形の破片であるを除き、小破片だけである。519は小破片のために器体の傾きは確実でない。522は外面にヘラケズリ調整を施す。甕もしくは鉢の脚台様の底部。523は杯部が深い高杯もしくは脚付杯で、脚の付け根に小さく細いキザミを施した三角突帯を貼付する。

下層出土の土器の中で529・530、535、539はほぼ完形に復元でき、他は破片であるが比較的大形である。524は口縁部下と内面にヘラ状工具で段をつける。甕・鉢は如意形口縁をもつ甕Aや鉢Aだけである。甕には口唇下端にキザミを施すものが多いが、529は口唇上端にキザミをつける。534は蓋の摘み部。535は球形の胴部をもつ鉢Aである。口縁部を「く」字形に折り曲げる。539は大形鉢で、つくりは大形壺を胴部中位で製作を中断して、わずかに屈曲する口縁部をつけたような器形である。下層出土の上器は板付II式中段階に比定できる。

**SU-029 (540~541)** 出土土器で同化できたのは、図示した2点と甕Aの口縁部破片の1点の計3点である。540は偏球形の胴部をもつ無頸壺、541は胴部上半の張りが目立つ甕Aで、口唇下半に大きめであるが浅いキザミを施す。口縁部下に幅広の段状の沈線を巡らす。板付II式古段階。

**SU-030 (542~550)** 出土土器は少なく、図示したものがほぼすべてである。542の壺は口縁部をよく折り曲げ、頸部との境に非常に浅い段状の沈線を巡らす。542は口縁端外側にキザミを施す凸帯を貼付する。544~547は甕Aで、544、547は口唇下端、545は全周にキザミを施す。これらは、板付II式古~中段階のものである。

**SU-031 (551~571)** 上層出土の上器には551~553の古墳時代前期の有田式の土師器が含まれる。

下層出土の土器には壺、甕、鉢、蓋がある。554は口縁部外側と内面端部を肥厚させ段をつける。556の口縁部下の段は非常にあまい。肩部の文様は、部分的にしか残っておらず、短斜線文か羽状文であろう。558は肩部と胴部上半に沈線をひいて無軸羽状文を、頸部に2条1単位の短線文をヘラ描き施文。甕には甕Aと甕Bがあり、後者の口縁部と胴部の凸帯にはキザミが施される。565は鉢、567は蓋の摘み部の破片。板付II式中段階に比定できる。

**SU-032 (572~573)** 図示した2点が出土したのみである。572は壺の肩部の破片。573は甕の口縁部片である。板付II式中段階のものである。

**SU-033 (574)** 574は「M」字形凸帯を巡らす壺の肩部の破片。外面は丹塗り。他には「く」字形口縁部をもつ甕の小破片が出土したのみ。弥生時代中期の須玖II式で、後世の混じり込み。

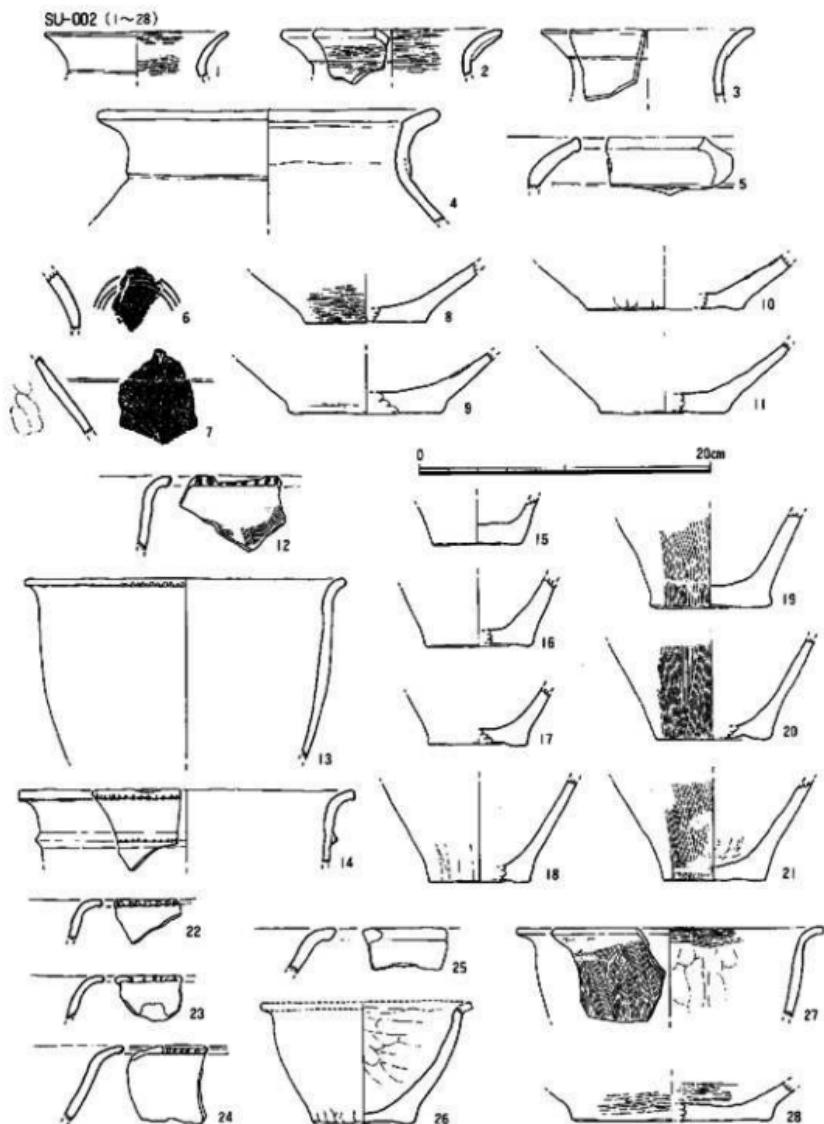


Fig.21 SU-002出土土器実測図(1/4)

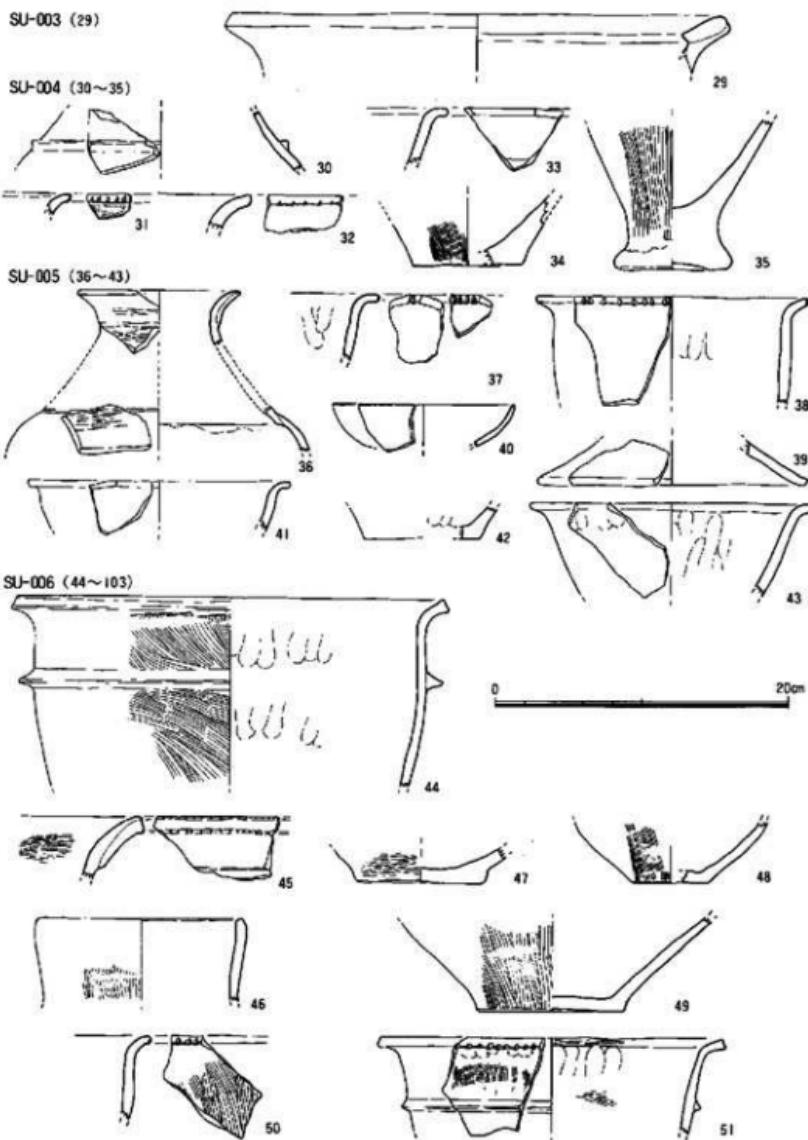


Fig.22 SU-003~006出土土器実測図(1/4)

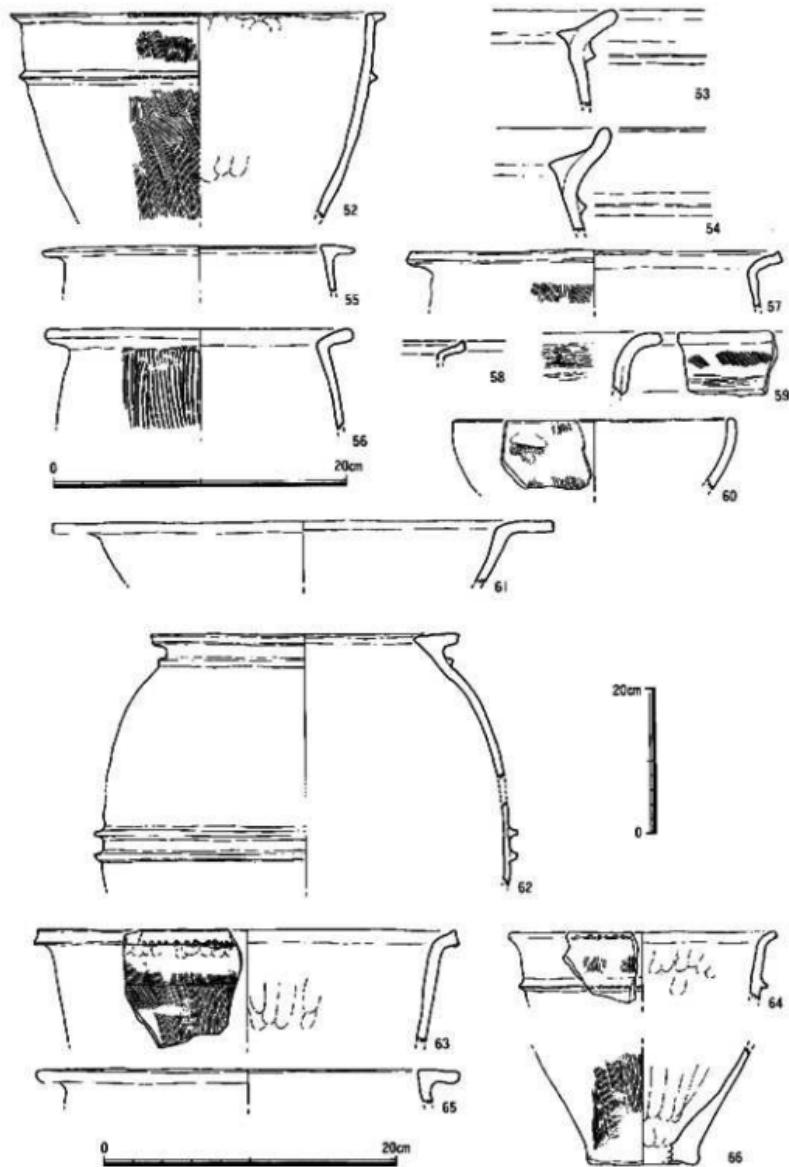


Fig.23 SU-006出土土器実測図(1/4)

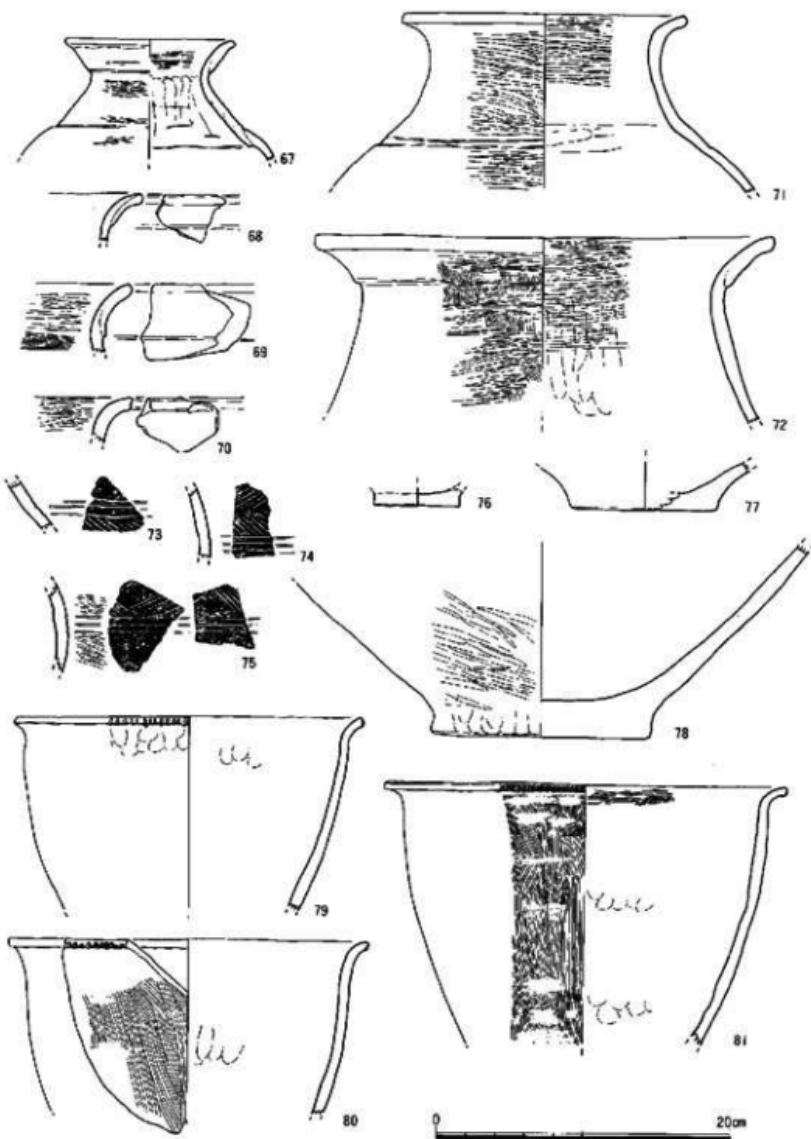


Fig.24 SU-006出土土器実測図2(1/4)

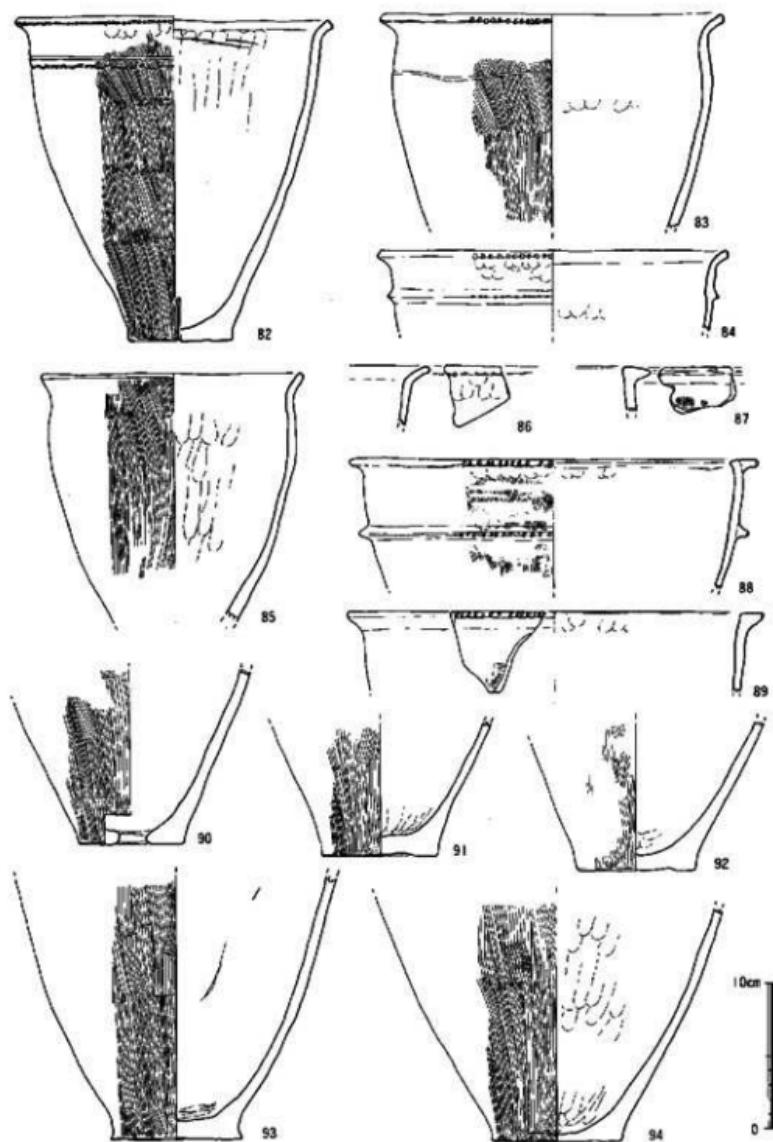
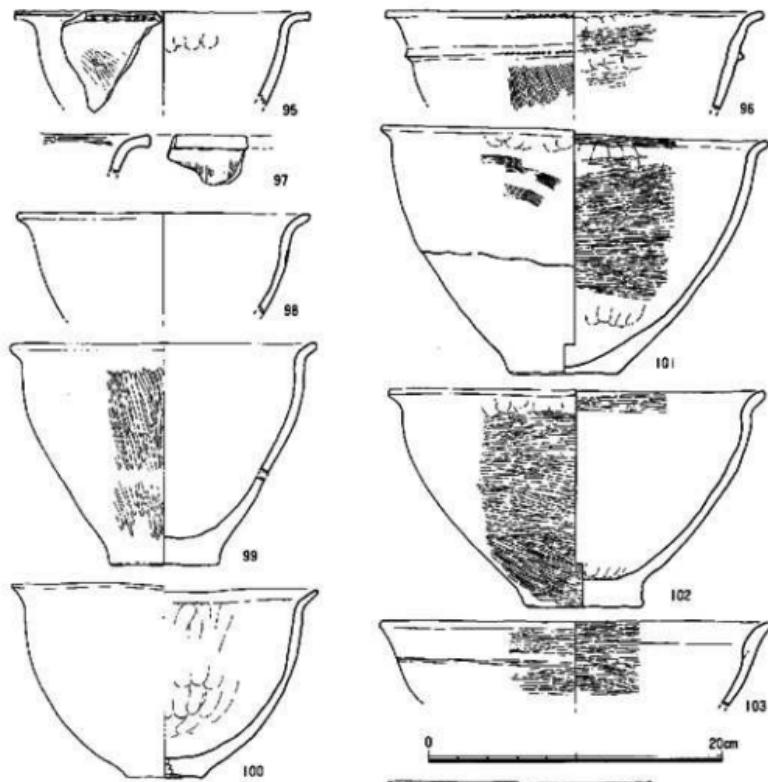


Fig.25 SU-006出土土器実測図3(1/4)



SU-007 (104~118)



Fig.26 SU-006・007出土土器実測図(1/4)

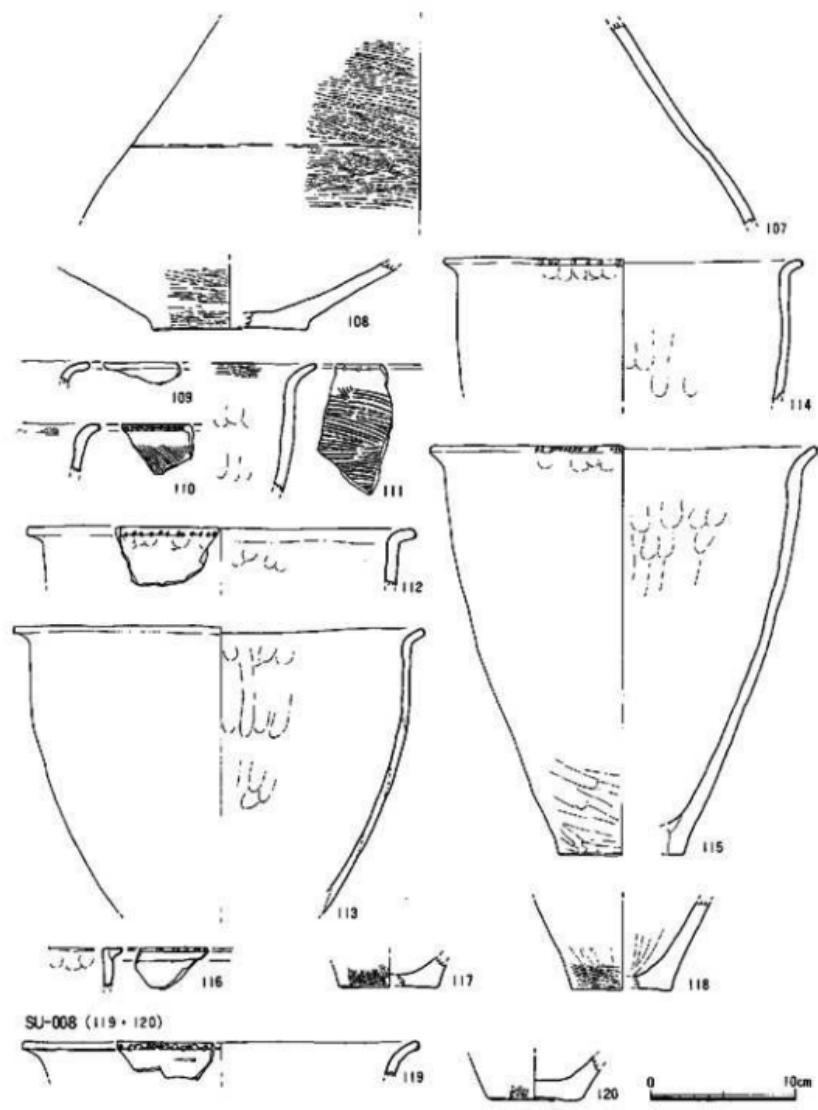


Fig.27 SU-007・008出土土器実測図(1/4)

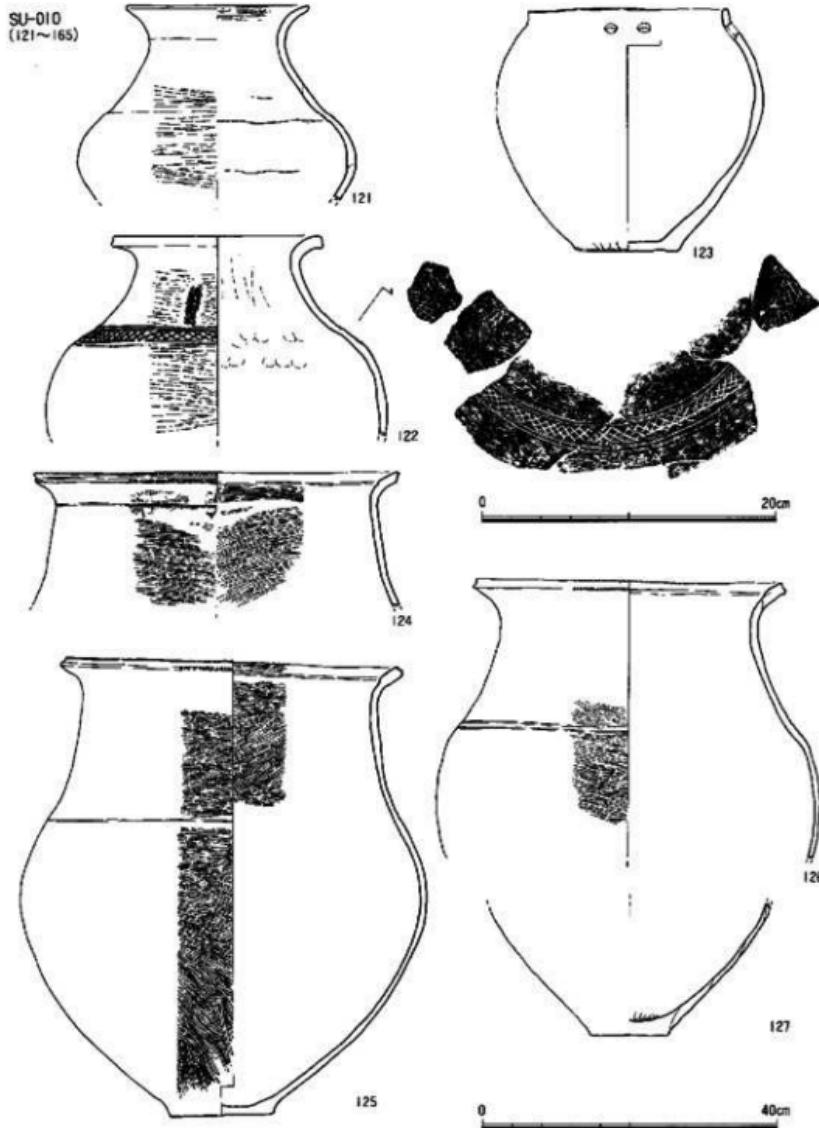


Fig.28 SU-010出土土器実測図(1/4, 1/8)

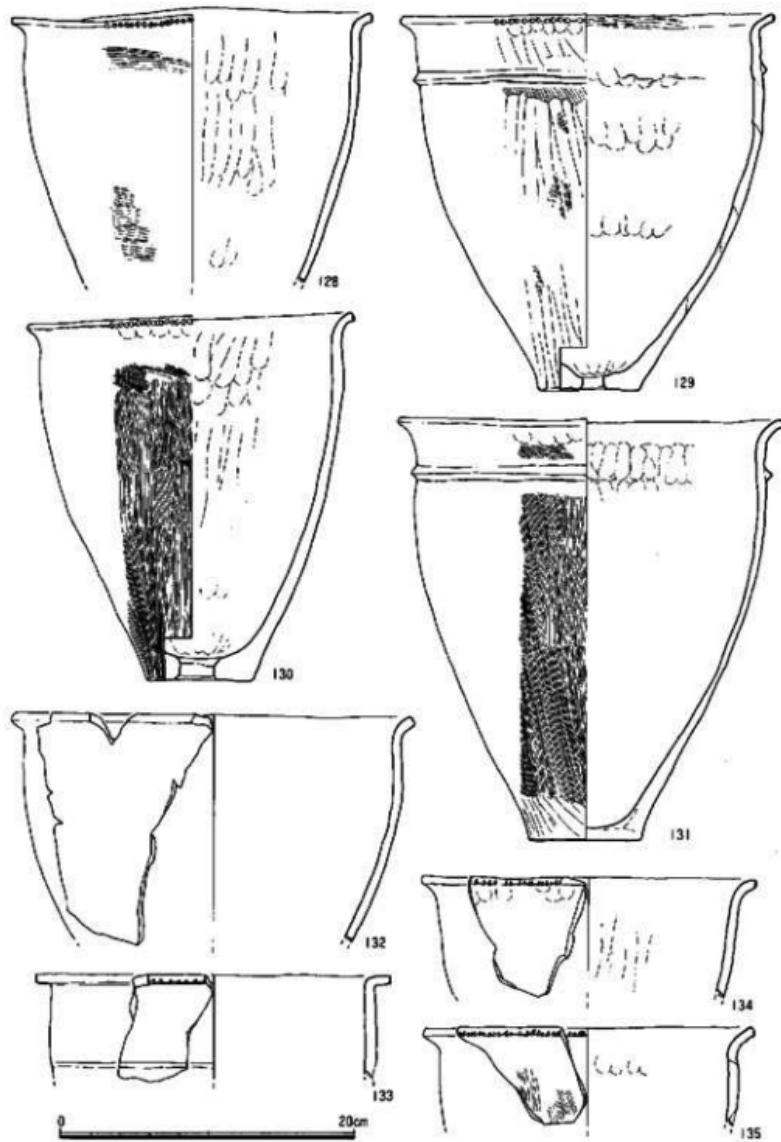


Fig.29 SU-010出土土器実測図2(1/4)

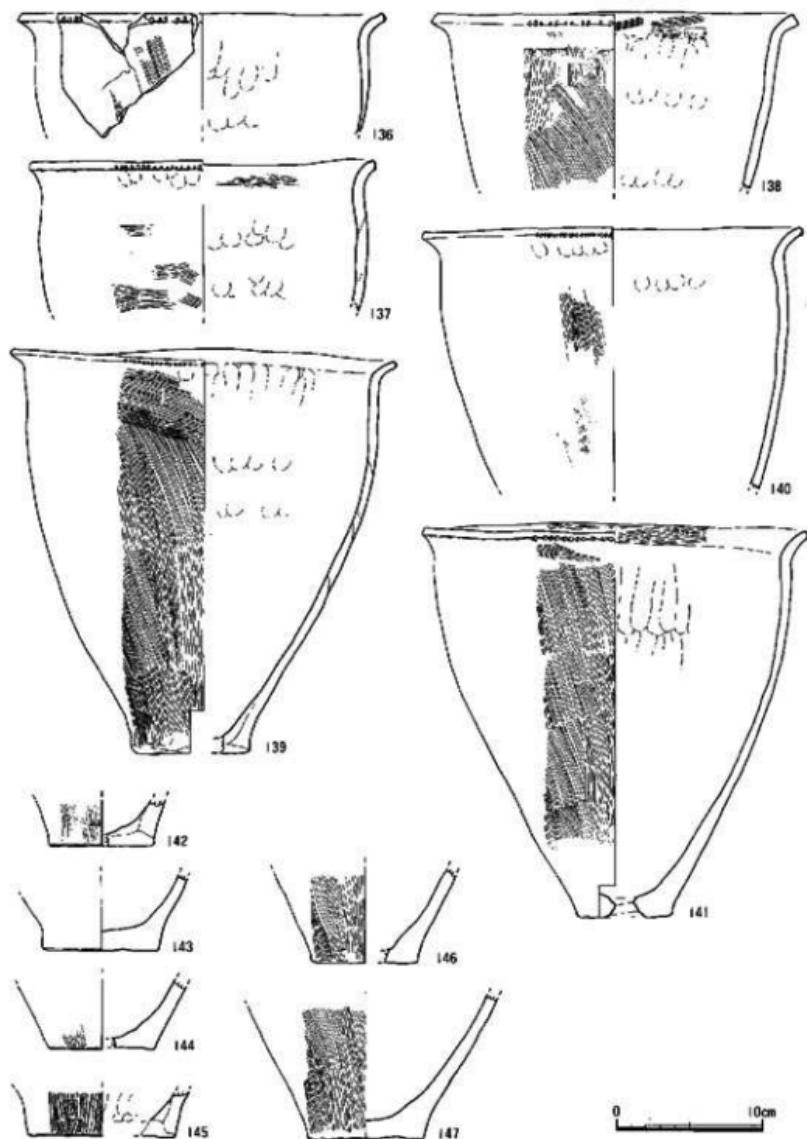


Fig.30 SU-010出土土器実測図3(1/4)

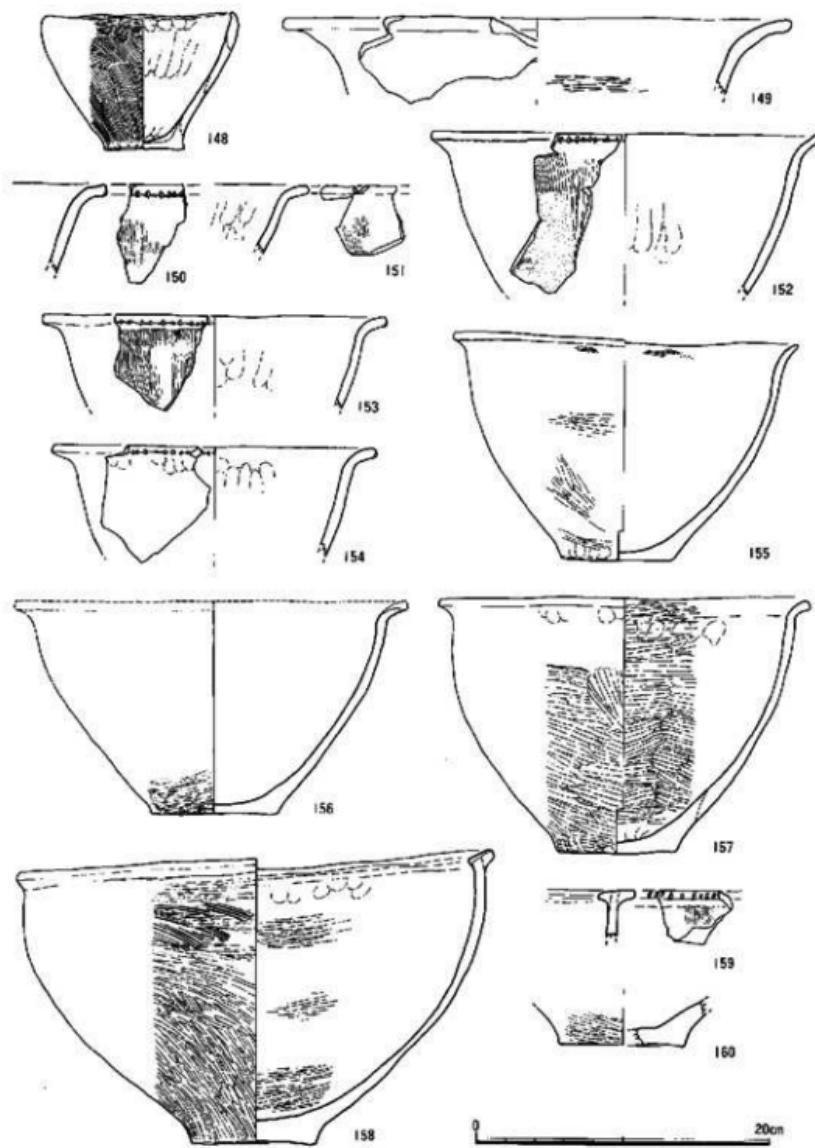


Fig.31 SU-010出土土器実測図4(1/4)

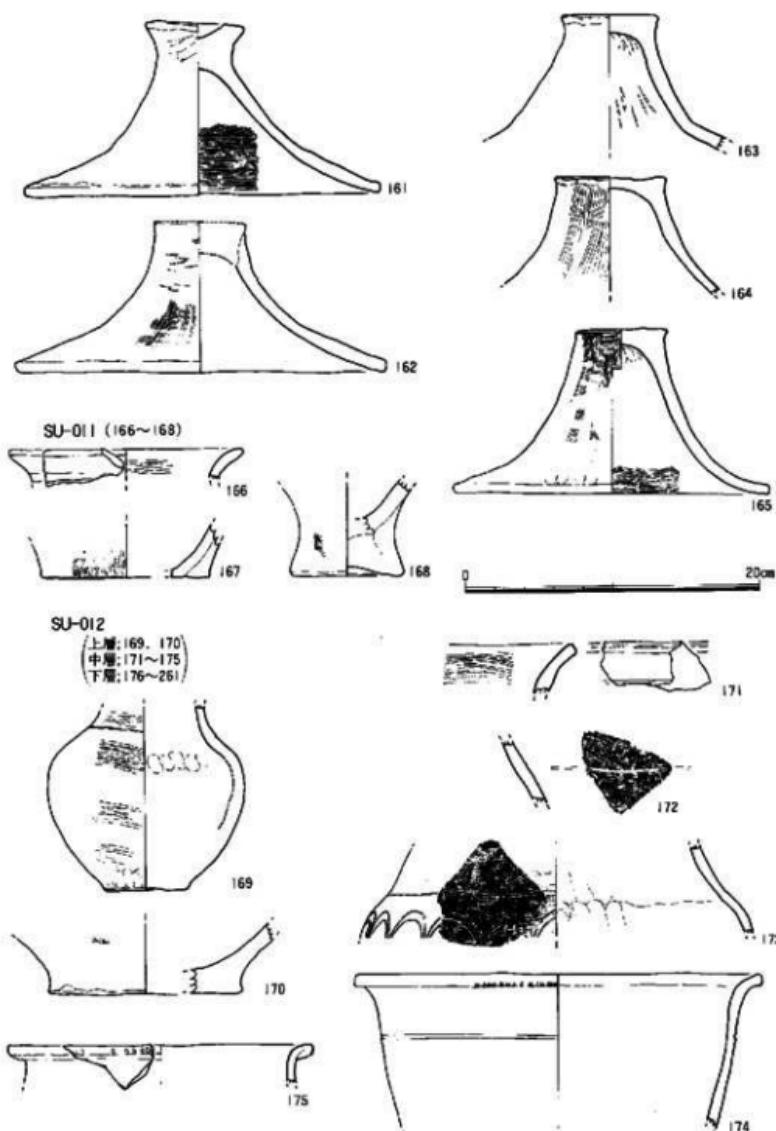


Fig.32 SU-010・011・012出土土器実測図(1/4)

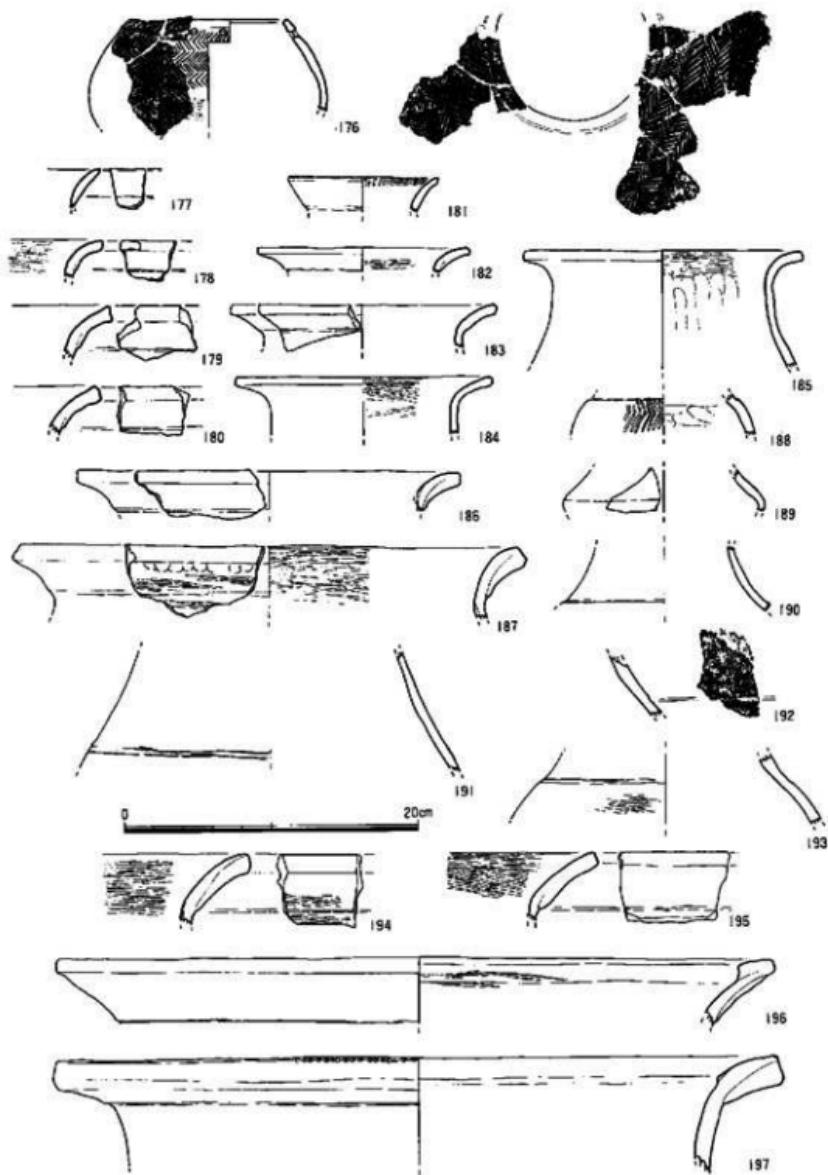


Fig.33 SU-012出土土器実測図1(1/4)

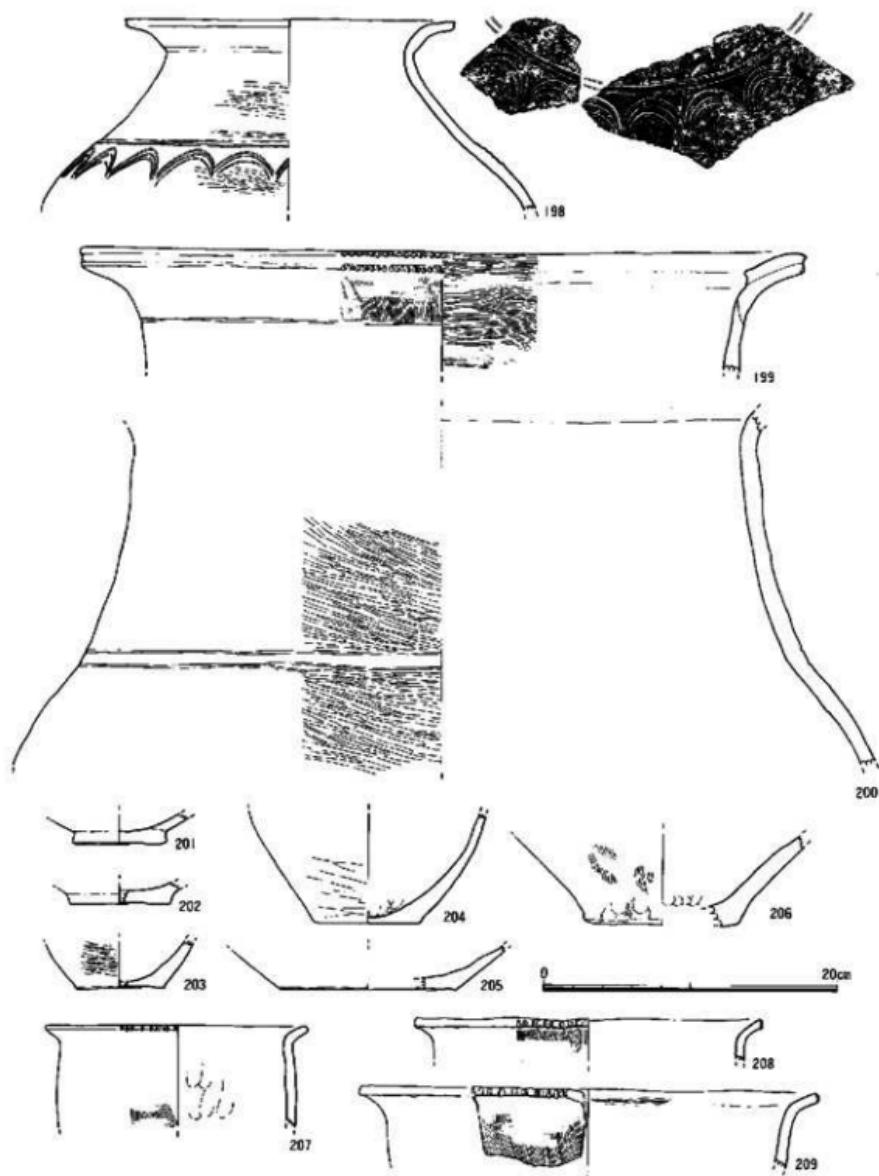


Fig.34 SU-012出土土器实测图2(1/4)

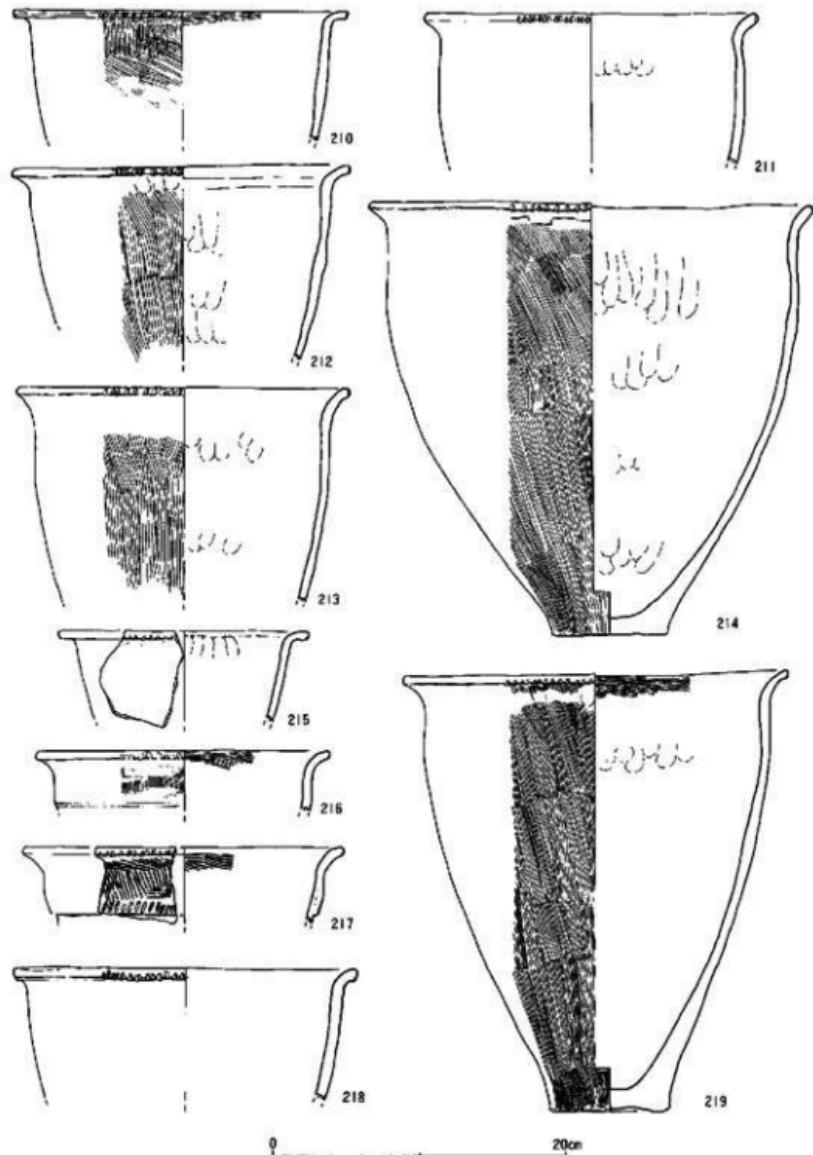


Fig.35 SU-012出土土體実測図3(1/4)

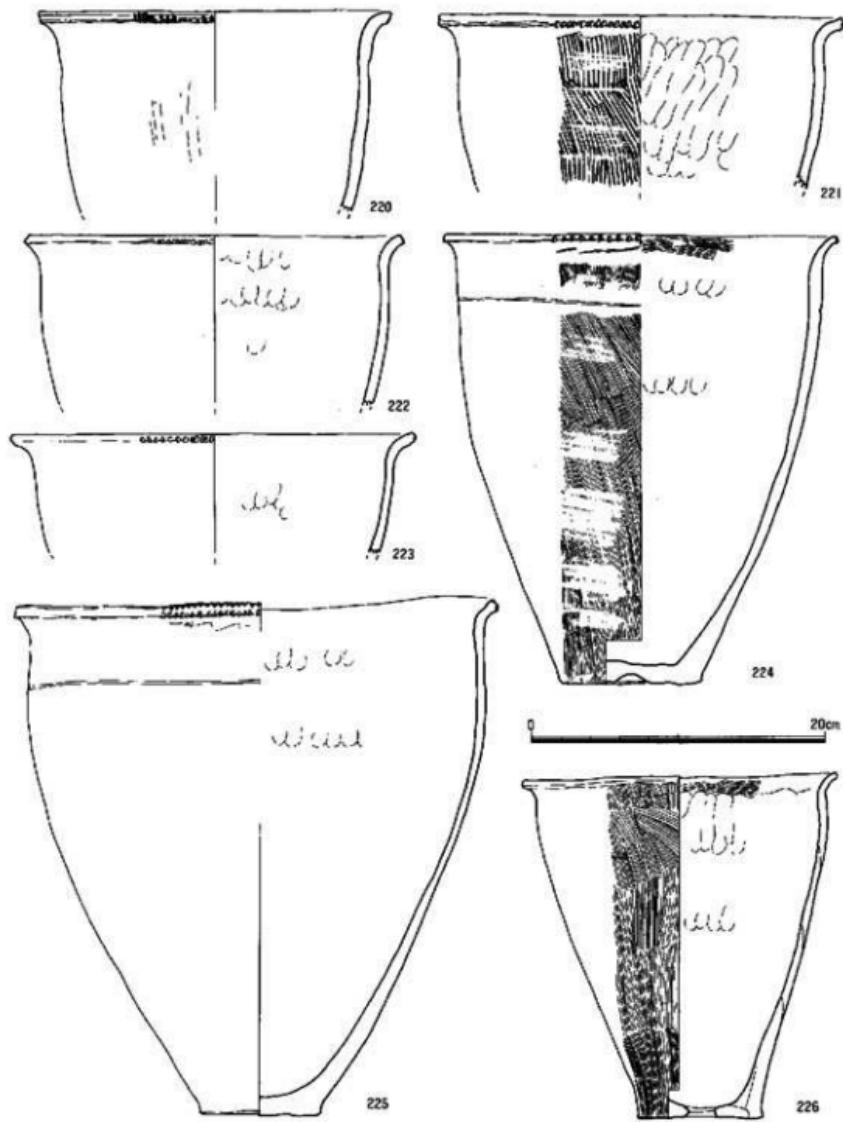


Fig.36 SU-012出土土器実測図4(1/4)

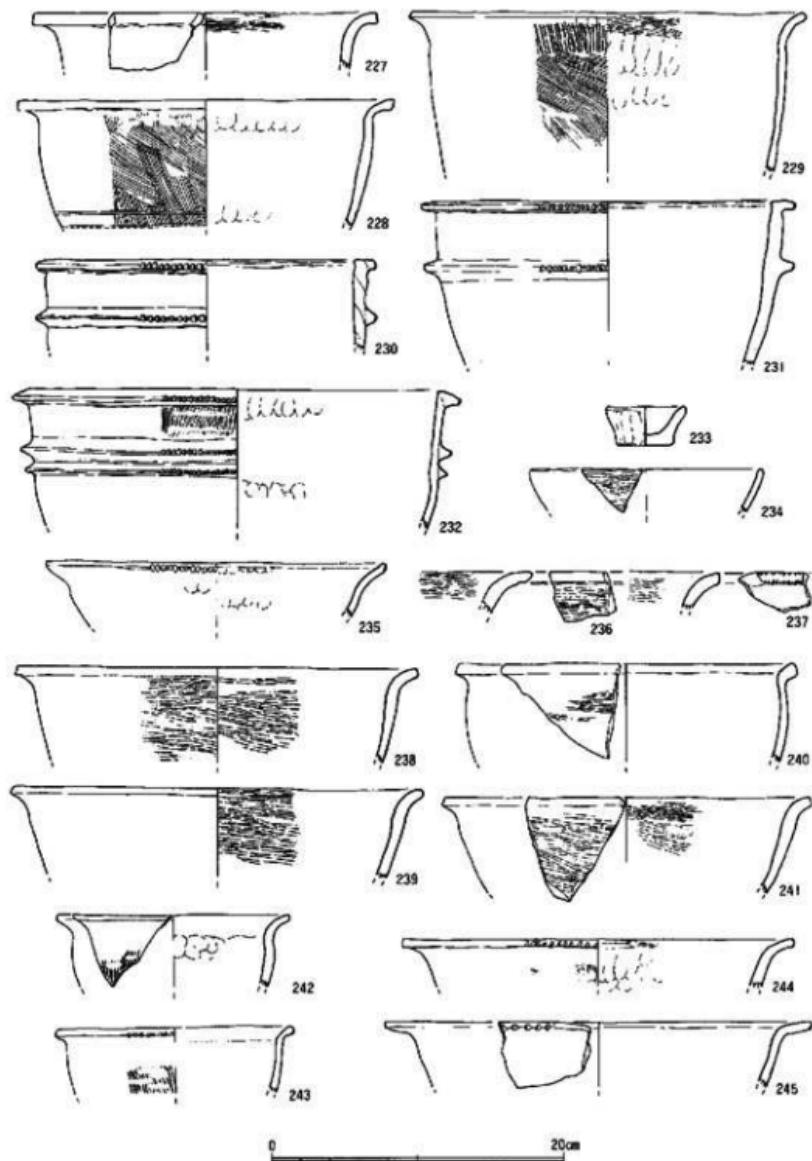


Fig.37 SU-012出土土器実測図5(1/4)

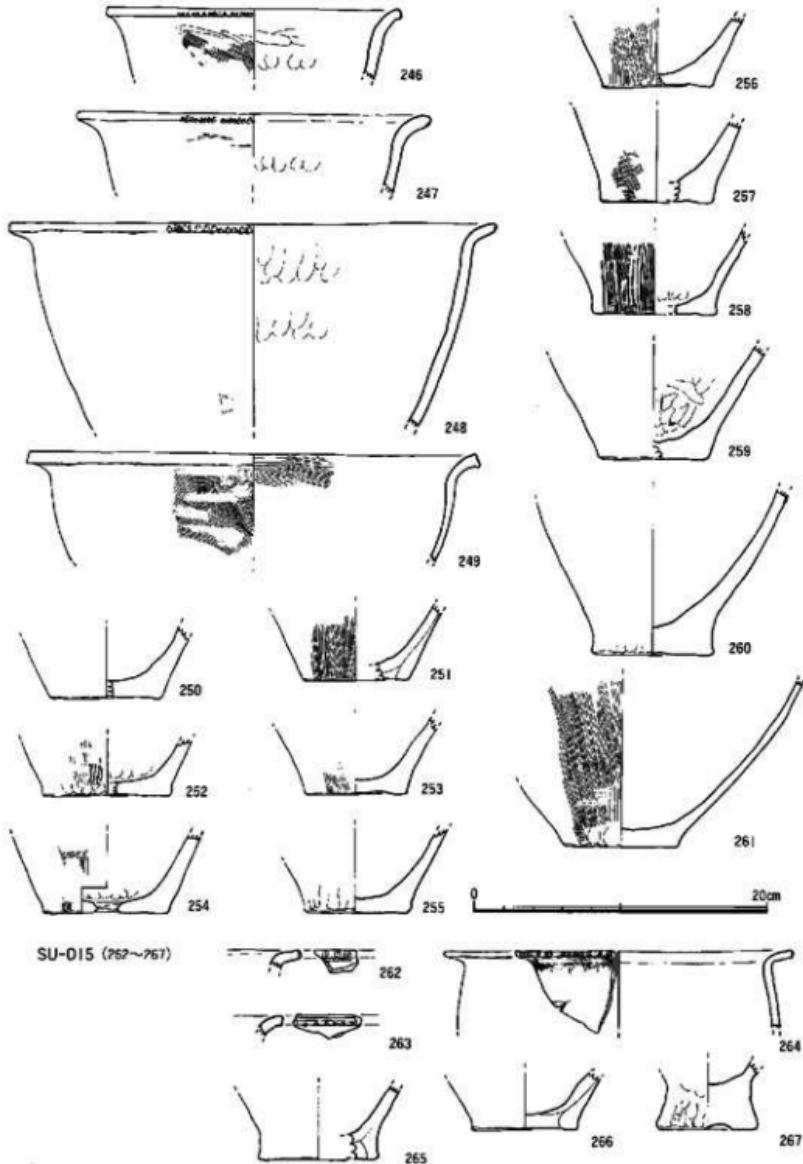


Fig.38 SU-012・015出土土器実測図 6 (1/4)

SU-016 (上層:268~276、下層:277~339)

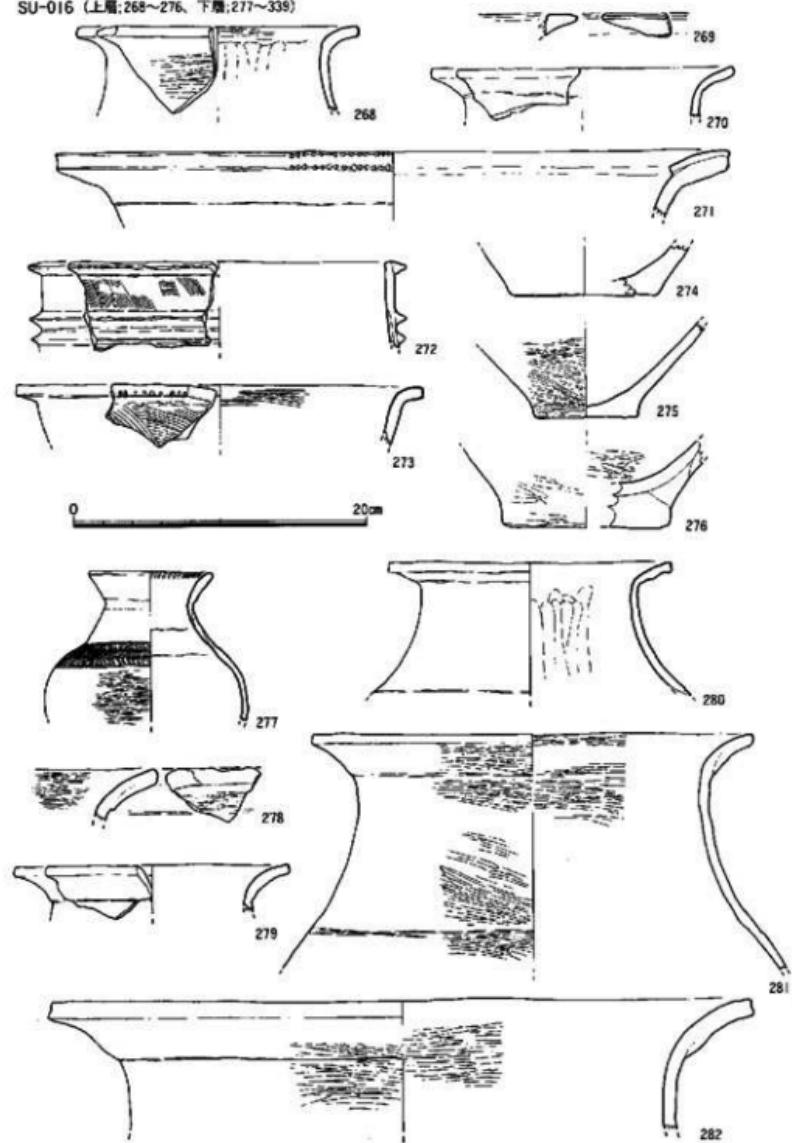
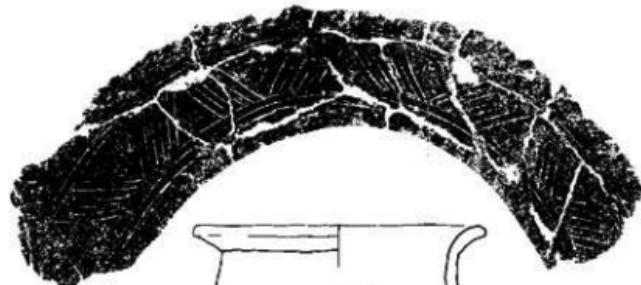
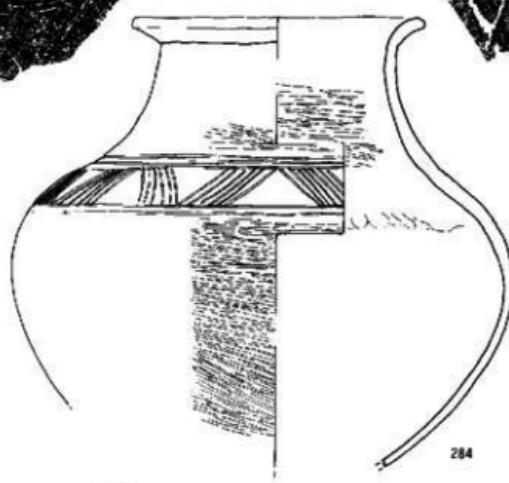


Fig.39 SU-016出土土器実測図(1/4)



283

0  
20cm

284



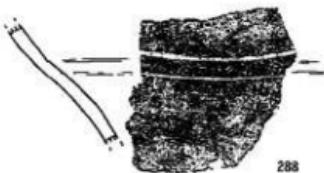
285



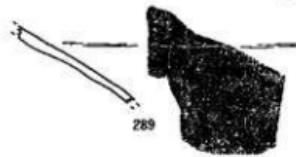
286



287



288



289

Fig.40 SU-016出土土器実測図2(1/4)

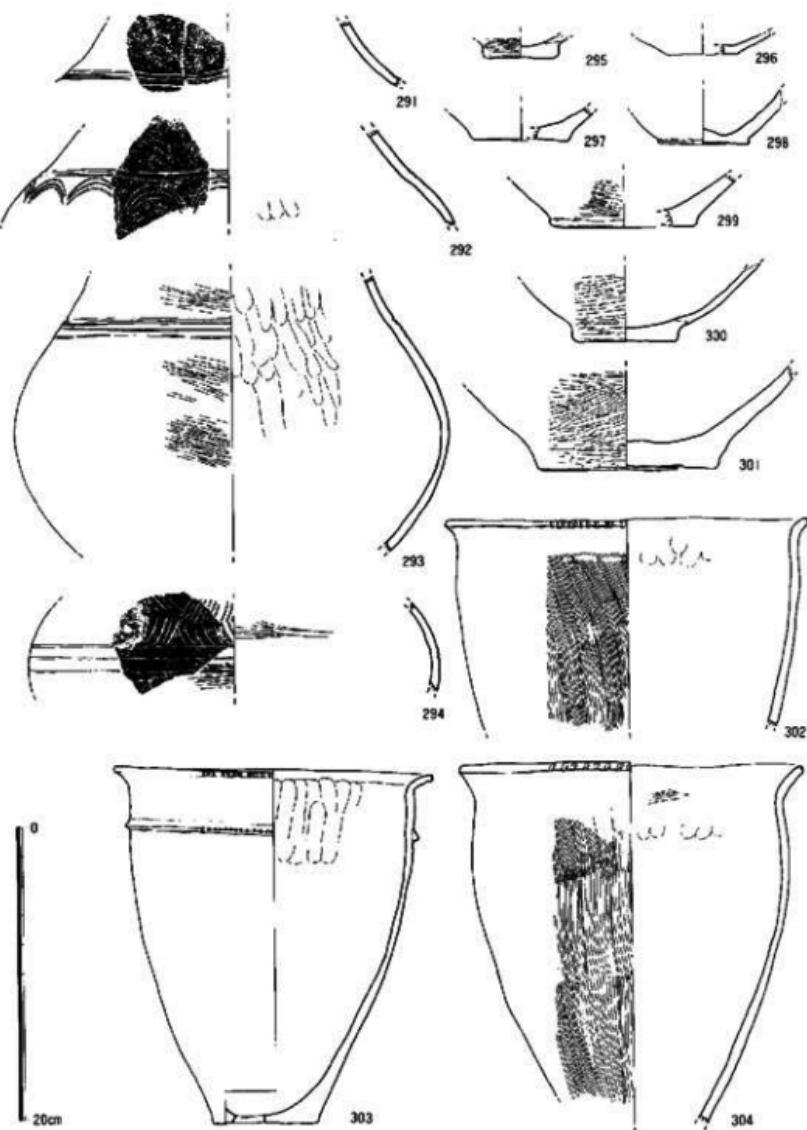


Fig.41 SU-016出土土器実測図3(1/4)

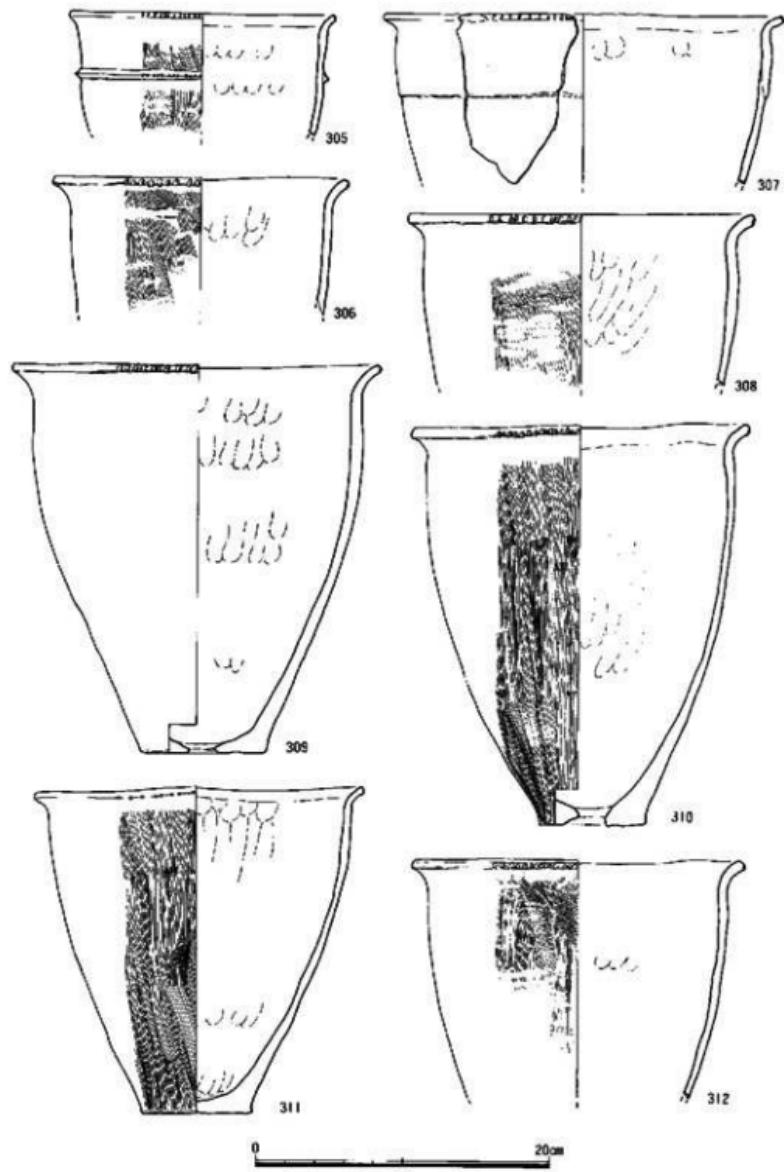


Fig.42 SU-016出土土器実測図4(1/4)

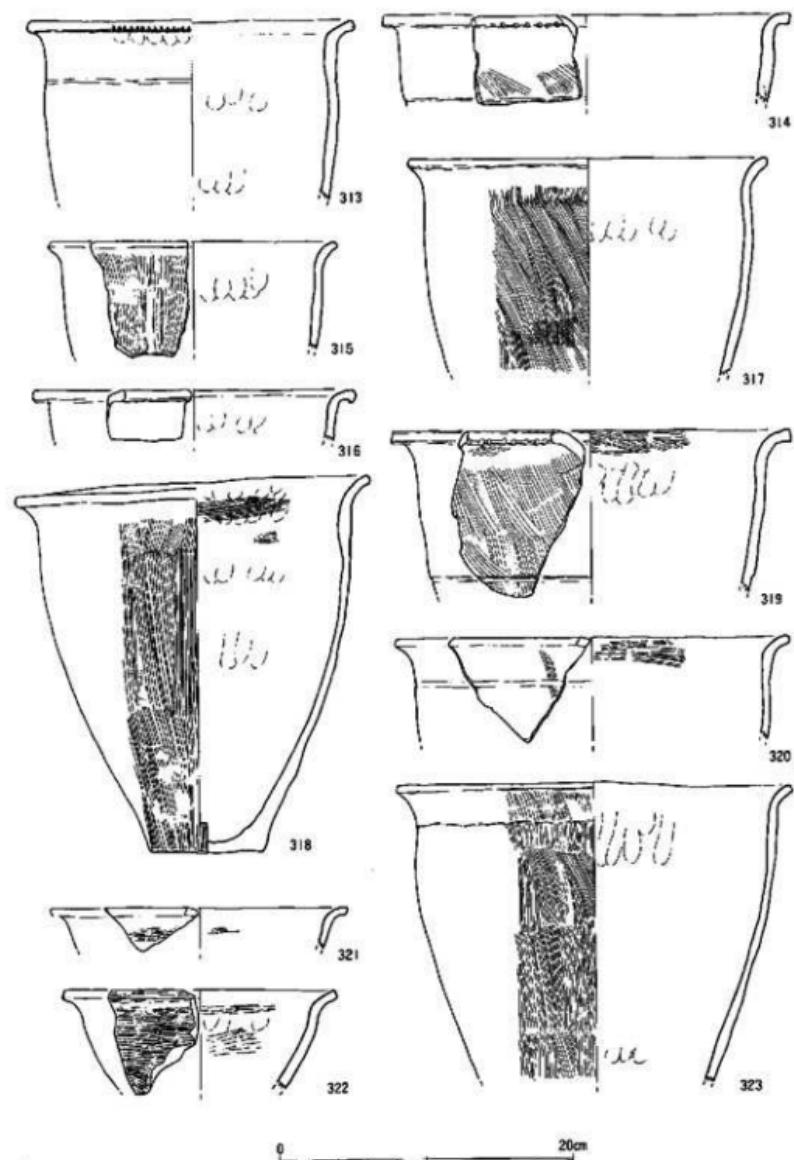


Fig.43 SU-016出土土器実測図5(1/4)

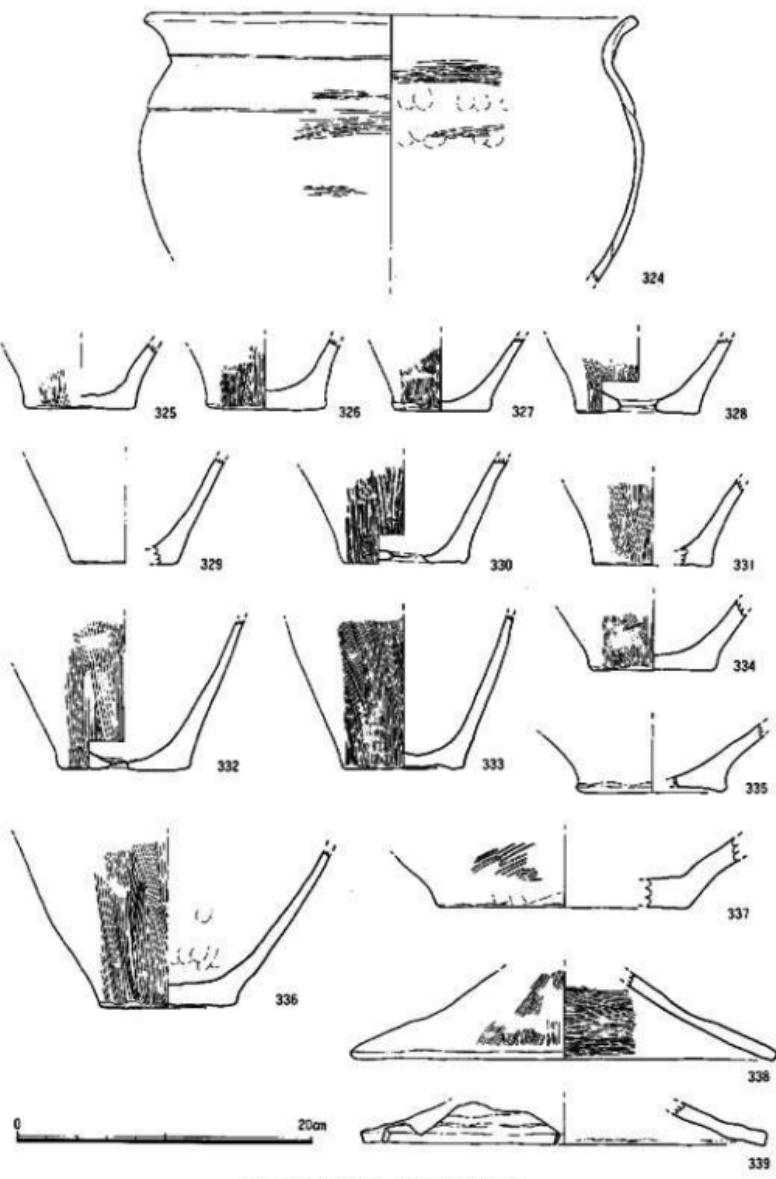


Fig.44 SU-016出土土器実測図6(1/4)

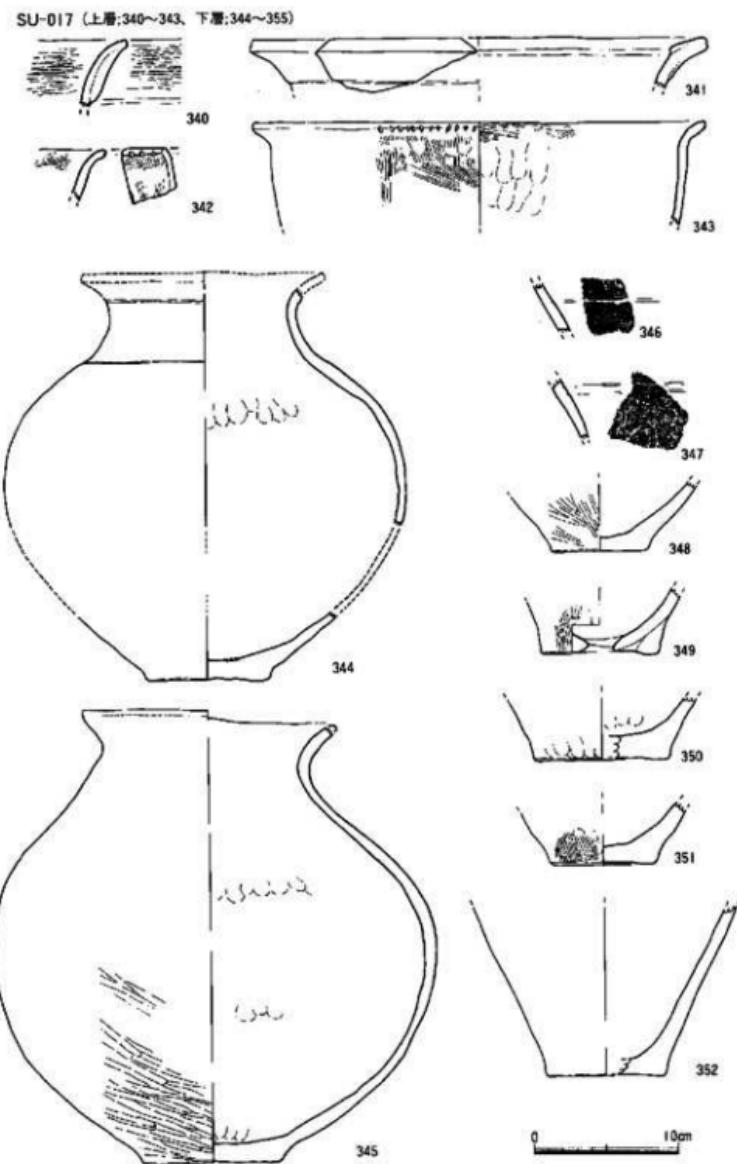


Fig.45 SU-017出土土器実測図(1/4)

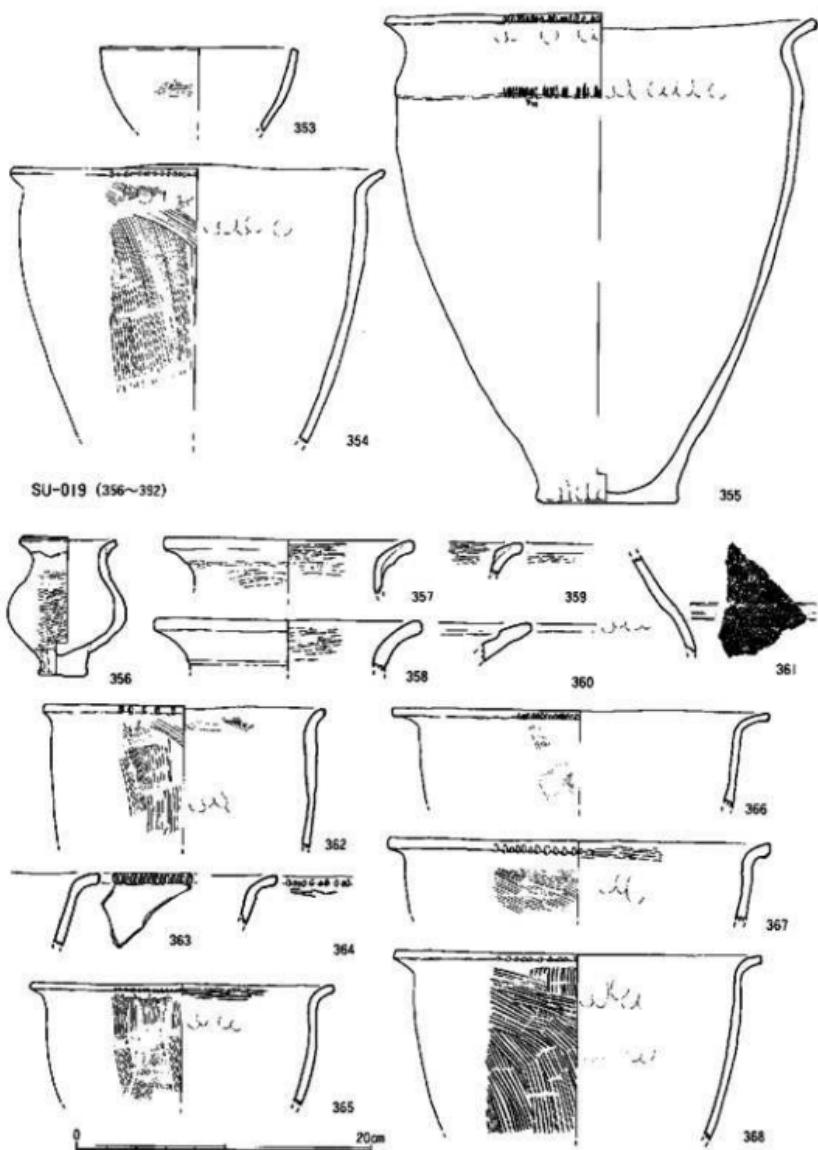


Fig.46 SU-017・019出土土器実測図(1/4)

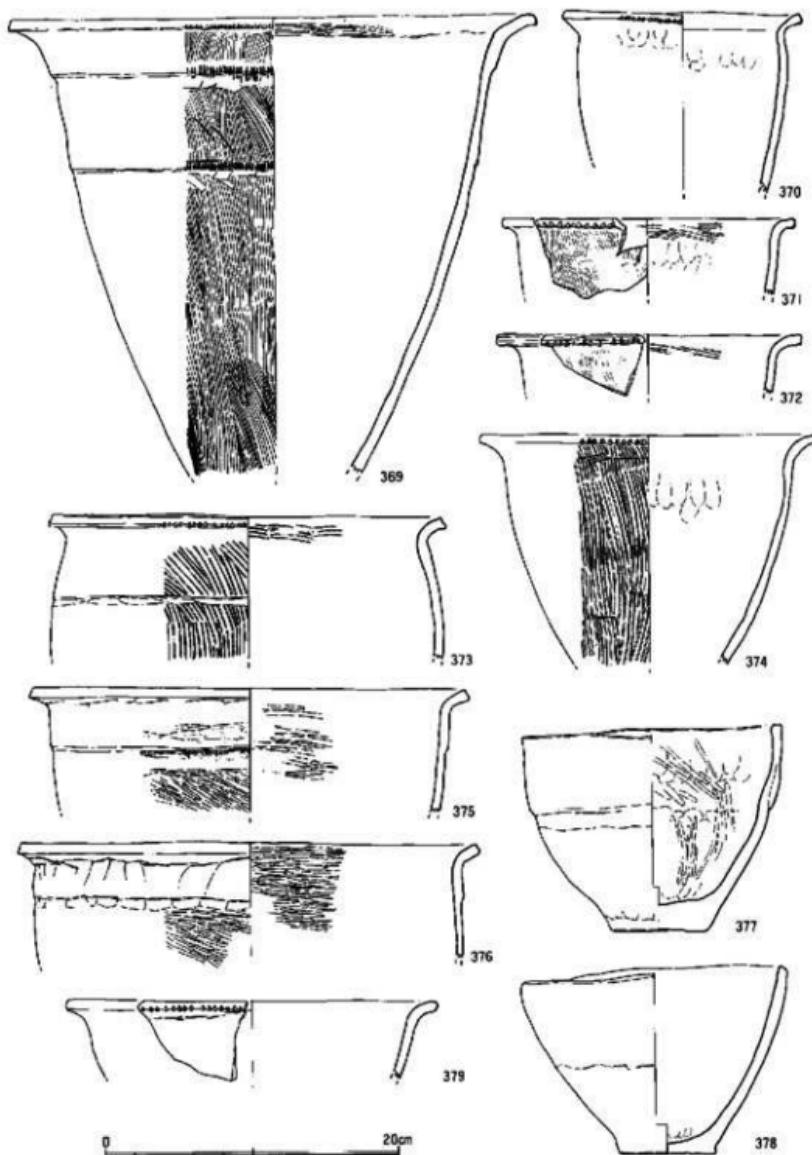


Fig.47 SU-019出土土器實測圖(1/4)

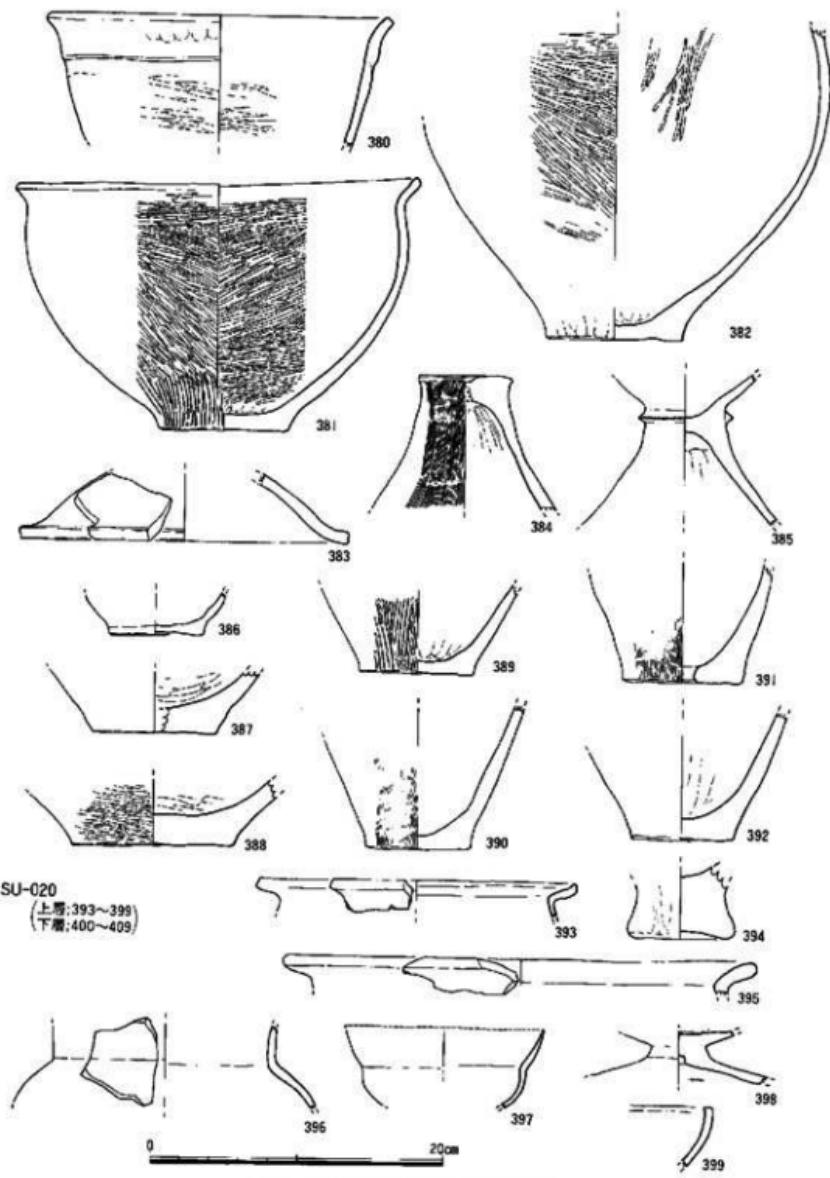


Fig.48 SU-019・020出土土器実測図(1/4)

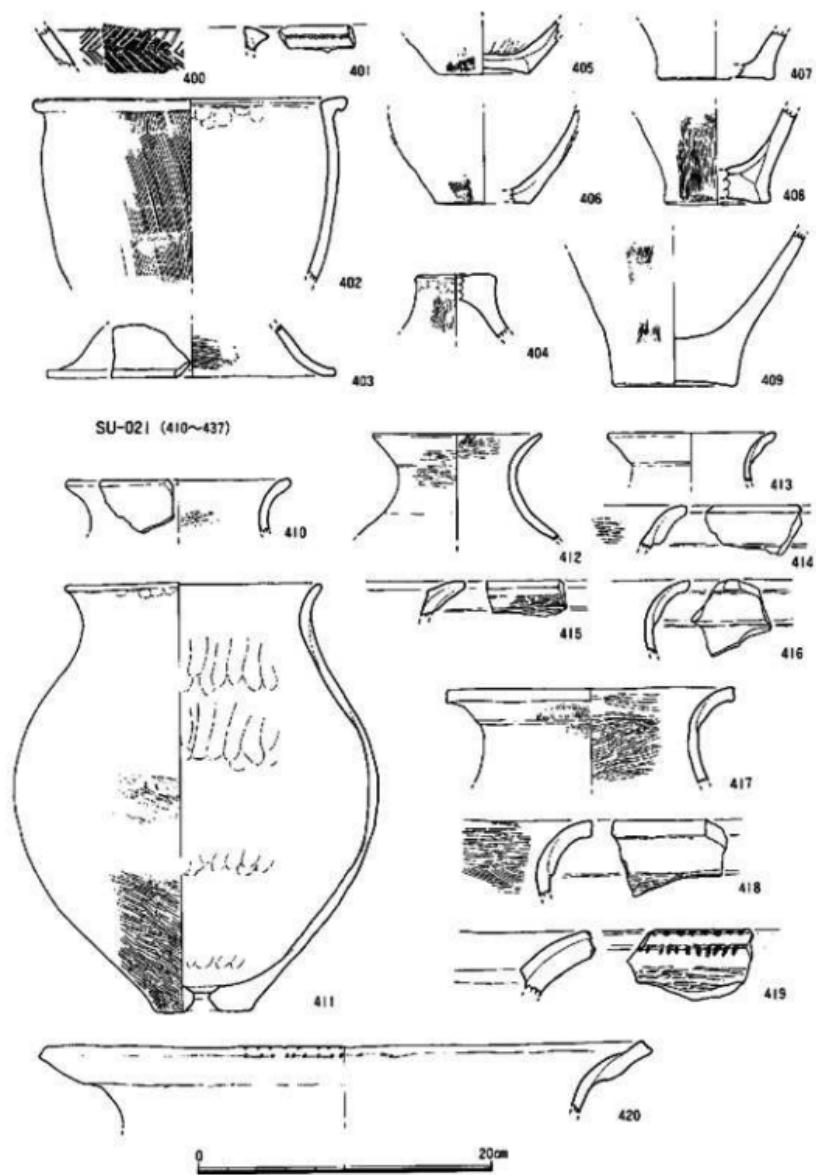


Fig.49 SU-020・021出土土器実測図(1/4)

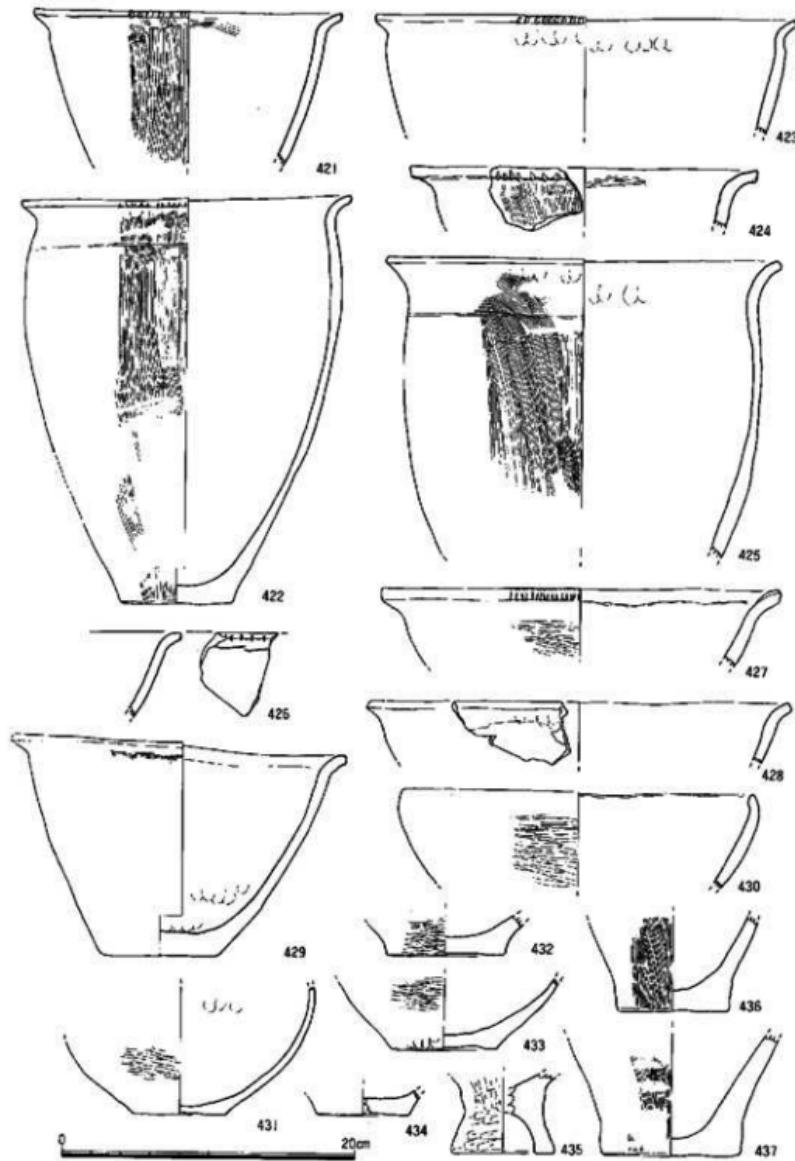


Fig.50 SU-021出土土器実測図(1/4)

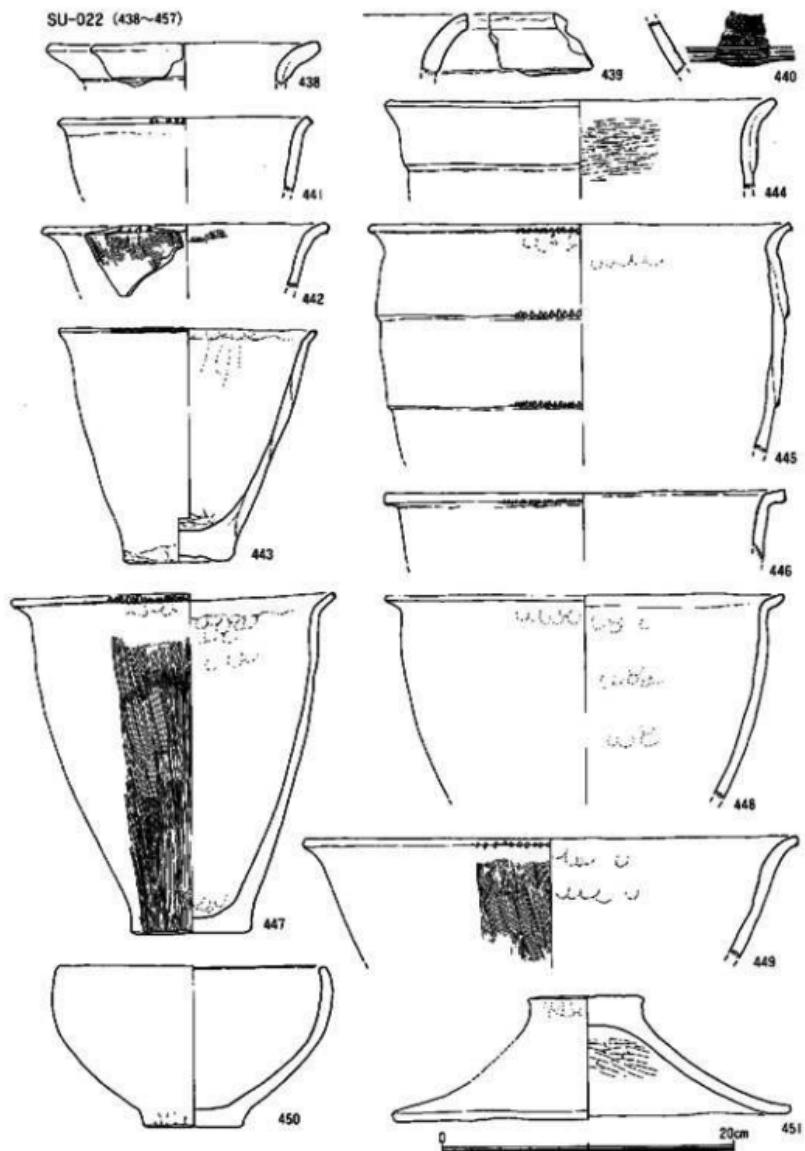


Fig.51 SU-022出土土器実測図(1/4)

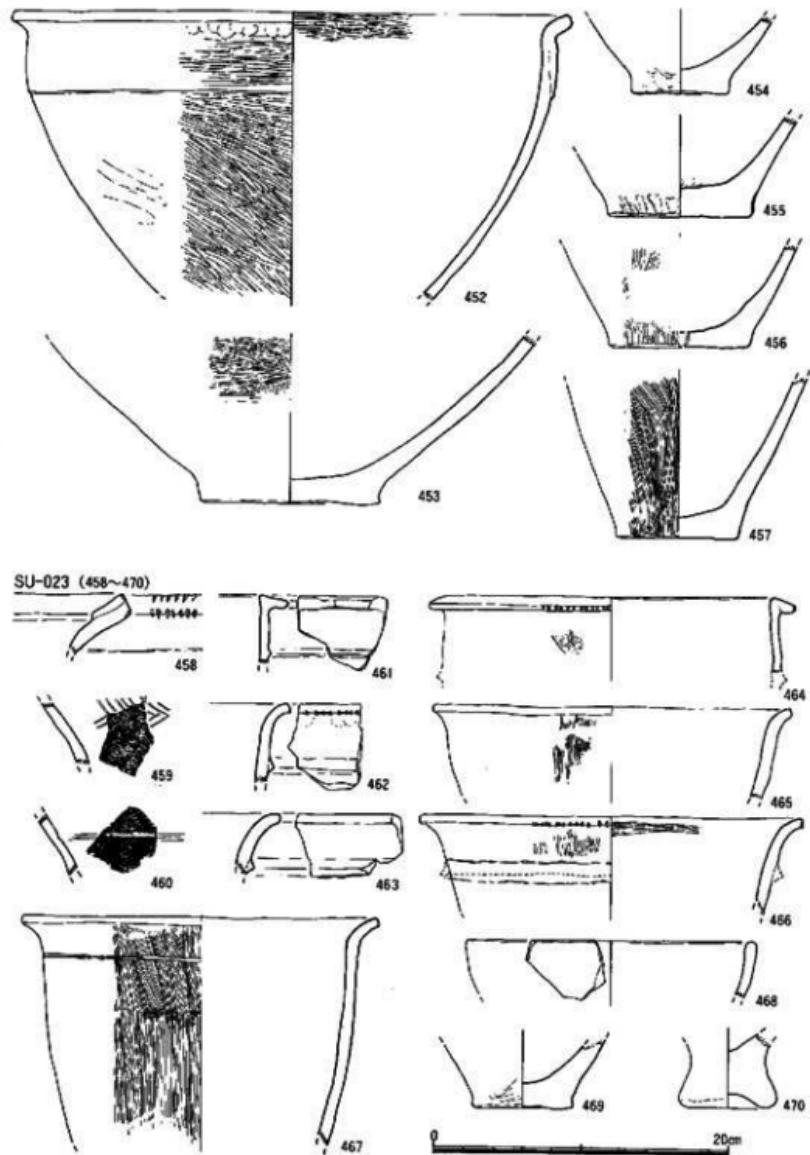


Fig.52 SU-022・023出土土器実測図(1/4)

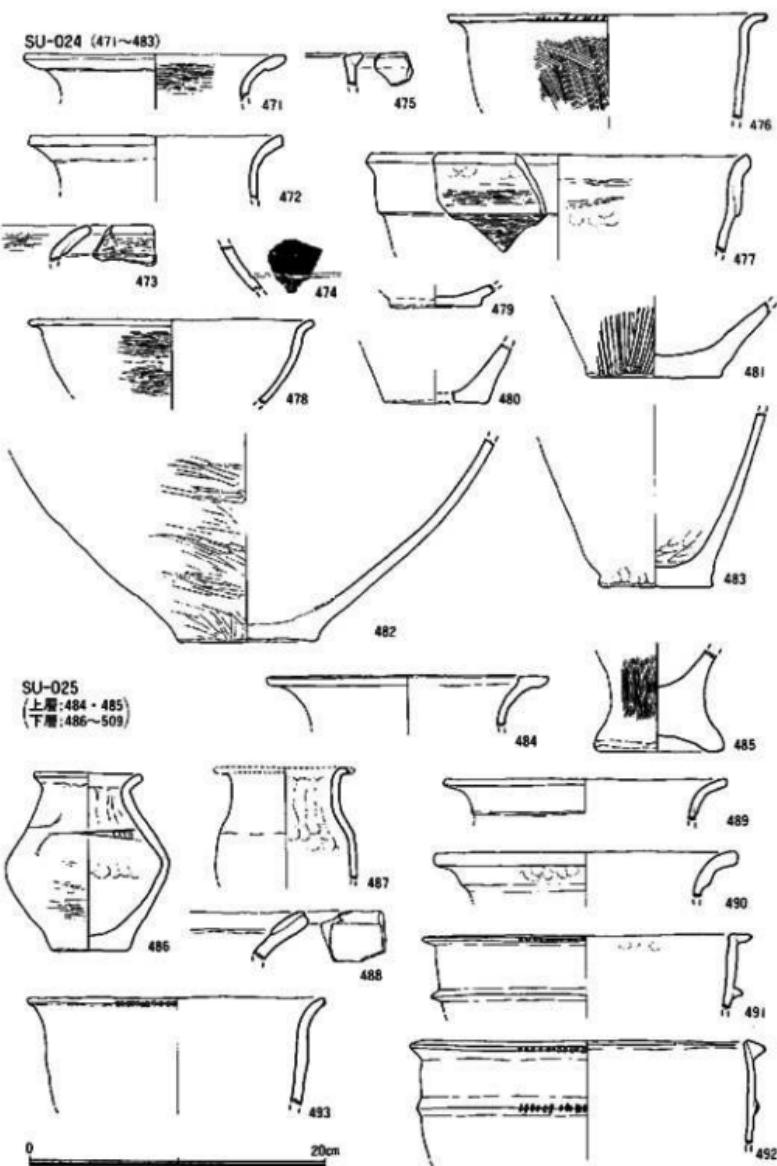


Fig.53 SU-024・025出土土器実測図(1/4)

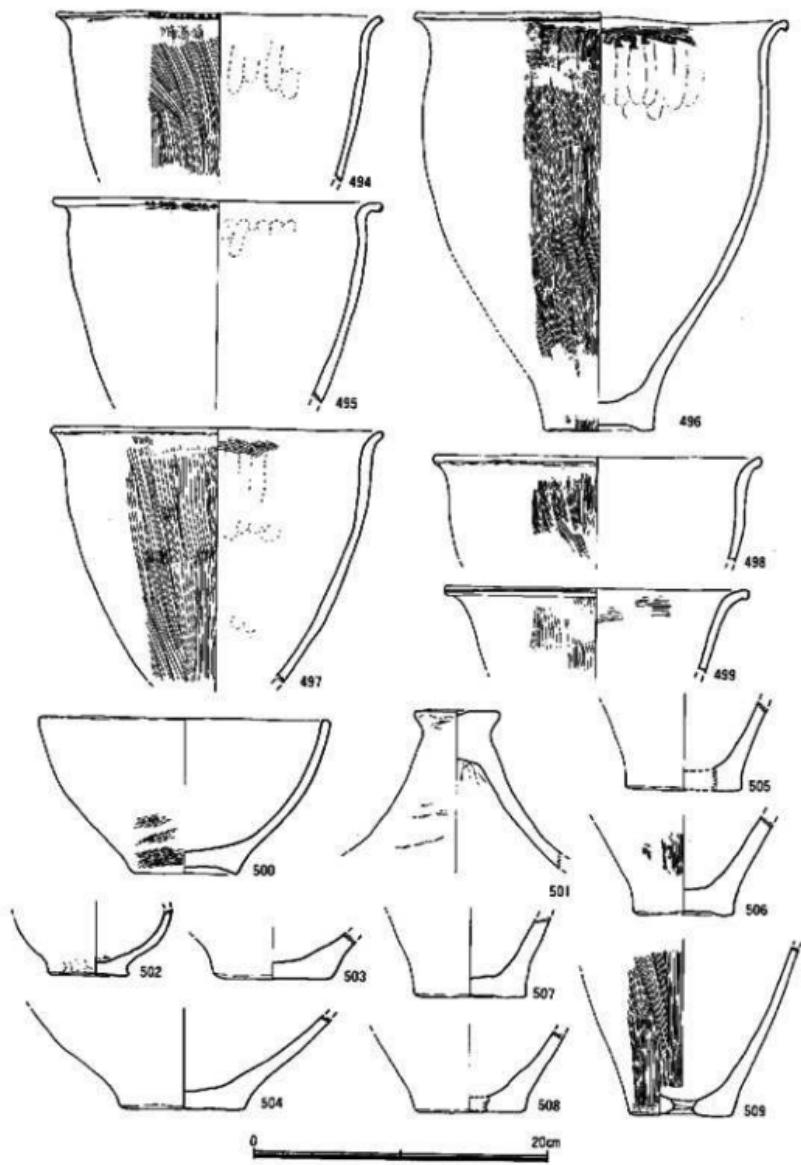


Fig.54 SU-025出土土器実測図(1/4)

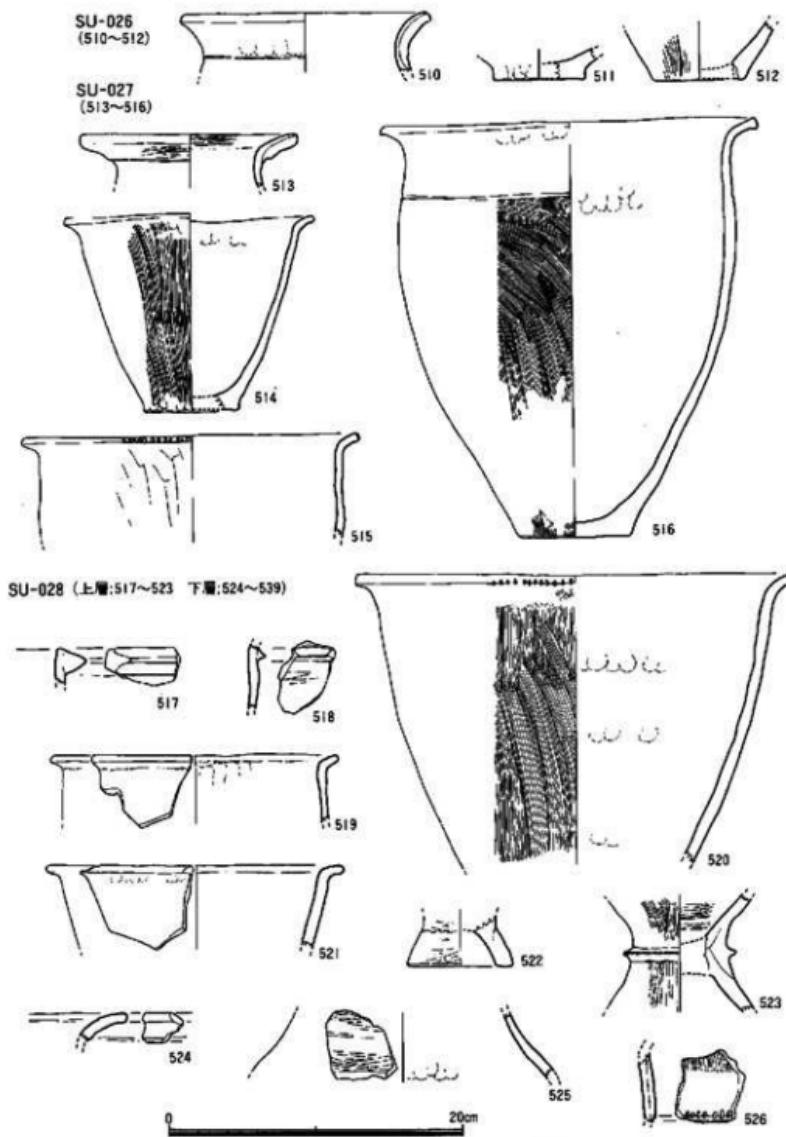


Fig.55 SU-026・027・028出土土器実測図(1/4)

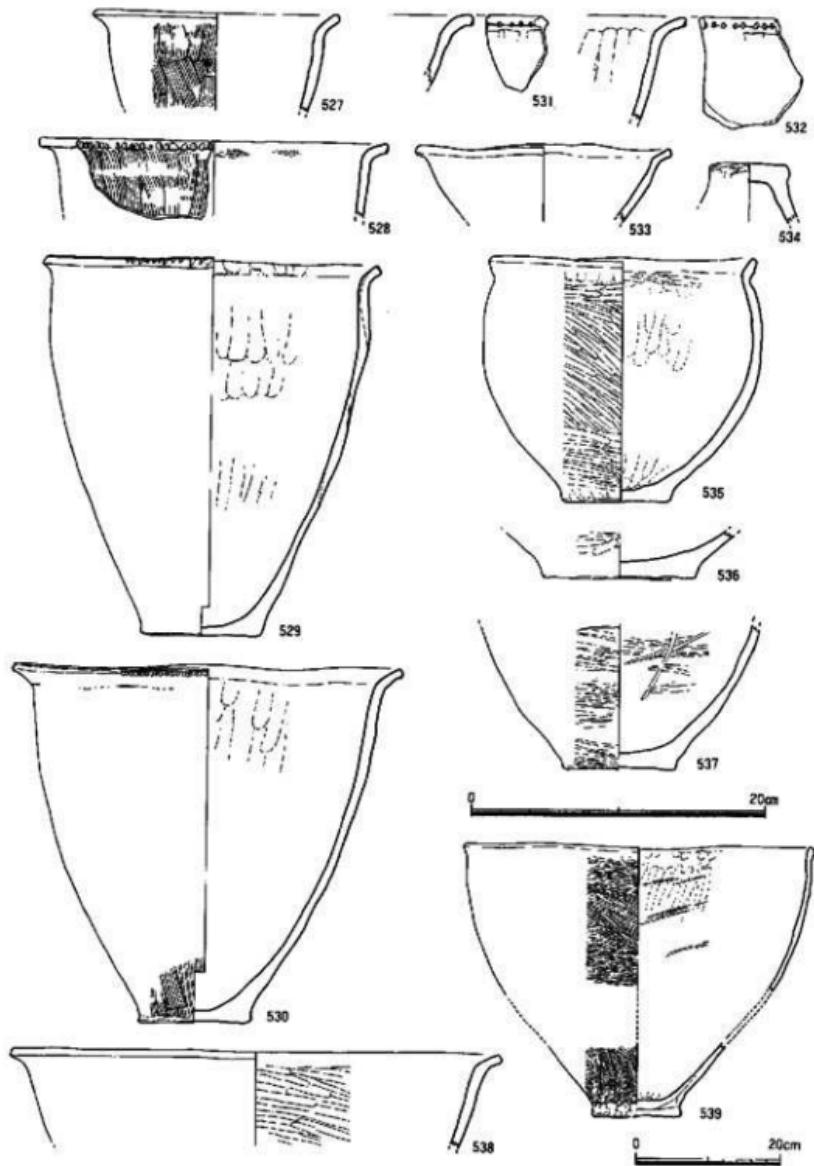


Fig.56 SU-028出土土器実測図(1/4)

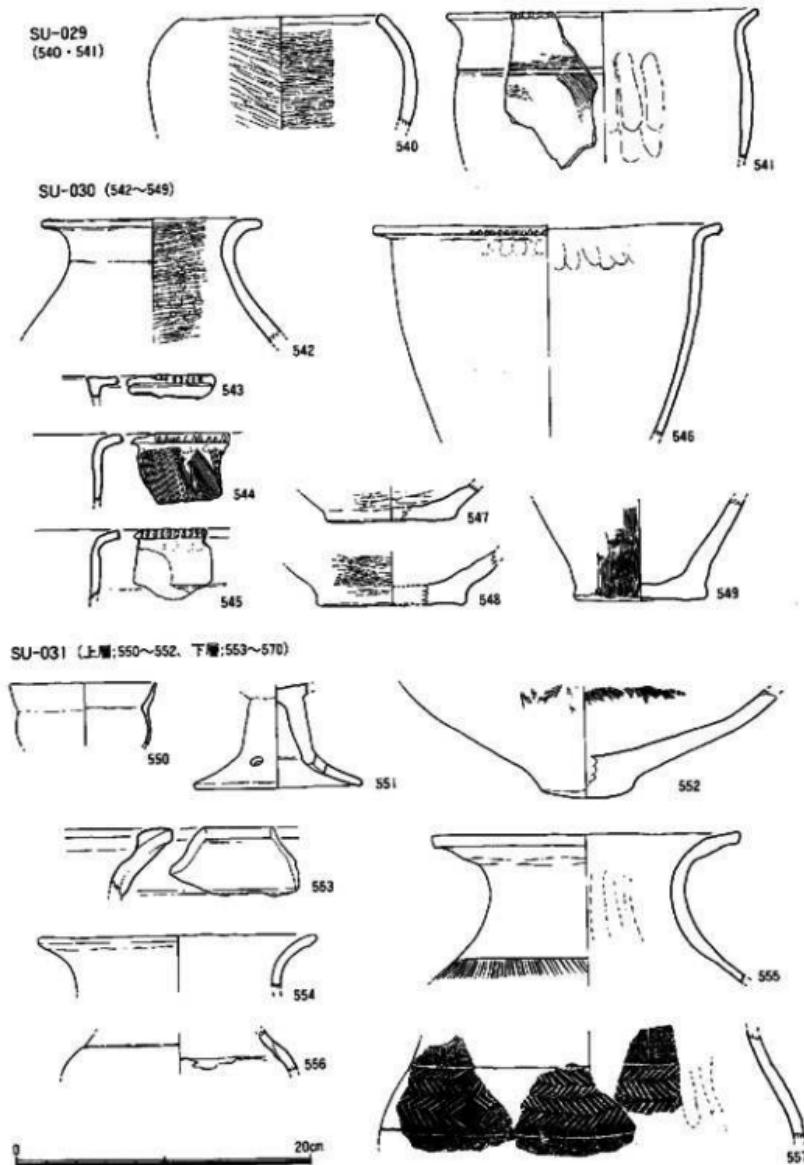


Fig.57 SU-029・030・031出土土器実測図(1/4)

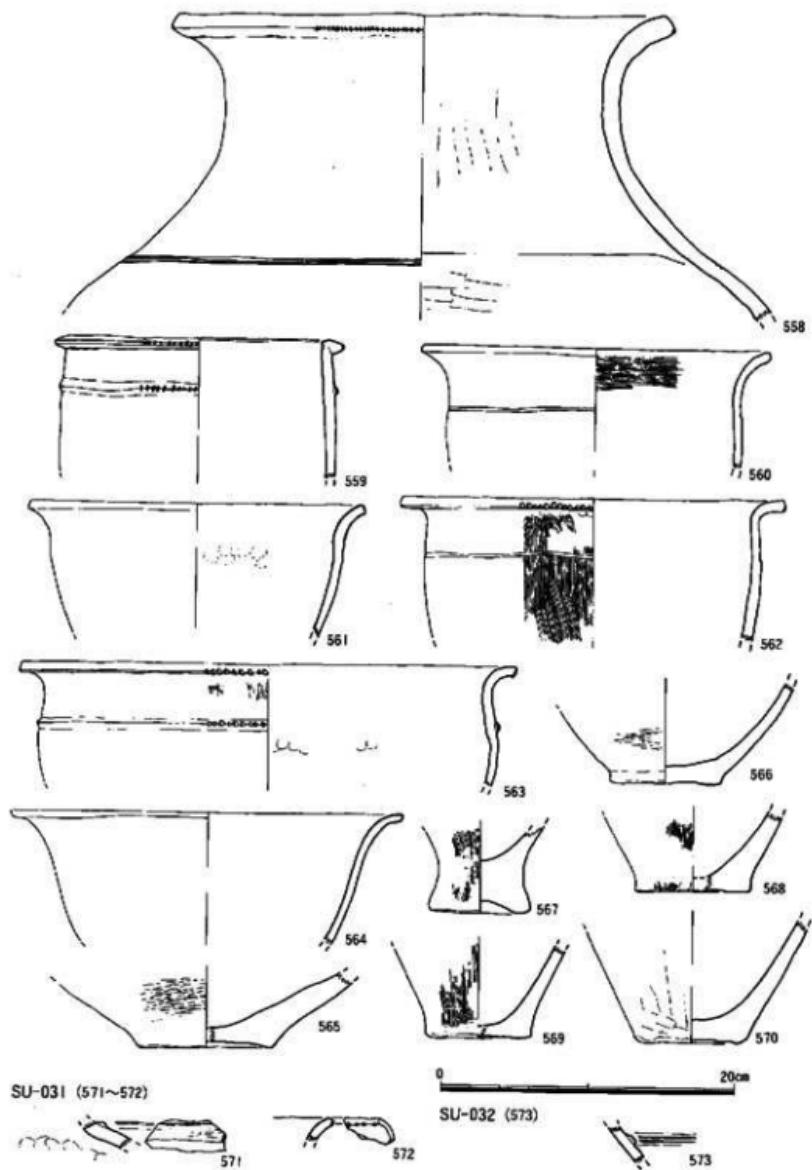


Fig.58 SU-030・031・032出土土器実測図(1/4)

## 土器片利用円盤

土器片利用円盤は上器の破片の周縁を打ち欠いて円形に整形したもので、さらに周縁を磨いたものもある。総計46個が出上した。SU-012・016など遺物が大量に出土した貯蔵穴に集中しており、貯蔵穴以外の造構からは出土していない。板付II式土器にともなうものと考えられる。

Tab. 3 土器片利用円盤一覧表

出土遺物	被別番号	遺存状態	直徑	厚さ	重量	利用器種	利用部位	遺物の特徴(mm/g)		周辺の処理ほか	遺物登録番号
								長	幅		
1	2	略完	41~45	10~11	20	壺または鉢	胴部	周縁の一部を擦る			1426
2	2	略完	46~52	8~9.5	26.9	壺	肩部	周縁の大半を擦る			1427
3	5	略完	39~44	7~8	16.7	甕	胴部	周縁の一部を擦る			1428
4	6	略完	36~41	6~8	13.3	甕	胴部	周縁全周を擦る			1429
5	6	略完	42~48	8.5~9	23.3	甕	胴部	周縁全周を擦る			1430
6	7	略完	31~36	7~7.5	16.1	甕	胴部	打ち欠きのまま			1431
7	7	略完	51~56	7.5~9.5	34.4	甕	頭部	周縁の一部を擦る			1432
8	9	略完	36~38	8.5~9.5	15.1	甕	胴下半部	打ち欠きのまま			1433
9	12	略完	35~38	7~7.5	12.2	甕	胴部	周縁の一部を擦る			1434
10	12	略完	36~38	9~10	17.8	壺	胴部	打ち欠きのまま			1435
11	12	約半分を欠損	49	7~9	(19.1)	壺	胴部	周縁全周を擦る			1436
12	12	略完	32~34	6~7.5	9.5	?	胴部	周縁の一部を擦る			1437
13	12	約半分を欠損	43	4~6.5	(10)	壺?	胴部	周縁の一部を擦る			1438
14	12	約半分を欠損	65.3	4.5~8	(20.5)	甕?	胴部	周縁全周を擦る			1439
15	12	約半分を欠損	50.3	10~11.5	(26.6)	壺または鉢	胴部	周縁の一部を擦る			1440
16	12	略完	47~51	8~9	30.3	壺または鉢	胴部	周縁の一部を擦る			1441
17	12	略完	23~26	7.5~8	6.3	壺または鉢	胴部	周縁全周を擦る			1442
18	12	略完	25~27	7~7.5	6.6	甕	胴部	周縁の大半を擦る			1443
19	12	略完	27~32	7~8	8.4	鉢?	胴部	打ち欠きのまま			1444
20	12	略完	45~51	10~12	29.7	鉢?	胴部	打ち欠きのまま			1445
21	12	略完	37~41	7.5~9.5	19	鉢	肩部	打ち欠きのまま			1446
22	12	略完	49~54	7.5~8.5	22.9	壺	肩部	周縁の一部を擦る			1447
23	12	略完	35~40	4.5~5	8.5	壺?	肩部	打ち欠きのまま			1448
24	16	略完	31	10	?	?	底部				1424
25	16	略完	25~27	7~7.5	6.1	甕	胴部	打ち欠きのまま			1449
26	16	略完	29~35	7.5~9.5	10.8	甕	胴部	周縁の大半を擦る			1450
27	16	略完	42~43	8~8.5	18.8	壺?	胴部	周縁の大半を擦る			1451
28	16	略完	49~51	6~7.5	21.6	?	胴部	打ち欠きのまま			1452
29	16	略完	62~71	7.5~8	48.9	壺?	胴部	周縁の一部を擦る			1453
30	19	略完	34~37	8~9	14.1	甕?	胴部	周縁の大半を擦る			1454
31	19	略完	52~55	8.5~9	35.1	壺?	胴部	打ち欠きのまま			1455
32	19	略完	42~53	9~10	29.8	壺または鉢	胴部	周縁の一部を擦る			1456
33	19	略完	43~47	6~7	17	壺または鉢	胴部	打ち欠きのまま			1457
34	20	略完	55~63	10~11	42	壺または鉢	胴部	周縁の一部を擦る			1458
35	21	約半分を欠損	40.1	10~13	(18.6)	甕?	胴部	打ち欠きのまま			1459
36	21	略完	62~64	7.5~8	40.9	甕	胴部	周縁の一部を擦る			1460
37	21	略完	52~53	7~9	31.5	甕?	胴部	打ち欠きのまま			1461
38	21	略完	52~55	8~8.5	29.7	?	胴部	見られが著しく不明			1462
39	22	略完	48~53	7~8	23.8	甕?	胴部	打ち欠きのまま			1425
40	23	略完	31~32	7~8.5	9.3	甕または鉢	胴部	打ち欠きのまま			1463
41	23	略完	36~47	6~7	12.7	甕?	胴部	打ち欠きのまま			1464
42	23	略完	36~39	6~7.5	11.9	甕?	肩部	打ち欠きのまま			1465
43	25	略完	43~48	6~7.5	(19.2)	甕?	胴部	打ち欠きのまま			1467
44	25	略完	22~27	8.5~9	5.8	?	胴部	打ち欠きのまま			1468
45	27	略完	47~57	8.5~9.5	34.8	壺?	胴部	周縁の一部を擦る			1469
46	27	約1/3を欠損	43	7.5~8	(13.5)	鉢?	胴部	周縁の一部を擦る			1470
47	28	略完	22~37	8~9	13.9	甕?	胴部	打ち欠きのまま			1471
48	29	略完	21~23	6~8	4	?	胴部	見られが著しく不明			1472

甕・鉢・壺の頸胸部を利用したものが多いが、例外的に底部を使ったものが1例ある。概要表を参照されたい（Tab.3）。

#### 貯蔵穴（SU）出土石器・土製品・鐵器

本調査地では、25基の貯蔵穴から454点（第10号貯蔵穴の接合資料を除く）の石製品と土製紡錘車1点（土製円盤については一覧表に示すが出土した。そのほか、1条の溝、3基の井戸、各柱穴の造構や造構検出時に86点の石製品と土製紡錘車・鉄斧各1点が出土した。石製品総計は540点、土製紡錘車2点、鉄斧1点である。石器は、石庖丁9点（未製品3点を含む）、蛤刃石斧9点、柱状片刃石斧未製品1点、石縁1点、磨製石鎌1点、打製石鎌未製品1点、石鎌2点、穂器1点、削器3点（搔器を含む）、使用痕ある剥片石器3点、敲石6点、磨石9点、砥石13点、紡錘車5点（2点の土製品を含む）、管玉1点、滑石製有孔石製品2点などがある。このほか、剥片118点、削片290点、石核36点がある。このうち85%以上は黒曜石製（以下、Obとする）で、次に古銅輝石安山岩（以下、Anとする）が10%強あり、残りは頁岩・珪岩・玄武岩製である。石核はすべてOb製で、石器製作のための残核がほとんどを占めている。これらは縄文時代の伝統をもった剥片剥出技術の所産であり、すくなくとも本遺跡では、弥生時代前期末まで剥片製石器が製作使用されていたといえる。以下、造構ごとにみていく。

SU-002 (Fig.59) 石庖丁（2）、磨石（1）、砥石各1点、剥片18点、削片87点、石核8点が出土した。2は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製（以下、AnTHとする）で、ほとんど欠損している。1は安山岩製の磨石で、打ち欠き、敲打後、研磨している。砥石は砂岩製で、剥片2点がAn製、削片1点が玄武岩製で、ほかの剥片・削片はOb製である。

SU-003・004 03からはOb製の削片1点、04からはOb製の剥片3点、削片8点が出土している。

SU-005 (Fig.59) 柱状片刃石斧未製品（3）とOb製削片3点が出土した。3は頁岩製で、剥離加工後研磨を加え長方形体に整形し、刃部造り出しが試みられている。

SU-006 (Fig.59) 石庖丁未製品（4）・蛤刃石斧（5）・磨石・砥石（6）各1点と、剥片4点、削片8点、石核2点、滑石1点が出土した。4はAnTH製で、敲打整形後研磨を加え、穿孔を試みているが中途で放棄している。5は今山産出玄武岩製太形蛤刃石斧の頭部である。6は砂岩製、剥片1点がAn製で、他の剥片等はOb製である。

SU-007 (Fig.59) 石庖丁・穂器（7）・敲石・板状素材各1点、Ob製剥片5点、削片4点が出土した。7は安山岩製で、裏面および表面の片方端部に剥離加工が加えられ鋭い刃部が造り出されている両刃穂器である。もともとは敲打器か。石庖丁・板状素材はAnTH製。

SU-008 磨石・Ob製削片1点が出土した。

SU-010 (Fig.60) 石庖丁未製品2点（8・9）、石縁（12）・削器（10）・紡錘車（13）・砥石（11）各1点、Ob製剥片13点、削片16点、石核2点とAnTHの素材一括資料（PL-12）が

出土した。8は剝離加工・敲打によって半月形に整形し、穿孔を試みている。8・9はAnTH製。10は今山産出玄武岩製で蛤刃石斧欠損後の再利用品、11は凝灰岩製で横断面形は方形をなし、4面が砥面として使用されている。12はAnTH製で、敲打整形後研磨を加え、内湾する両刃の刃部が造りだされている。石鎌の形状をなしているが、較としたほうが用途的にも近いと考えられる。13は滑石製で、剝離・削り加工後研磨を加え表裏から穿孔している。なお、縁辺は使用によって黒く輝いている。重さ24g。

SU-011 (Fig.60) 磨石 (14) 1点、Ob 製剝片 1点、削片 2点が出土した。

SU-012 (Fig.61) 蛤刃石斧 (18)・石錐 (15)・搔器 (20)・削器 (21)・敲打器 (19)・管玉 (16)・土製紡錘車 (17) の各 1点と剝片20点、削片35点、石核 5点、軽石 1点、硅岩原石 1点が出土した。18・19は今山産出玄武岩製で、18は太形蛤刃石斧の刃部片、19は太形蛤刃石斧が破損した後、破損面に研磨を加え敲打器として使用している。15はOb 製で、打面再生剝片を素材とし、端部に表裏から剝離加工を加え、錐部を造り出している。16は管玉製で上下から穿孔している。17は變形土器の胴部片を表裏から打ち欠き、円形に整形し、周縁を研磨している。なお、穿孔は表裏から行ない研磨している。重さ10g。20はAn 製で、粗い剝離加工を縁辺に加え刃部を造り出している。21はAn 製の剝片の縁辺におもに表から丁寧な剝離加工を加え鋭い刃部を造り出している。剝片はOb 製が14点、玄武岩製 3点、An 製 2点、頁岩製 1点で、削片は27点がOb 製、7点が玄武岩製、1点がAn 製、石核はすべてOb 製である。

SU-013 今山産出玄武岩製太形蛤刃石斧片・An 製剝片各 1点と Ob 製剝片 2点、削片 7点が出土した。

SU-015 (Fig.61) AnTH 製石庖丁片・砂岩製砥石 (22)・Ob 製削片各 1点と Ob 製剝片 3点が出土した。22は断面形方形で、3面を砥面として使用している。

SU-016 (Fig.61) 蛤刃石斧 (23)・敲打器・砥石 (24)・Ob 製石核・An 素材の各 1点と剝片 8点、削片14点が出土した。23は今山産出玄武岩製の太形蛤刃石斧の頭部片。24は砂岩製である。敲打器 4点の剝片、1点の削片がAn製、他の剝片・削片はOb 製である。

SU-017・020・021 SU-17からは、An 製剝片・Ob 製削片・石核・頁岩素材各 1点が出土した。SU-20からは、AnTH 製石庖丁片 1点、砂岩製砥石 2点、Ob 製剝片 3点、削片21点、石核 4点、An 製削片 3点と滑石 7点が出土した。SU-21からは、磨石・Ob 製剝片・石核・AnTH 製剝片・An 素材の各 1点が出土した。

SU-022 (Fig.61) 蛤刃石斧 (25)・砥石各 1点と剝片 7点、削片 4点、Ob 製石核・原石各 1点、滑石 1点が出土した。25は今山産出玄武岩製の太形蛤刃石斧で刃部のみが遺存している。剝片はOb 製 6点、An 製 1点、削片はOb 製 2点、An 製 1点、頁岩製 1点である。

SU-023 (Fig.61) 今山産出玄武岩製太形蛤刃石斧 2点、磨製石鎌 (27)・An 製敲石各 1点と剝片 9点、削片 4点が出土した。27は頁岩製で、無基三角錐で横断形は凸レンズ状をなして

いる。重さ5g。2点のAn製、1点のAnTH製剥片を除く剥片・削片はOb製である。

SU-024～028 SK-24からは、An製蛤刃石斧と磨石、Ob製石核各1点とOb製の剥片2点と削片6点が出土した。SK-25からは、Ob製の石鏃未製品・使用痕ある剥片石器・石核1点と砂岩製砾石2点、An製剥片2点、Ob製削片6点が出土した。

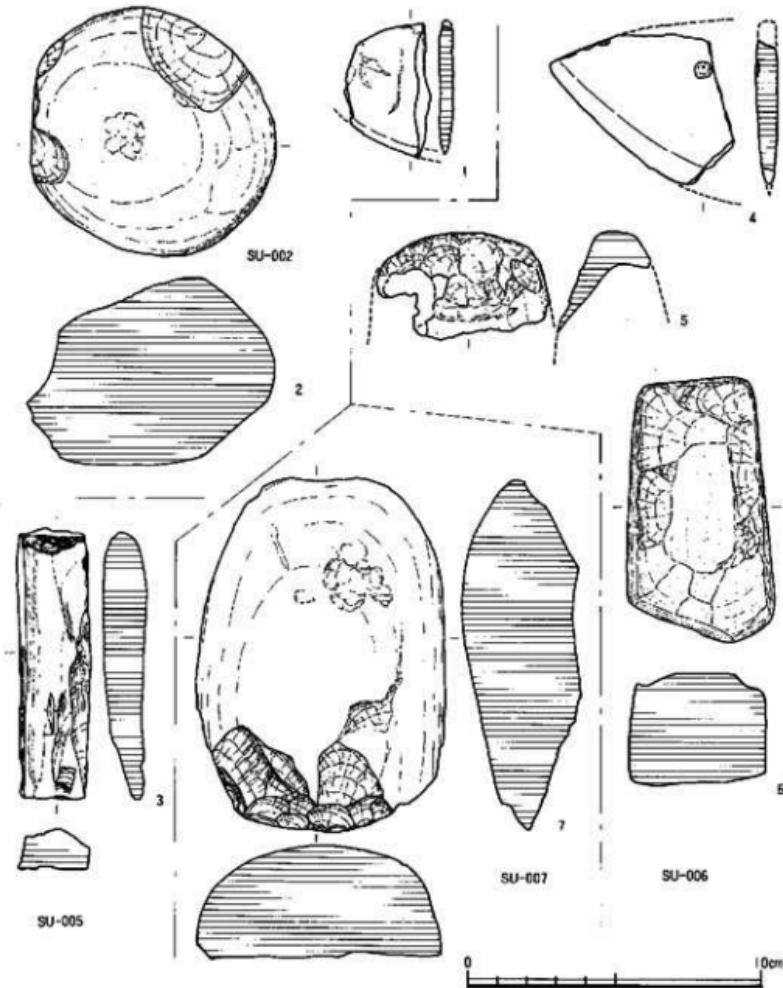


Fig.59 SU-002, 005, 006, 007出土石器実測図(1/2)

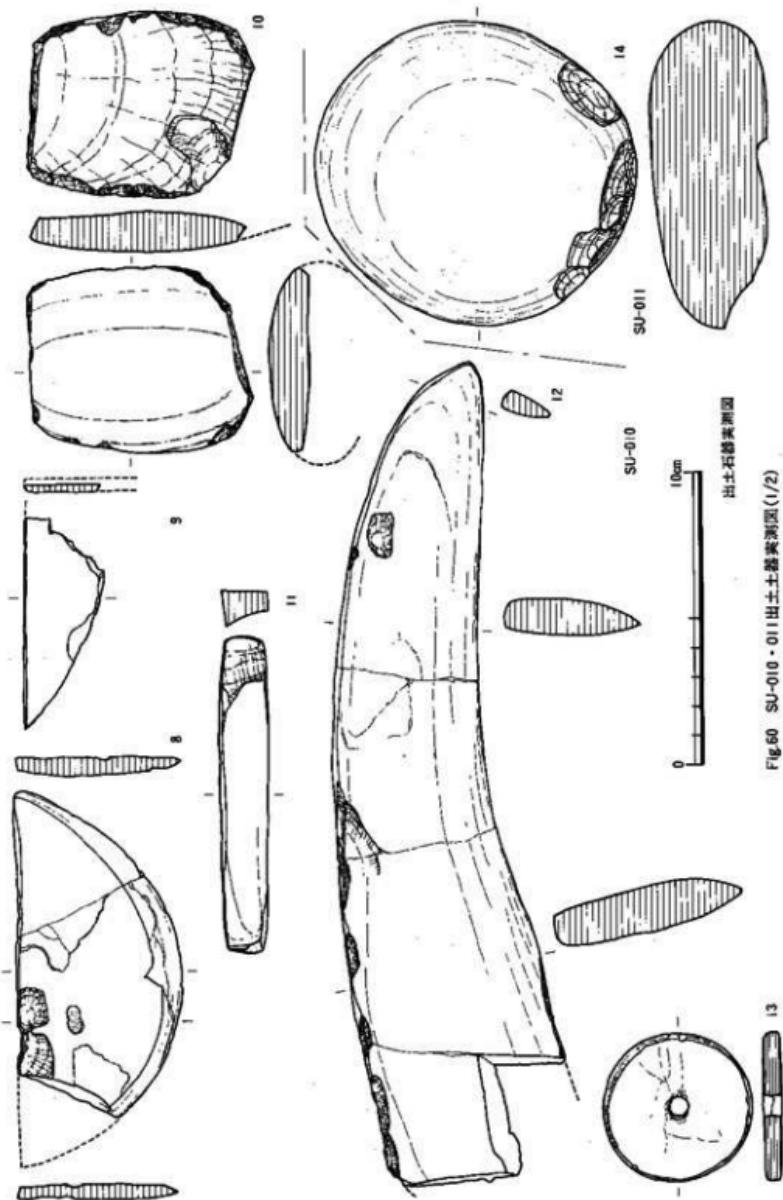


Fig. 60 SU-010・011出土石器実測図(1/2)

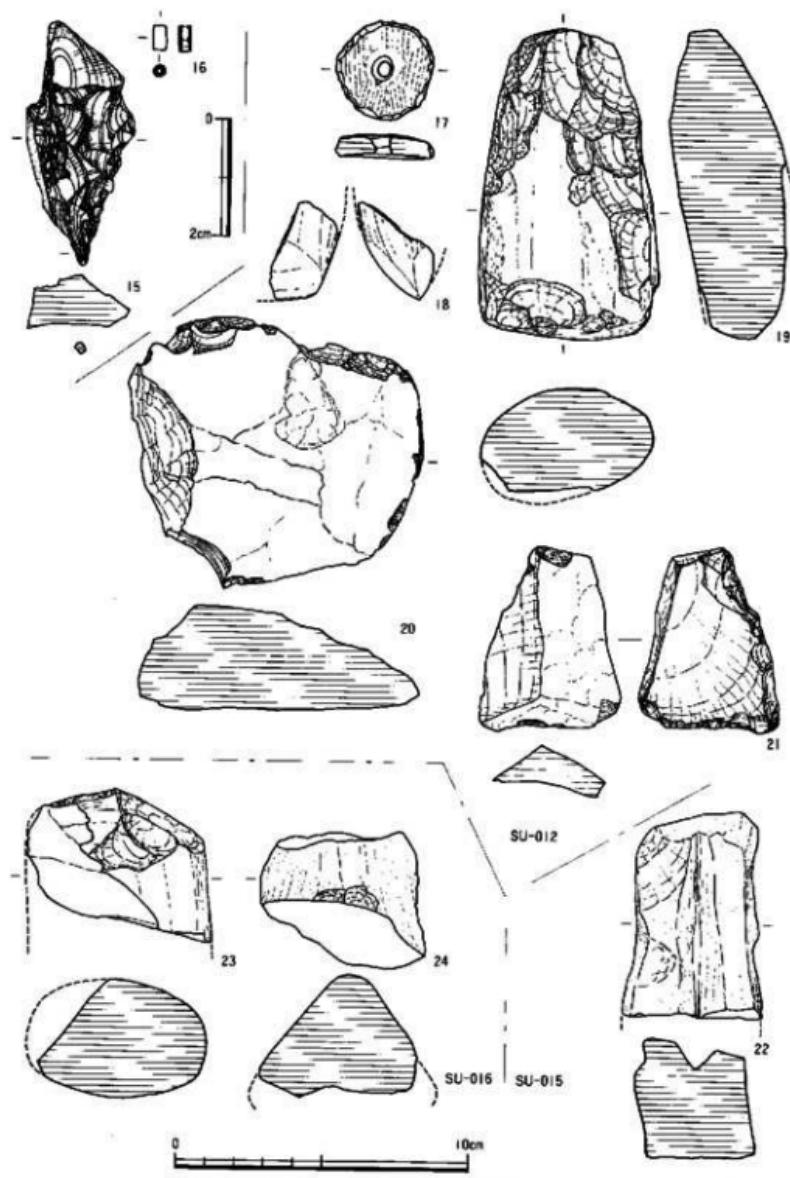


Fig.61 SU-012、015・016出土土器実測図(1/2)

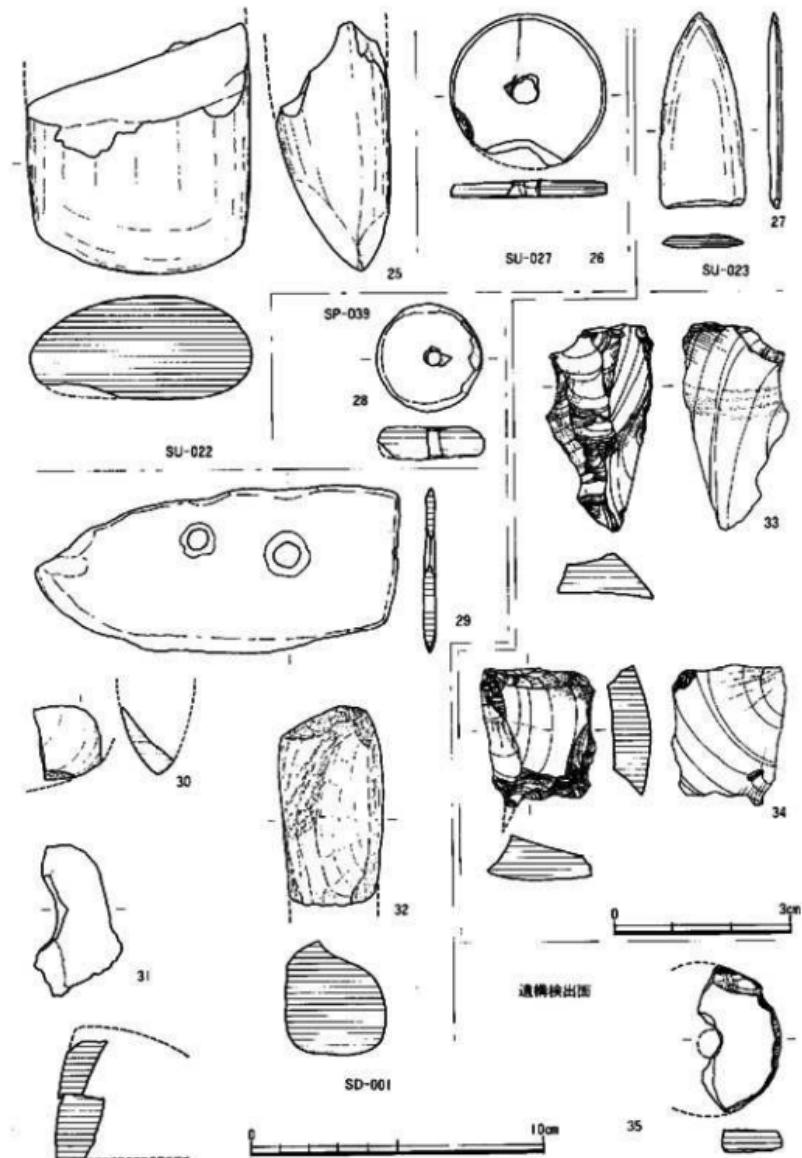


Fig.62 造構出土の石器・土製品実測図(1/2)

**SU-027** (Fig.61) 滑石片岩製紡錘車 (26) 1点が出土した。器面は丁寧に研磨が加えられており、穿孔は表裏から行われている。重さ20g。

**SU-028～031・034** SU-028からは、砂岩製砥石1点とOb製の剝片2点、削片3点、石核1点が出土した。SU-029からはOb製剝片1点が出土した。SU-030からはOb製の使用痕ある剝片石器1点が出土した。SU-031からは、AnTH製石庵丁片・花崗岩製台石・頁岩製剝片各1点とOb製の剝片・削片各3点、An素材2点が出土した。SU-034からは、敲石・Ob原石各1点が出土した。

その他の遺構および採集石器・土製品 (Fig.62) 28はSP-039出土の土製紡錘車で、手握ねで円盤形に整形し、穿孔は表裏から行われている。重さ10g。29～32はSD-001出土で、29はAnTH製石庵丁、30は今山産出玄武岩製太形蛤刃石斧、31は滑石製有孔石製品、32は砂岩製砥石である。33～35は造構検出面の採集で、33はOb製の使用痕ある剝片石器、34はOb製の石錐、35は滑石片岩製紡錘車で、器面は研磨されており、穿孔は表裏から行われている。以上の柱穴やSD-001出土および造構面検出の石器や土製品は、滑石製有孔石製品を除くと弥生時代前期末までの遺物と考えられている。

## 2) 井戸 (SE)

今回の調査では3基の弥生時代中期の井戸を検出した。井戸はいずれも素掘りのもので、井戸側等は設置されていない。3基は調査区中央から北東部にかけて、一直線に配列する。

### SE-009 (Fig.63)

調査区北側に位置する。平面形は円形を呈し、直径79.0～83.0cmを測る。底面は鳥栖ローム層と八女粘土層の境まで達している。深さ141cm、底面の標高3.9mを測る。埋土は上面から60cmは暗褐色粘質土が、そこから40cmは暗褐色粘質土まじりのロームが堆積する。底面から40cmではロームまじりの暗灰色粘質土が堆積する。遺物は埋土から弥生土器、石器等が出土した。また、底面近くで破砕された甌形土器が出土した。また、中層の暗褐色粘質土まじりのロームからは中細銅戈の鋲型片が出土した。

出土遺物から、本井戸の弥生時代中期末に位置づけられる。

### SE-014 (Fig.15)

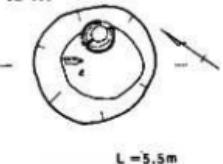
調査区中央東側に位置し、SE-009とSE-018の中間にある。貯蔵穴SU-006を切る。平面形は円形を呈し、直径80～100cmを測る。底面は鳥栖ローム層と八女粘土層の境まで達している。深さ200cm、底面の標高3.3mを測る。埋土は上面から100cmは暗褐色粘質土(炭、土器が多く含む)が、そこから50cmは暗褐色粘質土が堆積する。底面から50cmでは暗灰色粘質土が堆積する。遺物は埋土から弥生土器、石器等が出土した。底面近くで口頭部を欠いた袋状口縁壺が出土した。また、最下層の暗灰色粘質土からは斧の柄等の木製品が出土した。

出土遺物から、本井戸は弥生時代中期末に位置づけられる。

**SE-018 (Fig.63)**

調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、直径140~150cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘りこんでいる。深さ310cm、底面の標高2.2mを測る。上面から80cm下の壁面には長さ60cm、幅20cm、深さ20cmの掘りこみが2カ所ある。さらに本井戸に接して柱穴が1カ所あり、これらは井戸の上部の構造を支えるためのものとも考えられる。最下層からは把手付の木製容器が出土しており、水を汲み上げるために構造物があった可能性が考えられる。埋土は上面から90cmは暗褐色粘質土が、そこから120cmは暗灰色粘質土が堆積する。底面から100cmでは灰白色

SE-009



- SE-018土層**
- 1.暗褐色粘質土（ローム粒混る）
  - 2.暗灰色粘質土（木器、土器を多く含む）
  - 3.灰白色粘質土
  - 4.兔籠口一ム 砂山
  - 5.八女粘土

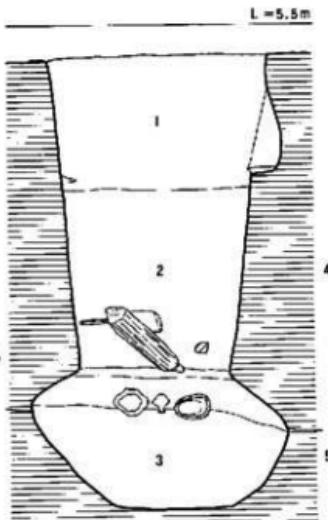
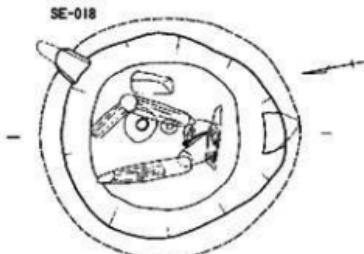


Fig.63 SE-009、018造構実測図(1/40)

粘質土が堆積する。鳥栖ローム層と八女粘土層の境は湧水のため、大きく抉れている。遺物は埋土から弥生土器、石器、木器等が出土した。特に、下層の灰白色粘質土からは容器、斧の柄等の木製品が多量に出土した。また、底面近くで完形の袋状口縁壺が出土した。

出土遺物から、本井戸は弥生時代中期末に位置づけられる。

#### 井戸 (SE) 出土土器

SE-008 (574~590) 土器は上層と下層からそれぞれ出土した。

上層出土の土器には壺・甕・器台・蓋がある。574は口縁部内面に粘土を貼付して段状に肥厚させ、外面の頸部との境には浅い段が巡る。板付II式の壺であり、混じり込みと考えられる。577は鋤形口縁の広口壺である。581は外面が丹塗り磨研され、壺の底部と考えた。575・576は鋤形口縁の甕で、前者は内外面を丹塗り研磨する。578・579は「く」字形口縁の甕で、胴部はほとんど張らない。580は口縁端を強く横ナデして跳ね上げ口縁に仕上げる。578・579と比較して胴の張りが目立ち、器壁はかなり薄い。582は甕の底部。583は器台の上半部の破片である。584は蓋の摘み部分。いずれも弥生時代中期後葉~末の須恵II式土器占段階~新段階のものである。

下層からは壺・甕・瓢形土器が出土した。585は長頸の袋状口縁壺である。586~588は「く」字形口縁甕で、588は「し」字形に近い。胴部はあまり張らず、胴部最大径が口径を上まわらない。589・590は瓢形土器で、外面および口縁部内面の一部は丹塗りが施される。いずれも弥生時代中期末の須恵II式土器新段階の範疇で捉えられる。

SE-014 (591~600) ほとんどが井戸埋土の下層~壙底付近から出土した。壺が圧倒的に多い。591は円筒状の頸部をもつ直口縁の壺である。中期に盛行する口頸部が朝顔形にひろがる広口壺から系譜がひけるものである。焼成前に頸部2ヶ所に円孔をあける。ほぼ完形に復元できた。592~597は袋状口縁壺である。いずれも外面は丹塗りされ、胎土には精選粘土を用いる。592・594の頸部には縱方向の暗文風の研磨調整を施す。597は肩部以上を打ち欠く。598は鋤形口縁甕で、口縁部はほぼ水平に作り上げる。599は鋤形口縁の鉢である。外面は丹塗り磨研され、胎土には精選粘土を用いる。600は「く」字形口縁の小形甕である。口縁端上面に細い粘土紐を貼り付けて跳ね上げ口縁に仕上げる。内面には部分的に赤色顔料が付着。いずれも中期末の須恵II式土器新段階に比定できる。

SE-018 (601~626) 土器は埋土上層と下層~井戸壙底から出土している。

上層出土土器には壺・甕・高杯がある。601は袋状口縁壺で、外面に丹塗りが施す。602はSE-014出土の591と同様な広口壺。603・604は口頸部が朝顔形にひらく広口壺で、鋤形口縁がつく。605の口縁部上面に円形浮文を貼付する。607は大形の「く」字形口縁甕である。口縁部直下に三角凸帯が巡る。607は丹塗り磨研の鋤形口縁甕である。口縁端面にヘラ状工具で浅いキザミを施す。下層出土の破片と接合した。608~611は「く」字形口縁甕で、胴部の張りは目立たない。

SE-009 (上層; 574~584、下層~最下層; 585~590)

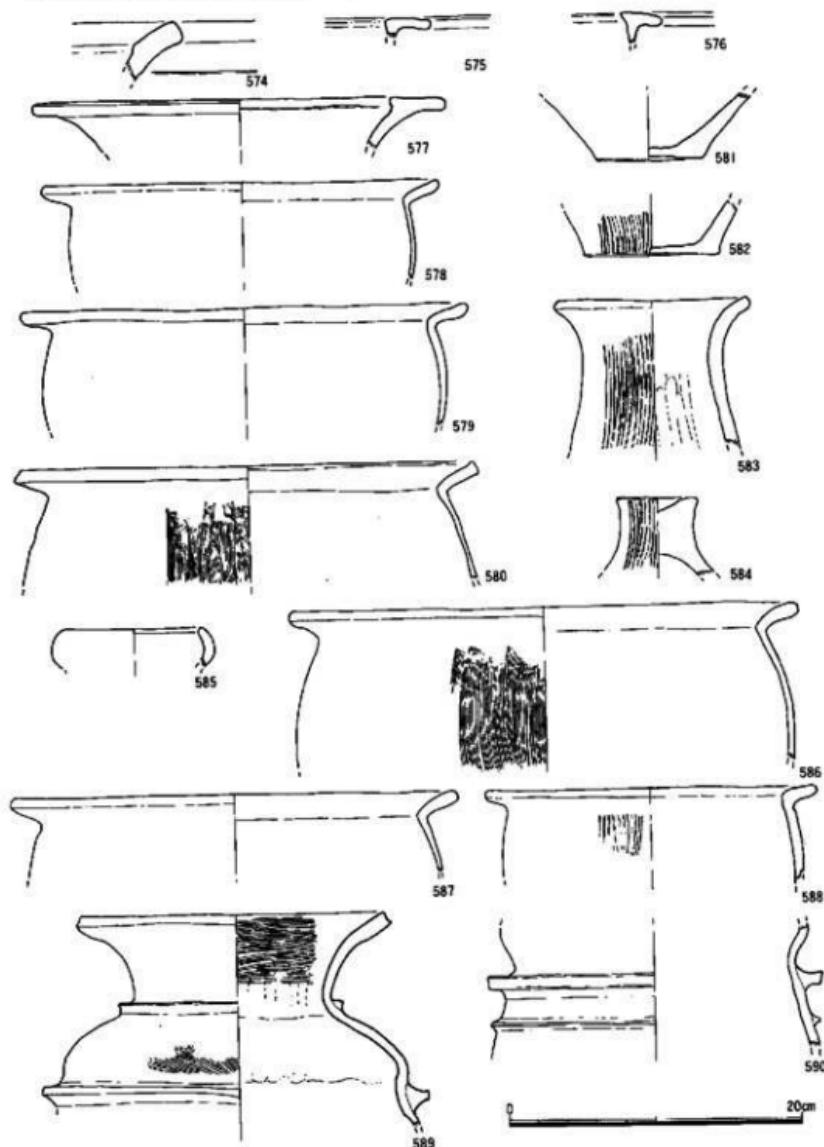
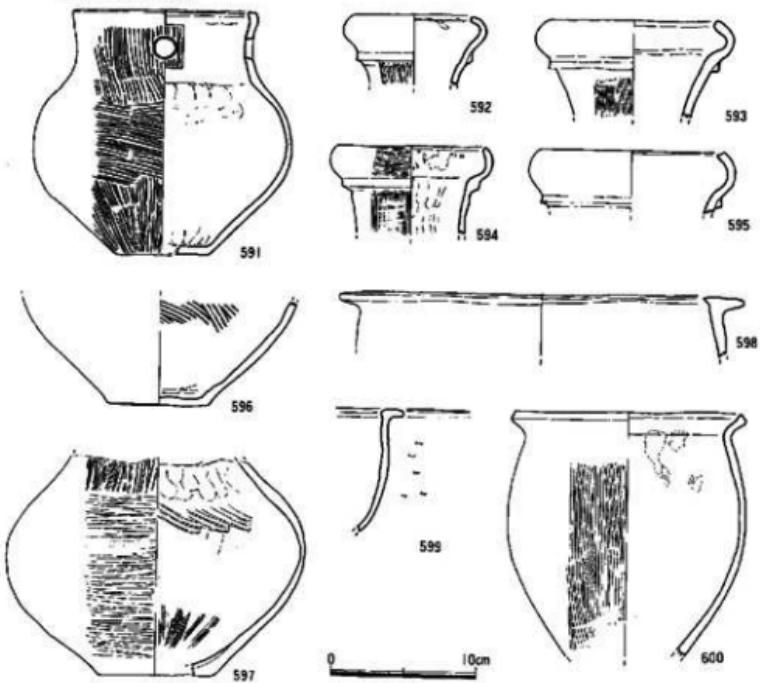


Fig.64 SE-009出土土器実測図(1/4)

SE-014 (591~600)



SE-018 (601~626)

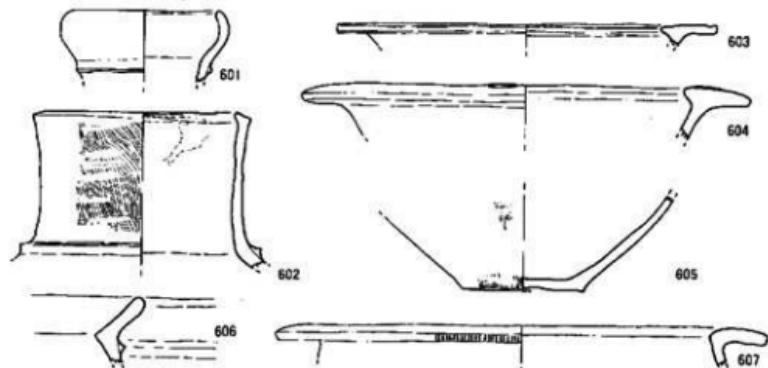


Fig.65 SE-014、018出土土器実測図(1/4)

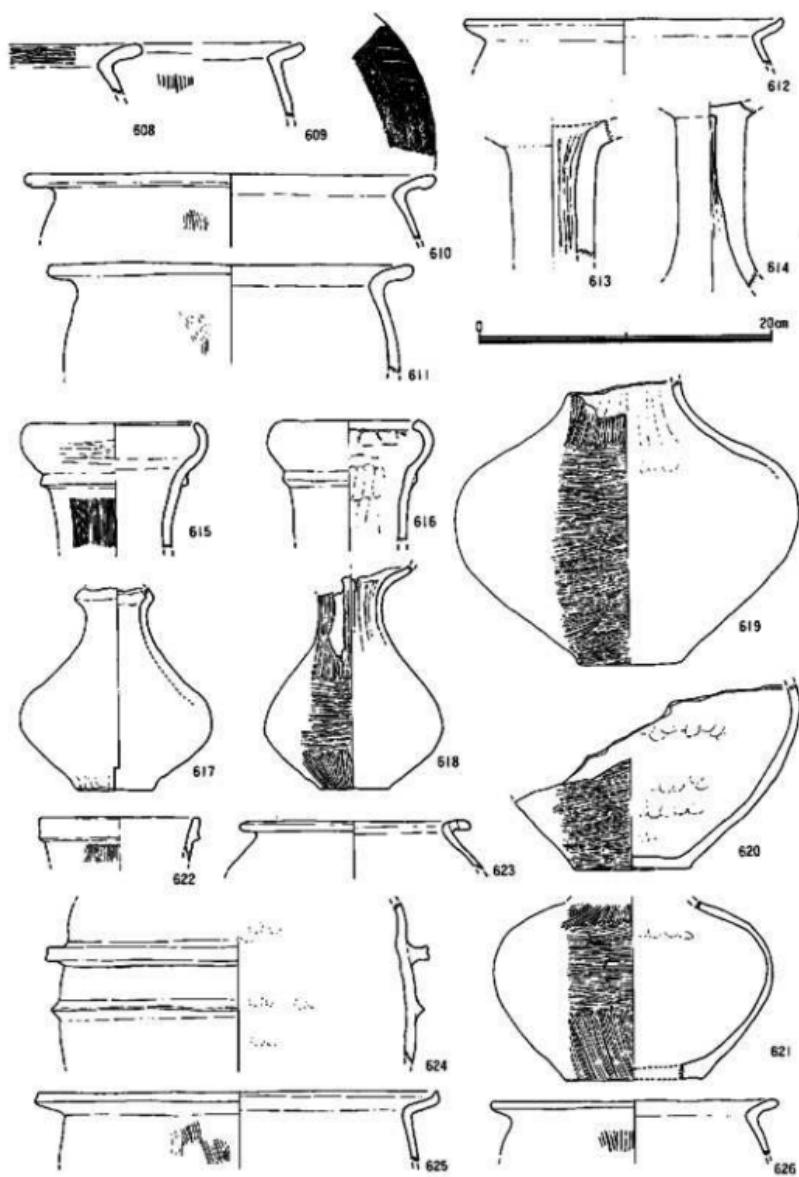


Fig.66 SE-018出土土器実測図(1/4)

610は口縁上面にヘラ描きの短斜線を3条描く。612も「く」形口縁甕であるが、口縁部上面を横ナデして跳ね上げ口縁に仕上げる。胸部は張り、器壁は薄い。613・614は高杯の脚部破片である。外面は丹塗り。いずれも弥生時代中期後葉～末の須恵II式土器古段階～新段階のものである。

埋土下層～墳底出土の土器には甕が多い。615～621は長頸の袋状口縁甕である。いずれも外面から口縁部内面にかけて丹塗りされ、胎土には精選粘土を用いる。615・618・619の頸部には縱方向の暗文風の研磨調整を施す。617・618は口縁部の一部、619は頸部以上、620は胸部上半以上を打ち欠く。622は口縁部直下に三角凸帯を巡らせる。外面は丹塗り磨研。頸部の研磨は暗文風である。623は逆「L」字形口縁をもつ無頸甕である。口縁部から胸部外面を丹塗りする。口縁部に焼成前に穿孔を施す。624は瓢形土器の胸部破片。625・626は「く」形口縁甕である。625は口縁端部の上面に細い粘土紐を貼り付けて跳ね上げ口縁とする。以上の多くは須恵II式新段階の範疇で考えられる。しかし、617の袋状口縁の外面に薄い稜線がつき、619の底部は凸レンズ状のやや不安定な平底であり、626は胸部が張り、口径より胸部最大径が大きいと考えられ、須恵II式より後出の様相をもち、弥生時代後期初頭に比定できよう。

#### 井戸（SE）出土石器

SE-018 (Fig.67) 有孔石製品 (36)・敲打器・砥石 (37)・切石・An素材各1点と磨石 (38)・輕石各2点の石器と板状鉄斧 (39) 1点が出土した。36は滑石片岩製で、径約10cm、孔径2.5cm前後で、器面や孔は研磨されている。37は砂岩製で、表裏と側面の3面が砥面として使用されている。39は幅2.5cm、器長3.4cm、厚さ0.4cmの瓦方形板の木口側の一辺にやや片寄った凹刃

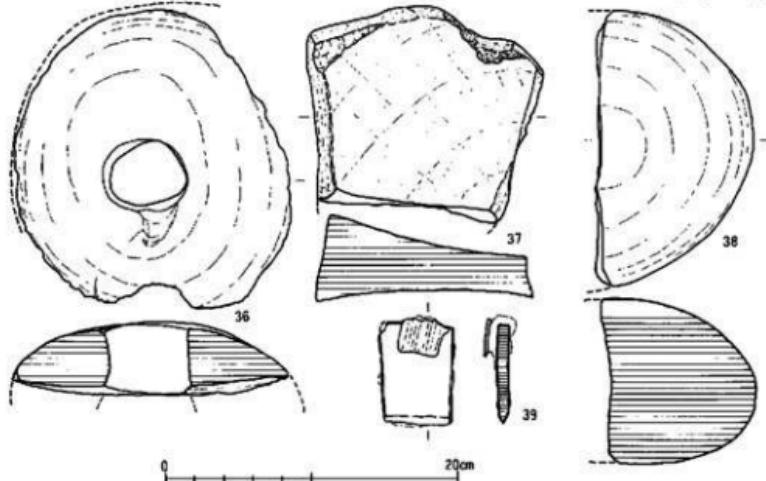


Fig.67 SE-018出土石器、鐵製品実測図(1/2)

の刃部を造り出している。器表には組合せ時のものと考えられる。同井戸で出土している予斧柄(11)が組合せを考えるうえで参考となろう。

#### SE-009出土鉄型 (Fig.68)

鉄型は欠損して一部分しか残存していない。表面は側面の1面を除くとすべて少なからず砥石として再利用されている。铸造面は両面に有り、側面には浅い溝がある。この講は砥石として使用された際に

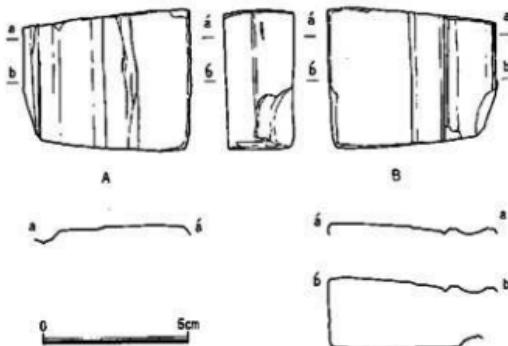


Fig.68 SE-009出土鉄型実測図(1/2)

付いたものではなく、鉄型に当初から施されたものと考える。残存する鉄型の長さ4.8cm、幅5.7cm、厚さ2.3cmを測る。側面が本来の状態に近いとするならば、鉄型の幅は97mm~100mmと推測される。石材は正式な鑑定を行っていないが、白色の緻密な石材である。それでは各面について見ていくと、铸造面のA面は背と身の部分である。铸造面及び合わせ面には黒変が見られ、表面は薄く剥離している。型の外側には2~3条の溝があり、成形の際に付いたものと考えられる。身の幅は両端ではなくど差が見られず、身の中央付近と考えられる。背の中央には明瞭な刻線があり、後の鈍い鎌が彫り込まれる。身幅42~43mm、背幅12~14mm、背の厚さ10mmが復元される。法量や背の特徴から中細銅矛が考えられる。一方、B面は背から身の部分で、穂の両側が残存する。表面は砥石として使用されているため、型の境は僅かに段が付く程度である。表面には黒変は見られない。身の幅はA面同様両端ではなくど差がない。背は断面半円形に彫り、深さ3mmを測る。穂は断面逆台形を呈し、僅かではあるが狭まっていく。身幅42mm、背幅10mm、穂の幅16~17mmが復元される。これらの特徴から銅戈の鉄型と考えられるが、鉄型の幅が100mm前後であり、穂の幅もその程度とすると中細銅戈が考えられる。これらの類例では春日市大谷遺跡出土の中細銅矛の鉄型、明治大学蔵伝八田遺跡出土の中細銅戈の鉄型、近隣では那珂遺跡23次出土の中細銅戈の鉄型がある。

比恵遺跡ではこれまでに鉄型の出土はなく、今回が初めての例になる。近隣の那珂遺跡では鉄型をはじめ、取り瓶、銅矛の中子等、青銅器生産を示す資料が出土しているが、今回の例は砥石としての再利用品であり、直ちに比恵遺跡で青銅器生産が行われていたとは言えない。しかし、比恵遺跡も那珂遺跡同様、奴国の重要な拠点集落であり、今後の調査に期待される。

なお、今回出土の鉄型については後藤直氏、宮井善朗氏にご教授頂いた。特に後藤氏には鉄

型の形態や類例について詳細なコメントを頂いた。ここに記して感謝の意を表する。

井戸 (SE) 出土木製品

SE-014出土木製品 (1~5) SE-014からは斧柄、板材、杭等が出土した。

1は斧の膝柄である。柄の先端は欠損している。枝と幹の枝別れ部分を利用し、木目に沿って削った幹を台にする。台の部分の表面は細かく加工される。用材の樹種はカシである。2は直柄の握り部である。鍔の柄、斧の柄等が考えられる。木取りは柾目である。用材の樹種はカシである。3、4は板材である。木取りは柾目である。用材の樹種はシイである。5は削り屑である。

SE-018出土木製品 (6~39) SE-018からは容器、斧柄、棒 (?)、不明木製品、板材、杭、削り屑等が出たした。

6~9は容器の破片である。6、8はくり抜きの椀で、6は器面には黒漆を塗る。用材の樹種はケヤキである。7は柾目取りの椀で、器面には黒漆を塗る。用材の樹種はクリである。10は把手付きの容器である。スギの芯持ち材を側面からくり抜いて、両端に把手を造り出す。把手には方形の孔を穿つ。両端は加工して丸みを持たせる。内法13.7cm×13.7cm、深さ10.7cm、把手までの長さ26.4cmを測る。11~13は膝柄である。枝と幹の枝別れ部分を利用し、木目に沿って削った幹を台にする。台の部分の表面は細かく加工される。用材の樹種はカシである。11は斧を装着するために、台の先端を削り取っている。偏平片刃石斧か板状鉄斧の柄と考えられる。12、13は台の先端が窄まっていく形状である。14は樹枝の先端を削って尖らせる。もう一方は面取りする。組合せ式の鋼柄の可能性がある。15は枝と幹の枝別れ部分を利用し、幹の部分を削って鉤状にする。枝別れの根元には縄を掛けた痕が見られる。用材の樹種はサカキである。16は樹枝の先端を削り出したものである。17は独鉢形の木製品である。カシの柾目材の両端を削り、中央にえぐりをいれる。2カ所に方形の穿孔が施される。長さ25.4cm、幅3.9cm、厚さ2.7cmを測る。17は孔に別の部材を組み合わせて使用するものと考えられる。類例がほとんどなく、性格を特定できないが、1つの可能性として棒を考えたい。弥生時代の資料としては静岡県白岩遺跡で類例が知られている。性格の特定には今後の類例の増加が待たれる。19は蓋状の木製品である。平面形は円形を呈し、中央には方形の孔を穿つ。表面は細かく加工される。木取りは板目で、樹種はスギである。18は性格不明の木製品である。側面には方形の孔を穿つ。木取りは柾目で、樹種はカシである。20は錐形の木製品である。隅の1カ所に穿孔を施す。用途は不明である。木取りは板目で、樹種はスギである。21~32は板材である。用材にはカシ、シイ、スギ等がある。29は火をうけて炭化している。32は中央に長方形の穿孔がある。33~39は削り屑である。樹種は同じで、同一の素材からの削り屑と考えられる。

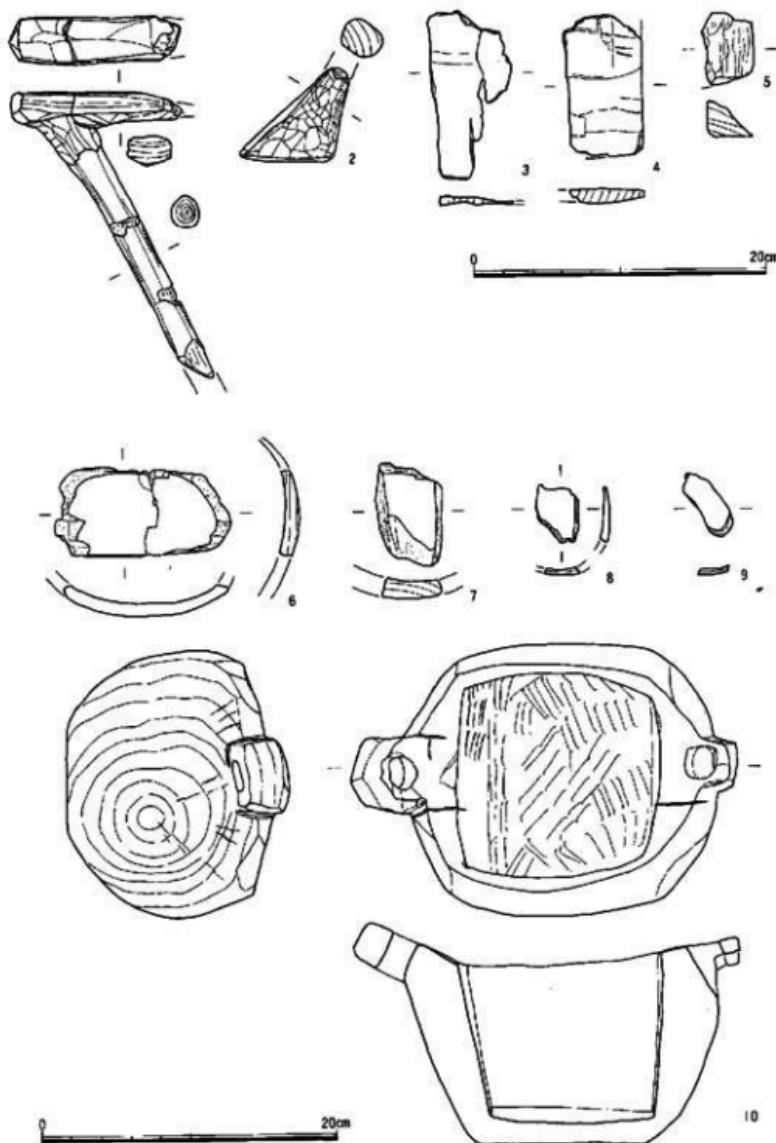


Fig.69 SE-014、018出土木製品実測図(1/4)

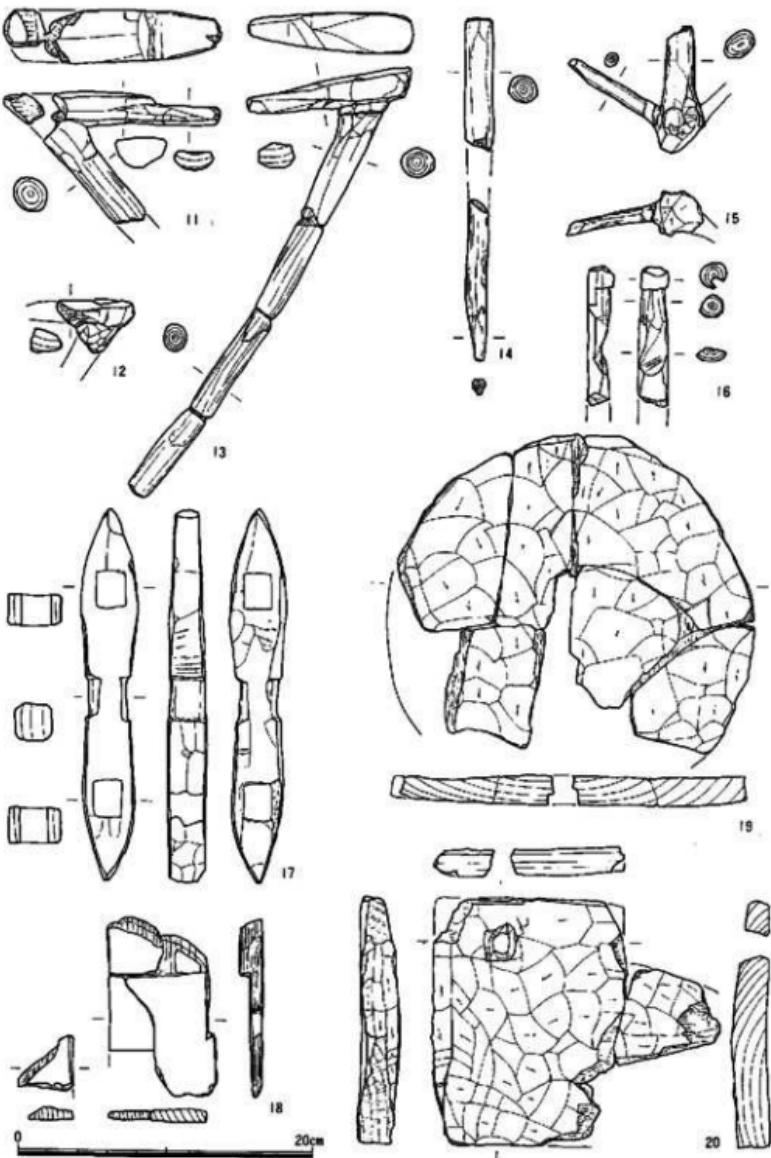


Fig.70 SE-018出土木製品実測図2(1/4)

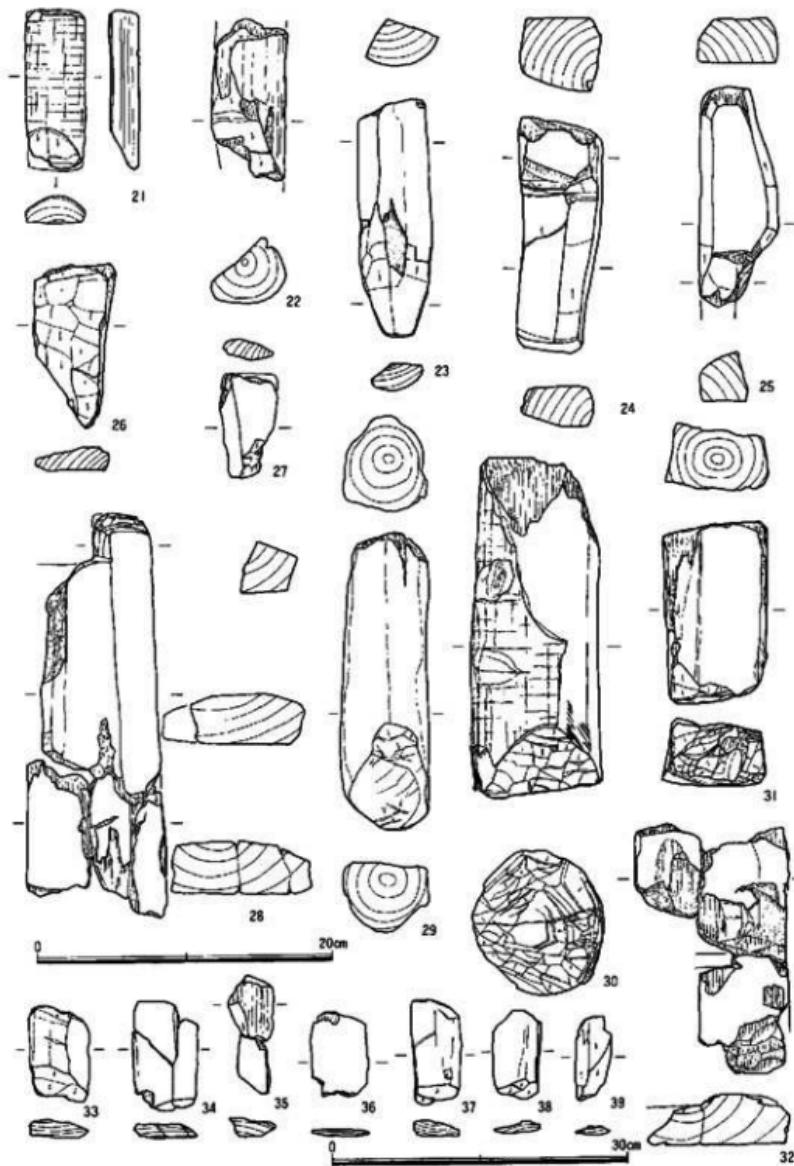


Fig.71 SE-018出土木製品実測図(1/4, 1/6)

### 3) 穴穴住居跡 (SC)

#### SC-013

調査区北端に位置し、造構は調査区外にさらに広がる。今回の調査では穴穴住居跡のコーナー部分を検出したに過ぎない。そのため、主柱穴の配置や規模等は不明確である。残存する深さは20cmである。床面で貯蔵穴SU-036を検出した。遺物は上面から土師器高环、甕などを検出した。

出土遺物から、本穴穴住居跡は布留式中段階に位置づけられる。

#### SC-013出土遺物 (627~635)

627~629は埋土上層から出土した。「く」字形口縁をもつ甕である。627は調部内面をハケメ調整で仕上げる。

630~635は住居跡の埋土下層にあたる暗褐色粘質土層から出土した。630は小形丸底壺であるが、褐色に焼き上げられ、つくりもあり良くない。631は「く」字形口縁をもつ甕で、口縁端部の内面を水平方向につまみ出す。調整の仔細は器面の荒れが著しく不明である。632・633は高环の环部破片である。ともに脚部との接合面で破損している。前者とくらべ633は、环部中位の反転部の段は明瞭である。634・635の高环脚部は円柱状で、635の内面は回転ヘラケズリ調整が施される。

埋土上層出土の土器も含めて、古墳時代前期の布留式中段階に時間的に並行する柏田式新段階に比定できよう。

### 4) 溝 (SD)

#### SD-001 (Fig.72)

調査区南側に位置し、N-20°Eで南北方向に直線的に延びる。断面形はV字形を呈し、幅100~120cm、深さ70cmを測る。埋土は大きく2層に分けられ、当初の溝が埋没後掘り直してい

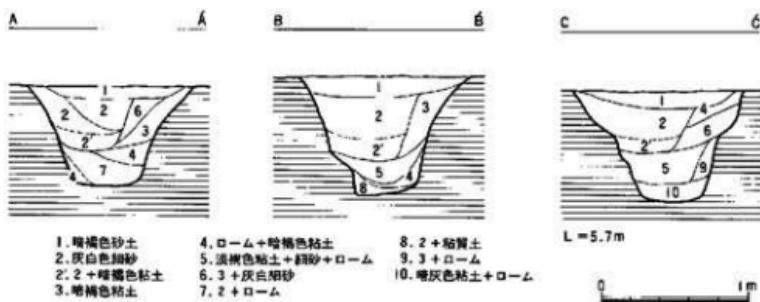


Fig.72 SD-001 土層断面図(1/40)

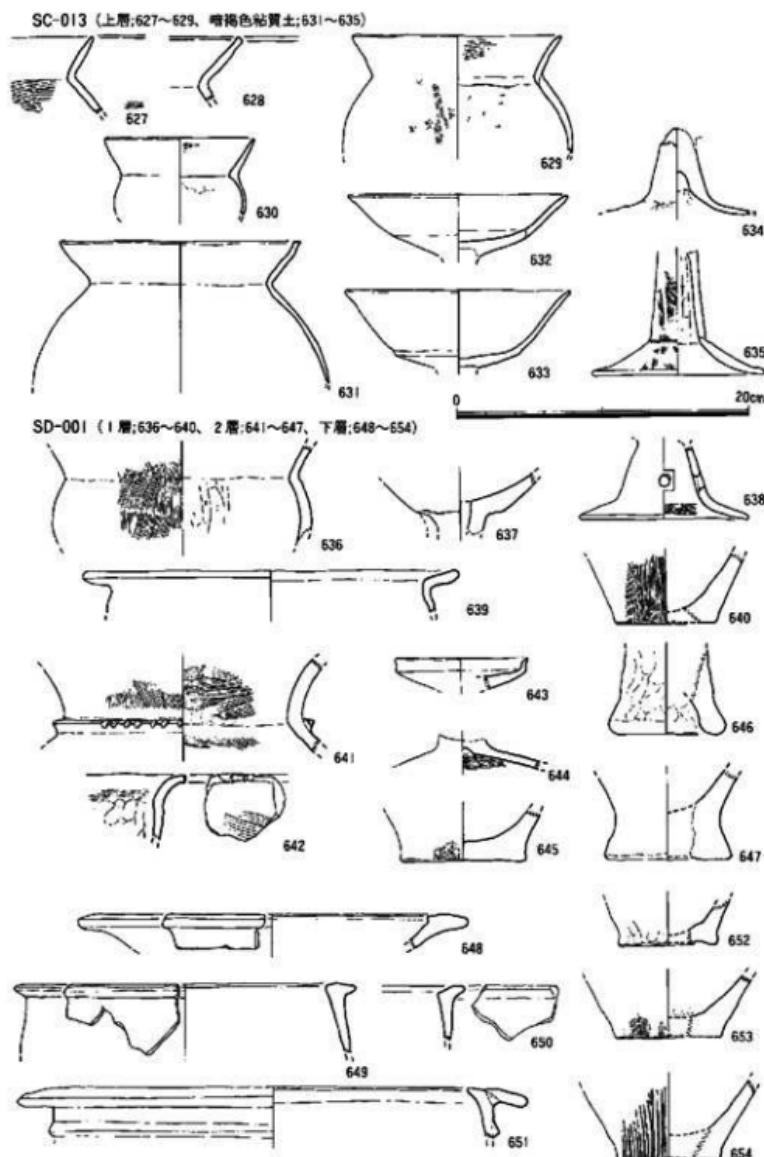


Fig.73 SC-013, SD-001出土遺物実測図(1/4)

る（第2層）。遺物は弥生土器、土師器、石器が出土した。

本講の時期は振削は弥生時代中期後半、最終的な埋没は布留式並行期と考える。

#### SD-001出土遺物（636～654）

比較的多くの土器が出土しているが、小破片がほとんどで、時期幅もかなりひろい資料が含まれる。代表的な土器を図示した。

636～640は溝堀上の上層部分の1層から出土した。639は「く」字形口縁をもつ甕で、弥生時代中期末の須恵II式新段階、640は前期板付II式の甕の底部破片である。他は古墳時代前期の布留式古段階に時間的に並行する有田式の範疇で捉えてよい。

641～647は埋土中層の2層から出土している。641は口頭部がラッパ状にひらく複合口縁壺と考えられる。643は小形器台、644は大きく裾が広がる脚付き小形鉢で、ともに精製品である。以上は古墳時代前期の有田式と考えた。642は如意形口縁をもつ鉢、646は器台、645、647は甕の底部の破片である。いずれも弥生時代前期の板付II式と考えられ、647は前期末の板付II式新段階に比定できる。

648～654は埋土下層にあたる3層から出土した。648は朝顔形に口頭部がひらく広口壺である。口縁部内面に粘土を貼り付けて段状に肥厚させる。649～654は蓋である。649・650は口縁部に三角形凸帯を貼り付けたもので、弥生時代前期末の板付II式に比定できる。651は動形口縁が外方に垂れるもので、中期後葉の須恵II式古段階と考えられる。

#### 5) 挖立柱建物(SB)

##### SB-042 (Fig.74)

復元した唯一の建物である。調査区北端に位置し、SC-013を切る。規模は2間×3間で、桁行5.7m、梁行4.7mを測る。長軸方位はN-20°-Eをとる。柱穴の平面形は円形で、直径40～60cmを測る。遺物は柱穴から少量の弥生土器、土師器が出土した。

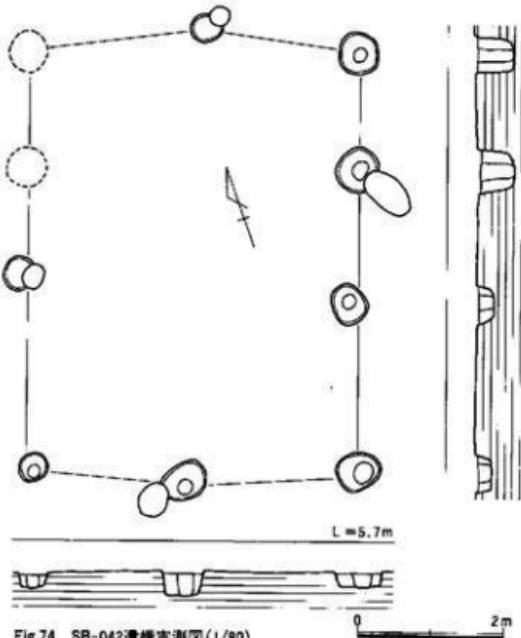


Fig.74 SB-042遺構実測図(1/80)

遺構の時期は出土遺物と遺構の切り合いから、古墳時代中期以降のものと考えられる。

#### 6) その他の遺物 (Fig.75)

655はSP-004から出土した上師器の小型鉢である。古墳時代前期の布留式古段階に時間的に並行する有田式に比定できる。656、657は調査区の南西部分で、遺構検出時に出土した須恵器環、甌である。甌蓋は器高4.4cm、口径11.4cmを測る。天井部の約1/2に回転ヘラケズリを施す。底は口縁端部は水平面をなし、口縁・頸部・胴部に棒描き波状文を施す。底部には回転ヘラケズリを施す。器高11.2cm、口径10.0cmを測る。656、657はともに陶邑I型式5段階並行に比定できる。

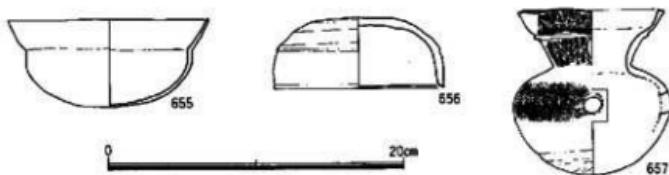


Fig.75 Pit. 遺構面出土土器実測図(1/4)

### 3 小結

今回の調査では弥生時代前期の貯蔵穴、中期の井戸、古墳時代前期の溝、竪穴住居跡等の遺構を検出し、それらに伴って数多くの遺物が出土した。ここでは今回の調査成果と問題点について述べていく。

#### 貯蔵穴について

今回の調査では29基の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は削平をかなりうけているため、入口部分の状況が分かるものはほとんどない。坑底の平面形は長方形、楕円、隅丸長方形、円形等がある。遺構の時期は前期中葉（板付II式古）～前期末（板付II式新）に位置づけられる。形態変化は長方形、楕円、隅丸長方形から円形という状況が見られる。

貯蔵穴に付随する昇降施設や覆屋の存在については明確にはつかめなかった。ただ、坑底の壁際の一ヵ所に浅い窪みのあるものが幾つか有る(SU-007、011、012、015等)。これは丸木梯子等を掛けたためにできた沈みこみと考える。この他、SU-004では中央に径20cm程の柱穴1個とその脇に5～8cm程の柱穴2個を検出した。覆屋等を支える柱があったと考えられる。

遺構の分布は調査区全域に及ぶ。分布の状態から幾つかの小群が見られる。ところで、南側にある第31次調査地点と北西隅の第37次調査地点を併せると、この時期の貯蔵穴は40基になる。

削平をうけていることを考慮しても貯蔵穴以外には当該期の遺構は見られず、この地域には貯蔵穴のみが営まれる領域であったと考えられる。遺構の分布は台地の延びる南北方向に広がり、北側には更に広がるであろう。南側は河川跡が存在することから、東西方向については31次、37次調査地点での遺構の分布からこれ以上は広がらないものと考える。したがって、これらから貯蔵穴の広がりは最小でも南北50m以上、東西約20mの範囲が考えられ、占有面積約1000~1200m<sup>2</sup>を越える広さの貯蔵専用の領域が存在したと考えられる。このように貯蔵穴専用の領域をもつ、この時期の遺跡としては板付遺跡、京都都郡田町葛川遺跡、奈良市光岡長尾遺跡等がある。これらはいずれも環濠集落であるが、板付遺跡は環濠内にある弦状溝に区画された地域がその領域と考えられている。葛川遺跡、光岡長尾遺跡は板付遺跡の在り方が発展した形の貯蔵穴のみ囲む環濠と考えられている。比恵遺跡においては現在まで前期の環濠は未検出であるが、「環濠貯蔵区画」とよばれる葛川遺跡、光岡長尾遺跡の環濠の在り方と本例は同様の性格を持つものと言えよう。つまり、ここに営まれる貯蔵穴は個々の住居もしくは成員に属するものではなく、集落もしくは共同体の管理の元にあって、作られたものと考えられる。

#### 比恵遺跡群の前期集落について

比恵遺跡群では現在第3、8次調査が行われた西台地と本調査地点がある北台地で、前期の遺構、遺物が検出されている。中央台地においてもわずかにその時期の遺物は見られるが、前期の集落の中心は北台地にある。

北台地は前章でも述べたが、先端に狭い谷が入り込み、二股に分かれた地形(Fig.11参照)を呈している。次の遺構の分布を見ていくと、竪穴住居跡に二股に分かれた西側の丘陵で検出されている。第26次調査地点では前期前葉の松菊里タイプの竪穴住居跡1軒、前期後葉の堅穴住居跡が2軒が検出されている。南側にある第25次調査地点でも前期後葉の堅穴住居跡が2軒検出されている。次に貯蔵穴は第4次、26次、28次調査地点で検出されている。第4次調査近くで3基検出された。第4次、26次の貯蔵穴は在り方は第30次調査地点での在り方と異なり、各堅穴住居跡に付随する貯蔵穴と考えられる。また、第4次、24~26次調査地点では谷の落ち際に貯木土坑が検出されている。貯木土坑も貯蔵穴同様、各住居に付随する在り方を示している。以上、遺構の分布を簡単に見てきたが、遺構の分布から北台地西側を堅穴式住居が営まれる居住区域、本調査地点周辺を貯蔵区域と考えることができる。北部九州の前期集落では先に見た板付遺跡、葛川遺跡、光岡長尾遺跡のように、居住区域と貯蔵区域とに分けて集落を形成するものが多いが、両者の様相が明らかなものは少なく、比恵遺跡群の遺構の在り方は前期集落の構造を考えるうえで好例と言えよう。今後の調査で、周辺の遺構の広がりをつかむとともに、墓域や水田城などを検出し、集落構造を明らかにしていくことが重要な課題と言えよう。

#### 参考文献

都出比恵志「日本農耕社会の成立過程」1989岩波書店。

## 第5章 第31次調査地点

### 1 調査の概要

本調査地点は比恵遺跡群の北側に位置し、第30次調査地点に隣接する。調査対象地の現況は、NTT の社員住宅と駐車場であった。調査は社員住宅の解体後、着手することになったが、建物の基礎については、それが遺構面に達していて、除去すると遺構を傷める恐れがあるため、調

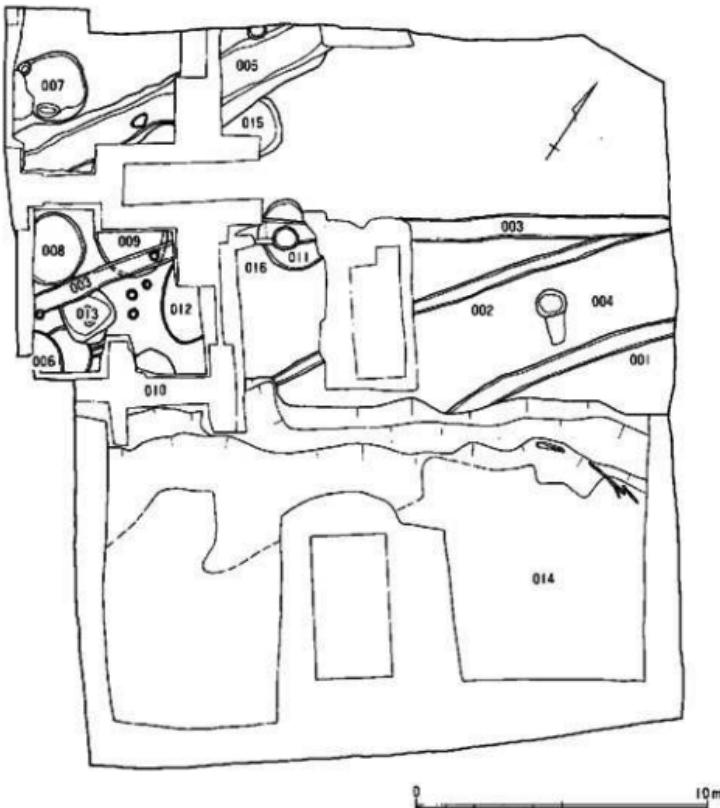


Fig.76 第31次調査地点遺構分布図(1/200)

査後に取り除いてもらうことになった。

調査は約70cm程の表土を除去し、基盤の鳥柄ロームを検出した。そして、その面で遺構が確認できたので、遺構の検出作業を行った。その結果、調査区の南半分に旧河川が存在する事がわかり、残土置き場を確保するため、調査は台地部分と旧河川部分とに分けて行った。

遺構は台地部分で弥生時代前期の貯蔵穴7基、中期の溝2条、古墳時代初頭の溝2条、土壙1基、奈良時代の土壙1基を検出した。また、調査区の南半分には古代時代初頭から5世紀にかけて流れていた河川を1条検出した。

## 2 調査の記録

### 1) 貯蔵穴 (SU)

今回の調査では7基の貯蔵穴を検出した。北側の第31・37次調査地点で検出した貯蔵穴の分布が更に南側に広がっていることが分かった。したがって、3カ所の貯蔵穴を合わせると、40基以上がこの地域に群集することになる。遺構の遺存状態は第30・37次調査と比べて非常に悪く、残存する遺構の深さは10~45cmである。遺構の検出面の高さに大きな差がないことから、本来の地形が南から北へ傾斜していたことが分かる。貯蔵穴は調査区の西側半分で検出でき、東側では検出されなかった。

#### SU-007 (Fig.77)

SD-005に切られる。平面形は不整楕円形である。床面の壁際には浅い窪みが認められる。この窪みは梯子等を敷設した際に沈んだものと考える。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

#### SU-008 (Fig.77)

SD-003に切られる。平面形は楕円形である。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

#### SU-009 (Fig.77)

SD-003に切られる。平面形は楕円形である。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

#### SU-010 (Fig.77)

SD-003、SK-016に切られる。平面形は楕円形である。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

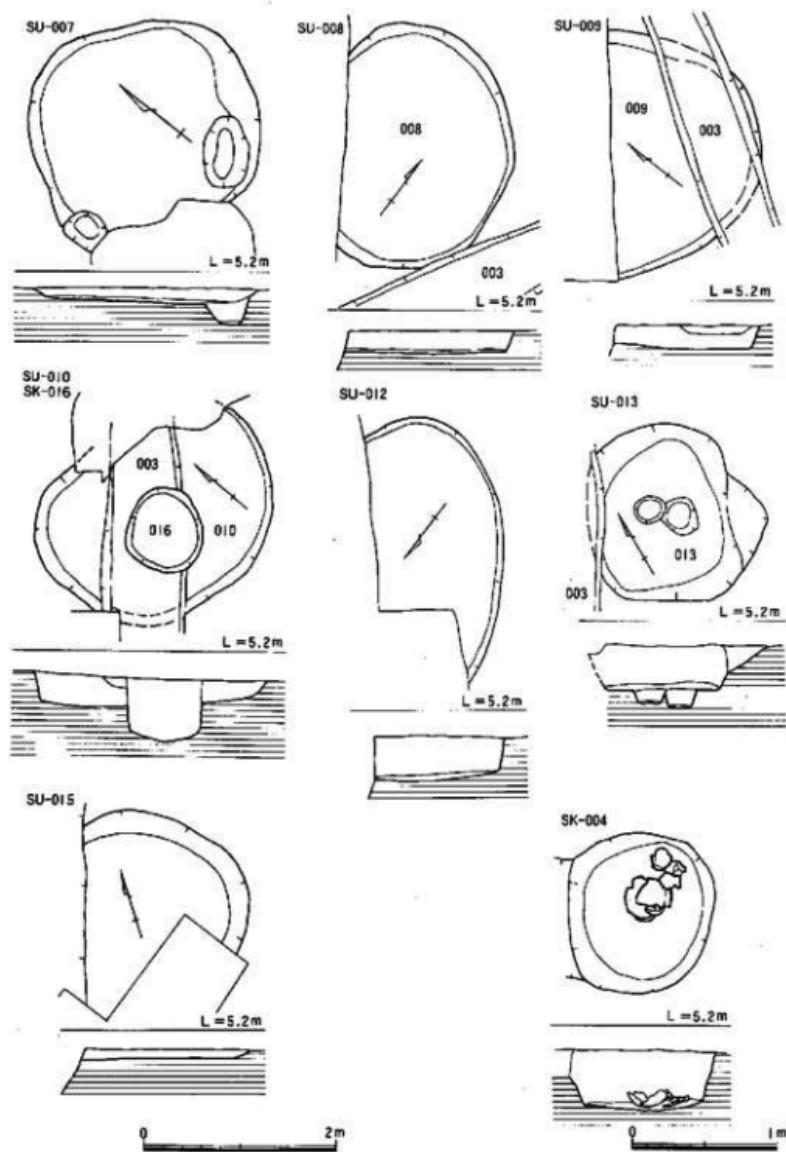


Fig.77 貯藏穴及び土坑造構実測図(1/60、1/40)

**SU-012 (Fig.78)**

平面形は不整橢円形である。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-013**

平面形は不整橢円形である。床面には柱穴がある。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**SU-015**

平面形は不整橢円形である。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は暗褐色粘質土から弥生土器、黒曜石剝片等が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

**貯蔵穴 (SU) 出土土器**

貯蔵穴出土の遺物は、隣接の30次調査区と比較してかなり少ない。SU-007を除き、出土土器は10点にみたない。しかし、弥生時代前期の板付II式上器がほとんどである。

**SU-007 (1~8)** 1は口縁部に段、肩部に3条の平行沈線文が巡る。2は胴部上半の破片で無軸羽状文をヘラ書き施文する。3は甕もしくは鉢の口縁部破片で、逆「L」字形に近く周曲する如意形口縁をもつ。図化していないが、同様な破片が他に1点ある。4・5は壺、6は鉢、7・8は甕の底部破片である。8は外底面に木の葉压痕が残る。他に壺4点、鉢1点、甕4点の底部破片がある。8以外は、板付II式古段階に分類できる。

**SU-008 (9~11)** 9は如意形口縁をもつ鉢の破片か。10・11は壺である。出土土器は刷破片以外、図化できたのは点のもみある。板付II式古段階のものか。

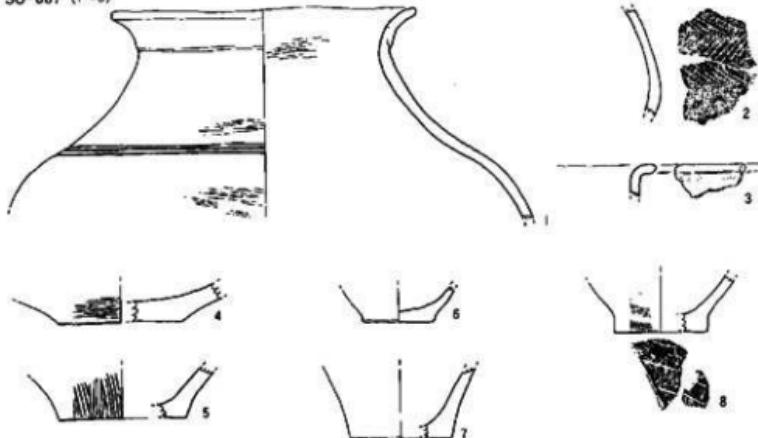
**SU-009 (12~14)** 12は口縁部内面に薄く粘土を貼付し段をつくる壺。13は如意口縁の甕で口唇下端にヘラ状工具で不揃いで小さなキザミを施す。14は鉢の底面破片。他に甕の底部破片が1点ある。板付II式中段階のものと考えた。

**SU-010 (15~16)** 15は小形壺である。口縁部下に段が巡る。他に精製の小形壺の胴部破片がある。16は甕で如意形口縁の屈曲が著しい。口唇下半にキザミを施す。板付II式古段階の範疇で捉えられよう。

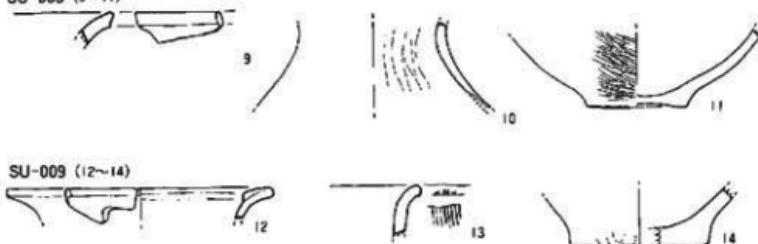
**SU-012 (17~19)** 17は如意形口縁の甕。口唇下端に棒状工具を押捺して、大小不揃いのキザミを施す。18・19は甕の底部破片。18は焼成後に外底部から穿孔を施して甕とする。板付II式古段階に比定できよう。

**SU-015** 弥生土器の甕の胴部破片が1点出土したのみである。

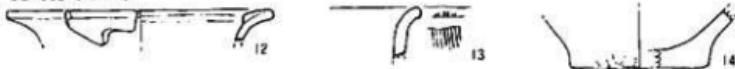
SU-007 (1~8)



SU-008 (9~11)



SU-009 (12~14)



SU-010 (15~16)



SU-012 (17~19)

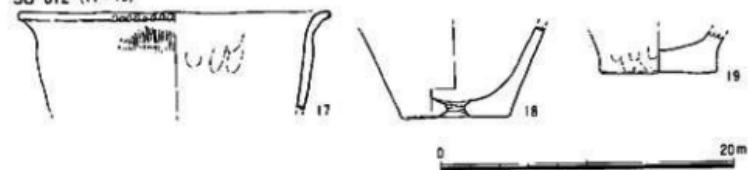


Fig.78 SU-007~010・012出土器実測図(1/4)

Tab. 4 貯蔵穴一覧表

Fig.- No.	遺構 番号	法量(cm <sup>3</sup> ) 長径×短径×深さ×底面積	底面の 平面形	出土遺物	時期 (前期)	備 考
77	007	228 × - × 15 × (2.88)	不整橢円形	上器I~8	後葉	渠底に1カ所浅い溝みあり
77	008	- × - × 25 × (3.10)	橢円形	土器9~11	後葉	SD003に切られる
77	009	- × - × 25 × (2.32)	橢円形	土器12~14	後葉	SD003に切られる
77	010	245 × - × 30 × (1.64)	橢円形	土器15, 16	中葉	SD003, SK016に切られる
77	012	- × - × 43 × (2.27)	不整橢円形	土器17~19	後葉	半分擾乱
77	013	178 × - × 45 × (1.47)	不整橢円形	-	-	床面に柱穴あり
-	015	- × - × 10 × (1.75)	不整橢円形	-	-	-

## 2) 土壙 (SK)

## SK-004 (Fig.79)

調査区中央東側に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、長径108cm、短径100cm、深さ40cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土で、床面直上で土師器等が出土した。

出土遺物からこの土壙は古墳時代後期に位置づけられる。

## SK-016 (Fig.79)

調査区中央に位置し、SU-010、SD-003を切る。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、長径86cm、短径78cm、深さ70cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土で、埋土から高台付きの土師器碗等が出土した。

出土遺物からこの土壙は奈良時代に位置づけられる。

## 土壙出土の土器

SK-006 (20~22) 20は比較的大形の壺の口縁部破片である。口縁部外面に粘土を貼り付け肥厚させ段をつける。21は如意形口縁をもつ壺である。口縁下端に不揃いのキザミを施す。22は小形の鉢である。20は埋土上層、21・22下層出土。いずれも弥生時代前期の板付II式中段階のものである。

SK-004 (23・24) ともに壺で、ほぼ完形に復元できた。23は球形の胴部に「く」字形口縁がつく。口唇端面は面取りされ、その処理の仕方は須恵器に近い。胴部外面は乱雜にハケメ、内面にはヘラズリ調整を施す。24は外表面はナテ、内面にはかなり乱雜にヘラズリ調整を施す。古墳時代後期。

SK-016 (25・26) 25は土師器の壺で、鶴口形の口縁をもち、下ぶくれの長球形の胴部がつくと考えられる。26は土師器の高台付椀。

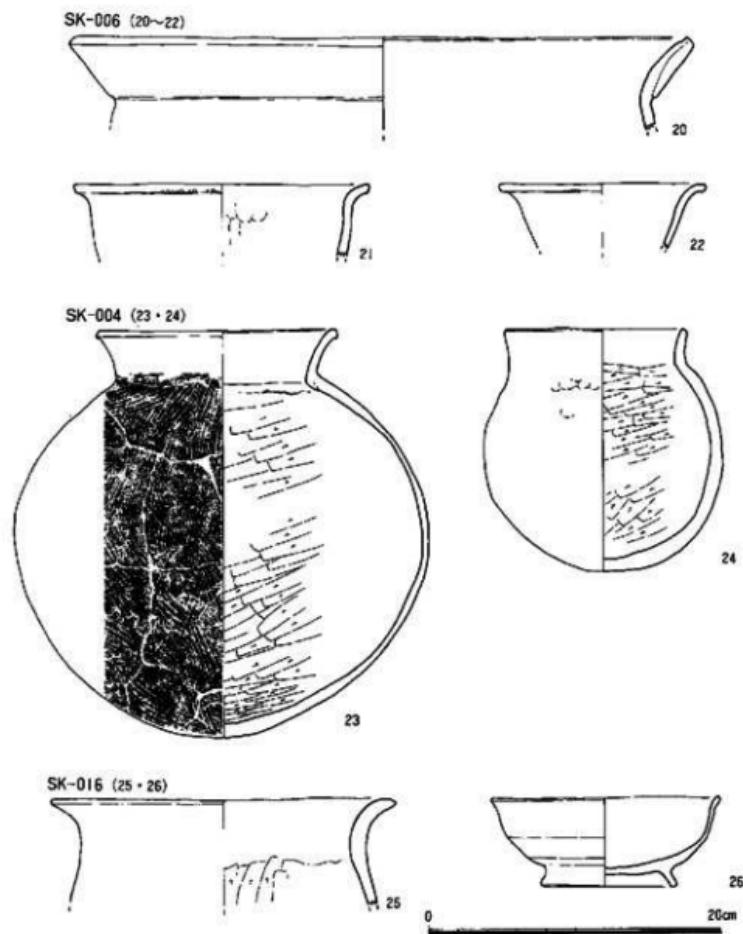


Fig.79 SK-006・004・016出土土器実測図(1/4)

### 3) 溝、旧河川 (SD)

今回の調査では4条の溝と1条の旧河川を検出した。溝はN-30°~55°-Eで南北方向に延びる。これらの溝は旧河川 SD-014に並行しており、この河川からの氾濫を防ぐために掘られたものだと考える。

#### SD-001 (Fig.80)

今回検出した溝の中で最南端に位置し、SD-002に並行して、N-35°-Eで南北方向に直線的に延びる。南端はSD-014に切られる。断面形は逆台形で、幅60cm、深さ30~35cmを測る。溝の底面は北から南に傾斜する。埋土は暗褐色粘質土と細砂が互層になっており、流水があったと考えられる。遺物は埋土から弥生土器が少量出土した。

出土遺物からこの溝は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### SD-002 (Fig.80)

SD-001の北側に並行して、N-35°-Eで南北方向に直線的に延びる。南端はSD-014に切られ、北端はSD-003に切られる。断面形は逆台形で、幅40~50cm、深さ20~25cmを測る。溝の底面は北から南に傾斜する。埋土は暗褐色粘質土と細砂が互層になっており、流水があったと考えられる。遺物は埋土から弥生土器が少量出土した。

出土遺物からこの溝は弥生時代中期後半に位置づけられ、SD-001と同時期に存在したと考えられる。

#### SD-003

調査区中央 N-55°-Eで南北方向に直線的に延びる。遺存状態は悪く、幅80cm、深さ10cmが残存する。埋土は暗褐色粘質土で、溝の底面は北から南に傾斜する。遺物は埋土から弥生土器、上師器、須恵器が少量出土した。

出土遺物からこの溝は古墳時代後期に位置づけられる。

#### SD-005 (Fig.80)

調査区北側に位置し、N-27°~30°-Eで南北方向に直線的に延びる。北側の30次調査地点で検出したSD-001に並行する。断面形は逆台形で、幅160~200cm、深さ50cmを測る。溝の立ち上がりの角度から推測して、本来は幅300cm、深さ150cmを越えるものであったと考えられる。埋土は大きく2層に分けられ、埋土の状態から流水があったと考えられる。溝の底面は北から南に傾斜する。遺物は埋土から弥生土器、土師器が出土した。

出土遺物からこの溝は古墳時代前半に位置づけられる。

#### SD-014 (Fig.80)

調査区南半を直線的に流れる旧河川で、SD-001、SD-002を切る。調査区内で検出した幅約12m、深さ1.6mを測り、更に規模は大きくなると考える。岸は急激に傾斜し、人為的に掘削され

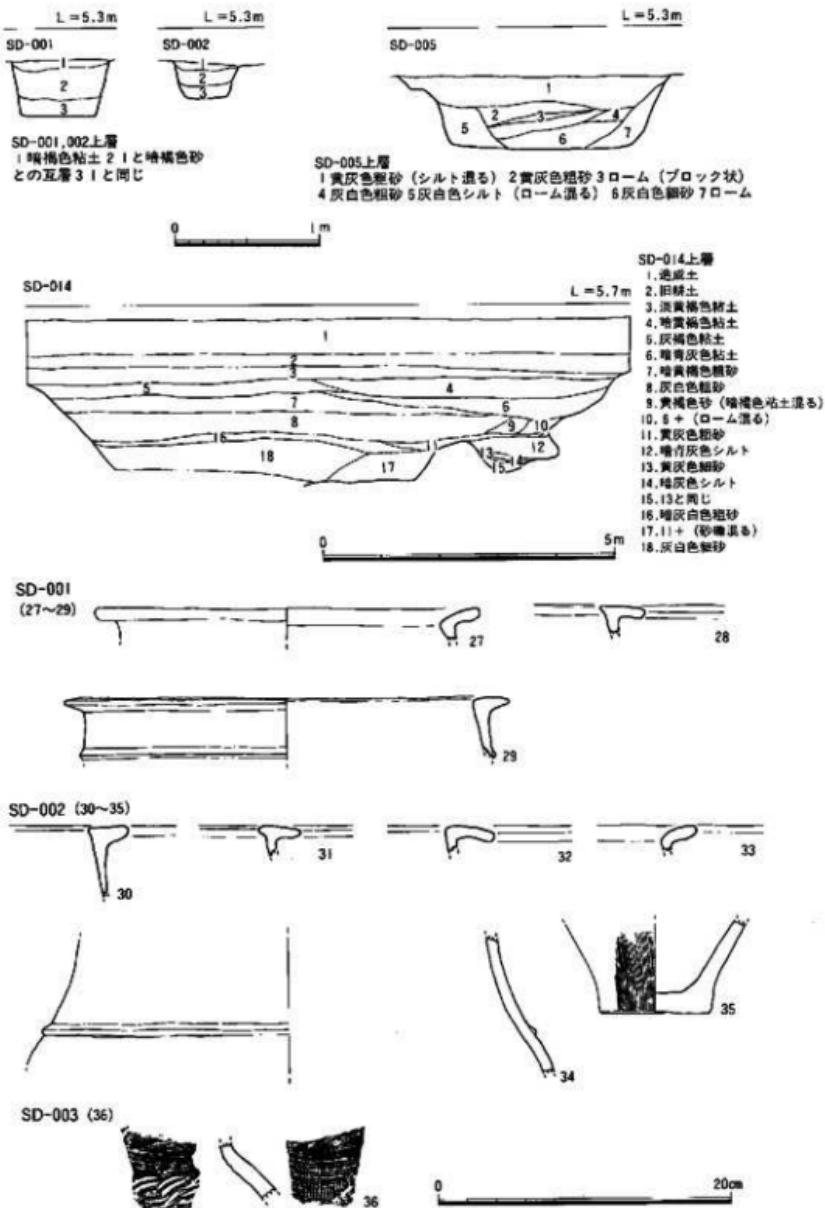


Fig.80 SD-001・002・005・014土層断面図(1/40、1/100)及び出土土器実測図(1/4)

た感がある。埋土は大きく2層に分けられ、上層は河川が機能しなくなった後の堆積で、整地層である。下層は河川の堆積上で、厚さ1mを超える粗砂層である。埋土の状態からこの河川は一時期に埋没したと考えられる。遺物は下層から弥生土器、土師器等が、上層からはそれらに加え、須恵器等が出土した。

出土遺物からこの河川の存続期を古墳時代初頭～古墳時代後期と考える。

#### 溝(SD) 出土土器

SD-001 (27～29) 27～29を含め、甕・高杯・壺・鉢が出土した。高杯と壺の一部には丹塗りを施したものがある。その中で、もっとも古いものは29の甕で、弥生時代中期前葉の須恵I式中段階に比定できる。また、27の「く」字形口縁をもつ甕は、中期末の須恵II式新段階に分類され、出土土器の中でもっとも新しい段階のものである。

SD-002 (30～35) 出土土器の量は少ない。30・31、33、35は埋土の上層、32、34は下層から出土した。32は内外面とも丹塗り研磨を施す逆「L」字口縁をもつ甕。33は「く」字形口縁の甕で、ともに弥生時代中期末の須恵II式新段階に属する。出土土器の中でもっとも新しい段階のものである。34は肩部に小さな三角形凸帯を貼付した弥生時代前期の板付II式中段階の壺である。図示していないが、他に壺・甕・鉢・高杯などの小破片がある。いずれも中期須恵II式の範疇で捉える。

SD-003 (36) 出土遺物は、36の他に弥生時代中期の壺と甕の底部が3点と、胸部の細片が少量あるのみである。35は古墳時代後期の須恵器の甕の頸部破片である。

SD-005 (37～56) 小破片がほとんどであるが、比較的の出土量が多い。埋土の上層と下層からそれぞれ出土している。

37は複合口縁をもつ壺で、弥生時代後期中ごろに比定できる。38は鋤形口縁の甕、39は「く」字形口縁の屈曲部内面に凸帯状に粘土を貼付する甕。40は直口縁で胸部上半に「M」字形凸帯を巡らす鉢。いずれも弥生時代中期の須恵II式土器である。41・42は古墳時代前期の有田式に分類される土師器の高杯である。これが上層出土の上器の中で、もっとも新しい時期のものである。

下層からは、弥生時代前～中期の土器、古墳時代前期の土師器、そして縄文土器が出土した。43は壺の肩部に2条の沈線をひき、下方に小さな傘形の文様をヘラ焼き施す。48は亀の甲式の甕、49・50は如意形口縁をもつ甕。50は口唇下半に細く浅いキザミを施す。いずれも板付II式に分類される。44・45は口頭部が朝顔形にひらく広口壺で、鋤形口縁につくられる。46は細頸の長頸壺、47は広口壺の一種、51はほぼ水平に鋤形口縁をつくる甕、53は外面を丹塗り研磨した高杯である。須恵II式に比定できる。52、54・55は有田式新段階の甕・高杯・脚台付鉢である。56は縄文土器で、胎土には滑石を多量に含む。縄文時代前～中期のものであろう。比恵遺跡周辺ではもっとも古い資料である。

SD-005 (上層:37~42、下層:43~56)

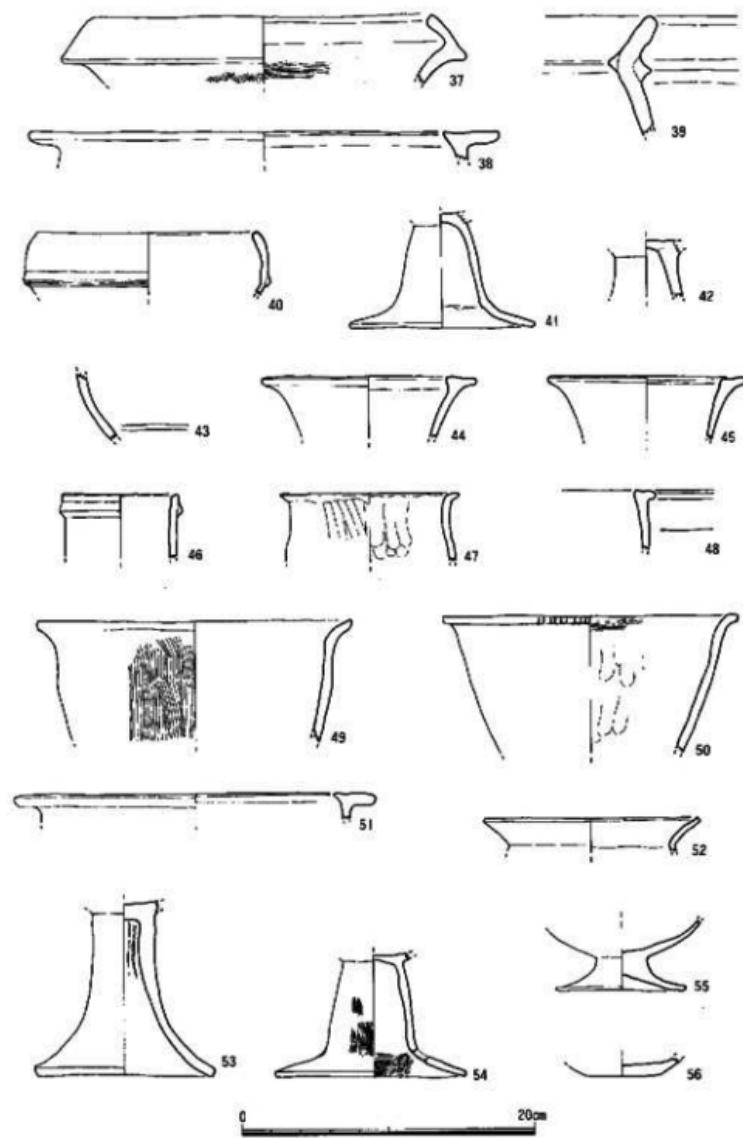
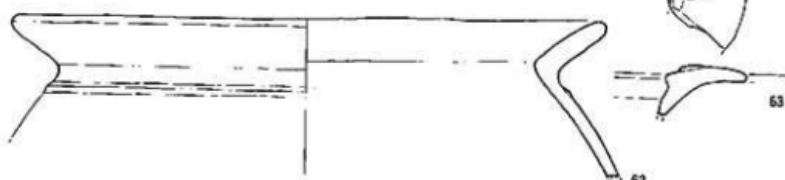
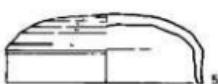
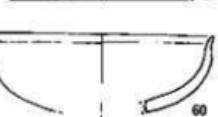
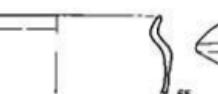
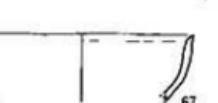


Fig.81 SD-005出土土器実測図(1/4)

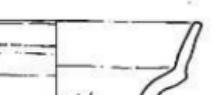
上層 (57~63)



中層 (64~68)



下層 (69~99)



0 20cm

Fig.82 SD-014出土土器実測図1(1/4)

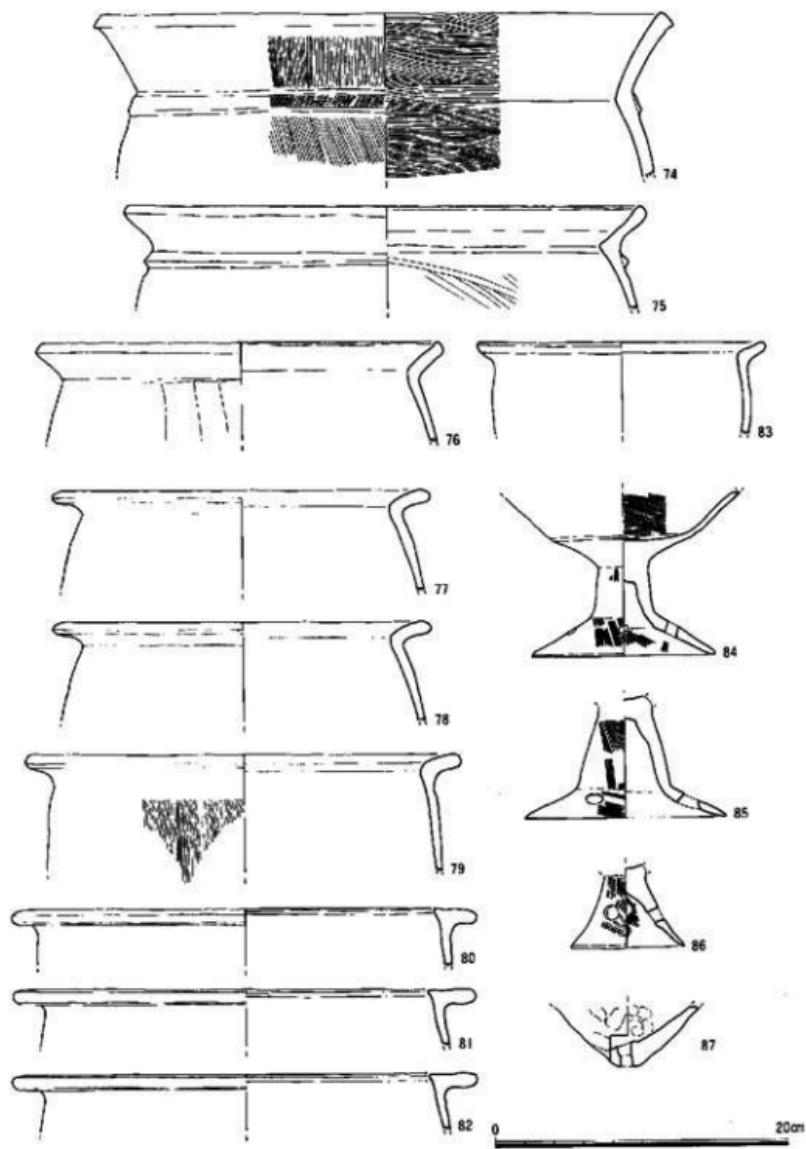


Fig.83 SD-014出土土器実測図2(1/4)

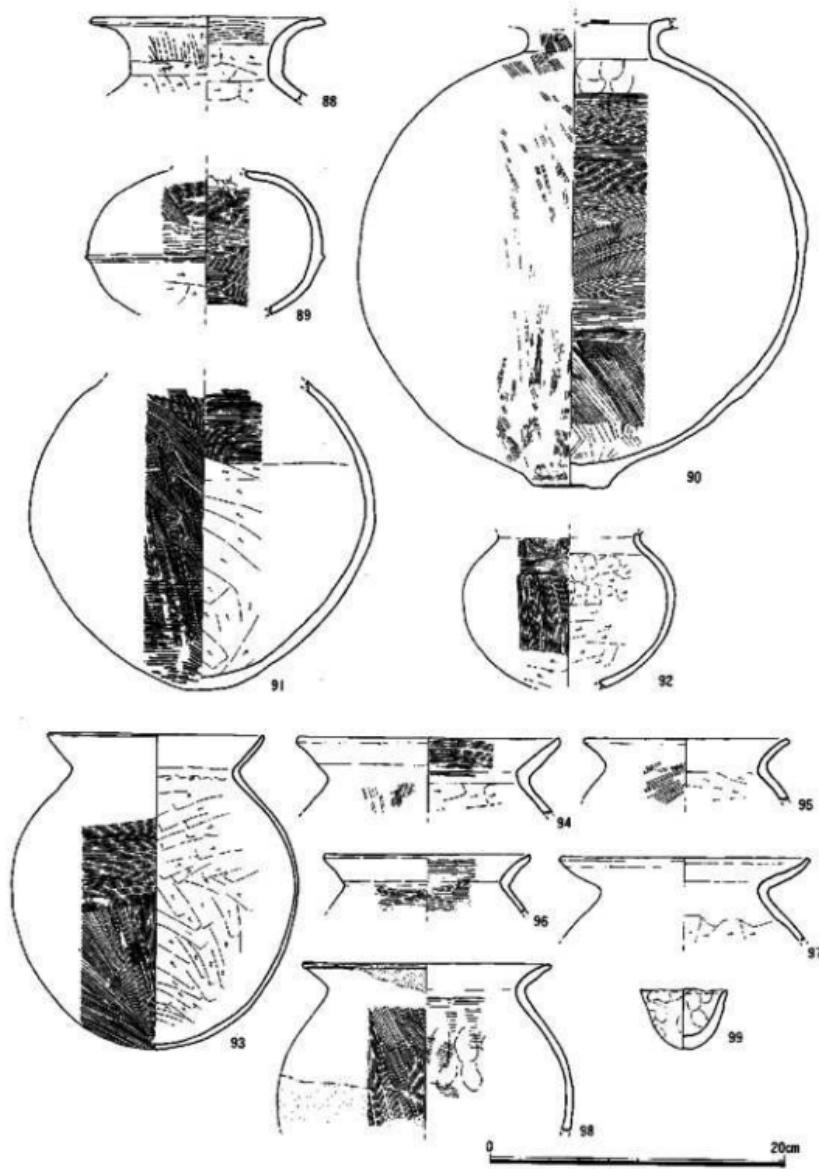


Fig.84 SD-014出土土器実測図3(1/4)

**SD-014 (57~99)** 上層からは須恵器・土師器・弥生土器が出土した。57~59は須恵器で、57は有蓋高杯の蓋、58は杯蓋、59は杯身である。60・61は土師器の鉢で、61は手づくね。ともに前述の須恵器にともなう。古墳時代後期の6世紀中ごろに比定できる。62は「く」字形口縁の中形甕で、63は鋤形口縁の上面に凹形浮文を貼り付けた広口壺である。それぞれ弥生時代後期中ごろ、中期末～後期初のものである。

中層からは土師器・弥生土器が出土したが、上層・下層とくらべ遺物の出土量は少ない。64・67は鉢で、上層出土の60・61と同様に古墳時代後期のものであろうか。66は弥生時代後期中ごろの複合口縁壺、68は古墳時代前期の土師器の高杯である。

下層からは遺物がもっとも多く出土した。古墳時代前期の土師器と弥生土器がある。69・70・90は二重口縁の壺、69・70は緩やかに反転する頸部をもち、69は口縁端部につよい横ナデを行い、内側へ突出させる。90は球形の胴部に短い円筒形の頭部がつく。小さな平底をもつ。84・85は脚部が裾近くで大きくひらく高杯である。胎上には精選粘土を用いる。裾部に84は4ヶ所、85は3ヶ所に焼成前に円孔を穿孔。86は小形器台である。精選粘土を用いられて作られているが、つくり自体は雑である。87は鉢形の瓶で、焼成前に底部に穿孔が施される。88は朝顔形にひらく広口壺の口頭部の破片で、球形の胴部がつくと考えられる。89は偏球形の胴部にラッパ状に開く口頭部がつく長頸壺である。胴部下半に小さな三角形凸帯が巡る。91~98は甕である。口縁部の形状からいくつかに区分できる。93は緩やかに屈曲する「く」字形口縁で、胴部上半には横位のハケメを意識的に施す。内面は口縁部の屈曲部から若干下がったところでヘラケズリ調整を施す。92にも同様な口縁部がつくと考えられる。94・96はほぼ直線的にのびる「く」字形口縁をもつ。胴部内面は94はヘラケズリ、96はハケメ調整である。95・98も「く」字形口縁をもつが、口縁上面が緩やかにふくらむ。97は口縁内面がわずかにくばむ。99は手づくねのミニュチアの鉢である。これらは古墳時代前期の布留式に時間的に並行する有田式～柏田式古段階の範疇で捉えられる。

下層出土の土器の中で、弥生土器は72~83である。72は器台。73は「く」字形口縁をもつ無頸壺である。口縁部には焼成前に2孔1組の円孔を2ヶ所に穿孔する。74~83は甕である。「く」字形口縁をもつ74~79・83、鋤形口縁の80~82の2者がある。74・75は中形甕で、75は口縁屈曲部の内面に粘土を貼り付ける。「く」字形口縁をもつ甕の中で、79、83は胴部の張りがあまり目立たないが、他は胴部最大径が口徑と同じか、もしくは若干うわまわる。口縁部の屈曲の度合いをあわせ、時間的な差を示している。鋤形口縁をもつ甕には、口縁が外側に垂れる80と、ほぼ水平に鋤形口縁をつくる81・82がある。後者は前者より時間的に先行する。これらはいずれも弥生時代中期後葉～後期初に分類できるものである。

#### 出土石器 (Fig.85)

1~5はSD-005、6・7はSD-014から出土した。

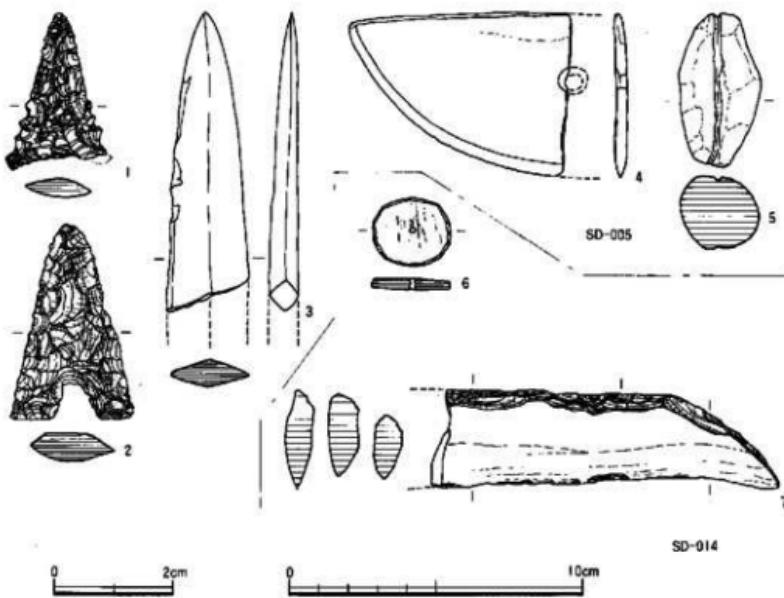


Fig.85 遺構出土石器実測図(1/1、1/2)

### 3 小結

今回の調査では建物基礎による搅乱で遺構の遺存状態は良くなかったが、河川跡、溝、土坑、貯蔵穴等を検出した。貯蔵穴については前章で触れたので、河川跡について述べていく。

河川跡は調査区南側で検出した。今回の調査では北側の岸は検出できたが、南側の広がりは不明である。本調査地点の東側50mで行われた試掘調査では地山の鳥栖ロームは検出できず、河川がまだ南側に広がると考えられる。南東約50mで行われた第12次調査ではこの河川跡は検出されていない。本調査地点で検出した貯蔵穴や溝など分布状態や他の遺構との切り合い関係などをみると、この河川跡は第31次調査地点と第12次調査地点の間の約50mの幅の中で流路を変えながら流れていたと考えられる。ところで、この河川跡の流路であるが、周辺の試掘調査では北東約40m先で折れて、北西方向に流路を変えることが確認されている。また、本踏査地点の北西80mで行われた試掘調査ではこの河川跡の北岸と考えられる落ちが検出されており、この河川は台地を横切って流れている可能性がある。つまり、この河川によって台地の北側は南北に分断され、第29次調査地点のFig.11に示した様な旧地形が想定される。

## 第6章 第32次調査地点

### 1 調査の経過と方法

#### 1) 調査・報告書作成までの経過

本調査は共同住宅建設に伴う事前調査である。平成2年、大島スガ子さんより埋蔵文化財事前審査願が提出され、同年7月26日に試掘調査を行なった。試掘により遺跡を確認し、その後、施工主のダイア建設株式会社と連絡、協議を重ね、発掘調査を同年9月25日から11月13日にかけて実施した。調査終了後、遺物、記録類の整理を行い、今年度の報告書刊行に至った。

こうした調査、報告書作成にあたっては、ダイア建設株式会社の方々の御理解と御協力を承り、順調に進行できた。記して感謝いたします。

#### 2) 調査・記録の方法

本調査地点は埋没谷に位置する。従って、調査の主旨を埋没の状況とその時期、旧地形、古環境の復元においていた。

先ず、バックホーにより、客土下、後述の第3層までの剥ぎ取りを行なった。しかし、狭い調査区の範囲で廃土置場の確保を行なった為に、この表土剥ぎ作業は3回に分割する打って返しの方法を取った。調査区南側を先行し、次に北側、最後に中央部という手順である。尚、北側道路から3.5mの範囲とユニットハウスを設置した場所については、表土剥ぎが困難であった為に調査は断念した。

表土剥ぎ後、2mグリッドを設定し、人為的発掘作業にかかった。グリッドは外周から1.5mの引けを取った調査区内に2mメッシュを組み設定した。その呼称は南隅より順次、番号で示した。その位置と第25次調査グリッドとの対応関係はFig.88の通りである。

発掘は堆積土の層位に従って掘り進むことを念頭においていたが、平面的に識別することは困難を窮め、概ね20cm位の人為的な分層で遺物を区別していく。

### 2 調査の記録

#### 1) 基本層序

第25次調査地点と概ね同様で、報告が重複するので簡単に記す。

1層は砂土の客土で、中世の青磁片、土師皿が混入する。

2層は旧水田土壤である。褐色ないし還元した青灰色を呈し、下部に酸化鉄の集積層(床土)がみられる。

3層は褐色系の土層で、第25次調査地点(以下、第25次と略す)の6層に該当する。地形の傾斜がみられる調査区南東隅で層厚をまし、大半は層厚35cmの水平堆積である。酸化鉄の沈下

が多くみられ、下部は暗い色調を呈す。遺物は弥生土器小片が、若干出土した程度である。第25次では近代まで含み、水田開田の際の整地層と考えられている。

4層は灰色から黒灰色の粘土である。第25次の7、8層に該当する。

4-1層は灰色粘土で鐵化鉄の斑紋を多くみる。バックホーにより、この層まで剥ぎ取りを行なった。地形が高い調査区南東隅では堆積せず、北側では褐色化した3層と4層の漸移層に変わり、3層との層界が不明瞭となる。

4-2~5・11層は暗灰色ないし灰黑色粘土である。調査区南側ではこの層から、人为で掘り下げたが、北側では4-2層下面(4-11層上面)までバックホーで剥ぎ取りを行なった。

4-2層は下層の八女粘土を含む暗灰色粘土である。4-3層は暗灰色~灰黑色粘土で調査区南東隅にかぎり植物遺体が多く黒味が強い土色を呈す。従って判別が困難であったがこの範囲で分層ができ大半は4-2層と同じと思われる。4-11層は調査区北側の、4-2層下に堆積する黒色粘土である。上面の層界は起伏が大きく、下面是なだらかなラインが引ける。土色は下層の4-5層に比べ明るく褐色味を帯びるが、土質は4-5層に近い。流木等を多く含む。

4-5層は黒味の強い灰黑色粘土である。第25次の8層に該当する。周辺のビル建設による

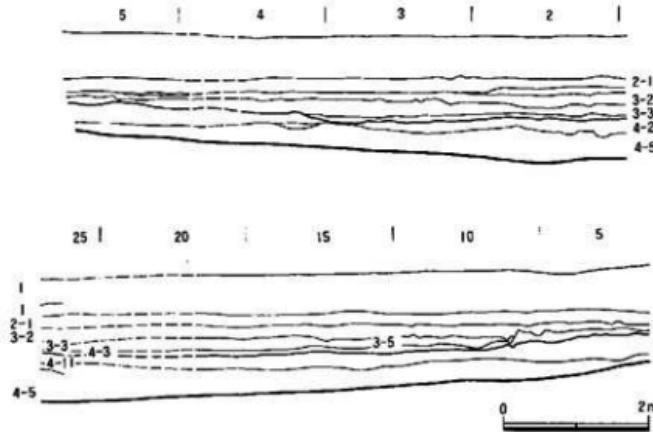


Fig.86 調査区南壁・東壁土層断面図(1/40)

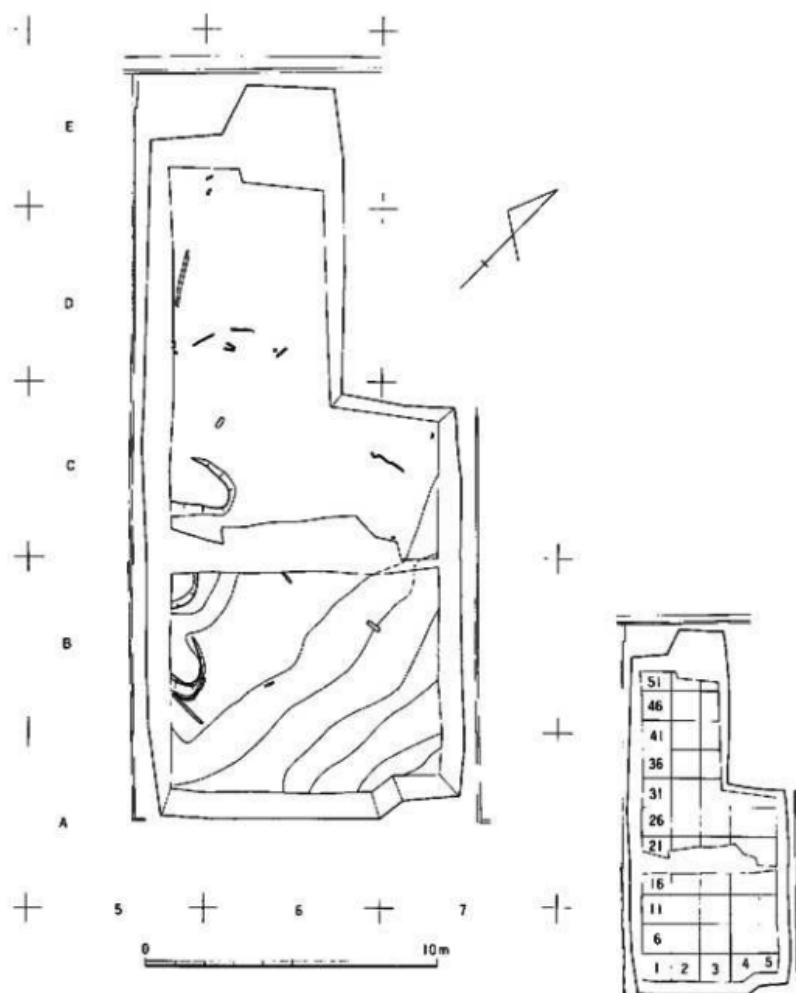


Fig.87 第32次調査地点全体図(1/200)、グリッド配置図(1/400)

地下水吸い上げの為か、粘りがなくバサバサした感じである。流水、葉など未分解の有機物を多く含む。

5層は地山の八女粘土である。上部は汚染され褐色がかる。

### 2) 旧地形

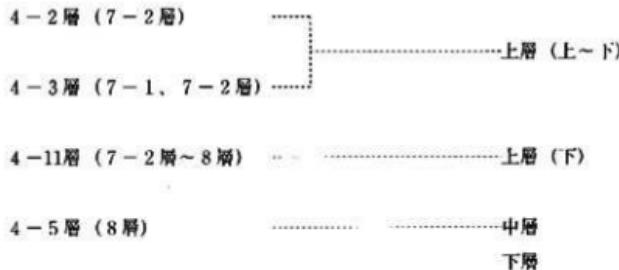
調査地点は先述のとおり、台地に占める比恵遺跡の北縁に位置した開析谷中にあたる。周辺の第24次、第25次調査成果を加え、谷の形状が明らかになった。先の2調査地点で台地落ちした開析谷は南がわに抉り入るような形状をぬす。従って本調査地点の地山の八女粘土は南東側から下降してくる。

### 3) 遺物の出土状況

台地落ちぎわに位置した第24次、第25次調査に比べ、谷底付近の当地点では全般的に遺物出土量は少なくなる。ただし、台地から近い調査地点の南東側では比較的、遺物が多い。他の出土量に変化があり見られず、総量にしてコンテナ16箱であった。期待された木器も先の2調査地点に比べ、極端に少ない。

遺物の取り上げ方については、1-2)で述べたが、ここでは土層との対応関係について重複する部分もあるがまとめて記す。

3層まではバックホーにより除去した。以下、層位に従い発掘することに努めたが、その判別が困難であった為、機械的に約20cmで振り下げる。従って遺物取り上げ時の記載と土層との対応は概ね以下に示すとおりである。



( ) 内は第25次調査の土層表記である

台地落ちぎわに近く、堆積土が薄い南東隅の3~5区では誤って4-5層を上層中に入れたので考察時に修正した。また、調査区北半部では調査期間の都合上、4-2層までバックホーで除去した。

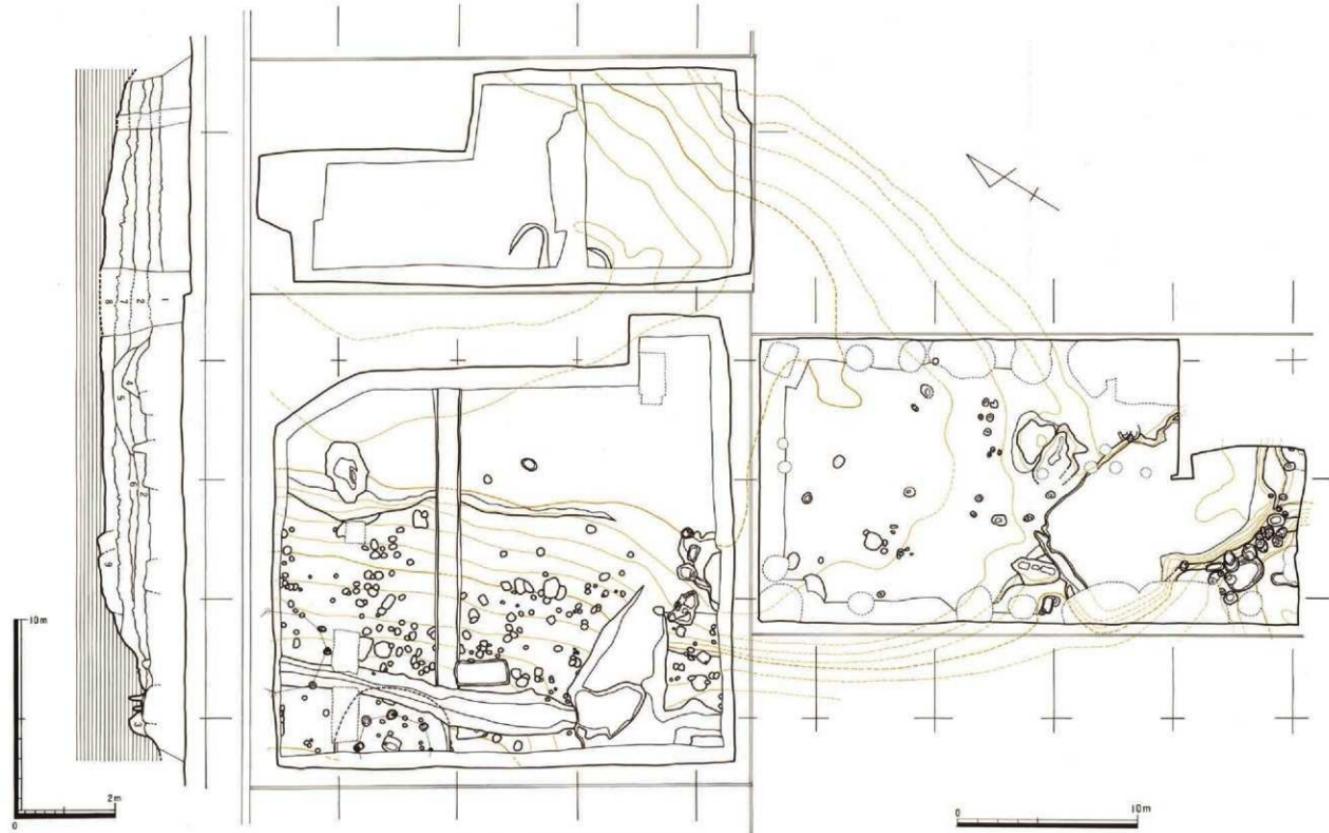


Fig.88 第24、25、32次調査地点遺構配置図(1/200)

#### 4) 出土遺物

人为で掘り下げる埋没谷中に包含層出土遺物を地点、層位に従って記述していく。

##### 1～20区、上層 (Fig.89, 1～19)

南東隅から落ちてくる台地に近い範囲であるために、堆積層も傾斜していく。この為に、遺物を取り上げた層位に誤認が生じている可能性がある。1～6は黒灰粘土(4～5層)上の4～2層ないし4～3層上部から出土した土器と判断され、他は下層の4～5層上部までのものを含む。

1、2は調査区南東隅の4～3層上部から出土した。1の口縁は折り曲げ貼りつけて鋤先状を呈す。端部に刻みが入る。2も貼りつけて鋤状の口縁を作る。色は明赤褐色を呈す。3はくの字口縁を呈し、後期前半代の範囲にはいる。この層位の上限を示す。4の逆し字状口縁は長くのび、垂れ下がりぎみである。胴部に断面三角形の穴帯を貼付する。中期初頭に比定されるが、新相を呈するものか。5は口縁断面が三角形に近く胴部の張りが小さい。中期初頭と思われる。6の底部は器厚が一定で、わずかに上げ底である。色は褐色～赤褐色を呈す。中期中葉以降であろう。

7の口縁は段を有して肥厚し、直立に近い立ち上がりである。内面にわずかなハケ目が残る。8は7区の4～5層上部までの層位から出土した。口縁部は内側に若干の張り出しがみられる。頸部は直立に近い立ち上がりで、外面に細い3本の沈線を施す。9の口縁断面は方形を呈し、外面端部は平坦面を呈す。10の口縁部は直口で、断面三角形の端部と下位の三角突唇に小さい楕円形の刻みを浅く施す。11～15は須次式の口縁部である。11、13は口縁が外側にのび、胴部が張る新相を呈す。16の如意口縁は端部にかけて器厚を減じ、刻みを施す。弥生前期末か。17は上げ底ぎみの底部で、胴部から器厚を増していく。18、19の上げ底は外側への張り出しが弱く、中期初頭に比定される。

以上、調査区南東隅から出土した1～3、6が新しいものの、全般的に中期初頭までの土器が主体を占める。このことは4～3層上部、4～2層が第25次調査の7～1層に比定され、その堆積の上限が後期前半まで降ることと符合する。さらに、他の土器が出土した4～5層上部までの層位は第25次の7～2層に当たり、その時期も概ね同じである。

##### 1～20区、下層 (Fig.90, 91, 20～39)

4～5層の下面から約20cm上までの層位から出土した土器である。

20は内傾して立ち上がり口縁部で大きく外反する。口縁端部にかけて器厚を減じる。21は内傾して立ち上がり、口縁端部近くで直立する。器厚は一定で端部は平坦面を呈す。外口縁と内面はナデ調整で横ハケ目がわずかに残る。外面胴部にかけてはミガキを施す。口縁近くに径6mmの穿孔が2箇所遺存する。22の环部は粘土帯を貼りつけた複合口縁を呈す。外側に張りだした上段の端部はM字状で凹内にハケ目が残る。下段の端部には細かい刻みが施される。胎土は

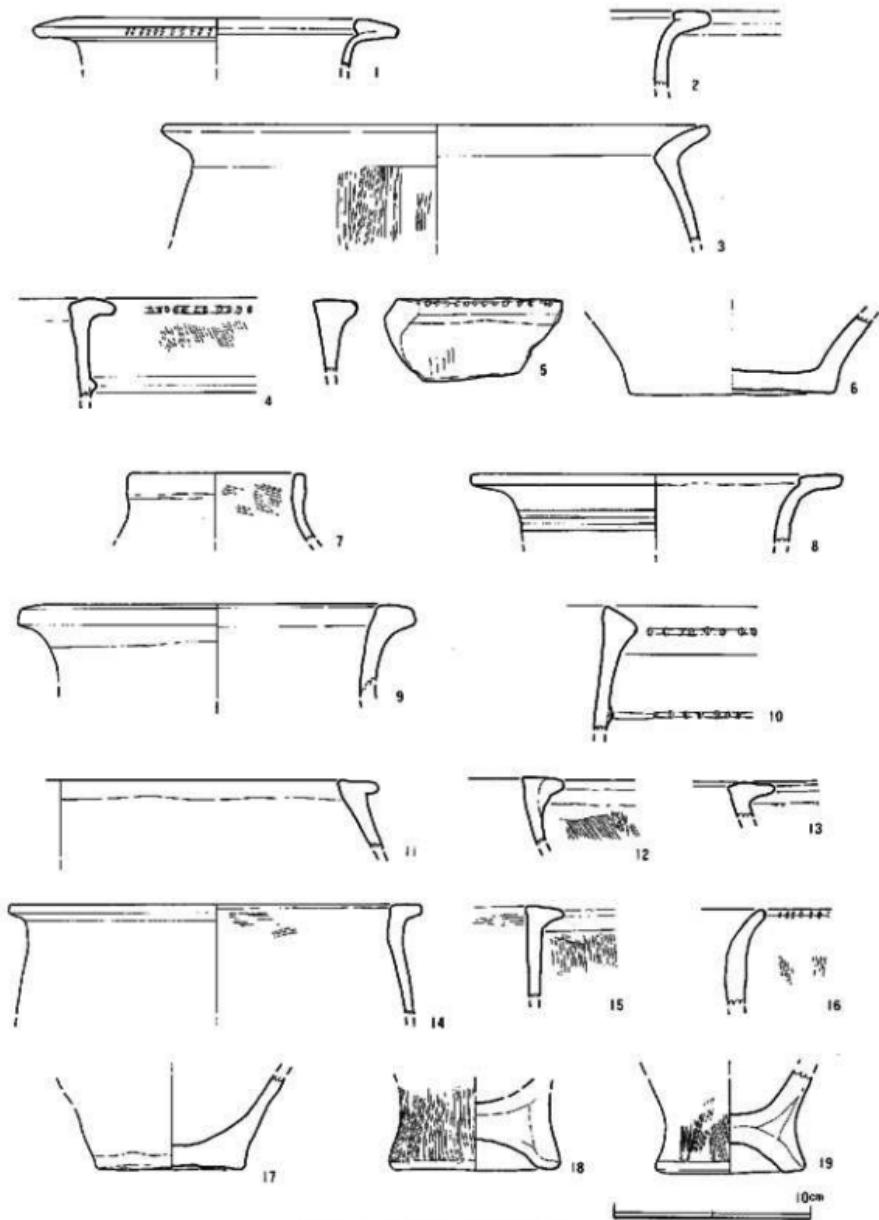


Fig.89 1~20区上层·中层遗物(1/3)

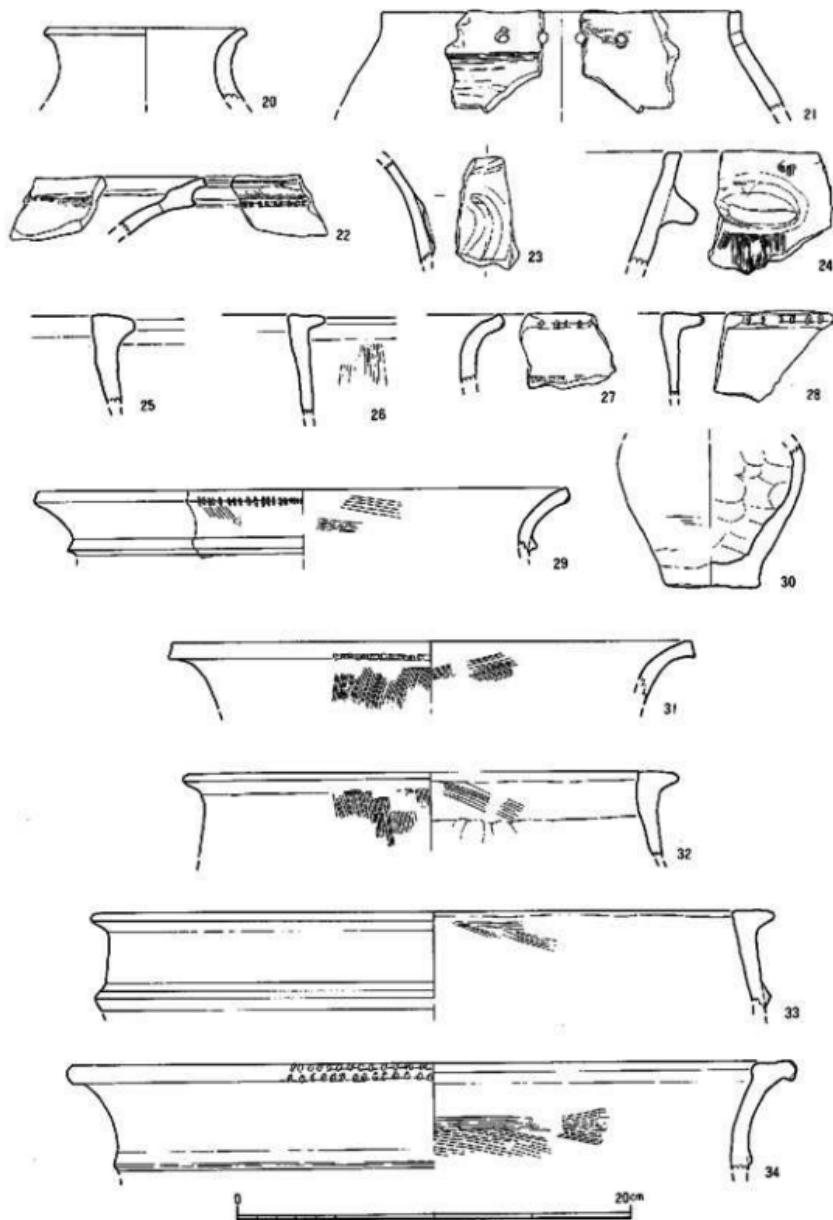


Fig.90 1~20区下層出土遺物I(1/3)

極めて精良である。23は壺の肩部で、ノの字突帯が張り付けられている。24は直口の鉢で、口縁下の円盤状の把手を貼りつける。30は前期末の小壺である。25～34の壺、壺は須玖1式の古段階までにおさまるものである。25の口縁端部は外側に短く張り出し、平坦である。27は前期末の如意口縁で端部下位に刻みを施す。26、28の口縁は比較的長く外側に張りだすが、肩部の張りはなく他と時期差はないものと考える。29、31は外反していく口縁下に三角形突帯を貼りつける。32、33は断面三角形に近い口縁を為し、肩部は外側にわずかに張る。34の口縁端部には2列に刻みが施される。内面の横ハケ目は一部を残すのみでナデ消される。胎土に焼粉を含む。35～39は前期末から中期初頭にかけてのものと考えられる。35の底部は厚く、外側にわずかに張り出す。36は比較的薄く、外側への張りだしが強い。板付II式まで遡る。37は中期初頭でも古い段階か。38は少し上げ底で、外面の最下位に横ハケを施している。

#### 21～53区、中～下層 (Fig.92, 40～51)

谷の下底部で土層が水平堆積した範囲である。この範囲は遺物の少ない4～2層までバックホーで除去したので上層の土器は記せない。同示した中層、下層は最下層の4～5層を区別したものである。40、44、45は中層、他は下層出土である。

40の壺口縁は肥厚し、外側に短く張りだす。頸部への傾斜も緩やかである。41、42は金海式の壺棺である。口縁部は上に貼りつけて肥厚させ、端部に2列の刻みを施す。頸部にかけての傾斜は急である。43は器厚が薄い直口縁である。端部下に台形に近い刻み突帯を貼りつける。44の如意状口縁はその端部下位と三角突帯に刻みを施す。肩部はやや張る。45は小壺の底部である。底部は若干、上げ底で厚くなる。46の如意状口縁は端部近くで弱い彎曲をもち外反する。端部下位に細かい刻みを施す。47の壺口縁は大きく外反し、その端部は平坦面を為す。内面に粗いハケ目をわずかに残す。48は断面三角形の壺口縁で、肩部にかけては直に近い傾斜である。49は口縁部が比較的、外にのび、端部は平坦に近い。肩部は直に近い立ち上がりで、口縁下に

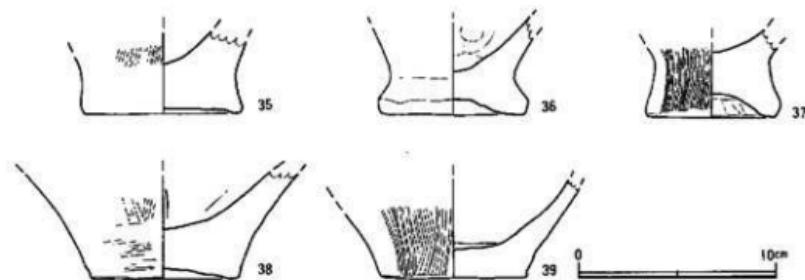


Fig.91 1～20区下層出土遺物2(1/3)

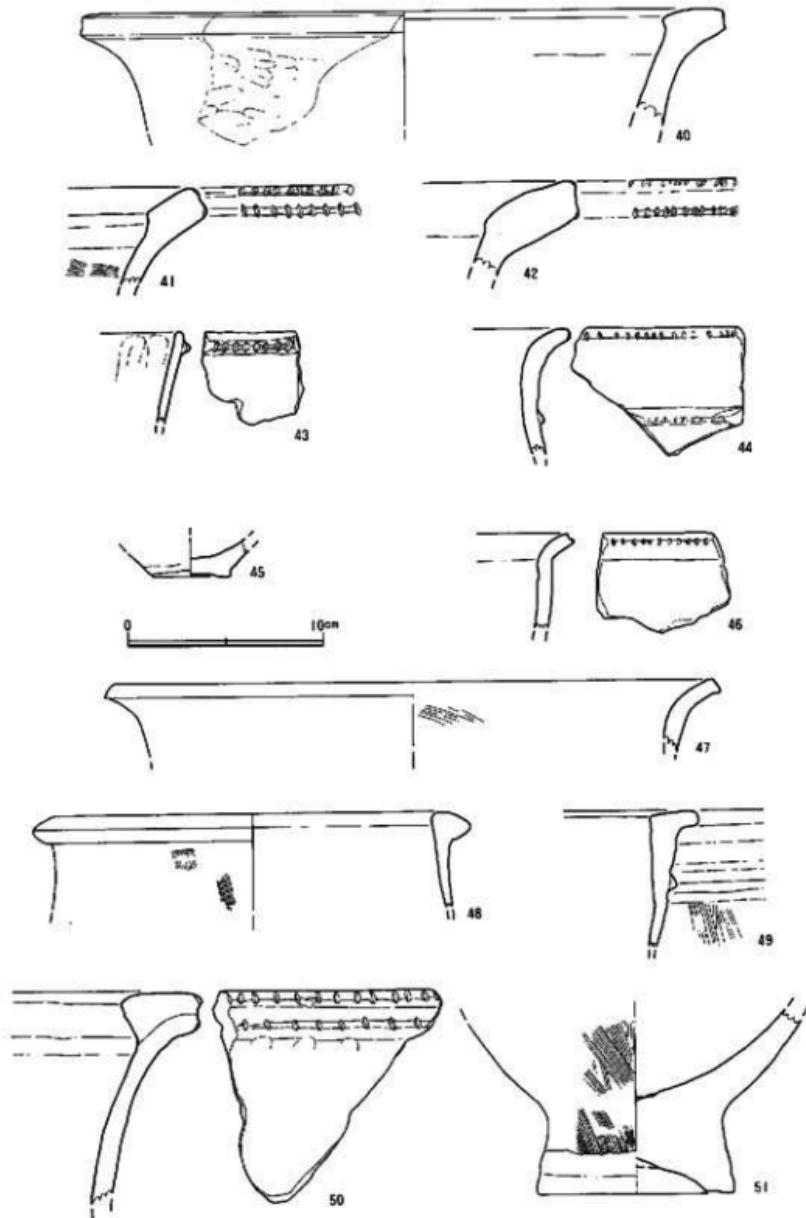


Fig.92 21~53中層・下層出土遺物(1/3)

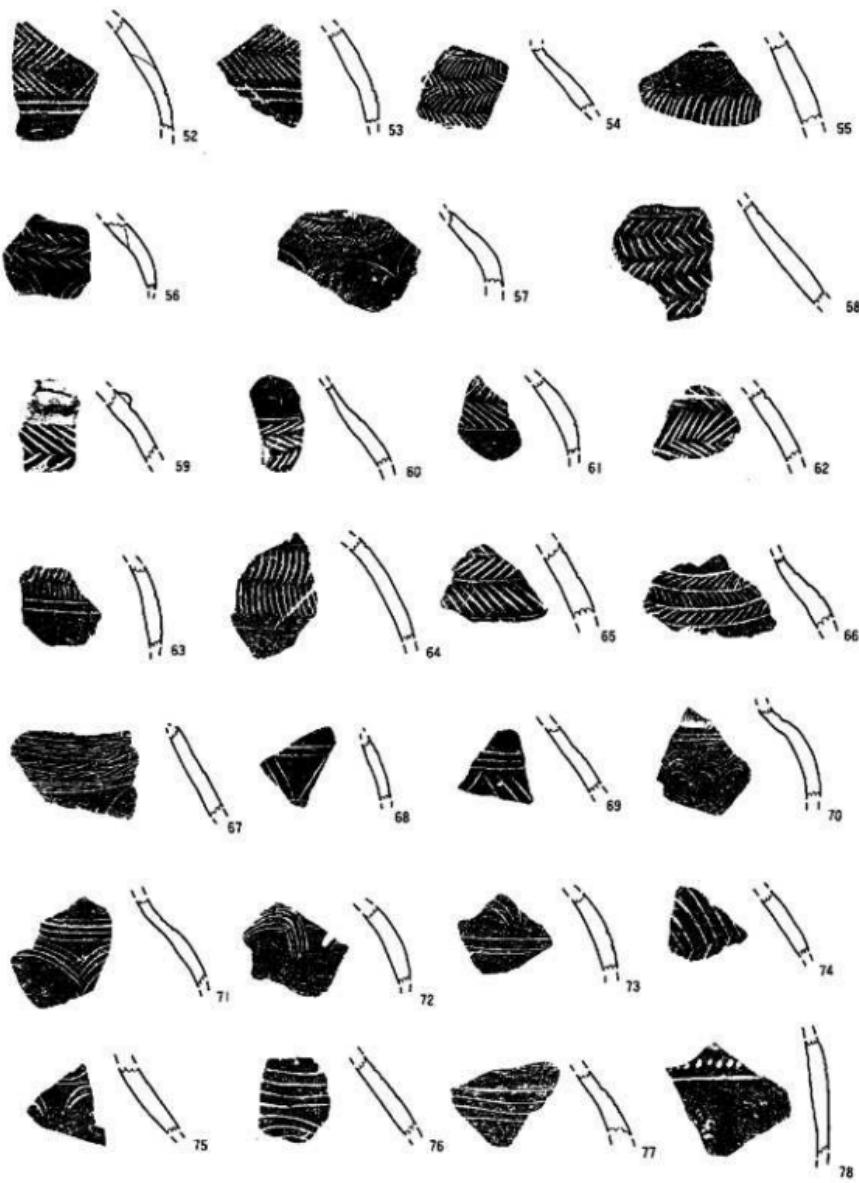


Fig.93 包含着出土施文土器(1/3)

三角突帯を貼りつける。50は金海式の新相にあたる妻棺である。口縁の内側が張り出し、剣部にかけては立ちぎみである。胎土に焼粉を混じる。51の妻底部はやや外側に外反し、厚い。外面に細かいハケ目が残る。

#### 施文土器 (Fig.93, 52~78)

この項では、包含層から出土した壺胴部に施文を有する土器を一括して記す。

52~56は貝殻腹縁で羽状文を施文する。単線、平行線で区画され、56は重弧文が下位に施される。57~64はヘラ描きの羽状文で、63は立ちぎみの羽状文を2条の平行線でその下位を区画する。65、66は平行線と羽状文を組み合わせた有軸羽状文を施す。67は羽状文は横位に張り出し、下位に弧線がわずかに認められる。68、69は横位の平行線と斜線を組み合わせる。70~76は重弧文を施す。70は頸部と胴部の境に3条の平行線を施し、その下に細いヘラ描きで4条の重弧文を施す。77は頸部との境近くに施した平行線、78は剣突列点文である。

#### 出土木器 (Fig.94, 79~)

本調査区は、前述したように比恵跡群の北端部に位置している。谷部にあたり、第24~26次調査地と同様の土層堆積状態がみられ、茶褐色粘質土層下位から下層の黒色粘質土層まで土器とともに多量の植物遺物が出土した。木製遺物は自然流木が多く、人為的加工がみられたので30点前後で、杭・削り屑・枝落し程度の加工があるものを除き、17点を図化し紹介しておく。

出土層位は79~83が9区の下層を中心とし84が8区の上層、87は13区下層、93が12区の中層、94が3区下層、他は調査区北よりの中央部の下層から出土した。従って層位的には84が上層からの出土、79~83も傾斜面の為、他より上層の可能性をもつものがあると考えられる。

出土木器は、武具・農具・容器・その他の木器がある。武器として、木鎌 (79・83)・矢柄 (80~82)・弓 (89) がある。79はタイミンタチバナ?の芯持ち材を用い、細かい丁寧な削り加工後器面を磨き2ヶ所に桜皮を巻いており、基部に桜皮を巻いた痕跡がみられる。矢柄の可能性もある。器長6.95cm+α。83はイスノキの極目取り材を用い、丁寧な削り加工で整形し、器面を磨いている。80~82は軟質の芯持ち材を用い、表皮を剥ぎ、削り加工後器面を磨いている。80は鐵組合せ部で先端部に組合せ孔が削込まれ、桜皮を巻いている。81は先端破損部付近に桜皮を巻き、器面には墨漆が塗布されている(本書P.175参照)。89は半裁材を用い、内側には細い削り加工痕がみられ、端部に弓蔓繩縛用の切り込みがみられる。器長117.05cm(推定160cm前後)、最大幅3.3cm、最大厚2.8cm。

農具として、鐵類 (84~86) がある。いずれもカシの極目取り材を用いている。84は方形柄孔をもつ三叉歫の柄孔部から端刃の部分で、刃部横断面は五角形を呈している。86は丸柄孔をもっており、刃の可能性もある。

容器類として、容器 (87) と栓? (88) がある。87は丁寧な削り加工後、器面を磨き黒漆を塗布している。外面の状況から高环とも考えられる(P.175参照)。88は削材を用い、削り加工を

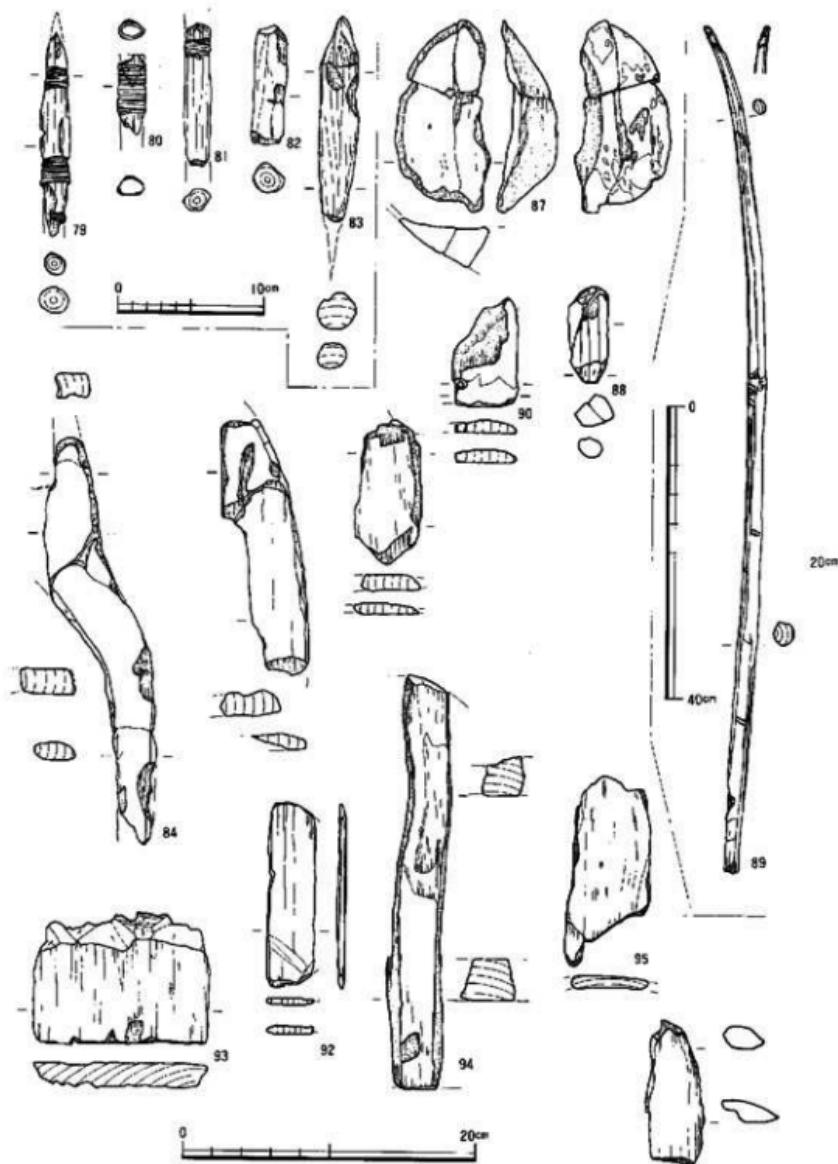


Fig. 94 包含層出土木器 (1/3)

加え片方端部は杭状に、他方は凸レンズ状をなしており樽の栓か。器長6.5cm。

その他の木製品には、板材と削材がある。90・92はスギの板目取り材を用い、90は小孔がある有孔板材。92は両端が薄く、ハケ目調整工具の可能性がある。93はスギのナメ取り材を用いた板材で加工屑か。94はスギの板目取り材を用いた厚手の板材。91は板目取り材を用いた板材。95は削材である。

以上の出土木器のうち、81の矢柄は墨漆を使用しており、84は方形柄孔をもつ三叉鉛である。この2点は弥生時代中期後半のものと考えられる。87は漆膜の分析の結果から弥生時代前期から弥生時代中期後半に至る過渡期的な様相をもつてゐるといえよう。本調査区出土の木器は、弥生時代中期前半から中期後半（中葉か）にかけてのものといえよう。

#### 銅鏡 (Fig. 95, 96)

調査区中央部の37区から出土した。層位は地山のロームより7cm位上の4-5層下部（下層）にあたり、流木と混在していた。

全長3.7cm、鏡身長2.2cm、最大幅1.1cmを測る。鏡身の断面形はやや重みのある扁平な菱形を呈す。逆刺は鈍角で茎に移行し、茎の断面形は弱い稜のある径約2mmの球形に近い。茎には桜皮と思われる木質が輪状に遺存している。

#### 石器 (Fig. 96, 97~99)

包含層からは、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石庖「（擦り切りが残る板石など）の未製品を含む石器が出土したが、図化できた3点のみ記し、他は削材する。

97は、流理のある頁岩を素材とした二等辺三角形の磨製石鏡である。先端部を少し欠くが、残存長4.0cm、最大幅2.3cm、最大厚0.3cmを測る。両面には製作時の研磨痕が残り、中央部は縦方向もしくは斜め方向、刃部付近は横方向に磨かれている。刃部は更に日の細かい研磨で丁寧に研磨され、研磨痕は観察されない。基部は宿まず直線的に仕上げられ、やや薄くなっている。色調は風化して灰色を呈するが破断面は緑色味を帯びており、本来は緑がかった色調を呈していたものと推察される。46区中層から出土している。

98は、縦長剥片を素材として製作された打製の剥片鏡である。やや大形で、表面には上下からの大きな剥離面、裏面には主要剥離面を残す。周縁の加工は粗雑で細かな剥離が散見されるに過ぎない。基部の剥り込みは両面からの細かな調整剥離によって丁寧に仕上げられている。腰岳産の良質な黒曜石製で、先端部を欠く。残存長2.3cm、最大幅2.7cm、最大厚0.3cmを測る。38区中央から出土している。

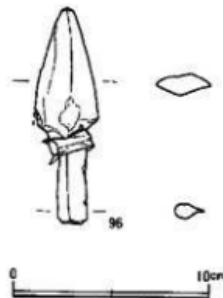


Fig. 95 包含層出土銅鏡(I/I)

99はいわゆる今山産とみなされる玄武岩質の太形蛤刀石斧である。全体に敲打によって整形され、断面からも窺えるように端正な作りになっている。刃部は使用によって潰れ、多くの剥離痕がみられる。基部は折損しており全形は分らない。折損面にはフィッシャーが中心部から放射状に広がっており、横からの加擊ではなく、上下の強い加圧によって折れたものと考えられる。残存長7.7cm、残存幅7.2cm、最大厚4.3cmである。25区東壁面4—5層下位から出土。

100は、石製紡錘車である。全径3.9cm、孔径0.6cm、最大厚0.6cm、重さ16gである。濃緑灰色の緑泥片岩製で、両面は平滑に磨かれ研磨痕が残らない。周縁には面取り加工が施され、上端は明確に、下端はかるく行われている。また、上面には細かい条線のキズが観察される。中心孔は中央部がやや小さくなり両面穿孔と考えられる。33区中層から出土。

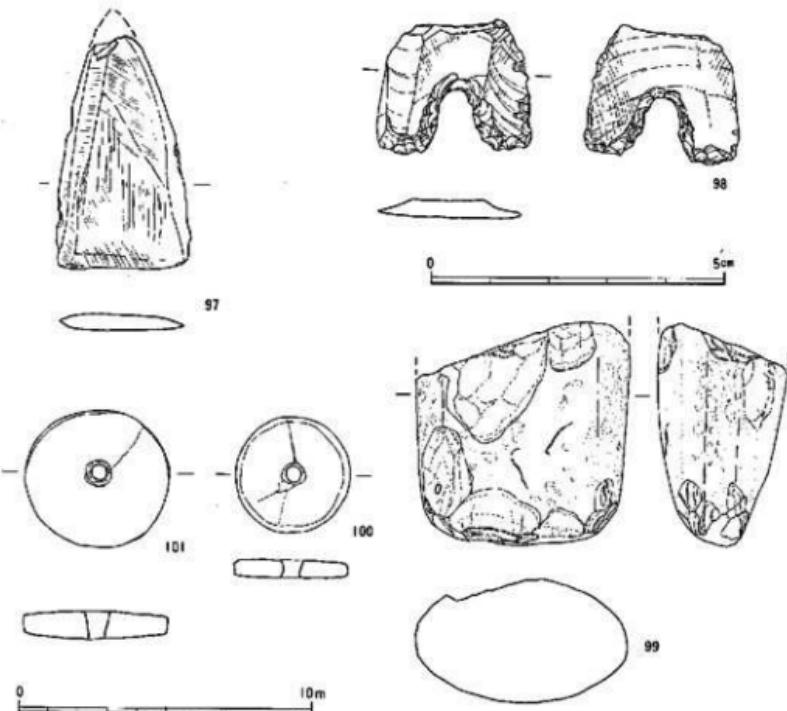


Fig.96 包含層出土石器(1/1, 1/2)

101は比較的大型の紡錘車で、径4.7cm、孔径0.6cm、最大厚0.9cmを測る。石材は片岩製で平滑に仕上げられている。周縁の面取りは明瞭である。孔は中心からややずれた位置に片面から穿孔されていると考えられる。32区の中層から出土。

土製品 (Fig. 97, 102~112)

102~109は投弾である。全長2.3cm~4.7cmまでバラエティがある。色調は灰褐色~赤褐色を呈す。器面はなめらかに仕上げられ、成形時の痕跡は認めにくい。110、111の紡錘車はともに径4.0cm、厚さ1.3cmを測る。孔径は110が $0.6\text{cm}$ 、111が $0.8\text{cm}$ を測る。色調は褐色を呈す。112は上部の周縁を打ち欠き、なめらかな円形に仕上げたものである。25次調査からも比較的、多く出土している。用途不明。

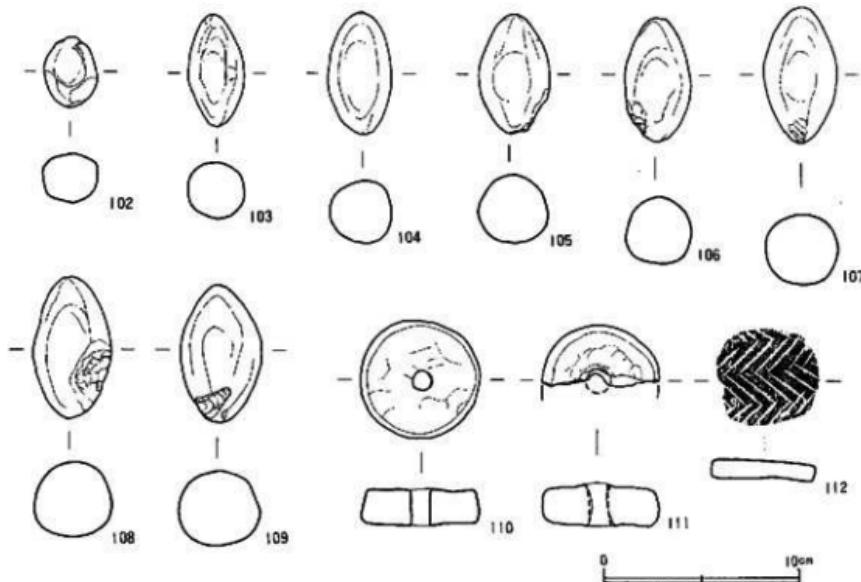


Fig.97 包含層出土土製品(1/2)

### 3 小結

本調査地点は第24次、第25次調査の隣接地であり、その埋没谷の調査成果とほぼ結果は変わらないが若干の考察を加えておく。

#### 1) 包含層の時期について

調査の記録の項で第25次調査と対応させて記したように、その包含層（埋没谷中堆積層）の時期はほとんど変わらない。上層（4-2層、4-3層）までの上限は概ね弥生後期前半までである。しかし、下層（4-5層下部）は中期初頭（田崎氏の須玖I式の古段階と考える）までの遺物を含み、第25次調査、第8層にみられた板付II式まで遡る層位は確認できなかった。4-5層も搅拌を受けかなり下位のほうまで新しいものを含むと考えられる。

#### 2) 銅鏡について

比恵遺跡の出土例として6例目になる。出土層位は4-5層下部で弥生中期初頭の所産である可能性が高い。上記のような状況でも中期を降ることはないと考えられる。すれば、銅鏡の出土例の中でも極めて古い部類に属する。



## 第7章 第34次調査地点

### 1 調査の概要

本調査地点は比恵遺跡群の北西端部に位置し、南西200mに第3次・8次調査地点がある。比恵遺跡群の中でも調査例の少ない地点である。調査前の試掘調査では、北側に傾斜していく台地の落ち際が確認された。その結果に基づき、調査は台地上の遺構と台地の落ち際の確認を主目的に行われた。

発掘調査は、工事予定地の南半分約80m<sup>2</sup>について行い、北側は残土置き場とした。調査はまず、約100cmの表土を除去した後に開始した。約100cmの造成土、旧耕作土を除去すると、鳥柄ローム層を基盤とする遺構を検出した。標高4.0m～4.8mである。

遺構は弥生時代中期の溝1条、土坑1基、近世以降の溝2条を検出した。また、北側に緩やかに傾斜していく台地の落ち際に弥生時代前期から中期後半の包含層を確認した。

### 2 調査の記録

#### 1) 溝 (SD)

今回の調査では3条の溝を検出した。そのうち、SD-002、004は旧耕作土の直下から掘りこまれており、近世以降の水田の水路と考えられる。SD-001は北側の包含層の上面から掘りこまれている。

SD-001

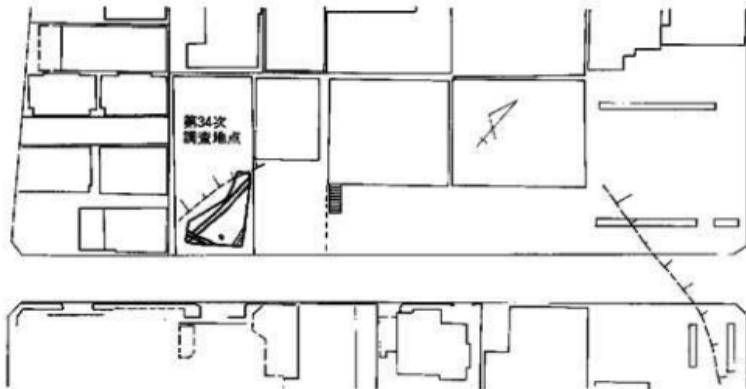


Fig.98 第34次調査地点周辺測量図(1/1000)

調査区北側に位置し、古地の落ち際に沿って、N-5°-Wで南北方面に延びる。溝の底面は南から北へ傾斜する。断面形は逆台形を呈し、幅100cm、深さ10~20cmを測る。遺物は埋土から弥生器、磨製石剣、木製品等が出土した。

出土遺物からこの溝は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### 出土遺物

SD-001は前期後半~中期前半の包含層を切り込んでいるため、その時期の遺物がかなり混在

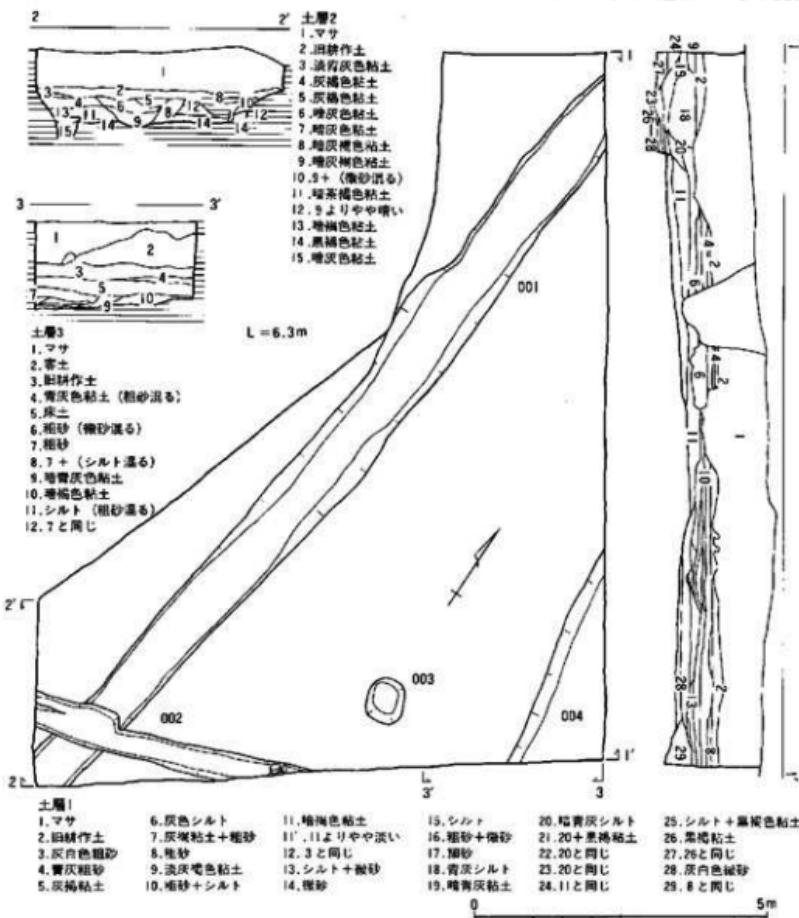


Fig.99 第34次調査地点遺構分布図及び土層断面図(1/100)

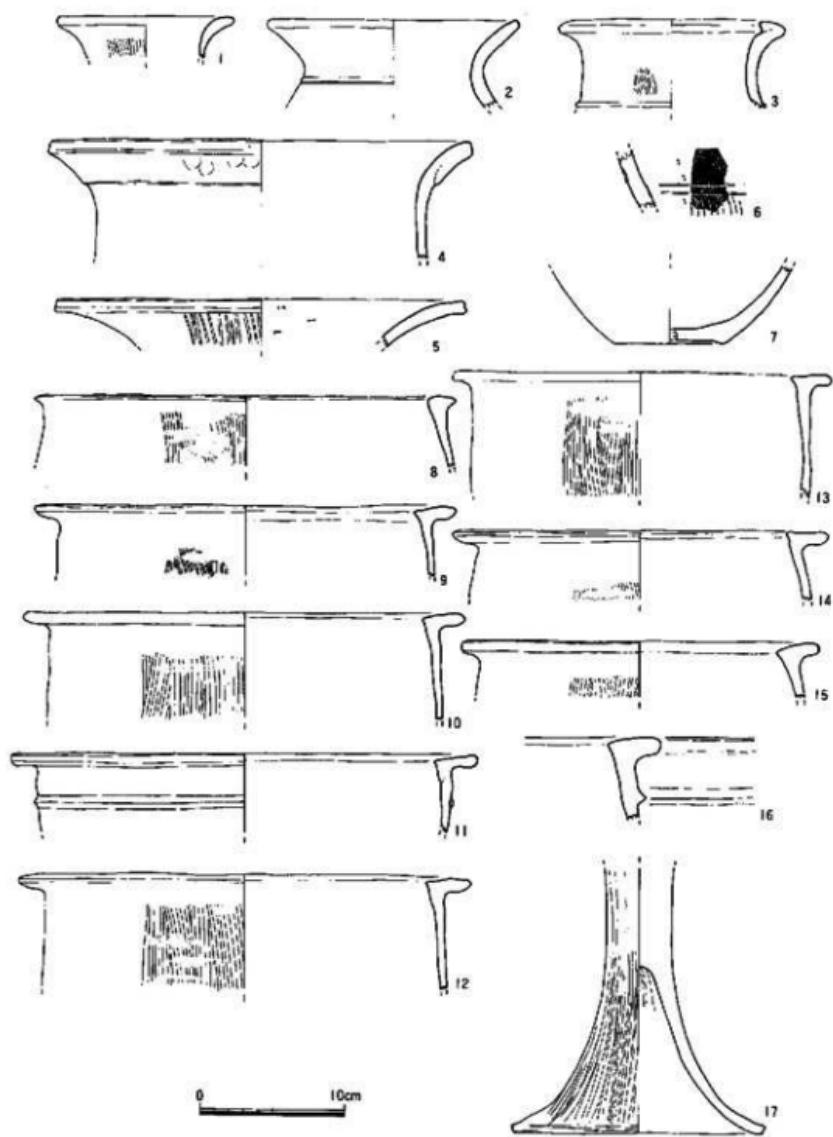


Fig.100 SD-001出土土器実測図(1/4)

している。1～5は壺である。1は口縁は緩やかに外反する。2は頸部に2条のヘラ描き沈線を施す。3は口縁内面に粘土紐を貼り付けて肥厚させる。頸部と体部の境には突帯を施す。4は大型壺で、口縁外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させる。5は肩部で、2条の沈線と貝殻施文を施す。6は広口壺の口縁で、外面には縦方向の暗文を施す。7は壺底部で、底は上底気味である。8～16は甕である。8は逆L字形口縁である。9～16はT字形口縁である。16は口縁下に突帯がつく。17は舟彫りの高杯の脚である。外面には縦方向の暗文を施す。

18は有茎の磨製石劍である。身の大部分は欠損している。身の断面形は菱形で、幅3.4cm、厚さ0.7cmを測る。茎部は長方形で、幅1.5cm、厚さ0.5cm、長さ1.5cmを測る。石材は結晶片岩を使用する。

19は性格不明の木製品である。側面観はT形を呈し、上面観はV形を呈する。枝の枝分かれの部分を利用し、それぞれの先端と又の部分を細かく加工する。

#### SD-002

調査区南側にある、SD-001を切って、東西方向に延びる。幅約50cm、深さ約50cmを測る。覆土は暗灰色粘質土で、粗砂を多く含む。遺物は弥生土器、須恵器等が出土したが、土層観察から近世以降の造構と考えられる。

#### SD-004

調査区東側にあり、南北方向に延びる。調査区外に造構が広がるため、幅は不明である。覆土は灰白色の砂質土である。SD-002同様、近世以降の造構と考える。

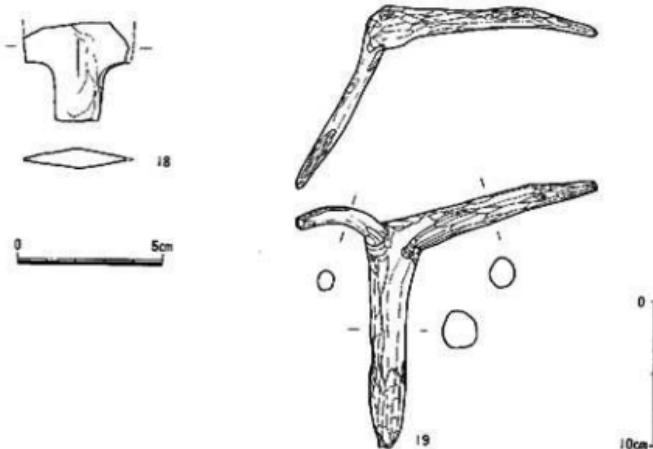


Fig.101 SD-001出土石剣及び木製品実測図(1/2, 1/4)

## 2) 土坑 (SK)

## SK-003

調査区南側に位置する。平面形は梢円形で、断面形は円筒形を呈する。長径75cm、短径64cm、深さ60cmを測る。遺物は埋土の上層で弥生土器が出土した。

出土遺物からこの土壙は弥生時代前期末～中期前半に位置づけられる。

## 出土遺物 (20)

20は「亀の甲」タイプの甌である。口縁下には指頭痕が残る。胎土には粗砂を多く含む。口径20.6cmを測る。

## 3) 包含層

調査区北側で台地の落ち際とそこに堆積した包含層を検出した。台地は緩やかに傾斜している、調査区南端と北端のレベル差は0.8mである。包含層は上層の暗褐色粘質土と下層の黒褐色粘質土の2層に分けられる。上層の暗褐色粘質土からは弥生時代前期後半から中期後半の遺物が出土し、谷の埋没の時期を示している。下層の黒褐色粘質土からはほとんど遺物は出土しなかった。

## 出土遺物 (21～25)

21は短頸甌である。口縁はくの字形を呈する。肩部は丸みをもつ。22は広口甌で、口縁は鶴先形を呈する。口縁外面には刻目を施す。23はT字形口縁の甌である。25は甌底部で、上底を呈する。

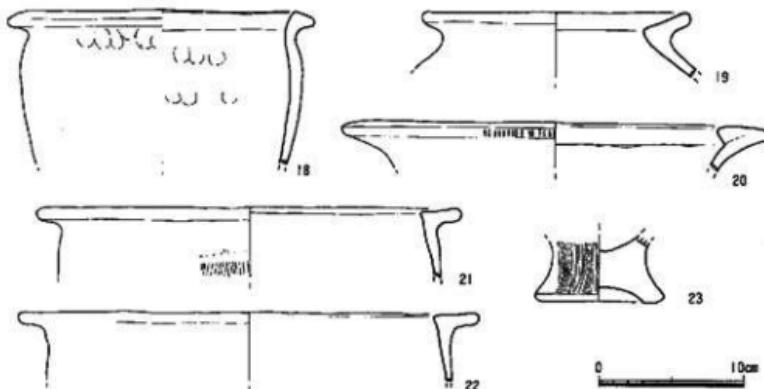


Fig.102 SK-003及び包含層出土土器実測図(1/4)

### 3 小結

今回の調査では弥生時代中期の土坑、溝等を検出した。調査は約80m<sup>2</sup>と限られた面積であったが、そのなかで、ひとつの成果として、北西に落ちていく台地の落ち際を検出できたことが上げられる。本調査地点周辺は既往の調査が少なく、旧地形や遺構の状況はまだ不明確な部分が多い。ただ、北東約70mで行われた幾つかの試掘成果では北東方向に落ちていく台地の落ちが検出されており、本調査地点で検出された南北に延びていく台地の落ちは再び南側に入り込み、Fig.98に示すような地形が想定される。第5章の第31次調査地点の報告でも触れたが、第31次調査地点検出の河川跡は台地を分断して流れていたと考えられ、ここで想定する台地の落ちはその傍証と言えよう。河川の形成の時期は今後の調査の積み重ねが必要になるが、この河川を境に弥生前期の遺構が今のところ南側ではほとんど見られないことを考えれば、この河川は集落形成に大きな影響をもったと言えよう。一方、本調査地点の西側約200m地点では第8次調査が行われ、その東側は谷になることが指摘されている。本調査地点の落ちは第8次調査地点の対岸の台地の落ちに連なると考えられる。比恵遺跡は市街化が進み、旧地形の復元は非常に困難であるが、今後の調査結果の増加を待って、詳細な検討を進めていきたい。

最後に今回の報告に使用した地形の復元図は山崎博之氏が今までの調査や試掘結果を道路地図に入れこんだ作業を元にして作成した。記して、田崎氏の労力に感謝致します。

## 第8章 第35次調査地点

### 1 調査に至る経過

1990年（平成2年）11月21日付で、デグラ商事株式会社 岸上完一郎氏から、博多区博多駅南四丁目109-1地内における事務所ビル建築に伴う埋蔵文化財の事前審査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、比恵遺跡群の範囲内であり、弥生時代の墳塚墓地や集落、古墳時代の集落跡など遺構が濃密に分布する第6次調査区の東側に位置すること、また、昭和13年に調査された環濠集落の北側に当たること、かつ、遺跡全体では北東部に位置し縁辺の様子が不明確であることから、事前に遺跡の有無確認が必要であると判断した。試掘調査は、関係者と協議のうえ同年12月18日に実施した。4本入れた試掘溝の調査によれば、申請地北側は谷部低地の堆積層、南側は八女粘土の台地部が残り、柱穴多数と土壙が1基検出された。遺構の密度は高いと判断され、時期は出土遺物によって弥生時代から古墳時代と推定された。そこで、試掘結果をもとに土地所有者及び関係者側と遺構の取り扱いについて協議を重ね、



遺構検出風景（西より）

申請地南側を中心に工事によってやむ無く破壊される遺構については、記録保存のための本調査を実施することになった。なお、試掘調査で北側谷部低部と考えられていた部分は本調査で大きな構であることが判明し、協議の結果、さらに調査区を北側に拡張することになった。

## 2 検出遺構

比恵・那河遺跡群は、福岡平野の中央部を北西にのびる低丘陵上に位置している。35次調査区は、丘陵の東端部に近い部分である。現況面の標高は、約6mをはかる。旧状は田で、5.3m付近で厚さ15cm程の黒褐色の粘質土、遺物包含層にある。包含層下は、明灰色の八女ロームとなる。調査区を横断する北東方向にのびる溝（SD-01）と東側に集中する柱穴群を検出した。不整形な土壤はSXと称する（SX-02～09）。柱穴の深さは、10～40cm程で、黒褐色の埋土がある

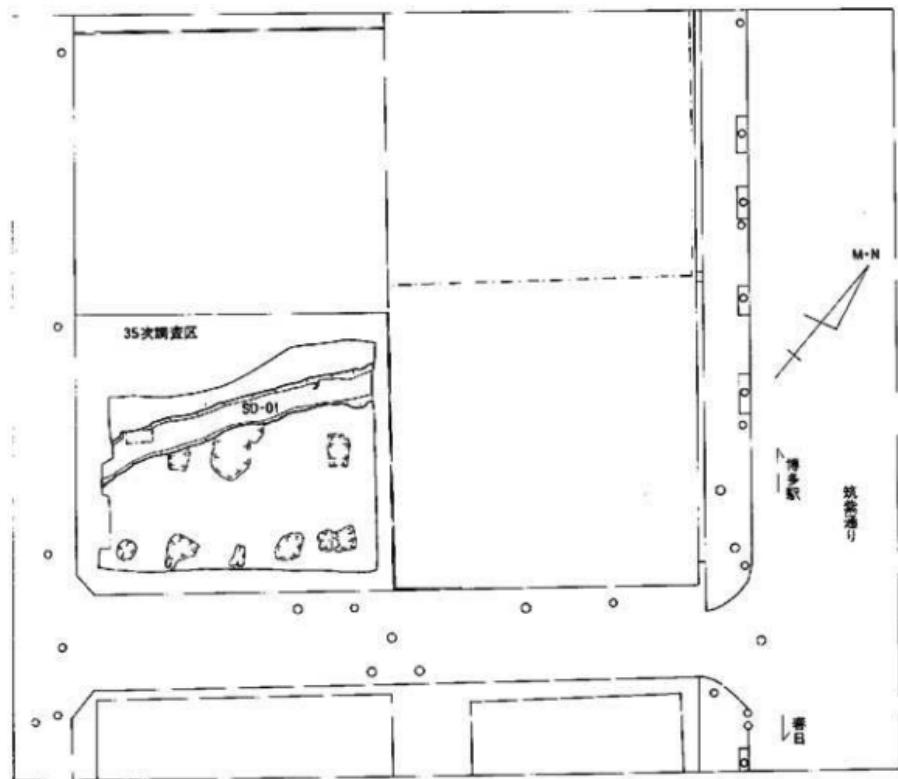


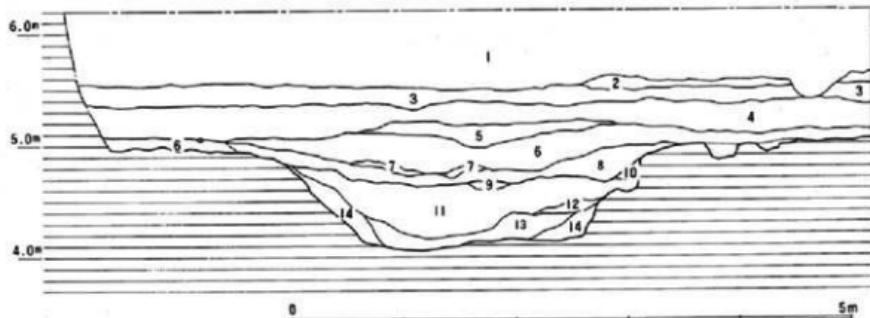
Fig.103 第35次調査地点位置図(1/500)



Fig.104 第35次調査地点遺構配置図(1/100)

られる。柱穴は掘立柱建物として捉えられなかつたので、多くは竪穴住居の支柱穴下部で、壁面は、完全に削平を受けたと理解したい。

SD-01は、断面逆台形を呈し、やや東寄りの底が20cm程度高くなっている外は、殆ど高低差はない。溝の肩と底との比高差は80cm前後である。出土遺物としては、木製品と土器、銅鏡がある。木製品の多くは、底面近くで出土し、遺存度の良い土器は、下の土層図では、8層と11層



- |  |                                    |
|--|------------------------------------|
| 1. 黒土 造土 ガレキを含む                              | 8. 黒色粘土                            |
| 2. 旧水田土壤 遺元した青灰土                             | 9. 八女粘土ブロック                        |
| 3. 淡黄灰色粘質土 (酸化鉄による黄色を基調とする)                  | 10. 灰黑色粘土 (八女粘土ブロックを含む)            |
| 4. 黄色粘質土 (上部を酸化し、黄色味を帯び、マンガンを含む)             | 11. 灰黑色粘土 (やや灰色を帯び明るい土色、八女粘土を少し含む) |
| 5. 黄色粘土 (粘性が強く均質。酸化鉄・マンガンの垂下をみなくなる。層界は比較的明瞭) | 12. 八女粘土ブロック混り黒色粘土                 |
| 6. 黒色～墨灰色粘土                                  | 13. 褐灰色粘土                          |
| 7. 灰白色粘土混り黒色粘土                               | 14. 八女粘土混り墨灰色粘土                    |

Fig.105 SD-01東壁土層断面図(1/50)

の間に集中する傾向が伺える。銅鑄は8層中で検出された。溝が掘削された時期は、弥生前期の上器片を含まないことや、遺存度の良い土器が中期後半から末にかけての型式であることから、中期中頃までに掘られたと推定する。また溝も柱穴群と同様、上部はかなり削平をうけたものと考えられる。

#### 出土遺物

遺物の多くはSD-01出土である。銅鑄・土器・投弾・石器・木製品がある。他に柱穴から出土した土器片があり型式が分かるものについては掲載する。

#### 銅鑄(Fig.106)

SD-01の黒色粘土層中から出土した。有茎式の鑄で、現存長3.85cm、重量2.16gをはかる。淡緑灰色を呈し、全体が粉状に錆化しており、非常に脆い。一方の面のみ明瞭な鎌が通り、刺逆を有しない。

#### 土器(Fig.107・108、1~19)

1は、壺形土器で、胴部下半を欠く。口径23.5cmをはかり、肩部に断面三角形の突帯を有す。器壁はハケ目調整を行ない、口縁や突帯付近にかけて横ナテを施す。明黄灰色を呈し、胎土中に石英の粗粒を多く含む。焼成良好である。2は、蓋形土器で、3の無頸壺に伴う。外面は丹塗磨研で、頂部を中心にして放射状に磨きを施している。内面の褐付近に布压痕が観察できる。無頸壺に対峙する位置に4箇所の穿孔がある。3は完形の無頸壺で、器高12.2cm、口径12.8cmをはかる。底部を除く外面に丹塗磨研を施す。内面はナテ調整で、ベンガラが部分的にたれている。外面の研磨は、横方向に5面に分割して行なわれている。2・3はともに胎土は暗黄灰色を呈し、砂粒を含むが極めて精良である。4は、直立気味の短い口縁部を有する壺形土器である。胴部中ほどが膨らみ、口縁部の対峙する位置に2つの穿孔がある。内外面にハケ目調整を施し、口縁や頸部、内面にナテを加えている。暗黄灰色を呈し、外面に赤色顔料を塗付する。胎土中に長石、石英粒、雲母の細粒を含む。5は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁下に三角突帯を回らし、横ナテを施している。明黄灰色を呈し、胎土中に石英の粗粒を含む。復元口径13cmをはかる。6は、高杯形土器の受部である。口径21.4cmをはかり、口縁部は、内側に緩く張り出す。内外面にハケ目を残す粗雑なつくりである。黄灰色を呈し、胎土中に石英・長石の粗粒を含む。7は、高杯形土器の受部である。口径22cmをはかり、丁寧なつくり

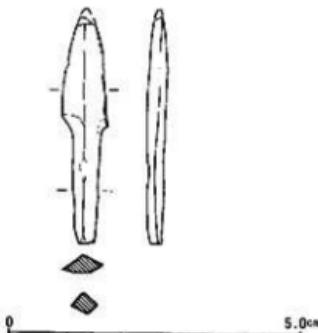


Fig.106 SD-01出土遺物実測図 (1/1)

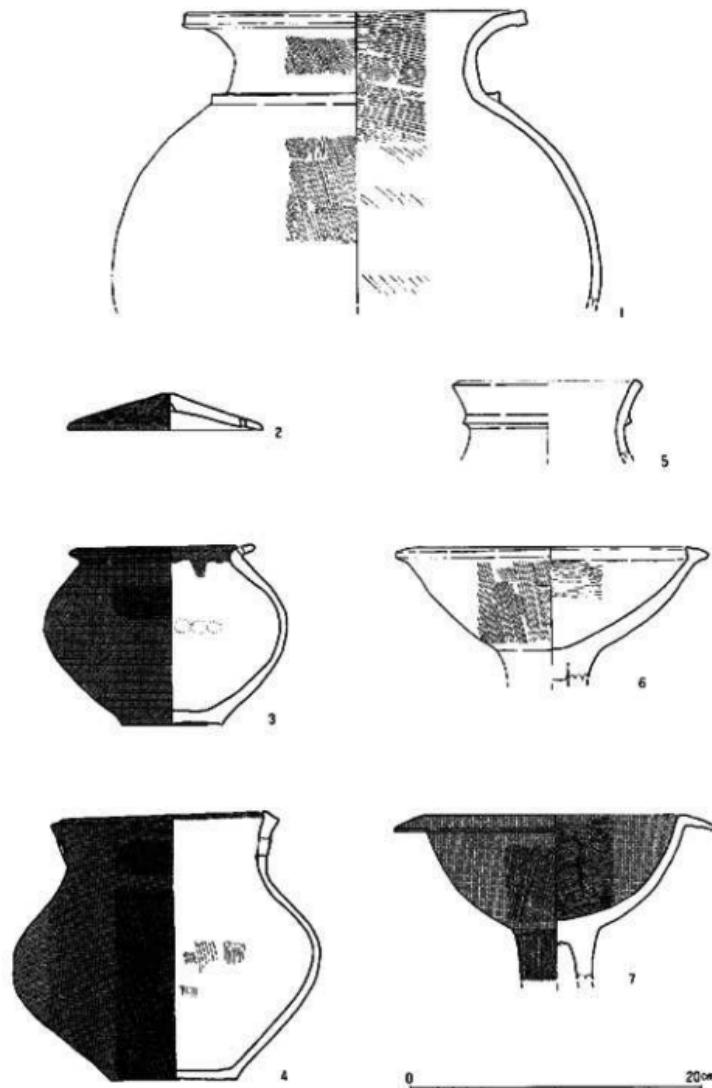


Fig.107 SD-01出土遺物実測図 2 (1/4)

である。内面は、底部に磨きを加えた後、側面に5面に分けた研磨を施している。丹塗で、地肌は黄灰色を呈し、胎土中に石英の粗粒と焼粉を含んでいる。8は、小型の注口土器である。黄灰色を呈し、外面には赤色顔料を塗付した可能性がある。胎土は細砂粒を含み精良である。下層出土である。9は、夔形土器の破片で、全周の7分の1を存する。内傾気味に外反する口縁を有す。灰褐色を呈し、細砂粒を含む。10は、夔形土器の口縁部の破片で、内嚢気味に外反する口縁を有する。淡黄灰色を呈し、細砂粒及び焼粉を含む。夔棺の可能性がある。11は、夔形土器の口縁部の破片である。外反する口縁の端部は、面取りがなされている。黄灰色を呈し、粗石英粒を含む。12は、平底の底部破片である。外面は丁寧なナデで丹塗が施されている。暗灰色を呈し、胎土中に細砂粒を含み、とくに雲母粒が目立つ。13は、平底の底部破片で、淡黄灰色を呈し、石英・長石の粗粒を多く含む。14は、胴部下半の破片で、外面に丹塗磨研を施し、

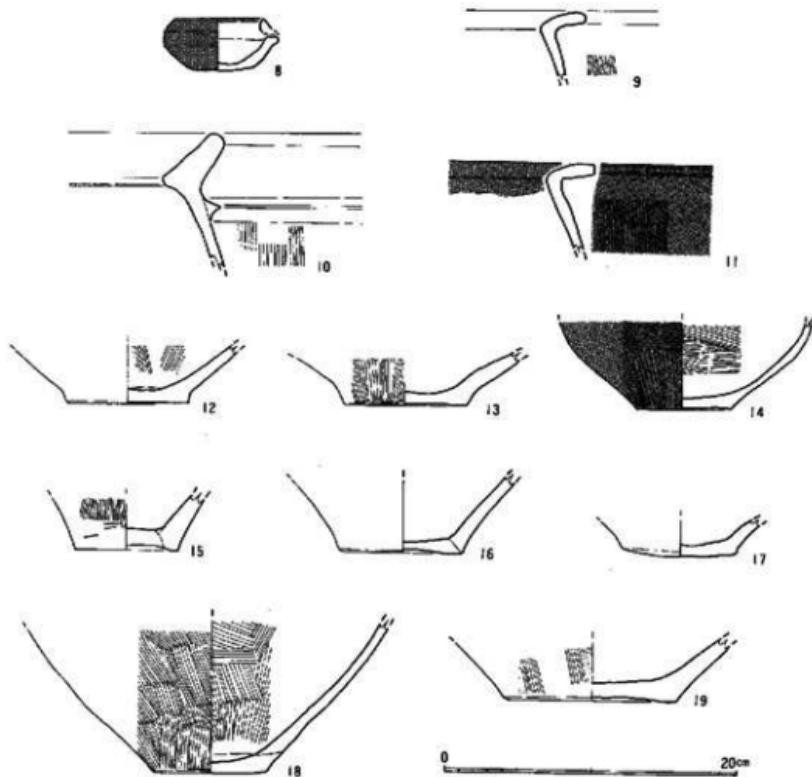


Fig.108 SD-01出土遺物実測図 3 (1/4)

内面にハケ目後ナデを加える。淡黄灰色を呈し、胎土中に砂粒の他、結晶面をなす黒色の鉱物を微量含む。15は、底部破片で、若干の上げ底を呈する。淡灰褐色を呈し、胎土中に石英粒や焼粉を含む。16は、底部破片で、若干の上げ底である。内外面ともにナデを施し、内底部に炭化物を付している。外面は肌色、内面は暗灰色で、胎土中に石英の粗粒を多く含んでいる。17は、不安定な平底の破片である。暗茶灰色を呈し、石英の粗粒を多く含む。

18は、胴部下半の破片であり、平底を呈する。内外面に粗いハケ目調整を施す。暗灰色を呈し、胎土中に石英の粗粒、雲母の細粒を含む。19は、平底の底部破片である。肌色を呈し、石英の粗粒及び焼粉を含む。出土した層位は、17が上層、9・10・18が不明で、他は下層である。投弾(Fig.109, 1~7)

1~5はSD-01、6・7は包含層中で検出された。1・2・5・6は茶灰色を呈し、3・4・7は肌色を

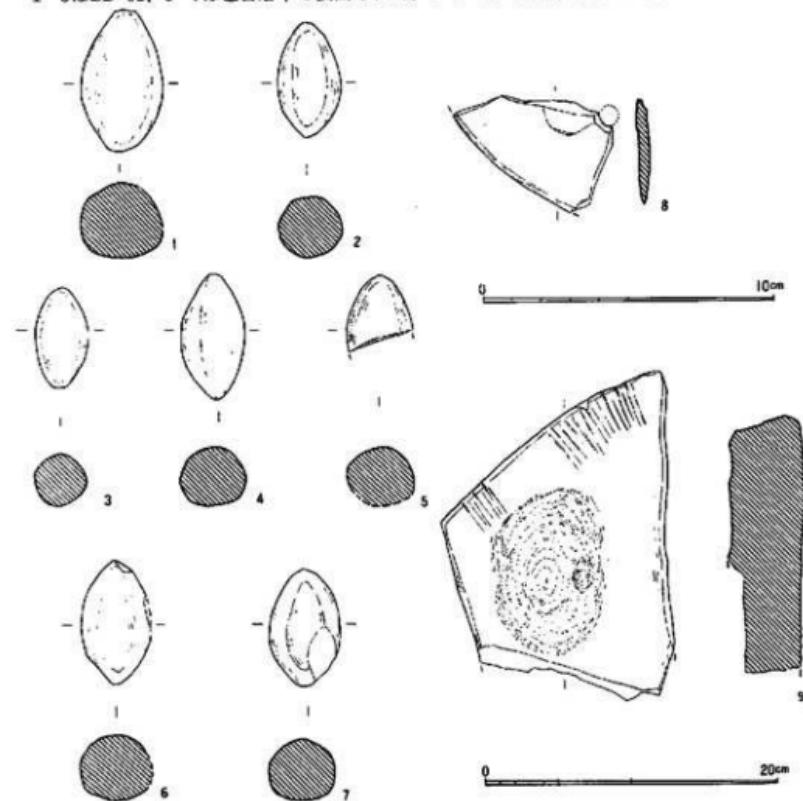


Fig.109 SD-01出土遺物実測図 4 (1/2, 1/4)

呈する。何れも細砂粒を含む精良な胎土で、7は焼粉を含む。3・4は、外面に赤色顔料を塗付した可能性がある。

石器(Fig.109, 8・9)

8は、粘板岩製の石庖丁の残欠で、外側刃半月形を呈する。溝の下層から出土した。9は圓石で、全形を留めていない。縁辺部を砥石として使用しており、端部に金属器の刃部の痕が観察できる。裏面は欠損しており、本来はもっと厚味があったと思われる。溝の下層で出土。

その他の遺構出土の遺物(Fig.110)

1 (SP-53) は、壺形土器口縁部の小片である。淡黄灰色を呈し、胎土中に焼粉を多く含む。2 (SP-53) は、壺形土器口縁部の小片である。淡茶灰色を呈し、胎土中に雲母粒などの砂粒を含む。3 (SP-53) は、三角突帯を有する壺形土器の胴部破片である。淡黄灰色を呈し、胎土中に焼粉を含む。1のような口縁部を付する型式と考えられる。4 (SP-13) は、壺形土器の口縁部の小片である。暗灰色を呈し、胎土中に細砂粒を含む。5 (SP-46) は、壺形土器の口縁部の小片である。淡茶灰色を呈し、胎土中に細砂粒を含む。6 (SP-33) は、壺形土器の頸部から胴部上半にかけての破片である。内外面に粗いハケ目調整、頸部に暗文状の調整を施す。型式と

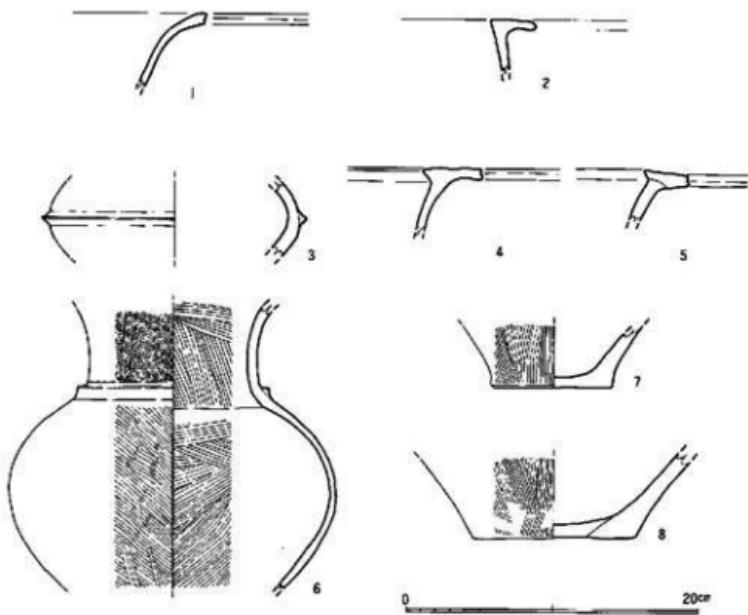


Fig.110 柱穴出土遺物実測図(1/4)

しては、弥生後期の複合口縁壺となる可能性がある。肌色を呈し、肩部に黒斑を有する。石英・長石を多く含み、雲母の細粒を含む。7 (SP-05) は變形土器の底部破片で、底径8.4cmをはかる。黄灰色を呈し、細砂粒を含む。8 (SX-09) は、底部破片で径11.4cmをはかる。明灰色を呈し、胎土中に長英・長石粒を含む。

#### 木器(Fig.111・112・113・114・115、1~21)

1は、半月形を呈する柄振の木体である。カシ材を、柾目に木取りをしている。刃部の幅は復元で約29cmをはかる。2・3は、三叉鋸の頭部から刃部にかけての残欠である。方形柄孔をもち、カシの柾目板を用材としている。4は、鋸の頭部で、方形柄孔を有している。カシの柾目板を用材とする。5は、鋸の刃部の小片である。カシの柾目板を用材とする。6は、一木造り

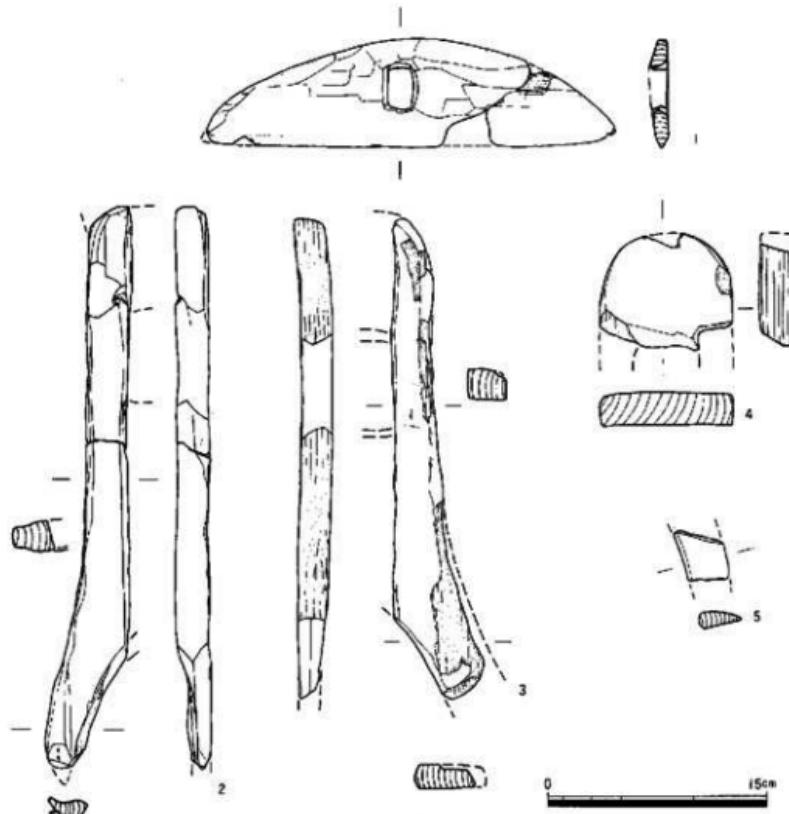


Fig.111 SD-01出土木器実測図 1 (1/4)

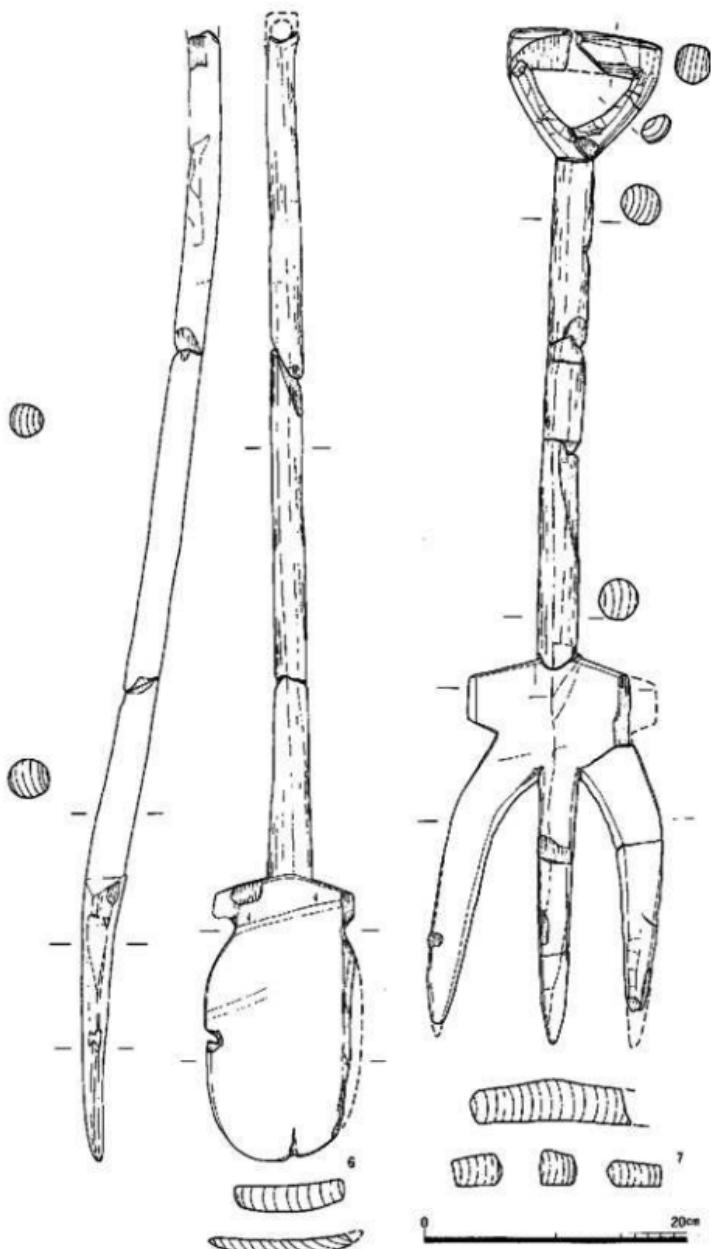


Fig.112 SD-01出土木器实测图 2 (1/4)

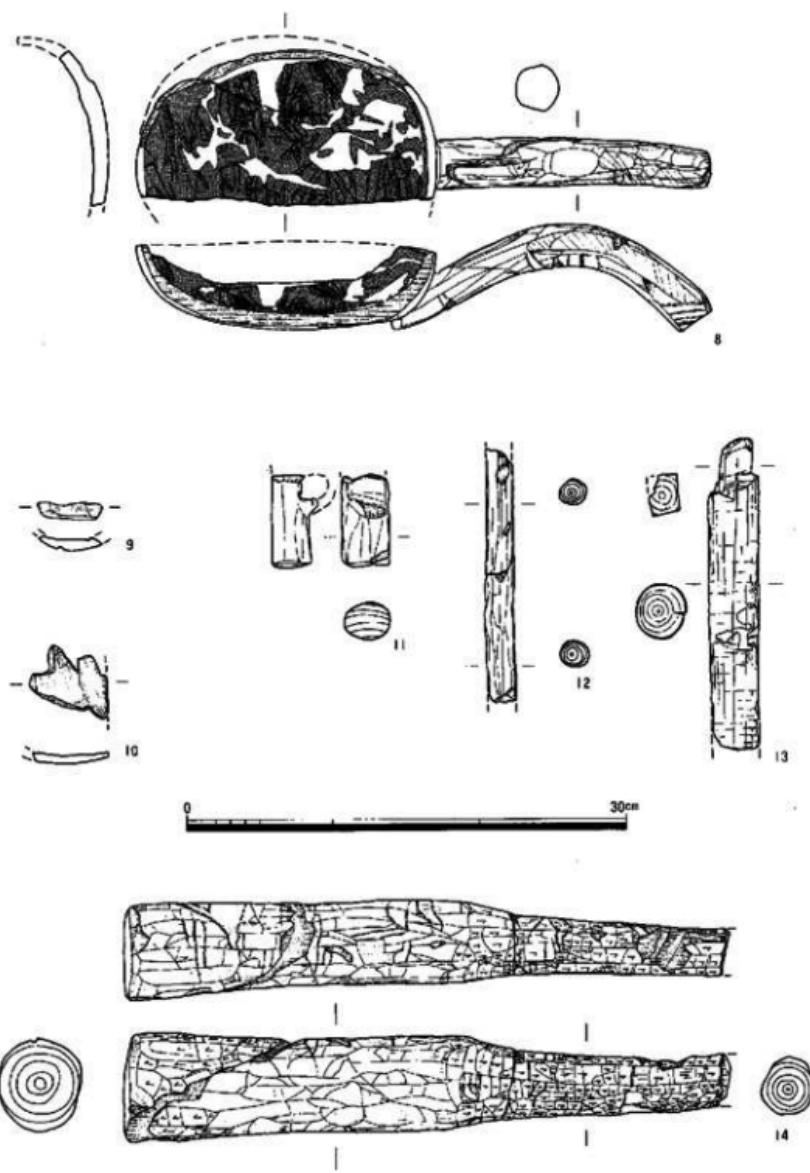


Fig.113 SD-01出土木器實測圖 3 (1/4)

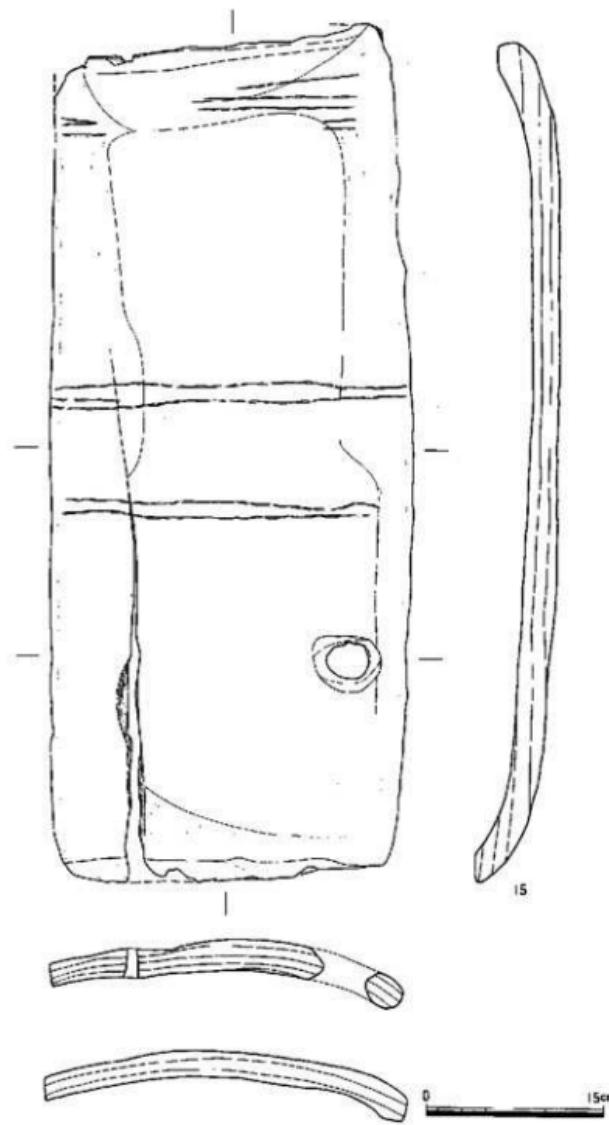


Fig.114 SD-01出土木器実測図 4 (1/4)

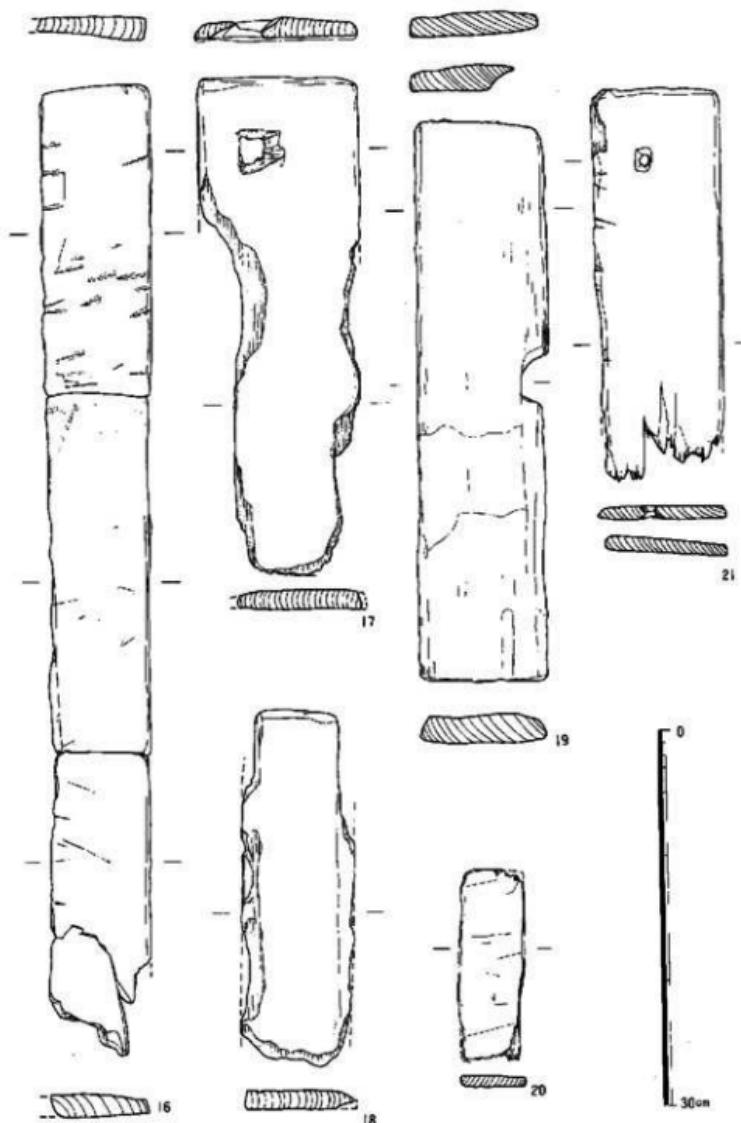


Fig.115 SD-01出土木器実測図 5 (1/4)

の跡で、カシの柾目板を用材とする。把手の一部を欠くが、復元全長88.4cmをはかる。把手部はT字形の組合せ式で、刃部にたいし垂直方向の位置をとる。7は、一木造りの三叉鎌で、カシの柾目材を用材とする。今日のスコップ柄状の把手部を有し、刃部は三叉でホーク状となる。刃部の付け根に造り出しを持ち、刃の分岐点はV字状をなす。左右の刃の横断面は5角形、中央部は方形に近い。全長77.4cmをはかる。8は一木造りの把手付容器で、ケヤキの又部の芯を剥り貫いたと推定される。身部の内面には黒漆を塗付しており、把手部に比べて細かい削りが施されている。9は、小片であるが、内面に黒漆を塗付していることから椀状の容器の可能性がある。10も9と同様で、内面に黒漆を塗付していることから椀等の容器と考えられる。11は、把手付容器あるいは槽の把手と考えられる。カシの柾目板を用材としている。12は芯持ち木を用いた柄の一部と考えられる。13は、芯持ち材で、柄が削り出されていることから、建築材等の可能性がある。14は、芯持ち木を用いた木槌である。握り部を細く削り出している。先端部に使用痕が観察できる。握りの一部を欠くが、現存長41.5cmをはかる。15は、桶あるいは樽の部材と考えられる。外面に籠の痕が三ヶ所に残る。孔は栓を差した可能性がある。用材は不明。16は、柾目板の用材で、表面に刃部の痕跡が伺える。17は、有孔の板材で、カシあるいはクヌギの柾目板を用材としている。18は、平歛の残欠で、上部に方形柄孔が伺える。カシの柾目板を用材としている。19は、杉の板材で、縦軸は原形を保っているが、横は欠けている可能性がある。縁部にコ字形の切り込みがある。20は、杉の板材で斜めの木取りがなされている。21は、有孔の板材で、杉を斜めに木取りを行なっている。

以上木製品について手短かながら説明を行なった。木製品の多くは溝の底近くで検出されている。炭化した以外に1.5mを超す木材や櫻の樹皮を巻き上げたものなどがある。共伴する土器から、木製品は弥生中期後半の所産として位置づけることができよう。



発掘作業風景（西より）

### 3 小 結

35次調査では、弥生時代の溝や柱穴群が検出された。溝は調査区を北東方向に横切っており、西端が南へ緩くカーブしていることから、楕円形に回る環濠の可能性がある。溝（SD-01）は、断面が逆台形、底から上面までの比高差が80cm程であることから、上部はかなり削平をうけてしまったようだ。このことは造構検出面が、淡灰色の八女ロームであることや、柱穴の残りが良好でないことから裏付けられる。出土遺物の状況から、溝の埋没は、弥生中期の終わり頃で、上部に後期の遺物が混入していると考えられる。木製品は、底に近い層に集中しており、残りの良い土器は、上層と下層の間に集まっている。銅錠は後期に属すると考えられる。溝の高底差は少なく、農具が多くを占めていることから、弥生中期には農業用水として機能していたのかもしれない。農具は、起工具、整地具、容器と多種多様である。溝出土の土器は、無頸壺と蓋のように近接して見つかったものがあり、原位置を留めていると考えられる。系統的に把握できていない型式もあるが、丹塗磨研を主体とする精製とハケ目調整をナデ消さない類とに大別できるようである。これらが土器様式としてどの程度幅をもっているのか、早急に結論を出すことはできない。また、数少ないながら、柱穴出土の土器と比べた場合、溝出土の土器は、須恵II式段階、柱穴出土は須恵I式段階と後期で捉えられる<sup>(1)</sup>。以上から、調査区は須恵I式段階まで集落として立地し、同II式古段階で溝が掘られ、同新段階で、溝の清掃等が行なわれなくなる。その後、溝縁辺に再び集落が営まれるのは、後期に入ってからと推定しておきたい。

比恵・郡河の丘陵は、早い時期の区画整理によって削平をうけ、市街地化がすすめられたため、遺跡の全容は、断片的な調査結果の集成を待たねばならない。しかし、これまでの調査によって、出土遺物や遺跡の規模とともに第一級の内容が明らかになりつつある。古代中国の史書「漢書地理誌」の百余国、「魏志倭人伝」の奴国の一翼を担う遺跡と評することができる。

註

(1) 田崎博之「須恵式土器の再検討」『史淵』第122号、九州大学文学部、1985年。



銅錠出土状況（南より）





完成間近の新社屋（92年春）建物には35次調査の展示スペースが確保されており、来訪者は、見学することができる。

## 第9章 第36次調査地点

### 1 はじめに

#### 1) 調査に至る経過

1991年（平成3年）1月10日付で、土地所有者御北村電気商会 北村正見氏から、博多区博多駅南六丁目30-2地内における倉庫増築に伴う埋蔵文化財の事前審査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、比恵遺跡群の範囲内であり、かつ南側50m地点には第11次調査区が存在するなど、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物の出土が予想されたため、事前に遺跡の有無確認が必要であると判断した。

試掘調査は同年2月6日に実施した。試掘の結果、表土下25cmで赤褐色ロームの地山に到達し、東西方向に幅4~5mの溝と西端部で段落ち、それに柱穴などが検出された。溝の覆土からは弥生後期土器、土師器や完形に近い須恵器などが発見され、良好な状態で遺構・遺物が存在すると判断された。そこで、試掘結果をもとに土地所有者側と遺構の取り扱いについて協議を重ね、工事によってやむ無く破壊される遺構については、記録保存のための本調査を実施することになった。

#### 2) 調査・記録の方法

試掘のデータをもとに、先ずバックホーにより表土剥ぎを行なった。調査範囲は増築される倉庫の範囲に幾分引けをとった8×25mの長方形部分である（面積200m<sup>2</sup>）。バックホーによる作業は地山のローム上面まで行い、以前の建造物基礎による広範な擾乱の除去も併行した。統いて、遺構検出、発掘作業を東側から人手ではじめた。

遺構の呼称は溝をSD、柱穴をSPとし、それぞれに通し番号を付した。同時に、遺物の取り上げはこれに従う。全体図の割り付けは調査区の長軸にはば沿った方向で主軸をきめ、2mグリッドを組んだ。

尚、調査にあたっては比恵第35次調査も平行して行なった事情により下村、常松、荒牧の3名が入れ替わり担当することもあった。

#### 3) 調査の概要

調査の関心は方形周溝墓の可能性がある溝に注がれた。比恵遺跡群では既往の調査によってこの墓制は1例検出されている。周辺の調査が進んでいないこと、今調査の面積が狭いこと等から全体像の把握が困難であるが、注目される遺構・遺物をみることができた。特に、最近関心を集めている立柱を検出し、葬送儀礼を考察する上で新たな例を得ることができた。

遺物においても、この溝から庄内併行期の完形に近い壺、前代の墓に副葬され混入したものと考えられるが銀製の指輪が出たし、貴重な資料を得た。

## 2 調査の記録

### 1) 上層

調査地点においては層厚25cmの客土・暗黄褐色砂質土（耕作土）下に赤褐色の鳥栖ロームが堆積する層序である。全城にわたって削平、擾乱が著しく包含層の堆積をほとんど見ない。現況は客土・舗装により標高7.60mの平坦地であるが、地山のローム面は調査区東壁側で7.30m、西壁側で7.00mを測り、南北方向に緩やかに下降する。尚、この検出面のロームは約50cm下では明黄褐色の脈がみられ、鳥栖ローム下部に位置すると考えられる。

### 2) 遺構

検出された遺構は、弥生中期～後期を中心とする柱穴群、庄内併行期の方形周溝墓と考えられる溝の一部（SD01）、古墳後期以降の溝4（SD02～05）である。

#### SD01

調査区西側にコーナーを有し、内弯しながら東へ走行する。上端幅はコーナー近くですばり2.7m、内弯した中央部で最大3.7mを測る。下底も同様の形状で規模を変える。深さは上端から50～70cm残り、下底のレベルは地形に対応して西側へわずかに低くなる。断面形は北側（外側）の立ち上がりが急勾配であるのに対し、内側へ緩やかである。この形状は中央部の内弯した範囲に明瞭に認められた。

堆上は図示した3と4層の層界が明瞭に判別できた。この3層は不明瞭ながら明褐色土を多く混じた上層を分層することができる。調査区西壁ではこの分層が明らかで、上層は中央の層厚20cmのレンズ状に堆積し、調査区東側にかけて厚く堆積していく。包含する遺物は須恵器など古墳時代後期のものを含み、下層の遺物と明確に時期を異にしている。4層以下からは庄内期の壺等が彎曲した中央部の下底近くから多く出土した。

留意されたのは中央部の北側壁から重なりあった板石が重なり合った状態で出土した。他に埋土中からも散在した小片が見受けられ、周溝掘削時に前代の箱式石棺が破壊された可能性がある。

#### 立柱

調査区西側のコーナーの位置から極めて特異な立柱が検出された。掘り方は一辺約90cmの方形プランを呈し、深さ70cmを測る。木柱は下端から30cm程遺存し、湧水のため明確な形状ではない。



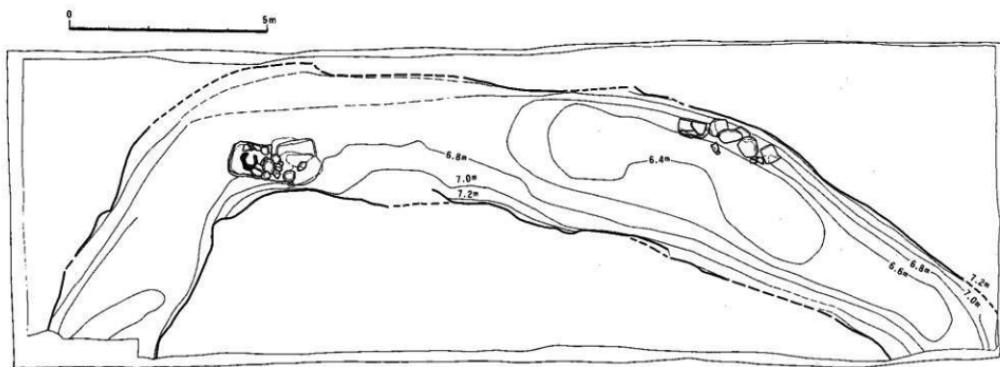
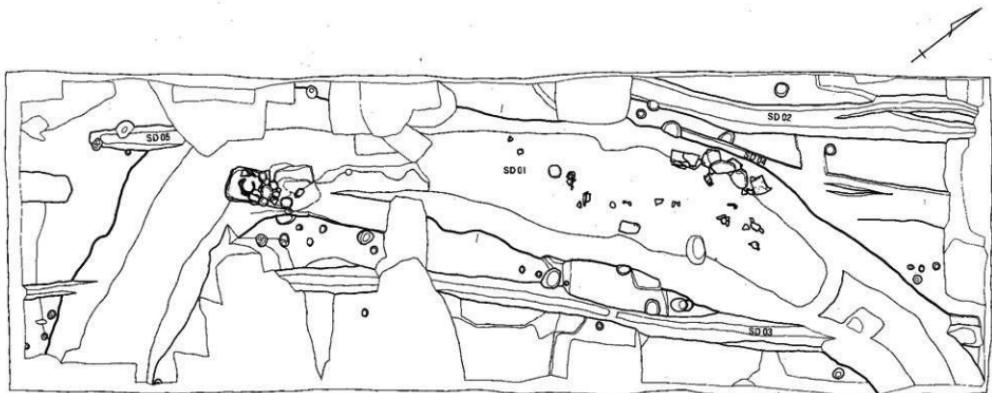


Fig.117 第36次調查地点全体図、SD-01実測図(1/100)

が掘り方の下底が円錐状に沈み込んでいた。木柱は柱底から径約60cmに復元できる。掘り方内の埋土は灰色混りの暗褐色粘土で、締まりがなく空隙が多くみられた。また、埋土に赤色顔料（水銀朱）が多く含まれており、散布されたものとも考えられた。

周溝に斜交して掘り方に向かう、木柱搬入用のスロープが幅0.7m、長さ3.0m以上にわたって掘削されていた。スロープの底面は平坦で立ち上がりは直に近い。スロープと掘り方の境に円礫、先述の板石を含む集石が置かれていた。このうち円礫は上部に配置される。集石は掘り方内に落ち込んだ状態で、木柱を引き上げる際のコテに使用されたものと考えた。

#### SD02~05

擾乱のため断続的であるが、調査区の長軸に概ね沿うような方向で平行した4本の小溝が検出された。埋土は褐色系でSD01を切ることが明瞭に判別できた。幅は70cm前後、深さ約10cmを測る。埋土中から須恵器等が出土し、6世紀後半以降の時期と考えられる。

#### 柱穴

埋土は黒褐色系のものが多く、時期は出土遺物から弥生中期～後期にかけてのものか。

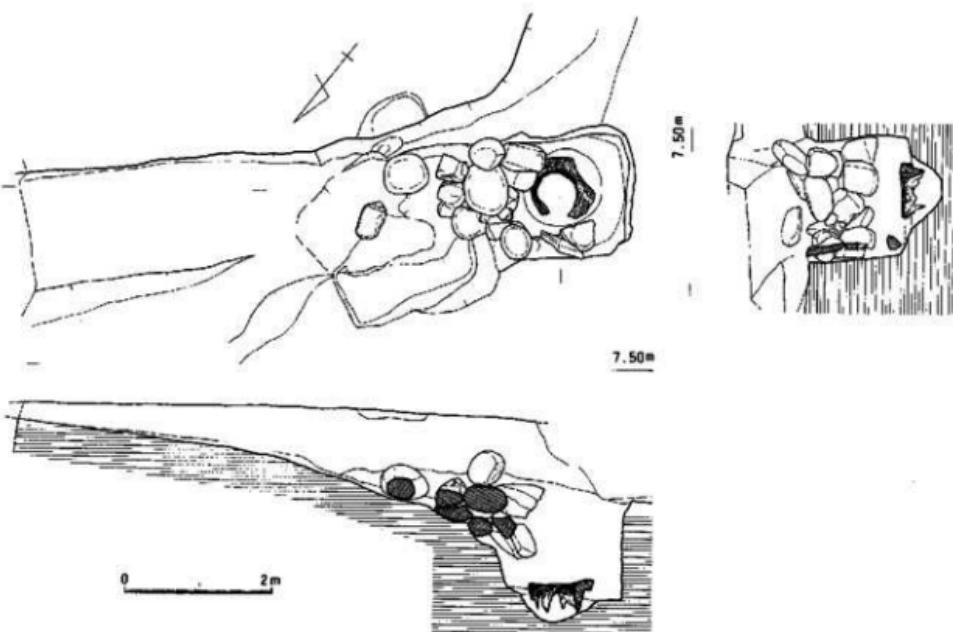


Fig.118 立柱実測図(1/40)

### 3) 出土遺物

SD01

#### 上層出土遺物 (Fig.120、121、1~11)

埋土の上層褐色土 (Fig.116、土層断面図・1層) から出土した土器である。下層出土の土器と明確に時期を異にし、後代、沈み込んでいた周溝に流入したものと考えられる。

1~10は須恵器、11は上師器である。1~3は天井部が丸く、4は天井部が平坦に近く口縁端部は浅く凹む占式のタイプである。5、6は縮小し、扁平な器形を呈す。5の口径は11.8cmを測る。7は深みのある丸底の杯と考えた。口縁部にかけては直に近い立ち上がりで、外面部下位は手持ちのヘラ削りで調整を行なう。8の杯部外面には2条の浅い沈線が施される。10は直口壺で胴部上位に櫛齒の綾杉文を施す。11は長胴形の壺で、胴部が少し張り口縁部への屈曲は緩やかに移行する。

#### 下層出土遺物 (Fig.121、122、124、12~38)

SD01の下層からは、弥生後期から古墳時代前期にかけての土器が出土した。主体となるのは後者で、弥生土器は、器台や高杯の脚柱部のように残り易い部分以外は、細片である。

12は二重口縁の壺形上器で、木柱の掘り込みの上で口縁部を下に向けて出土した。口縁の内側は、放射状の磨きが施されており、外面は縱方向のハケ目調整である。黄褐色を呈し、胎土中に石英の粗粒を多く含む。軟質で、器壁の剥落が著しい。13は、二重口縁壺で、内外ともに磨滅が著しい。口縁の屈曲部は緩やかで、胴部は扁球形に近い。茶灰色で、石英の粗粒を多く含む。焼成は脆弱で、胴部は反転復元したものである。この壺と似た器形で、赤坂古墳（佐賀県鳥栖市）出土例がある<sup>(1)</sup>。赤坂例は、口縁の外側に円形の貼付浮文が回り、底部に穿孔がある。本例の底部は、穿孔かどうか不明である。14は、口縁部を欠く壺形土器で、小さな上げ底を有する。内面に粘土の積上痕が観察できる。肌色を呈し、胎土中に石英粒と焼粉を多く含む。15は壺形土器で、器高は22.5cmをはかる。口縁部は「く」字に屈曲し、胴部に径3cmほどの焼成後の穿孔を施す。胴部外面にはハケ目を施した後、下から上へ向って粗いナデを加えている。胴部内面は規則性のないハケ目調整を施す。肩部内面に粘土の積上痕が観察できる。明黄灰色を呈し、胎土中に石英・長石粒を多く、雲母粒を少し含んでいる。焼成は良好である。16はほぼ完形の壺形土器で、器高は22cmをはかる。胴部に左下がりのタタキ目がある。タタキは下から上に反時計回りに施されている。内面は纖維状の原体で底部から胴部に向ってナデ上げているが、器体は軽くない。褐色を呈し胎土中に石英・長石粒を多く含む。焼成はやや脆弱である。17は壺形土器の胴部で、外面に右下がりのタタキ目を施すもので、所謂「人和型庄内壺」と云われるタイプである。こげ茶色を呈し、胎土中に石英・長石・雲母の他に角閃石を含んでいる。内面は削りを加えた後、下から上にナデ上げている。18は、小型の壺形土器の底部と思われる。尖底状の小さな底が残る。内外面に粗いハケ目を施す。暗灰色を呈し、細砂粒を多く含む。焼

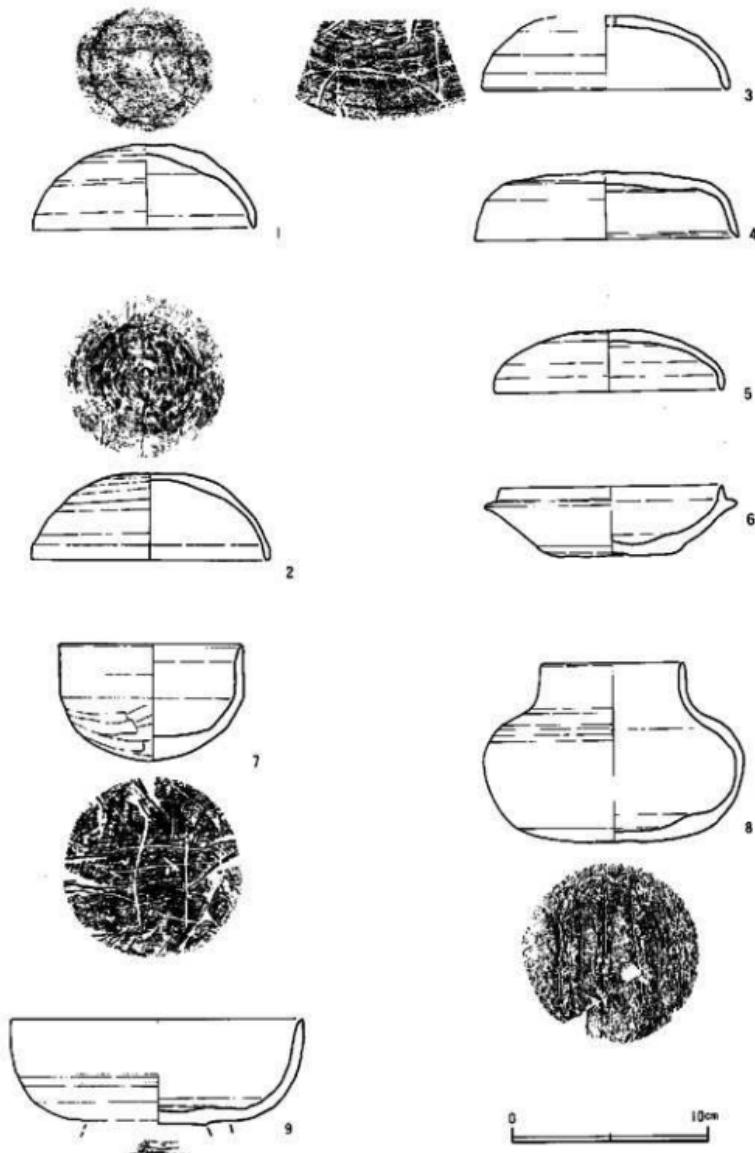


Fig.119 SD-01上層出土遺物實測圖 1 (1/3)

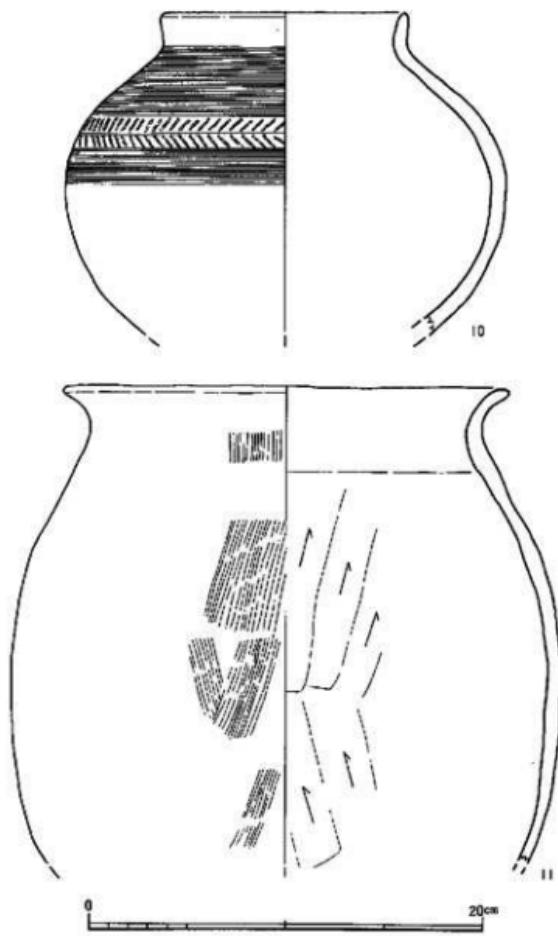
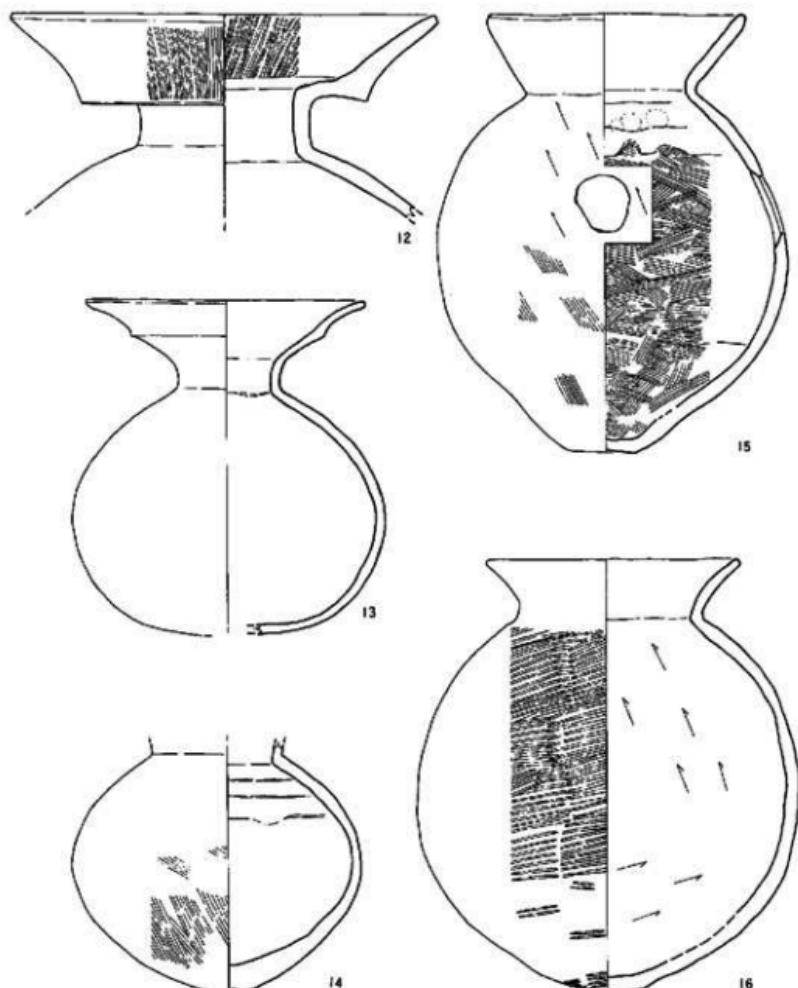


Fig.120 SD-01上層出土遺物実測図 2 (1/3)



0 20cm

Fig.121 SD-01下層出土遺物実測図 I (1/3)

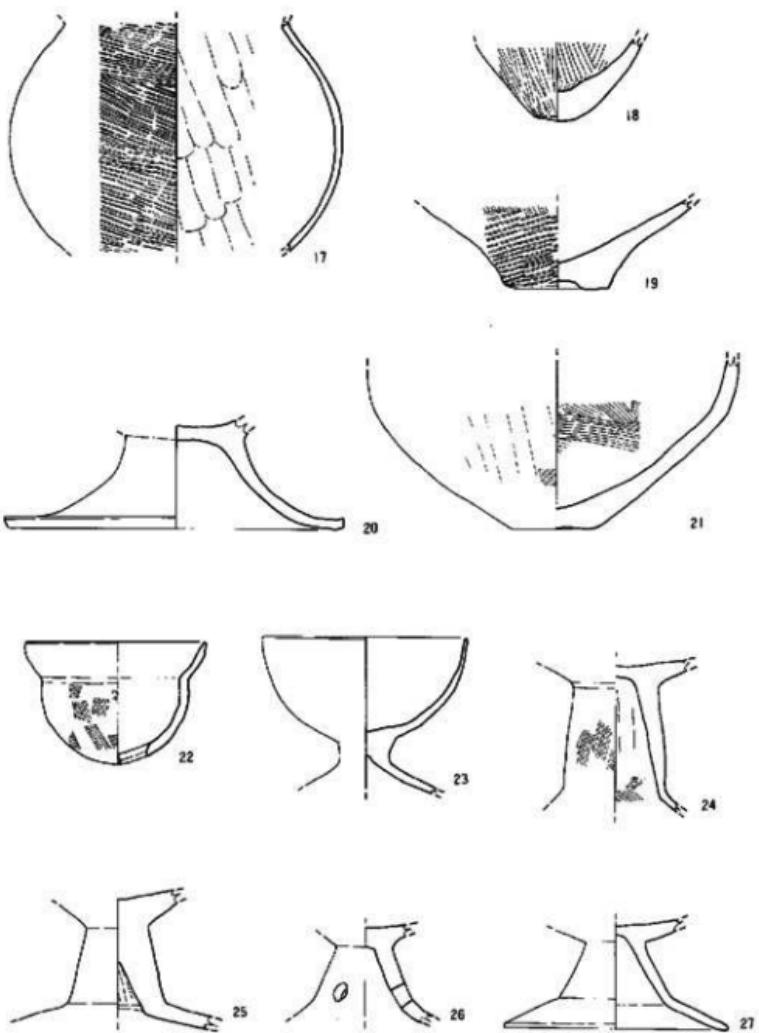


Fig.122 SD-01下層出土遺物実測図 2 (1/3)

成は良好である。19は壺形土器の底部で、タタキによる成形を行ない底部が上げ底になっているなど在来の器種にみられない形状である。胴部にかけてはタタキ成形の後ハケ目調整を加えている。内面は磨滅が著しく調整不明である。暗褐色を呈し、胎土中に石英の粗粒を含む。器内を中心に分布するタイプに似た特徴がある。20は、上部を欠いており器種不明であるが台部と考えている。壺端部は面取りを行なっており、内外の調整はナデと思われるが、磨滅が進んでいる。暗茶褐色を呈し、石英・長石粒を多く含む。21は、壺あるいは壺の胴部下半で、上げ底の底部を有する。内外ともにハケ目調整の後ナデを加えており、外面に赤色顔料を塗付する。暗茶灰色を呈し、粗石英粒を多く含む。焼成はやや軟質である。22は小型の壺で、口径9.3cm、器高6.3cmをはかる。底部から少し胴部寄りの位置に焼成前とみられる穿孔がある。暗褐色を呈し、胎土中に石英・長石の粗粒の他、鉱物の細粒を含む。器壁は、ハケ目調整やナデの痕が伺えるが、全体に磨滅が著しい。23は、台付鉢で、台部縁を欠いている。口径10.5cmをはかり、器壁は磨滅が著しく調整不明である。茶灰色を呈し、胎土中に石英・長石の粗粒を含む。24は、高杯の脚柱部である。内外面ともに磨滅が著しいが、ハケ目調整を観察できる。肌色を呈し、胎土上中に焼粉を含む。25は高杯の脚部である。内外面ともに磨滅が著しい。茶灰色を呈し、胎土中に粗石英粒を多く含み、黒色の鉱物片を混入している。26は高杯の脚部である。内外面ともに磨滅が著しい。暗茶灰色を呈し、胎土中に石英・長石粒を多く含む。脚部に穿孔がみられる。27は、高杯の脚部で、穿孔はない。赤褐色を呈し、焼粉を多く含む。内外面ともに磨滅が著しい。28は、複合口縁壺形土器の口縁部である。復元口径19.5cmをはかる。茶褐色を呈し、粗砂粒を多く含む。屈曲部に綫い稜線が入るタイプで弥生後期前半に比定される。29は複合口縁壺形土器の口縁部である。屈曲部は面をなし、逆「く」字形に反転するもので、後期後半以降に比定される。明黄灰色を呈し、胎土中に石英の粗粒を多く含む。30は複合口縁壺形土器の口縁部である。29と同じタイプで、屈曲部が29ほど立ち上がってないので、やや古い傾向が伺える。明黄灰色を呈し、石英の粗粒を含んでいる。31は小型壺の小片である。口縁から胴

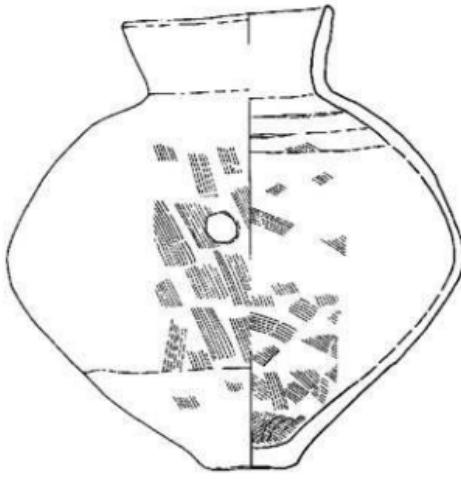


Fig.123 第19次調査地点出土土器(参考資料)

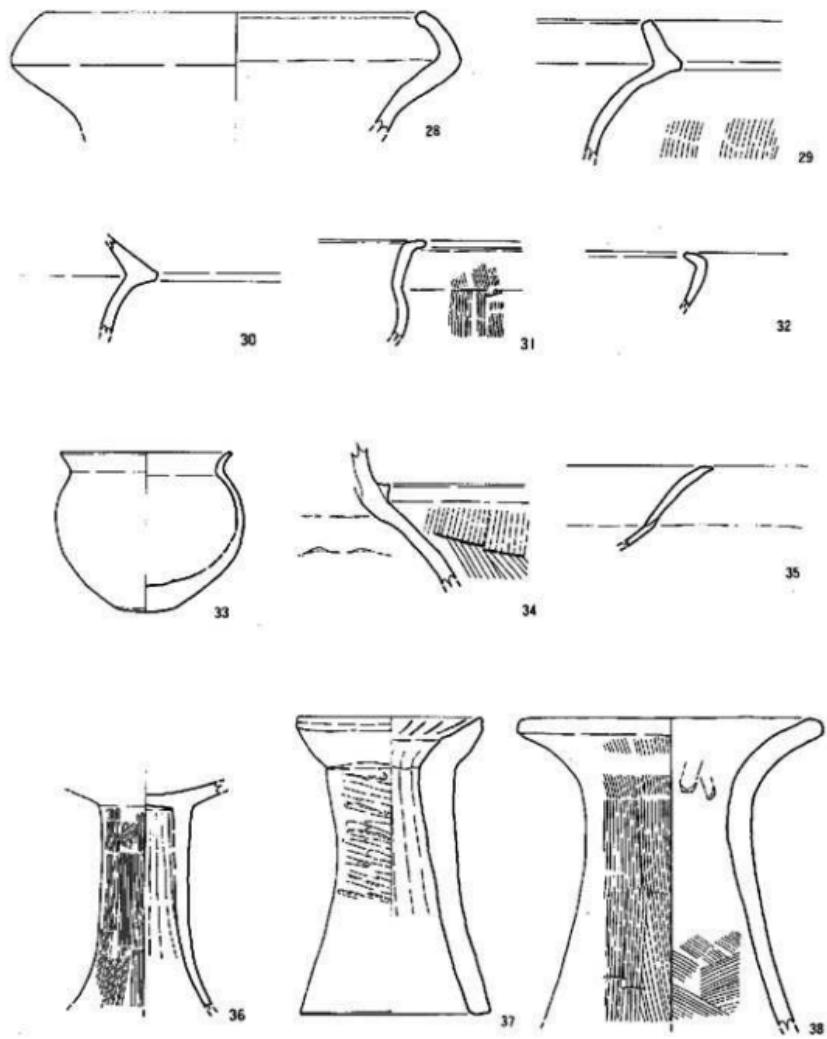


Fig.124 SD-01下層出土遺物實測圖 3 (1/3)

部中位にかけてを存す。肌色を呈し、砂粒を含む。弥生中期的な特徴が伺える。32は、壺形土器、あるいは高杯の口縁部の細片で、傾きは不確かである。茶灰色を呈し、赤色顔料を塗付した形跡がある。33は、小型壺形土器で、口径8.7cm、器高8.1cmをはかる。底部は不安定な平底をなす。暗灰褐色を呈し、石英・長石粒が多く含む。内外ともにナデ調整を施す。34は、複合口縁部の肩部の破片である。断面三角形の突帯を付し、胴部外側に粗いハケ目を施す。暗茶褐色を呈し、胎土中に石英の粗粒を含む。35は在来系高杯の口縁部の小片である。暗褐色を呈し、石英粒を含む。弥生後期後葉から終末にかけてに比定される。36は、高杯の脚柱部である。暗茶褐色を呈し、胎土中に石英・長石・雲母粒が多く含み、焼粉を混入する。37は、円筒形の器台で、受部は外反する。外面に粗い右下がりのタタキ目を有している。茶褐色を呈し、石英粒を多く含む。38は、円筒形の器台で、裾部を欠く。外反する受部を有し、外面に縦方向のハケ目調整を施す。茶灰色を呈し、胎土中に石英の粗粒を多く含む。Fig.123は、比恵遺跡の19次調査区（36次調査の北西約200m）出土の壺形土器である。柱穴出土で、ほぼ完形を呈している。形態的に在来の器種と云えないことや、焼粉を含むなどSD01出土の15と共通点が見出せるため、資料紹介の運びとなった。

壺は、器高23.4cm、口径11cm、胴部最大径23.5cmをはかる。胴部のやや上位に焼成後の穿孔を施す。肌色を呈し、胎土中に石英の粗粒、焼粉を多く含む。内外面にハケ目調整を行ない、口縁部を中心に横ナデを加えている。底部内面は放射状にハケ目を施し、外底はやや上げ底である。肩部内面には粘土の接ぎ目が観察できることから紐づくりと考えられる。

共伴遺物がかないため、時期比定が難しいが、内底部のハケ目は畿内第V様式の壺形土器に共通している。類例としては松木遺跡<sup>123</sup>138街区2号住居跡出土資料があげられる<sup>124</sup>。本例の底部に比べ、より不安定な様子が伺えることから松木例を後出の型式と捉えたい。

埴輪(Fig.125, 39)

調査区東側のSD01上層褐色埋

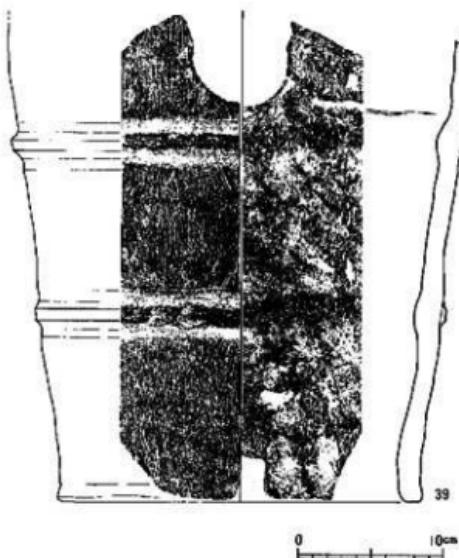


Fig.125 SD-01上層出土埴輪実測図(1/3)

上から出土した。最低2個体分の破片が認められた。

39は下底径24.8cmに復元され、高さ33cmまで遺存する。下底の接地面は平坦を為し、そこから直線的に体部は開いていく。体部外面には2段の台形状タガが残る。下段のものは高さが低く、扁平である。上段のタガの上位に径約6cmの円形透孔を穿つ。調整は外面に明瞭な縦ハケを残し、内面に左上がりから縦方向の強いナデを施す。色調は淡黄褐色から赤褐色を呈し、やや軟質である。

#### 土製品・石器(Fig.126, 127, 40~46)

40は土製投弾である。下半部の一部を欠損しており全長は分からぬが大形の投弾である。残存長4.3cm、最大径2.7cmを測る。灰褐色から暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には1mm前後の石英・長石粒子に加えて黒色の角閃石を多く含む。これまで出土している那

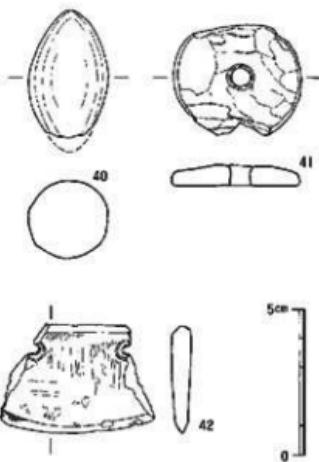


Fig.126 SD-01出土土製品・石包丁実測図(1/2)

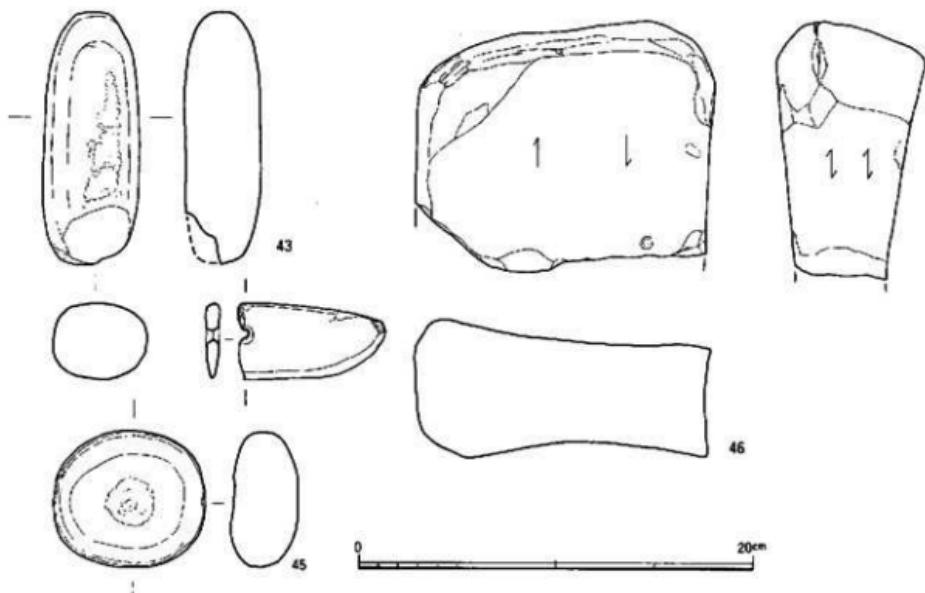


Fig.127 SD-01出土石器実測図(1/2)

珂・比恵遺跡出土の投弾とやや異なるようである。3層からの出土。

41は灰緑色を呈した滑石製の紡錘車である。上端と下端を破損しているが、外径4.3cm、孔径0.7cm、最大厚0.7cmを測る。上面は荒い削りによって凸面状に整形され、下面も削りによって平坦に加工されている。下面には幅0.8cm前後の細かな削り痕が全面に観察される。弥生時代に

属するものであろう。5区下層から出土している。42は小豆色をした輝緑凝灰岩製の所謂立岩產石庖丁である。残存長5.2cm、最大幅3.7cm、最大厚0.7cmで、孔間は3.1cmとやや広い。表裏とも製作時の研磨痕が残る。3層出土である。44は残存長7.5cm、最大幅3.9cm、最大厚0.7cmを測る。灰色を呈し、片岩系の石材か。43、45は磨石であろう。43は全長13.0cm、最大幅4.9cm、最大厚3.9cmを測る。敲打痕が一部みられ石斧に近い器形を有すが、刃部ではなく、端部に磨痕が残る。玄武岩製か。下層より出土。45は径7.1~7.6cmの円形を呈し、厚さ3.2cmを測る。ほぼ全面にわたって滑らかに磨かれているが、周縁に面取りの稜が残る。表裏中央を敲打により凹ませている。この凹みは片面が深く明瞭である。石材は玄武岩か。上層褐色土から出土した。46は日の細かい砥石である。方形を呈し表裏面ともに研ぎ込まれ彎曲した器面をなす。遺存する周縁の一辺に自然面を残す。

#### 指輪、管玉(Fig.128, 47・48)

47は純銀製と考えられる指輪である。極めて類例の少ない資料である。勿論珂・比恵遺跡では初めての出土である。環径1.83~1.87cm、内径1.5cm、環体の幅0.22cm、厚み0.17cm~0.22cmを測る。断面は「D」字に近いが、上下面には僅かな平坦面があり、内側にはかすかな稜が残る。図示した平面図の右側はやや太くなっているが、これは銀線を丸く彎曲させて接合した部分であろうと推察される。下層土器が集中した調査区東よりの地点で出土した。同時に出土した土器は古墳時代初頭に属するものが多い。しかし、弥生後期土器もかなり混入し、明確な時期決定ができないが、形態からは弥生後期に属する可能性が高い。48は小形の管玉である。全長1.1cm、径0.3cmで、径0.15cmの孔を有する。孔径は上下端とも同じで両面から穿孔されたものと考えられる。石材は白っぽい流理を含む緑色の碧玉である。中層上部（褐色土）から出土。弥生時代の混入品であろう。

#### SD02~05

図示していないが、6世紀後半代を上限とする須恵器、土師器等の細片が出土している。SD02~05出土遺物に時期差はほとんど認められない。

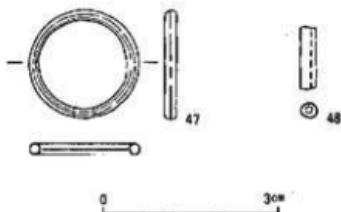


Fig.128 SD-01出土指輪・管玉実測図(1/1)

### 3 小結

#### 1) 造構の時期と性格

本調査の中心を占めたSD01は下層出土遺物から庄内併行期に時期がもとめられ、形態から方形周溝墓の可能性が高い。その掘削により弥生中期から後期に属していたと考えられる柱穴（集落）、石棺墓は破壊を受けている。SD01埋土から出土した銀製指輪、碧玉製管玉も後者の墓に副葬されていた可能性もある。年代に空白ができるが古墳時代後期（6世紀後半）にSD02~05が掘削される。平行して走行するがその性格は不明。注目されるのはSD01上層から埴輪が出土しており、古墳の存在が考えられる。近い時期に当地から南東400m離れた前方後円墳の劍塚古墳が築造され、その関係が留意される。

#### 2) 立柱について

SD01のコーナーで検出された立柱について若干の考察を加えておく。石野博信氏、最近では土生田純之氏等の業績により注目を集め、新例も増えている。今回検出された立柱はこうした類例のなかでも特異な点がある。周溝のコーナーに位置する事、周溝内側から搬入路を設けて石をコテに使うような巨木であること等が挙げられる。何れにしても鳥形木製品を組み合わせたものや後代の古墳の周間に埴輪と並列した立柱と意義・性格が異なるように思われ、類例が待たれる。立柱については、サンプルを光谷拓実氏（奈良国立文化財研究所）に調べていただきたい。その結果、材質は杉で、現状では年輪年代決定法のデータにあてはめることはできないとの所見を伺うことができた。また赤色顔料について本田光子氏（福岡市埋蔵文化財センター）によれば、顎微鏡観察、螢光X線分析、X線回析によって、Fig.122-2の壺内出土の赤色顔料はベンガラ（酸化第二鉄）、立柱部で検出された赤色顔料は朱（硫化水銀）との同定結果をいただいた。

#### 3) SD01下層出土遺物について

北部九州における古墳出現期の土器については、これまで統一された呼称はない。弥生終末の土器様式としては、「西新式」が定着している。しかし終末などという便宜的な用語に捉われて、弥生か土師器かといった弁別を行なうのは、土器研究のうえでは最早意味をなさなくなってしまったのかもしれない。

36次調査で検出された下層の遺物は、在来の器種としては、弥生後期の中に収まるもので、何れも混入として捉えられる。V様式系の壺と大和型庄内壺の共伴、Fig.121の13・15・16の器種は、溝内での遺存度から、同時性が推定される。また終末以後の在来の器種が含まれていない点は、祭祀的性格を考える時、重要な意味が密められているようである。

註

- (1) 藤瀬祐尊「赤坂古墳」「鳥栖市文化財調査報告書32」鳥栖市教育委員会、1987年。
- (2) 濑田康夫・佐藤昭則「松木遺跡II」「那珂川町文化財調査報告書第12集」那珂川町教育委員会、1985年。

## 第10章 自然科学的分析

### 1 土器の赤色塗彩に使われた赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田 光子  
宮内庁正倉院事務所 成瀬 正和

比恵遺跡第30次調査で出土した彩文土器12点、丹塗磨研土器3点に用いられた赤色顔料について顕微鏡観察とX線分析（蛍光X線分析・X線回折）を行い、赤色顔料の種類や特徴を調査した。試料の一覧と分析結果及び推定される赤色顔料の種類をTab.5に示した。

**試料** 土器の赤色塗彩の残りはその埋蔵環境に大きく左右される。弥生前期の彩文土器は焼成後塗彩であるため、一般に文様部の残りが悪い。本来は全面黒色下地に赤色で文様を描いたものであるが、発掘時に土の方へ彩文部分が付いてしまったり、運良く残っても剥落する場合が非常に多い。本遺跡出土例も例外ではなく、調査担当者の適切な判断、取り上げにより、即バインダー処置が行われてはいるもののやはり残りが悪いものが多い。これに対して丹塗磨研土器の赤彩色は焼成前塗彩のため、彩文土器に比べると赤色顔料の残りは良い。今回の試料は赤色顔料が厚く残り、良い状態である。試料番号292～303は板付I～II式期の小型彩文壺、304、305は須恵II式期の丹塗磨研のヒサゴ形土器、307も同様の袋状口縁壺である。

**顕微鏡観察** 土器片をそのままで反射光により40～100倍で検鏡し、赤色顔料の有無、その種類、付着残存状態を観察した。また、赤色部分から針先に付く程度の量を採取しプレパラートを作成し、透過光・反射光40～400倍で検鏡した。赤色顔料としては朱、ベンガラの両者が認められた。出土ベンガラにはいわゆるパイプ状粒子と呼ばれている管状の粒子が含まれることがあり、産地を示すものかと議論を呼んでいる。この管状粒子を含むベンガラ（以下ベンガラ（P）と呼ぶ）がNo293、294、300に見いだされた。No300には朱も認められた。

**X線分析** 赤色顔料の主成分元素の検出を目的として蛍光X線分析を、赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としてX線回折を実施した。分析の諸条件は福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集に記したものと同様である。赤色顔料の主成分元素としては鉄と水銀が、主成分鉱物としては赤鉄鉱（Hematite）と辰砂（Cinnabar）が同定された。

**まとめ** 以上の分析結果を併せて赤色顔料の種類を推定した。判断の基準は第291集に記した通りである。

丹塗磨研土器の赤彩色は焼成前塗彩であることからも推定できるようにベンガラである。今回の3資料はX線回折で赤鉄鉱の顕著なピークが認められることから、スリップ等ではなく酸化鉄含有量の高いベンガラを用いたものであろう。

No293、294、300に認められたベンガラ（P）は日本各地の遺跡から出土しているが、土器資

Tab. 5 彩文土器・丹波磨研土器の赤色顔料の分析結果

試料番号	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	挿図(遺物番号)
	鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
292	+	-	-	+	朱	朱	Fig.39-277
293	+	-	+	-	ベンガラ(P)	ベンガラ(P)	Fig.33-188
294	+	-	-	-	ベンガラ(P)	ベンガラ(P)	Fig.33-190
295	+	+	-	+	朱	朱	Fig.33-181
296	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig.26-104
297	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig.28-121
298	-	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig.26-105
299	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	SU-012(第4層)
300	+	+	-	+	朱、ベンガラ	朱、ベンガラ(P)	SU-012(第4層)
301	+	+	-	+	朱	朱	SU-012(第5層)
302	+	+	-	+	朱	朱	SU-012(第5層)
303	-	-	!	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig.49-412
304	+	-	!	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig.54-390
305	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig.65-391
307	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig.55-602

+は検出、-は未検出を表す

ベンガラ(p)は管状粒子を含むベンガラ

料から検出されたのは四箇24次出土の夜白式の赤彩彫文土器について2例である。土器の赤色顔料は非破壊で調査するが多く、表面からの観察では判りにくかったためかもしれない。但し、本試料のベンガラ(p)は最長のものでも10ミクロンを超えず、すべて非常に短いものであった。漆器などには長い粒子がみとめられることが多いのは、顔料の調整法に差があるのかあるいは単にサンプリングの問題なのか今後の課題であろう。なおNo.300には朱粒子も認められており、X線回折の結果から見れば朱が主体とも言えよう。朱とベンガラ(p)の混色か、重ね塗りなのか断面観察が必要である。

比恵遺跡等30次調査出土の彩文土器に使われた赤色顔料は朱が4点、ベンガラが7点、朱とベンガラの両者を用いたものが1点であった。彩文土器の赤色顔料についてはこれまでに15点の分析例があり、ベンガラ14(比恵25次)、朱1(藤崎第4地点)であった。これまでに肉眼観察した他遺跡出土の彩文土器にも両者が使われているようである。本報告書の岡田文男氏の報文によればこの時期には漆器でも朱とベンガラの両者が使われている。弥生時代前期の赤彩には朱とベンガラの両者が同じように(単に赤色として)使われるのか、何らかの規制の基に使い分けがあったのかを知るためには多数の資料が必要である。この時期には赤色顔料を用いた土器装飾法が多様化し、漆製品に用いられている赤色顔料の種類も含めて、分析資料の増加が望まれる。

## 2 福岡市出土の縄文晩期から古墳時代にかけて 漆器の塗膜構造の観察について

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 岡田 文男

### はじめに

平成2年度に、これまでに福岡市で出土している縄文晩期から古墳時代を中心とする漆器の塗膜構造の分析を行うことができた。日本での漆の利用は福井県の鳥浜貝塚の木製の堅備や北海道苦小牧市のニナルカ遺跡の弓の出土例から知れるように、縄文時代の前期初頭にまで遡る(注1)。また中国大陸でも、日本の縄文時代と同時期に漆器が製作されていたことが最近の考古学的調査によって判明している(注2)。このように古くから利用されてきた漆器の製作技術はわが国では縄文時代の晩期に非常な隆盛を迎える。一方、弥生時代には大陸や朝鮮半島から新しい生産様式である船作技術がもたらされ、生産に関わる多くの技術が同時に移入されたと思われる。新米の技術の窓口となった北部九州地方において、従来の漆器製作技術がどのような影響を受け、変遷したのか、漆器の塗膜構造の分析を通して探ってみたい。

### 塗膜構造の分析方法

漆器は胎骨の表面に繰り返し漆を塗布して製作される。漆器の塗膜断面を薄片にして顕微鏡観察すると、漆塗布の回数、下地の混和物、顔料の種類について確度の高い情報を得ることができる。分析試料の大きさは最大5mm角程度とし、試料採取が可能な場合には1点について複数カ所から採取することで部位による塗膜構造の違いの有無について観察できる。塗膜構造の分析方法は筆者既発表の漆塗膜片をエポキシ樹脂に封入して研磨により厚さ数ミクロンの薄片に仕上げる方法に加え(注3)、今回新たに漆塗膜片をセロイシンに包埋してミクロトームで切片を作製する方法を補った。両者を併用した漆塗膜の顕微鏡観察により、従来よりも精度の高い観察が可能となった。

### 分析試料と結果

分析した漆器は木胎を主にした縄文晩期から古墳時代までの高杯や椀などの容器類と、そのほかに腕輪などの装飾品も一部含まれる。既報告の資料に加え、今回比恵遺跡第32・35次調査の漆器5点を追加し、(イ)縄文時代3点、(ロ)弥生時代前期前半4点、(ハ)弥生時代前期後半9点、(ニ)弥生時代中期-後期4点、(ホ)弥生時代後期3点、(ヘ)古墳時代3点の合計26点を分析した。

(イ) 縄文時代晩期(板付I式・夜臼式)の漆器

**資料1 木刀状漆器 (四箇A地点、報告書172 (注4)、挿図 Fig.91-35W, PL 1.19, 24)**

全体の形状が不明の木胎漆器で、表面からの観察によって木質の一部に撚糸が巻かれていること、黒漆の上に赤漆が塗られ、部分的に赤漆の上にさらに黒漆の文様が見られることが知れる。撚糸が巻かれた赤漆部分で分析を行った結果、撚糸の纖維は既に分解して空洞で纖維の種類は不明であるが、輪郭が楕円形であり植物纖維に由来するものと判断できる(注5)。この撚糸を覆ってすくなくとも2層の透明感のある黄褐色層があり、さらにその上に朱を混和した層が2層観察される。部分的にはさらにその上に薄い黄褐色層が見られる(写真1)。(顕微鏡下で見える黄褐色層は表面観察で黒漆とされるもので、透過光での顕微鏡観察が可能な薄さに試料を仕上げると黒漆層は透明感のある黄色層に近くなる)。黄褐色層には不純物らしきものを認めなかった。朱を混和した2層の密度は下層と上層で違い、下層のほうが粒子が細かくかつ密度が高い。朱の粒径は、やや粒子の大きい上層で2ミクロンm程度である(注6)。塗膜の厚さは300ミクロンm以上。

**試料2 赤彩土器 (四箇24次、報告書261 (注7)、P25-36, P31)**

赤彩の土器片で、表面全体に赤漆が残る。土器表面から剥離した塗膜試料の検鏡結果では、塗膜最下部に黄褐色層が部分的に観察され、その上に2層のベンガラを混和した比較的平滑な層が確認できる。ベンガラの密度は下層と上層で違い、下層の方が高い。両層ともパイプ状粒子が観察される。塗膜の厚さは約60ミクロンm(写真2)。

**試料3 木製椀? (四箇24次、報告書261 (注8)、P25-39, P31)**

内外面とも全面に赤漆が塗布された椀?で、赤色の塗膜は部分的に剥落する。試料採取時に塗膜と共に木質も剥離した。検鏡の結果、木質の表層に厚さの均一でない黄色層があり、その上に木炭粉とベンガラを含む厚い層がある。さらにその上に4層から6層のベンガラを混和した層が見られる。それぞれの塗膜は場所によって厚さにムラがあり、途切れた層も観察される。ベンガラは層によって密度の粗密があり、粒子も層により、パイプ状粒子の含まれる層と含まれない層がある。塗膜の厚さは180ミクロンm程度(写真3)。

(ロ) 弥生時代前期前半(板付1式・夜臼式期)の漆器

**試料4 木製高杯? (拾六町ツイジ、報告書92 (注9)、Fig.10-9, PL 25-9)**

高杯の脚部分で、内外面とも赤漆が塗布された外面の赤漆塗膜を検鏡したものである。試料採取時に塗膜部分のみが剥離した。検鏡面の塗膜層は2層からなり、厚さにムラが見られる。2層とも赤色の顔料が含まれており、下層はベンガラ、上層が朱である。朱の粒径は大きなもので20ミクロンm程度。塗膜の厚さは160ミクロンm程度(写真4)。

**試料5 木製高杯 (拾六町ツイジ、報告書92 (注10)、Fig.10-10, PL 25-10)**

高杯の脚部分で内外面とも赤漆と黒漆が面的に塗布されている。赤漆塗膜を検鏡した。塗膜は2層からなり、下層はやや茶色みをおび、やや厚い。その上層には赤色顔料が混和され、粒

程度の朱である。塗膜の厚さは140ミクロンm（写真5）。

試料6 木製容器脚部（拾六町ツイジ、報告書92（注11）、Fig.11-13）

黒漆の他に赤漆の線描を5本1組として施された赤色の描線部分の塗膜を検鏡したものである。塗膜の厚さは均一でごく薄く、木質表層に不透明物質を混和したごくうすい層があり、そのうえに2層の黄褐色層、さらにその上に赤色顔料の混和された薄い層が観察できる。顔料の混和量は他の試料と比較すると非常に少なく、粒子も細かい。塗膜の厚さは60ミクロンm（写真6）。

試料7 丹塗り木製品（板付G-7b地点、報告書49（注12））

試料採取時に赤漆の塗膜だけが残っていたもので、塗膜本来の表面がどちらかは検鏡面での判断が難しい。塗膜構造は3層からなり、どれも赤色顔料が観察される。仮に検鏡面の上下を塗膜の本来の塗り重ね順（写真の上下）とすると、顔料はベンガラ、朱、朱の順である。ベンガラ、朱とも大変粒子が細かい。塗膜の厚さは120ミクロンm程度（写真7）。

（ハ）弥生時代前期後半の漆器

試料8 木製容器類脚部（三筑、報告書69（注13）、Fig.42-2）

黒漆の上に赤漆を面的に塗布した部分と、5本1組の赤漆の細線部分からなる容器脚部の面的に赤漆が塗布された塗膜を検鏡した。木質の表層に木炭粉を混和した層があり、その上に黄褐色層、さらにその上に赤色顔料（ベンガラ）を混和した層が観察される。黄褐色層の下部は一様に微粒子を含み、その上部は透明感がある。ベンガラにはパイプ状粒子が含まれる。塗膜の厚さは80ミクロンm（写真8）。

試料9 木製腕輪（拾六町ツイジ、報告書92（注14）、Fig.11-14、PL 32-14）

全面に黒漆を塗り、その上に赤漆によるシダの葉状の文様を持つ腕輪のシダの葉部分の塗膜を検鏡した。塗膜構造は木質表層に木炭粉の混和層があり、その上に少なくとも2層とみられる黄色層がある。文様部の顔料は大変大きく角張った赤色の鉱物で、朱であることがわかる。観察された朱は今回の分析試料すべてのなかで最大の粒径を持つ（最大長75ミクロンm）塗膜の厚さは130ミクロンm（写真9）。

試料10 木製組合せ式容器（比恵25次、報告書255（注15）、Fig.136-458、PL 17-458）

組合せ式容器（高杯？）の脚部外面に全面に塗布された赤漆の一部を検鏡した。木質の表層に木炭粉を混和した層が見られ、その表層は波打っている。その上に粒状の微粒子を諸處に含む黄褐色層が観察される。この層は落射光ではやや白みをおびた褐色で、他の試料には観察されない色調である。赤色顔料はパイプ状粒子を含むベンガラである。塗膜の厚さは120ミクロンm（写真10）。

試料11 木製組合せ式容器内面（比恵25次、報告書255（注16）、Fig.136-458、PL 17-458）

組合せ式容器脚部（試料10）のはぞ穴の内面の木質部に付着した黒色の物質を検鏡したもの

である。肉眼観察ではほぞ穴内面の黒色の物質は塗膜状には見えなかった。検鏡の結果、木質の細胞および表層に透明感のある黄色の内容物を確認した。これは他の試料で観察された黒漆部分の検鏡結果と同じもので、木質に直接塗布された漆が内部まで浸透した結果と見られる。接着剤として漆が用いられた結果と推定する（写真11）。

試料12 木製脚付杯（比恵25次、報告書255（注17）、Fig.136-456, PL 17-456）

全面黒漆のうえに赤漆による文様を描いた脚付き杯の文様部の塗膜を検鏡したものである。文様に変化があることから付け根・花びら状・上部の細線部分の3ヶ所で分析を行った。3ヶ所とも木質の表層に木炭粉の混和層があり、その上に非常に薄い黄色層が見られる。その上にベンガラの混和層があり、付け根部分は2層、他は1層からなっている。ベンガラにはパイプ状粒子が見られる。塗膜の厚さは80ミクロンm（写真12）。

試料13 木製高杯（比恵25次、報告書255（注18）、Fig.136-459, PL 17-459）

高杯脚部の黒漆塗膜を検鏡したものである。試料は塗膜のみが剥離したもので、塗膜の厚さは均一で全体に黄色を呈し、最下部にベンガラの粒子がわずかに観察される。塗膜上部は透明感があるが、下部と上部の境界ははっきりせず、層構造は不明。塗膜は30ミクロンmほどとこの時代の塗膜としては薄い（写真13）。

試料14 木製高杯（比恵25次、報告書255（注19）、Fig.136-460, PL 17-457）

高杯口縁部の黒漆塗膜を検鏡したものである。塗膜構造は試料13と同様に厚さが均一で全体に黄色、下部にわずかにベンガラを混和した部分があり、上部は透明感がある。塗膜の厚さは30ミクロンm程度（写真14）。

試料15 木製鉢（比恵25次、報告書255（注20）、Fig.136-457, PL 17-457）

試料は内外面とも黒漆塗りの容器破片の黒漆塗膜を検鏡したものである。塗膜構造は試料13、14と同様で全体に黄色で、下部に部分的にベンガラが観察され、上部は透明感がある。塗膜の厚さは30ミクロンm程度。塗膜の下部にベンガラを混和した試料は13・14・15のみであり、塗膜の構造・厚さ・色調からみてこれらは同一個体の異なる部分の破片の可能性が高い（写真15）。

試料16 木製輪（四箇22次、報告書199（注21）、Fig.22）

試料は黒漆の上に赤漆を塗り重ねた腕輪の赤漆塗膜を検鏡したものである。塗膜採取時に木質の一部がとともに剥離した。鏡下では厚い木質とその上の黄褐色層の色調が同じで、境界がやや分かれにくい。黄褐色層はやや透明感のあるが、内部に均一な微粒子が全体に観察される。この黄褐色層の上に、非常に薄い赤色顔料混和層が見られる。この顔料の粒子はせいぜい2ミクロンm以下であるが色調から朱とみられる。拾六町ツイジ出土の腕輪と比較すると、朱の粒子の大きさが全く違う。塗膜の厚さは10数ミクロンm（写真16）。

（二）弥生時代中期後半の漆器

試料17 棒状木製品（今宿五郎江2次、報告書238（注22）、Fig.117-30210）

試料は棒状の木製品の表面の赤漆塗膜を検鏡した。漆塗膜と木質とがともに剥離した。鏡下では木質表層に直接赤色顔料混和層が観察できる。顔料は粒子の形状・色調から朱である。粒径はせいぜい3ミクロン程度。本試料は木質表層に木炭粉の混和層や黄色層が少しも観察されず、しかも塗膜構造が平滑でないことなど、他の試料との相違点を認める。本試料に関しては漆以外の物質が塗布された可能性（例えば膠）も考えられる（写真17）。

試料18 木製高杯（比恵18次、報告書227（注23）、Fig.47-W2、PL 9-3）

試料は高杯脚部の黒漆塗膜を検鏡したものである。試料採取時に漆塗膜と木質とがともに剥離した。鏡下では試料面全体が茶色で、厚い木質とその上にあるはずの塗膜層の色調が同じで、境界が識別できない。（写真18）。

試料19 木製矢柄？（比恵32次11区、本報告 Fig.94-79）

試料は矢柄？の黒漆塗膜を検鏡したものである。木質を含まない黒色の塗膜だけが剥離したもので、顕微鏡下でも黄色層のみが見える。塗膜は大変薄く15ミクロン程度。黄色層の下部にごく僅かに微小な不純物が確認できる（写真19）。

試料20 木製容器（高杯？）（比恵32次、13区下層、本報告 Fig.94-87）

試料は容器（高杯？）の黒漆塗膜を検鏡したものである。試料採取時に木質も同時に剥離した。木質の表層に木炭粉の混和層が見られ、その上に褐色層が見える。木炭粉混和層は樹脂分が少なく部分的に剥離し、表層は平滑さに欠ける。褐色層には微細な不純物（顔料？）が見える（写真20）。

（ホ）弥生時代後期の漆器

試料21 木製把手付容器（比恵35次、SD01、本報告 Fig.113-8）

試料は把手付容器の黒漆塗膜を検鏡したものである。試料採取時に漆塗膜だけが剥離した。最下層は木炭粉混和層で、その上に黄色層がある。黄色層は何回か塗り重ねられている。塗膜表面はやや平滑さに欠ける（写真21）。

試料22 木製容器（比恵35次、SD01、本報告 Fig.113-9）

試料は容器の黒漆塗膜を検鏡したものである。試料採取時に漆塗膜と木質が同時に剥離した。検鏡面では木質とその上の茶色で非常に薄い層（10ミクロン程度？）が観察されるが、木質と茶色層との境界が明瞭でない。茶色層には微粒の不純物（顔料？）が観察される（写真22）。

試料23 木製容器（比恵35次、SD01、本報告 Fig.113-10）

試料は容器の黒漆塗膜を検鏡したものである。試料採取時に漆塗膜と木質が同時に剥離した。塗膜層が薄く（20ミクロン）木質と塗膜層との明瞭な境界が観察できること、塗膜層の色調や内部に微粒の不純物が観察される点、試料22と同様である（写真23）。

（ヘ）古墳時代の漆器

試料24 木製杓子（拾六町ツイイ、報告書92（注24）、Fig.74-229、PL 69-229）

試料は杓子の表面に塗布された黒漆塗膜を検鏡したものである。試料採取時に黒色の漆塗膜と共に木質部が剥離した。塗膜は全体に茶褐色でやや薄く(40ミクロン)、木質と塗膜との境界は不明瞭である。試料22・23と同様の塗膜構造といえる(写真24)。

試料25 木製杓子(高畠12次、報告書210(注25)、Fig.19-505, PL 19-505)

試料は黒漆の塗布された杓子の内面の漆塗膜を検鏡したものである。試料採取時に漆塗膜と共に木質が剥離した。塗膜は全体に茶褐色をしている。木質と塗膜との境界は不明瞭である。

試料22・23・24と同様の塗膜構造といえる(写真25)。

試料26 木製弓(高畠12次、報告書210(注26)、Fig.45-529, PL 45-593)

試料は弓に塗布された黒色の漆塗膜を検鏡したものである。漆塗膜層だけが剥離した。塗膜は黄色で最下部に不透明で粒子の大きさもはっきりしない混和物層が確認できる。この混和物は大変細かく、偏光顕微鏡で観察しても鉱物を確認することができず、内容物については不明である(写真14)。黄色層は薄い(15ミクロン)。

### 考察

#### (イ) 素地固め

出土漆器の中で、比恵25次調査の組合せ式漆器ではほぞの内面に黒色の物質(試料11)を確認した。検鏡の結果、この物質は木質に沈着しており、透過光では透明感のある黄色にみえた。この色調は他の多くの漆器の黒漆膜の検鏡結果と同様である。そこで、この黒色塗膜物を黒漆と同様漆の塗布によるものと解釈した。また、漆塗膜の採取時に木質が同時に剥離されるもの

Tab. 6 下地・顔料の時代による分類

時代	下地				顔料				試料数
	木炭粉	木炭粉と ベンガラ (不明含む)	ベンガラ (不明含む)	なし	黒色	赤色 朱	ベンガラ	試料数	
縄文晩期	—	○	—	—	?	○	○	3	
弥生前期前半	○	—	○	—	?	○	○	4	
弥生前期後半	○	—	○	○	?	○	○	9	
弥生中期後半	○	—	—	○	○	○	—	4	
弥生後期	—	—	—	○	○	—	—	3	
古墳時代	—	—	○	○	○	—	—	3	

と、塗膜だけが分離されたものとがあった。塗膜と木質が同時に剥離したものは木質表面が漆によって固化されたもので、現代の髹漆技法の素地同様に相当するもの（注27）と判断した。木質内部まで漆が浸透した漆器は弥生時代中期以降に確実に見られる。

(ロ) 下地

木質表層に、木炭粉などの混和物を含む層が観察される試料が多く見られた。この層は、現代の髹漆技法の下地に当たる（注28）。観察された混和物の種類には、(a) 木炭粉、(b) 木炭粉とベンガラ混合、(c) ベンガラ、(d) 前記以外の不明物質が見られた。

(ハ) 風料

(a) 黒漆 肉眼的に黒漆と見ても、顕微鏡観察で黒色の発色に関わる顔料と見なされる不純物は弥生時代前期までの漆器では不明で、中期以降の茶褐色に見える層中に黒色の微小の混和物が確認できた。内容は不明。

(b) 赤漆 顕微鏡下での顔料の判断は、赤漆層に透明感のある赤色の粒子が観察できるものを朱とし、パイプ状の粒子および類似のものが認められたものをベンガラとした。この判断は概ね蛍光X線分析（注29）の結果とも一致した。

(二) 塗膜構造の時代変遷

(a) 繩文晚期 試料3の漆器は木質表面に繰り返し赤色漆を塗り重ねた塗膜構造をもつことが判明した。塗膜を繰りかえし塗布した漆器はこの時代日本の各地で出土しており、同傾向の漆器が北部九州地方でも確認されたことになる。これにより、福岡市出土の縄文晚期の漆器は日本各地の出土漆器と共に塗膜構造により製作されたものと判断したい（注30）。

(b) 弥生時代前期前半（板付I式・夜臼式） この時代の漆器には前時代の塗膜構造に類似すると思われる漆器（試料3、7）以外に塗膜構造に一定の共通性を持つと思われる漆器が見られる。その共通項は、

(i) 木質表層に木炭粉を混和した下地をほどこし、次に黒漆（顕微鏡下では黄色層）を塗布後、文様部ないしは全面に赤漆を塗布する場合でも繰り返し赤漆を塗布するのではなく、ほとんどが1回だけ（まれに2回）の塗布で終えていること

(ii) 異なる試料においても塗膜構造が類似し、下地や塗膜が平滑で、厚さも比較的均一（100-120ミクロン程度）なこと

などを挙げることができる。以上の2点はそのまま縄文晚期の漆器との相違点でもあり、弥生時代前期前半の漆器には縄文晚期のそれとは異なる系譜の技術による漆器が含まれるといえる。

(c) 弥生時代前期後半 漆器の塗膜構造は前期前半の前述の2点の特徴を持つ漆器が大半で、前期前半の技術を継承した結果と見なすことができる。一方、塗膜が非常に薄い漆器（厚さ30ミクロン程度）や、木質表面に直接漆を塗布しただけと思われる漆器が一部に見られる（試料13、14、15、16）。

- (d) 弥生時代中期後半 後膜が非常に薄く、木質表面に直接漆を塗布しただけと思われる漆器が増える。前期以来の技術を継承したとみられる漆器でも、塗膜構造に均一さや平滑さを欠く傾向が見られる（試料20）。
- (e) 弥生時代後期 試料数が少ないが、試料17が赤色の漆器であったほかはすべて黒漆塗りである。後膜が非常に薄く、かつ木質表面に直接漆を塗布したと見られる点は中期後半の技術がそのまま継承されたものと思われる。これは赤漆・黒漆とも共通した現象で、漆器の製作工程そのものが簡略化されている。
- (f) 古墳時代 塗膜が非常に薄い点、木質表面に直接漆を塗布したと見られる点は弥生時代の中期後半以降の技術を継承した結果と思われる。

#### まとめ

福岡市出土の縄文晩期から古墳時代までの漆器の塗膜構造の分析を行うことができた。この結果、東日本を中心に発展した赤色漆を繰り返し塗布した塗膜構造を持つ縄文晩期の漆器を当地でも確認できた。一方、稻作が開始された弥生時代前期の漆器の塗膜構造は、縄文晩期に見られる赤漆を繰り返し塗布する構造とは違い、表面が赤漆でも黒漆を基層にし、その上に一度だけ赤漆を塗布する例が多くみられた。この傾向は弥生時代の前期前半に始まり後半へと継承される。弥生時代中期以降から古墳時代にかけては塗膜構造に変化が見られ、前期の特徴を持つ漆器は減少し、製作工程が簡略化する。すなわち塗膜は薄くなり、下地がほどこされず木質の表面に直接漆を塗布した漆器が増加する。

従来、弥生時代の漆器については表面の文様的な観察から、稻作とともに移入された新來のきゅう漆技術は北部九州に到達したが、その技術は一時的なもので、縄文以来の伝統的技法に驅逐され、弥生文化のなかに広く継承されることがなかったとする意見がある（注31）。塗膜構造の変遷を調査した今回の分析は一地域の結果であるが、従来の見解に再考を促すものになる可能性がある。今後試料を追加し、さらに広範に分析を行うことでこの点を明らかにすることができると考える。

#### 謝辞

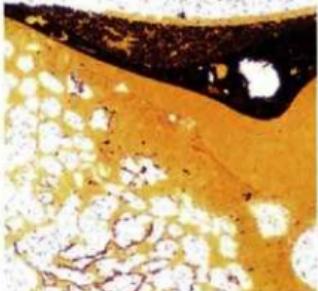
分析にあたり、小量といえども破壊を伴う漆器の分析を快諾くださった福岡市教育委員会の方々、とりわけ折尾学氏、柳田純孝氏、山口謙治氏、菅波正人氏、山崎博之氏（現愛媛大学助教授）、本田光子氏には大変お世話になりました。明記して感謝する次第です。

- 注1 奈良国立文化財研究所編(1984)『漆製品出土遺跡地名表1』
- 注2 河姆渡遺址調査隊編(1980)『浙江省河姆渡遺址第2期発掘的主要収穫』『文物』1980年5月号
- 注3 同田文男(1991)「出土漆器製品の觀察」『日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨集』で発表した顕微鏡薄片製作法は漆塗膜片の分析も含む。
- 注4 福岡市教育委員会(1987)『西筒遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第172集』
- 注5 布目順郎(1988)『絹と布の考古学』雄山閣
- 注6 今回計測した朱の粒径は、本田光子(1991)『西筒遺跡出土木刀状漆器の塗膜について』『西筒遺跡』中の朱の推定粒径と一致する。
- 注7 福岡市教育委員会(1991)『西筒遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第261集』
- 注8 注7と同じ。
- 注9 福岡市教育委員会(1983)『拾六町ツイジ道路 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第92集』
- 注10 注9と同じ。
- 注11 注9と同じ。
- 注12 福岡市教育委員会(1979)『福岡市 板付遺跡調査概報 福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集』
- 注13 福岡市教育委員会(1981)『三筑道路・次郎丸高石遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集』
- 注14 注9と同じ。
- 注15 福岡市教育委員会(1991)『比恵遺跡群(10) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集』
- 注16 注15と同じ。
- 注17 注15と同じ。
- 注18 注15と同じ。
- 注19 注15と同じ。
- 注20 注15と同じ。
- 注21 福岡市教育委員会(1989)『福岡市 西筒遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集』
- 注22 福岡市教育委員会(1991)『福岡市 今宿五郎江遺跡2 福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集』
- 注23 福岡市教育委員会(1990)『比恵遺跡群(9) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集』
- 注24 注9と同じ。
- 注25 福岡市教育委員会(1989)『板付周辺遺跡調査報告書(15) 高畠遺跡12次調査地点福岡市埋蔵文化財調査報告書第210集』
- 注26 注25と同じ。
- 注27 津口悟(1933)『日本漆工の研究』(復刻'66美術出版社)
- 注28 注27と同じ。
- 注29 宮内正倉院事務所、成瀬正和氏による。
- 注30 繩文時代の漆器の塗膜構造については永島正春(1985)『縄文時代の漆工技術』『国立歴史民俗博物館研究報告』6や、奈良国立文化財研究所編(1991)『埋蔵文化財ニュース70』により漆器の塗膜構造に繰り返し赤漆を塗布する共通性が見られる。
- 注31 工來善通(1986)『漆工技術』『弥生文化の研究 6 退共と技術2』雄山閣、栗山伸司(1989)『弥生時代の漆製品』『生產と流通の考古学』横山浩一先生追憶記念会

Tab. 7 福岡市内遺跡出土漆器の漆膜分析結果

No.	時代	遺物	遺跡	塗膜	塗彩(顔料)
1	縄文晩期	木刀状漆器	四箇A地点	(赤) + 黒 + 赤 + 赤	朱 - 朱
2	縄文晩期末	赤彩土器	四箇24次	(黒) + 赤 + 赤	ベンガラ
3	縄文晩期末	椀?	四箇24次	素地固め + (漆 + 木炭粉) + 赤(6層)	ベンガラ 6層?
4	弥生前期(前半)	高杯?	拾六町ツイジ	赤のみ	朱
5	弥生前期(前半)	高杯	拾六町ツイジ	素地固め + 黒 + 赤	朱?
6	弥生前期(前半)	容器脚部	拾六町ツイジ	(漆+上) + 黒(2層)	ベンガラ
7	弥生前期(前半)	丹塗り木製品	板付G-7b地点	赤漆のみ	ベンガラ + 朱 + 朱(細粒)
8	弥生前期(後半)	容器類脚部	三筑	(漆 + 木炭粉) - 黒(2層) + 赤	ベンガラ
9	弥生前期(後半)	輪輪	拾六町ツイジ	(漆 + 木炭粉) - 黒(2層) + 赤(文様)	朱、大粒
10	弥生前期(後半)	組合せ式容器	比恵25次	(素地固め) + (漆 + 木炭粉) + 黒 + 赤	ベンガラ
11	弥生前期(後半)	組合せ式容器	比恵25次	素地固め	-
12	弥生前期(後半)	脚付杯	比恵25次	(漆 + 木炭粉) + 黒(2層) + 赤 - 赤	ベンガラ
13	弥生前期(後半)	高杯	比恵25次	(漆 + ベンガラ) + 黒(3~4層?)	下地にペラガラ (部分的)
14	弥生前期(後半)	高杯	比恵25次	(漆 + ベンガラ) + 黒(3~4層?)	下地にベンガラ (部分的)
15	弥生前期(後半)	鉢	比恵25次	(漆 + ベンガラ) + 黒(3~4層)	下地にベンガラ (部分的)
16	弥生前期(後半)	輪輪	四箇22次	素地固め + 黒 + 赤 (文様)	朱(非常に薄い)
17	弥生中期後半 後期初	棒状木製品	今宿五郎江2次	素地固め + 赤	朱
18	弥生中期後半	高杯	比恵18次	素地固め + 黒	-
19	弥生中期後半	矢柄?	比恵32次11区	塗膜のみ黒	-
20	弥生中期後半	高杯?	比恵32次13区	漆 + 木炭粉 + 黒	-
21	弥生後期	把手付容器	比恵35次	素地固め + 黒	-
22	弥生後期	容器	比恵35次	素地固め + 黒	-
23	弥生後期	容器	比恵35次	素地固め + 黒	-
24	古墳時代	杓子	拾六町ツイジ	素地固め - 黒	境界不明
25	5世紀	杓子	高畠12次	素地固め - 黒	境界不明
26	5世紀	弓	高畠12次	(漆 + 上) + 黒	簡単なつくり

縄文時代晚期



1. 試料1 木刀状漆器( $\times 120$ )

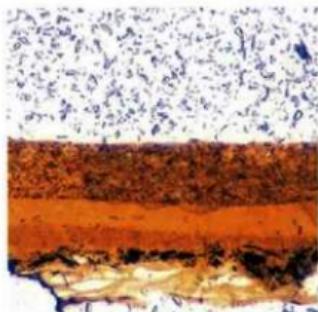
弥生時代前期



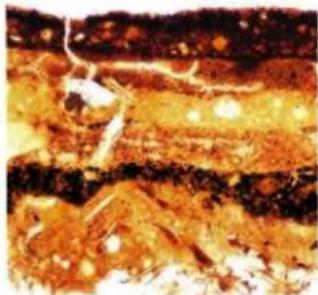
4. 試料6 容器脚部( $\times 520$ )



2. 試料2 赤彩土器( $\times 250$ )



5. 試料8 容器脚部( $\times 250$ )

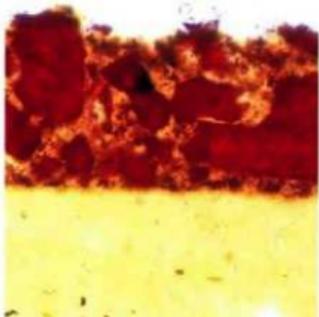


3. 試料3 木製椀( $\times 120$ )



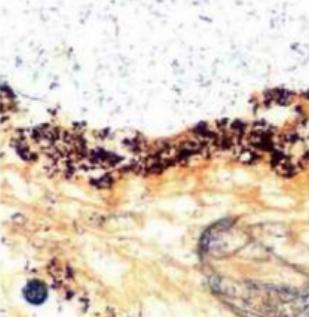
6. 試料14 高杯( $\times 500$ )

弥生時代前期

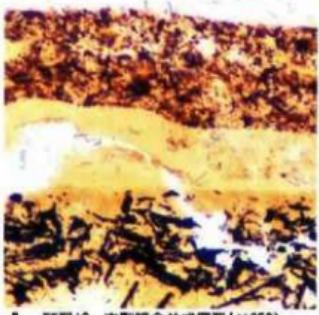


7. 試料9 赤色顔料(朱) ( $\times 500$ )

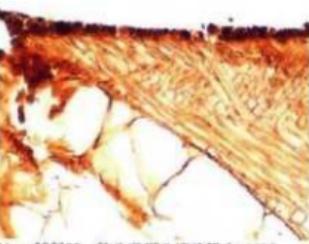
弥生時代中期



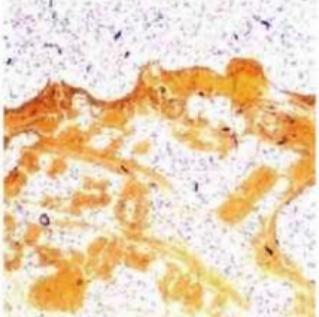
10. 試料17 棒状木製品 ( $\times 250$ )



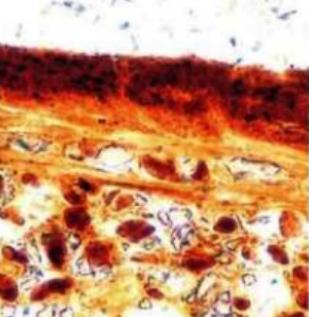
8. 試料10 木製組合せ式容器 ( $\times 250$ )



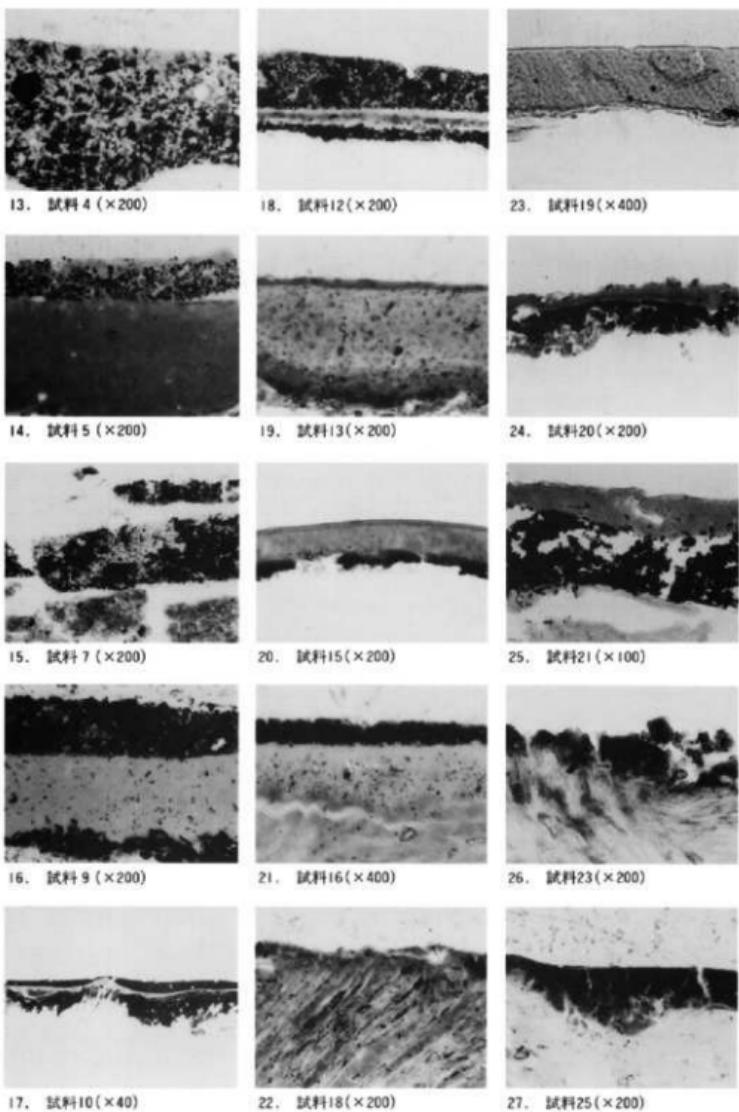
11. 試料22 弥生後期の漆塗膜 ( $\times 120$ )



9. 試料11 組合せ式容器内面 ( $\times 120$ )

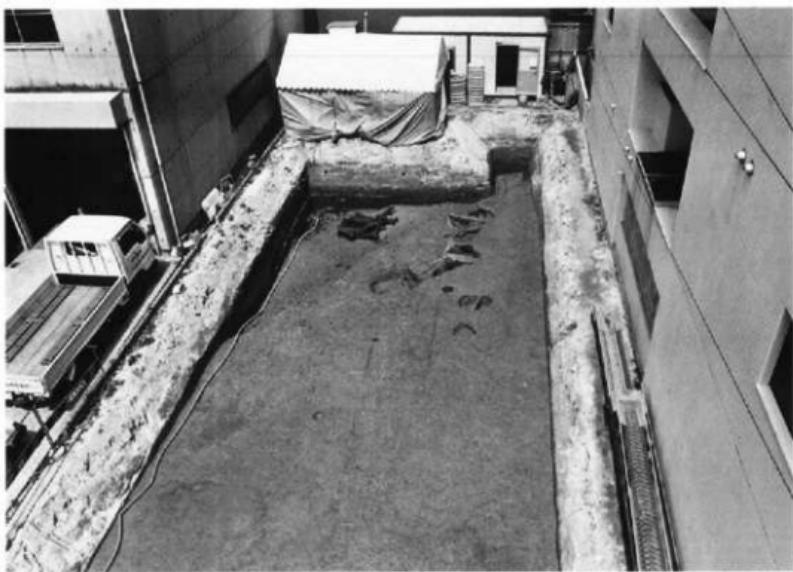


12. 試料24 古墳時代の漆塗膜 ( $\times 500$ )



# 図 版





I. 第29次調査地点全景（西から）



2. 水田面足跡（西から）



1. 調査区北壁土層（南から）



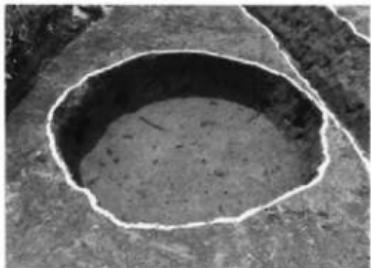
2. 調査区東壁土層（南から）



I. 第30次調査地点全景（北から）



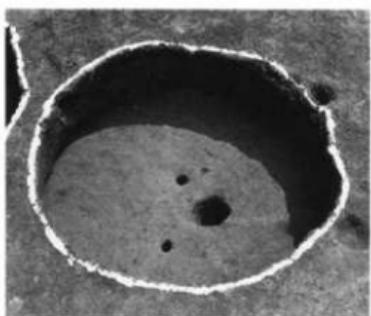
2. 第30次調査地点全景（南から）



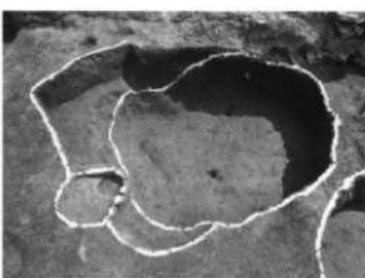
1. SU-002完掘（東から）



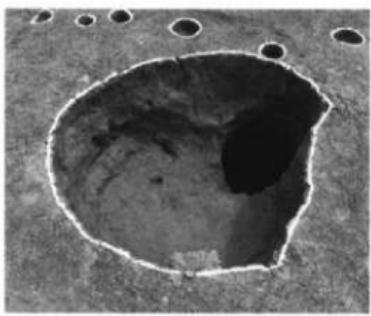
2. SU-003完掘（西から）



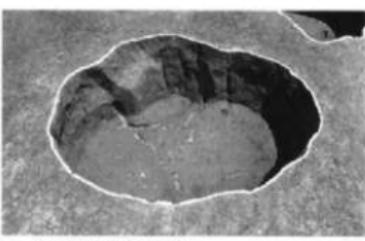
3. SU-004完掘（西から）



4. SU-005、035完掘（西から）



5. SU-005、SE014完掘（西から）



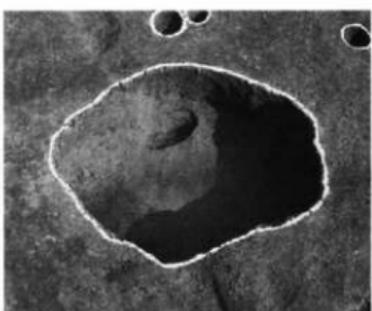
6. SU-007完掘（南から）



1. SU-008完掘（東から）



2. SU-010完掘（西から）



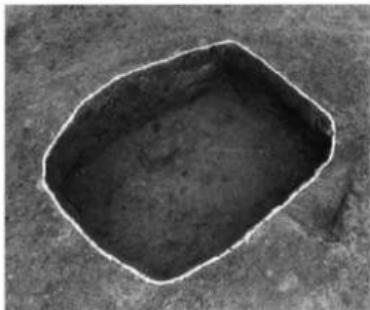
3. SU-011完掘（北から）



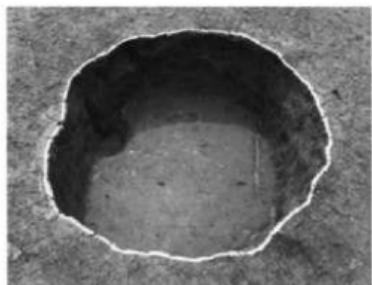
4. SU-012遺物出土状況（北から）



5. SU-012歯骨、貝出土状況（北から）



6. SU-012完掘（北から）



1. SU-015完掘（南から）



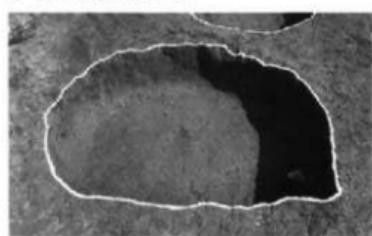
2. SU-016、017遺物出土状況（北から）



3. SU-019完掘（南から）



4. SU-021完掘（南から）



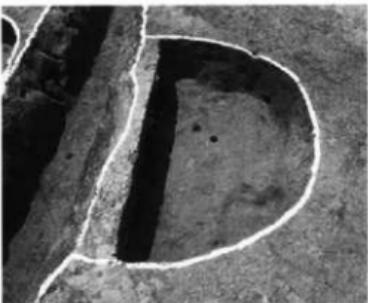
5. SU-022完掘（南から）



6. SU-023完掘（南から）



1. SU-024～026発掘（北から）



2. SU-027発掘（北から）



3. SU-028発掘（西から）



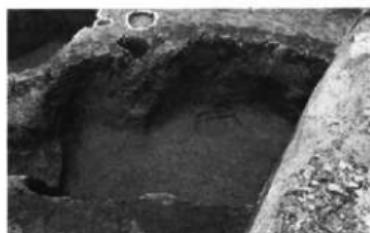
4. SU-029発掘（東から）



5. SU-030発掘（西から）



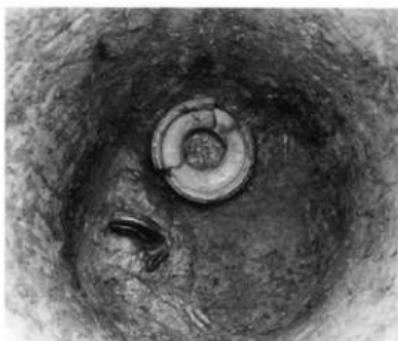
6. SU-031発掘（北から）



7. SU-032発掘（南から）



1. SE-018遺物出土状況（西から）



3. SE-009完掘（東から）



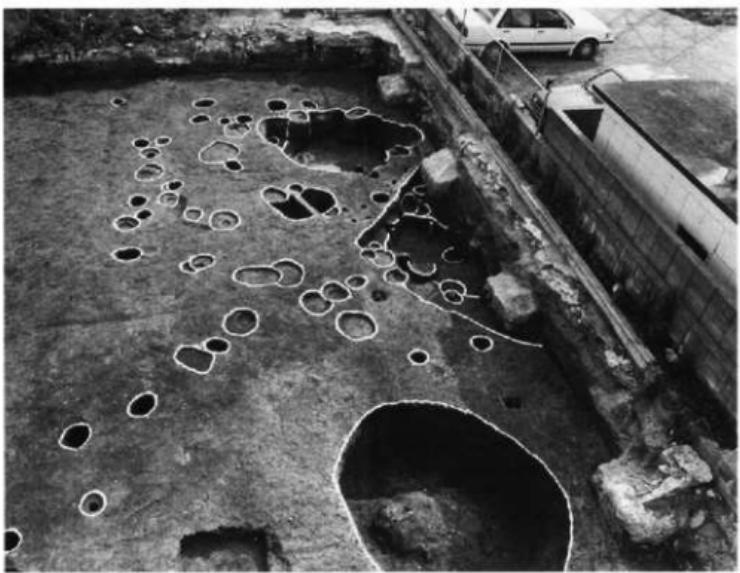
2. SE-018完掘（北から）



4. SD-001完掘（東から）



5. SD-001土層（南から）



1. SB-042、SC-013 (東から)



2. 第37次調査地点 (平成3年度調査) (北から)



1. SU-007出土土器



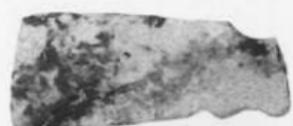
2. SU-010出土土器



I. SU-012出土土器

2. SU-016出土土器

3. SU-021出土土器 (松菊里型、中央)



1. SE-009出土铸型

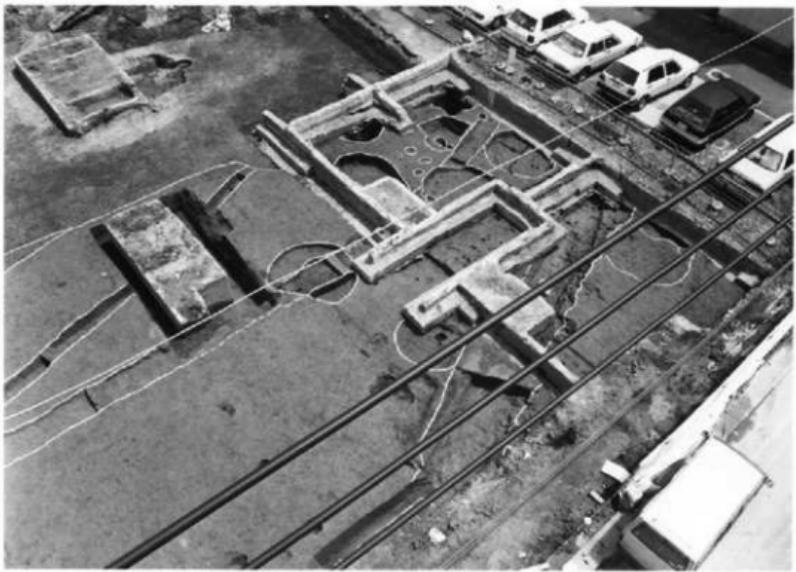
2. SU-010出土剥片接合状况



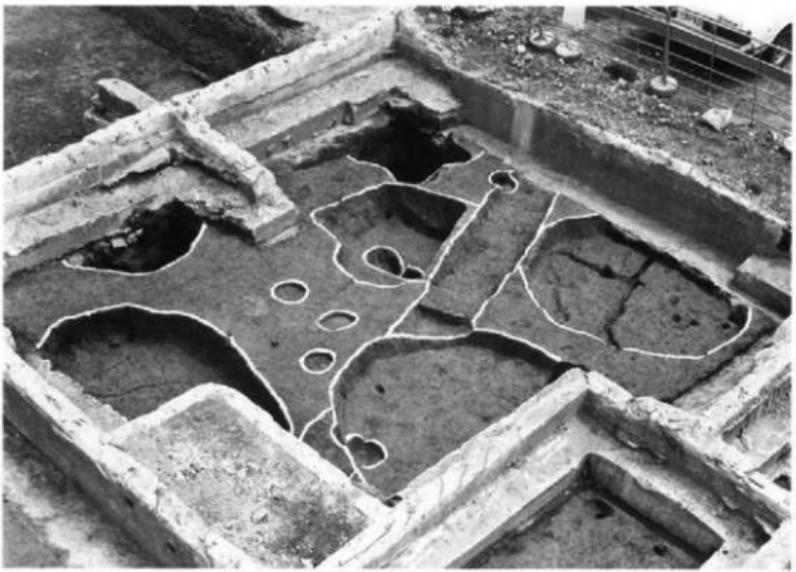
1. 第31次調査地点全景（北から）



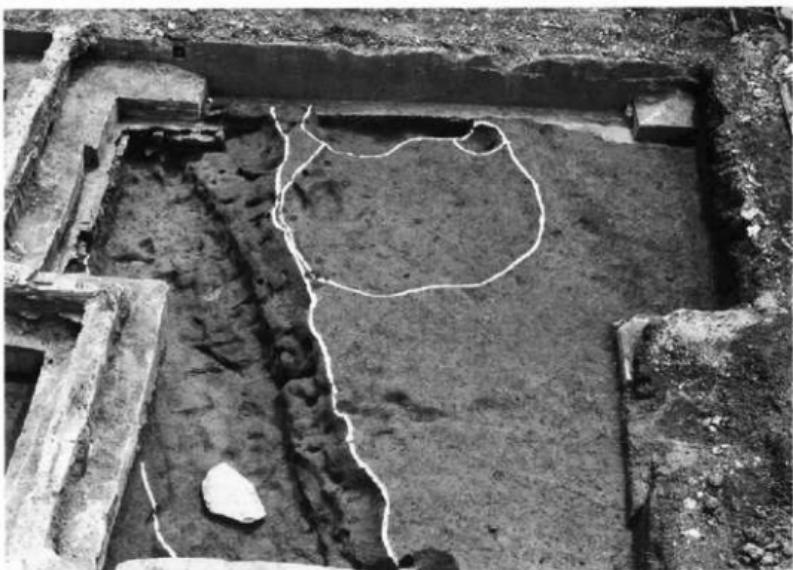
2. 調査区北側（東から）



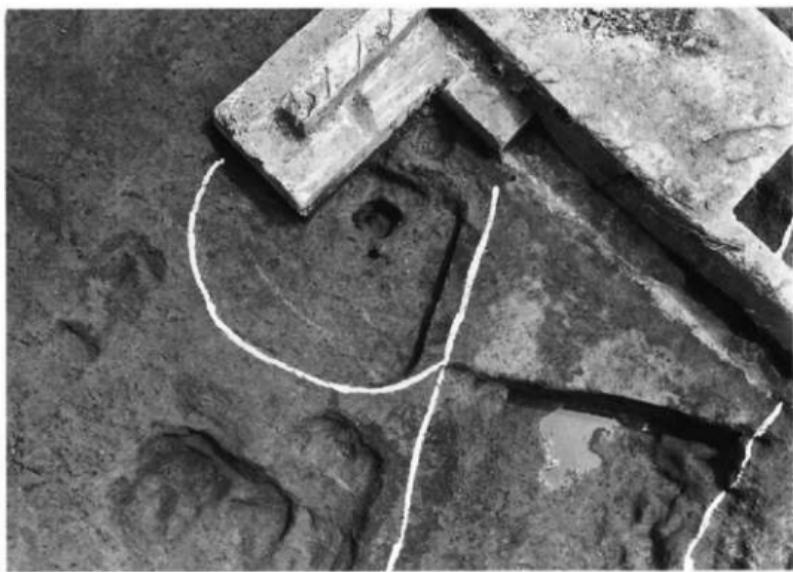
1. 調査区北側（北から）



2. 研磨穴完掘（北から）



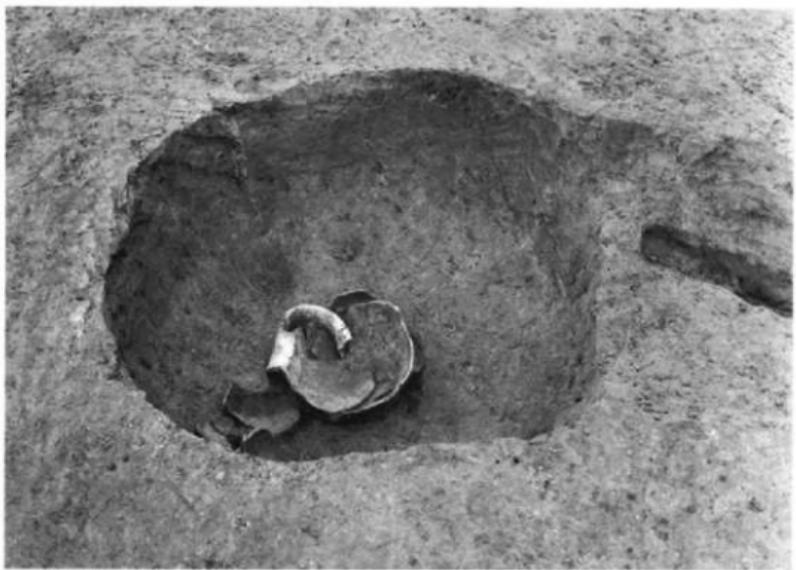
1. SD-005、SU-007発掘（東から）



2. SU-015発掘（東から）



1. SU-010, SK-016発掘 (西から)



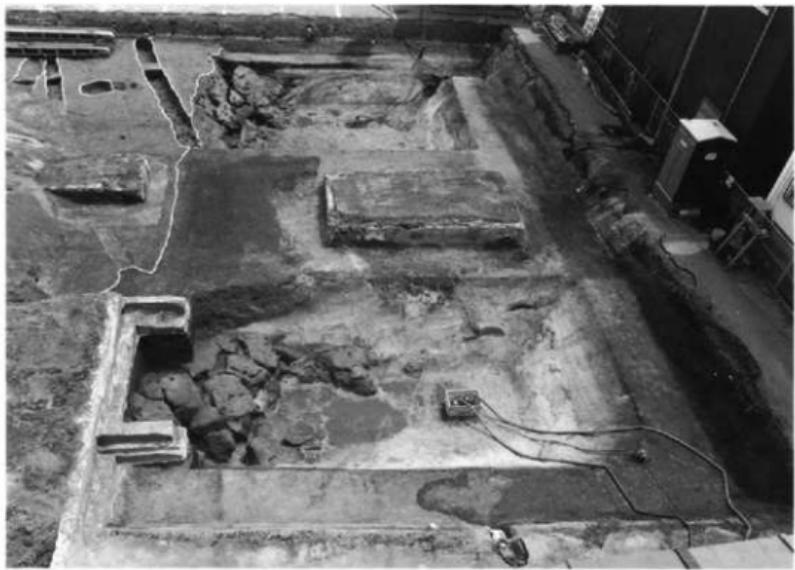
2. SK-004遺物出土状況 (西から)



1. SD-005土層（東から）



2. SD-014（東から）



I. SD-014 (西から)



2. SD-014 (西から)



1. 第32次調査区南半全景（南から）



2. 第32次調査区北半全景（南から）



1. 第32次調査区南壁土層（北から）



2. 第32次調査区包含層出土遺物



1. 第34次調査地点全景（北から）



2. 調査区東型土層（西から）



I. SD-001出土木製品（西から）



1. 第35次調査区北半部全景（南より）



2. 第35次調査区北半部全景（西より）



1. 第35次調査区北半部作業風景（南より）



2. 第35次調査区北半部作業風景（西より）



1. 第35次調査区南半部全景（西より）



2. SD-01遺物出土状況 <1> (南より)



1. SD-01遺物出土状況〈2〉〔南より〕



2. SD-01遺物出土状況〈3〉〔北より〕



1. SD-01遺物出土状況〈4〉(南より)



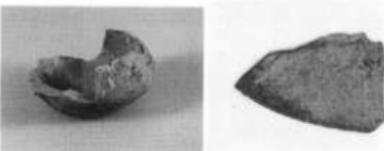
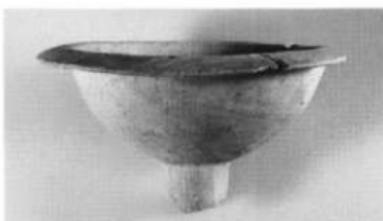
2. SD-01遺物出土状況〈5〉(南より)



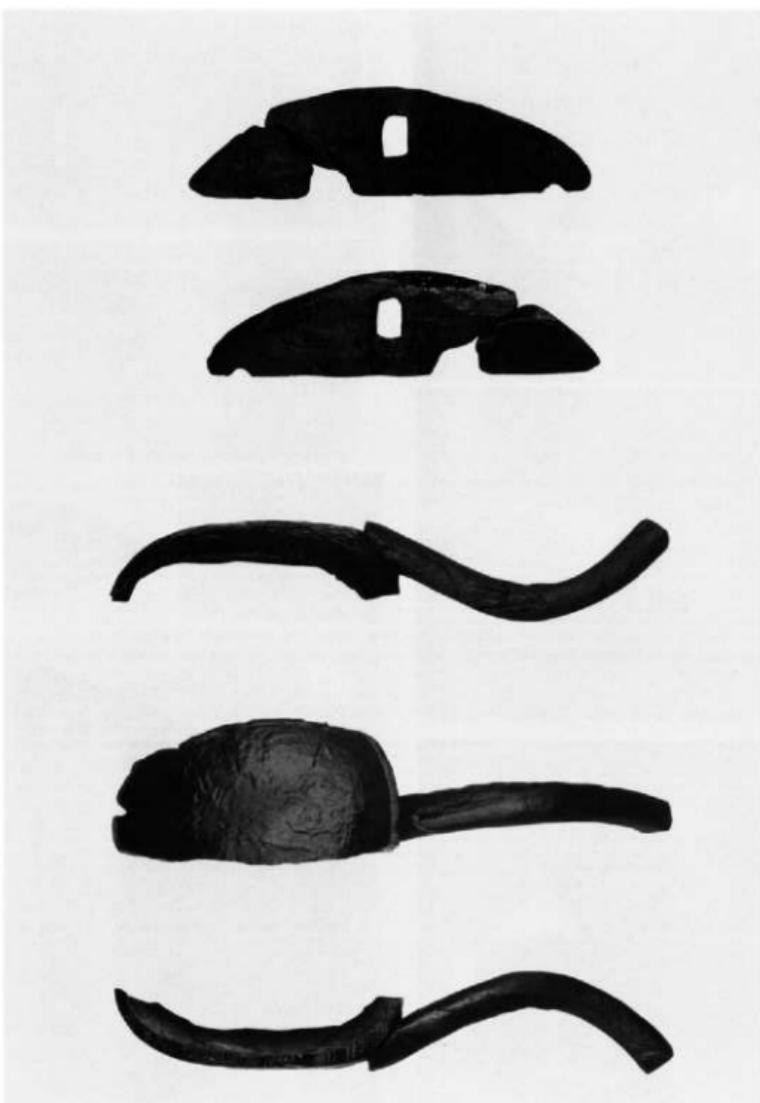
I. SD-01出土の無頭壺と蓋



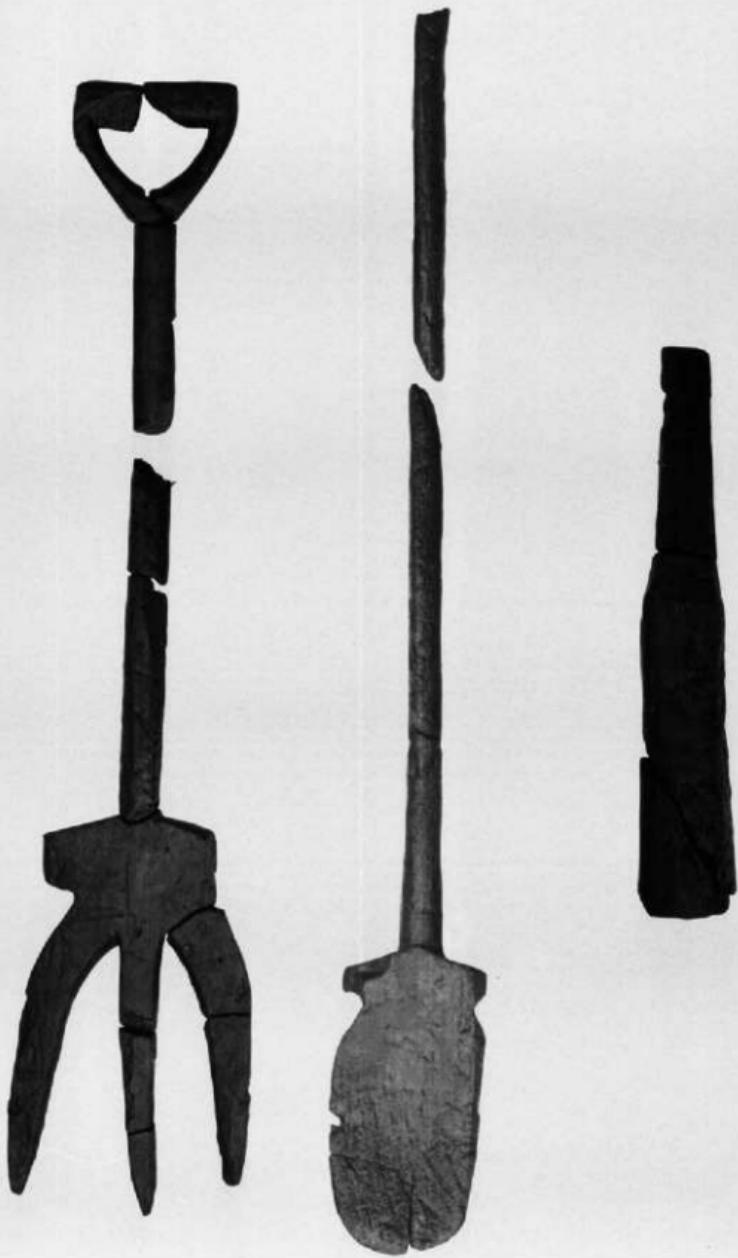
2. 無頭壺出土状況（南より）



第35次調査区出土の土器・石器



SD-01出土の木製品 <1>



SD-01出土の木製品 <2>



SD-01出土の木製品〈3〉



1. 第36次調査区全景（南から）



2. SD-01遺物出土状況（西から）



3. 調査区全景（東から）



1. 立柱検出状況（北西から）



2. 立柱検出状況（南西から）



3. 木柱出土状況（南西から）



I. SD-01遺物出土状況（立柱付近）



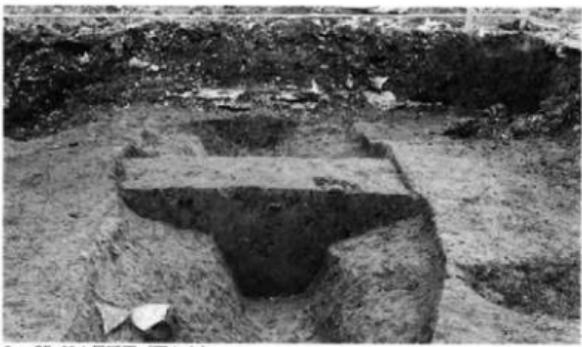
2. SD-01遺物出土状況（中央部付近）



1. SD-01土層断面（南西から）



2. SD-02土層断面（西から）



3. SD-03土層断面（西から）

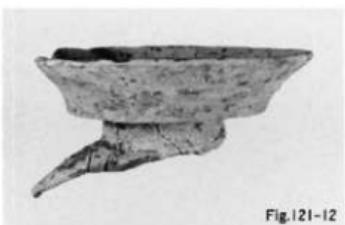


Fig.121-12



Fig.121-15



Fig.121-13



Fig.121-15

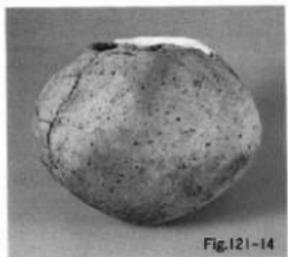


Fig.121-14

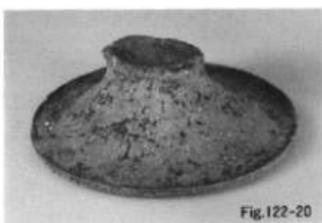


Fig.122-20



Fig.121-16



Fig.122-17



Fig.122-19



Fig.125



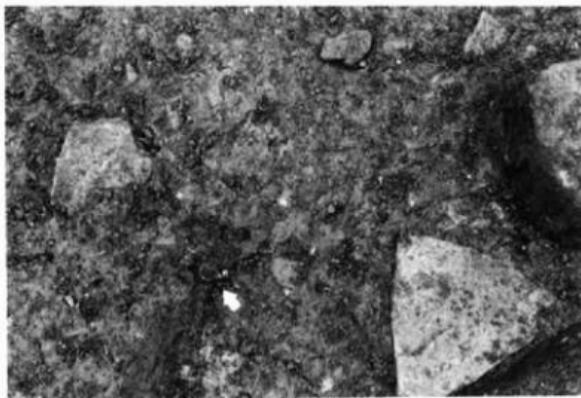
Fig.124-37



Fig.124-33



Fig.126



SD-01出土の土器・石器・玉製指輪



Fig.128

---

## 比恵遺跡群(11)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集

1992年（平成4年）3月13日

施行 福岡市教育委員会  
印刷 秀巧社印刷株式会社

---